くノ一元禄帖

はごろも天女

文庫書下し

六道 慧 Kei Rikudou



徳間文庫

徳間文庫

くノ一元禄帖

はごろも天女

六道　慧



徳間書店

徳間文庫

くノ一元禄帖

はごろも天女

六道　慧



徳間書店

目次

序章 5
第一章 紋妖師（もんよう） 10
第二章 謎の男 60
第三章 肌衣（はだぎ） 116
第四章 阿蘭陀（オランダ）宿 169
第五章 闇（やみ）の元締 223
第六章 蜘蛛（いがき）網ノ法 279
あとがき 348

序　章

一

肌が燃える。
白無垢の下で、桜色に火照っている。
「あ……と、殿様」
姫君はまだ幼さの残る顔に、強い羞恥を浮かべていた。十五歳になったばかりで同じ家格の大名家に嫁ぎ、祝言を終えて初夜の床に横たわっている、はずなのだが、これは夢なのかもしれない。夜毎、訪れるいつもの甘美な夢、綿帽子を被ったまま、姫君は白無垢の裾を乱していた。
「だ、だめでございますぅ、そのような、こと、あ、あぁぁ」
裸身を曝しているわけではない。仰向けに横たわり、白足袋を穿いた足をわずかに開い

ているだけだ。それなのに感じる、声が洩れてしまう。肌襦袢や腰巻き、長襦袢といった肌着が、だれもふれたことのない肌を、やわやわと刺激していた。白無垢の帯が自然にゆるみ、着物の紐が解け、裸身を締めつけるものすべてが外れていく。

「わ、若殿様？」

薄闇に目を向け、屋敷の後継者を探した。明るくなりすぎないように、行灯に布をかけてあるのだが、部屋の中に人影はない。では、だれが帯を解き、紐を外したのだろう。そう思って顔をあげたとき、

「あ！」

乳房に甘い痺れが走った。肌襦袢がまるで人の掌のように動き、まだ固いふくらみを揉みあげたのである。妖魅を思わせる行いだったが、姫君はむろん知る由もない。下半身を包んでいる腰巻きもまた人の唇のごとき不可思議な動きを見せる。絹が波のように揺れ、太股を這い、舌で嘗めるように愛撫した。姫君はうっとり目を細める。

「ああぁ、わ、若様、あはぁ～～～」

小さな足が足袋の中で、窮屈そうにひくついた。両膝をすりあわせるようにして、もじもじと尻を振る。悩ましげな吐息が、幾度となく洩れた。乳房をくるむようにして揉みしだかれる。両太股の付け根に、舌が這うような感覚が起こる。産毛のような淡い叢にも、舌のようなそれが伸びた。

「あぁっ」

姫君はのけぞり、思わず尻を突きあげる。しかし、叢に分け入る気配はない。もっと足を広げないと駄目なのだろうか。あの快感がほしくて、もどかしげに尻を振る。薄目を開けて、あたりの様子を窺う。

「どうしてほしいのか、言うてみよ。言葉にせねばわからぬ」

不意にだれかが命じた。人の姿はないように思えたが、もはや思考能力を失っている。命じられるまま小声で答えた。

「は、はい。あそこを……」

嘗めてたも。

語尾は恥ずかしさで消えた。代わりにおずおずと両足を開き、白無垢の裾を大きく広げる。御褒美とばかりに、絹の愛撫が激しくなった。乳首を撫でさすり、腹や叢を嘗めるように這いまわる。埋もれていた乳首が、少しずつ迫り出してきた。ぽっちりと可愛らしくふくらみ、よけいに感じやすくなる。絹がすりすりとこすりあげ、咥えるような仕草をした。

「うぅ〜ン、あはぁあぁ〜〜〜〜」

はしたないと思いつつも、声をあげずにいられない。しきりに尻を持ちあげたり、左右に振ったりして、おねだりする。動いているうちに、純白の打掛や着物はずり落ちて、長

襦袢姿になっていた。姫君なりにせいいっぱい、両足を広げたつもりだったが、長襦袢や腰巻きで秘部は今も隠れている。それが気に入らないのだろう。

「どうしてほしいのじゃ」

声に苛立ちが加わる。はあはあと喘ぎながら、姫君はかすれた声を絞り出した。

「こ、ここを」

自分の両手で腰巻きを外し、長襦袢の裾を割る。できるだけ尻を突きあげ、秘部を薄明の下にさらけ出した。淡い叢が剝き出しになって、十一月の夜気にふれる。見られているのを感じて、両目を固く閉じた。

「あふっ」

刹那、女陰に熱い舌がふれる。荒々しいとさえ言える舌技で、花弁を割り開いた。ぎゅっと乳房を摑まれ、揉みしだかれる。が、そこからの愛撫はこのうえなく優しかった。花弁の中で震えていた花芯を、舌先で小刻みに刺激する。小さな愛らしい乳首を、指で念入りにいじる。待ち望んだ瞬間、姫君は両太股をぐっと大きく広げた。

「ああ〜〜〜、いいぃ〜〜〜」

花芯を嘗める舌が速くなる。迫り出した乳首を、クリクリとつまむ。まとっている長襦袢が、生き物のように蠢き、背中や腕を撫でさすった。桃を思わせる尻にも、絹の愛撫が広がる。すぼまっている菊花に、そろり、と舌のようなものがふれた。

「んふぅっ」

姫君は一瞬、裸身をはねあげる。若様の舌は花芯から離れない。吸いつくようにして舌を蠕動させ、乳房を下から激しく揉みあげる。白い夜具の上で、白い長襦袢に包まれた裸身が、艶めかしくうねった。赤子がいやいやをするように忙しげに首を振る。舌先がいっそう濃やかになる。花芯が痛いほど勃ったそのとき、

「あっ、あっ、あっ」

達くぅっ!!

歓喜声を迸らせて、姫君は裸身を硬直させる。髪を覆っていた綿帽子が、ふわりと宙を舞い、畳に落ちた。

絹の愛撫はまだ続いている。

白い長襦袢が柔肌を、嘗めるようにさわっていた。

第一章　紋妖師

一

築地鉄砲洲の河岸は暗闇に沈んでいる。

すぐそこが外海という港の一角に、鬼火のような灯が点在していた。築地は明暦三年（一六五七）の江戸大火の際、消失した西本願寺を、木挽町の東の干潟を埋め立てた場所に建て直したのが明暦四年、すなわち万治元年で、これが築地の草創と言われている。その後、さらに海面を埋めて、現在の築地が造成された。本願寺の四隣には諸大名の藩邸、幕臣の居宅が立ち並び、それより東の海辺に町屋が設けられている。

元禄八年（一六九五）十一月、新月の子刻（午前零時前後）、鼻をつままれてもわからないほどの闇夜だった。風はなく、どちらかといえば穏やかな夜だが、嵐の前の静けさという感じがしなくもない。冷たい風を運んで来る外海の方からも、新たな灯が近づいて来

る。おそらくは船であろう。それらの光景を、港に林立している庫の陰から、何人かのクノ一が無言で見つめていた。

来たようだね。

阿魔衆の若きお頭、桜花は、まだ合図を送らない。近づいて来る船が目的の船なのか、慎重に様子を窺っていた。桜花はもちろんのこと、従っているクノ一たちも、しなやかな肢体を黒っぽい忍び装束で包んでいる。黒覆面から覗く美しい眸は、緊張で鋭く輝いていた。いっときも気はぬけない。仲間たちをひとりも失うことなく、命令を遂行しなければならなかった。

合図だ。

船の上で灯が、二度、点滅した。河岸側の灯も、まったく同じように点滅する。提灯を布で隠したり、外したりして、明暗を生み出しているにちがいない。船が近づいて来るのを再度、確認してから、桜花は短く指笛を吹いた。静まり返った河岸では、かすかな音も異様に大きく聞こえる。

「だ、だれだっ」

「気をつけろっ、だれかいるぞ!?」

河岸で待ち受けていた男たちが色めきたつ。と同時に大きな爆発音が轟いた。バシュッと爆ぜる音が鳴り響いたあと、河岸の夜空に色鮮やかな花火が広がる。『火処の朱楽』の

異名を持つ火術師の朱楽が、気合いをこめて放った一弾であった。真っ暗な河岸では、くノ一たちも敵味方を誤る可能性がある。明かりの粋な演出に気を取られたのが運のつき、阿魔衆はそれぞれの武器を手にして、いっせいに動いた。

「哈っ」

先頭に立つ桜花は、背中にくくりつけておいた二本の鎌を自在に操る。普通の鎌よりもやや小さめに造られており、扱いやすさを重視していた。女の手にしっくりとなじむ。目にも止まらぬ速さで、二人の腹をほとんど同時に柄で突いた。くぐもった声をあげて、男たちは地面にくずおれる。あっけないほど簡単に、周囲は失神男だらけとなった。近づいて来た船は異変に気づき、船首を返そうとする。

「こいつらを縛っておきな。騒がれると面倒だ」

命じながら、桜花は次の行動に出た。

「行くよ！」

河岸から離れようとしている船に向かって飛ぶ。まさに羽根のごとき軽やかさで、甲板に舞い降りた。ひとり、二人と阿魔衆が、桜花のあとに続いて飛び移る。不意をくらった乗員たちは、それでも果敢に反撃して来た。

「てめえらっ」

「盗人か！」

「返り討ちにしてくれるっ」

突き出された匕首を、右、左とかわして、距離を取る。朱楽が第二弾の花火を打ちあげたらしく、先刻の河岸と同じように、船上が眩い光に包まれた。花火とわかっていても驚かずにいられない。一瞬、相手が怯んだ隙に、鎌で匕首を叩き落とす。武器を失った男の鳩尾を、柄で素早く突いていった。

「いいかい、殺すんじゃないよ。気絶させるだ……」

突如、異音が夜気を切り裂いた。反射的に身構えた桜花の左肩に熱い衝撃が走る。忍び装束が焦げ、きなくさい臭いが鼻をついた。

「お頭っ」

あわてたのは右腕の白蓮だ。十九歳の桜花より一歳年上で、黒覆面の下に野性的な美貌を隠している。撃った相手に黒い鞭を叩きつけ、絡め取るようにして鉄砲を奪い取った。海に飛びこもうとした鉄砲師を、二人の下忍が捕まえる。

「大丈夫か？」

花火の下に浮かびあがる白蓮の顔は少し青ざめている。お頭に怪我をさせたのは自分の責任と激しく悔やんでいた。阿魔衆は桜花あってこそのくノ一軍団、だれよりもそれを知っている。

「ああ、たいしたことないよ。かすっただけさ。それにしても」

鉄砲まで用意していたとはね。桜花の目は白蓮が奪い取った火縄銃に向いていた。命中率が今ひとつと言われているが、この銃は引き金を引くやいなや、火皿の口薬に点火して、瞬時に弾が発砲される。発火時の衝撃が少なく、命中精度に優れていた。かなりの至近距離だったため、当たらなかったのは奇蹟といえる。

「まさかとは思うけど」

小声のつぶやきを、相棒が受けた。

「われらの襲撃を知っていたと？」

「わからない。なんといっても物騒な仕事だからね。用心していただけかもしれないよ。河岸の様子がおかしかったんで、すぐに応戦できるようにしておいたんだろうさ。ま、それはこっちも同じだけどね」

「お頭。やはり、この船に間違いないようです。船底に荷を隠してありました」

下忍の報告に、どちらからともなく顔を見合わせる。隠されていた荷こそが、物騒な仕事であることの証。依頼主は確かな情報源を持っている。もたもたしてはいられない。

「よし、朱楽たちを船に来させとくれ。こいつらを岸に降ろしたら、急いでここを離れるよ。人目につくのはまずい」

「承知」

河岸に残っていた朱楽たちに、提灯で合図を送る。縛りあげた男たちを岸に移して、一

カ所にまとめた。情報収集源として、ひとりだけ船に残してある。口を割らせるのは腕次第、そのへんはぬかりがない。桜花は笑って、失神軍団の前に木札を置いた。

「『お上に逆らう不届き千万な輩なり。よって処罰されたし』か。その上前をはねるわれらは捕まらぬのか？」

皮肉っぽく、白蓮が尋ねる。

「さあて、どうかねえ。阿魔衆の金主は本物の妖怪爺、あたしたちを罠にかけて、上前の上前をはねようとしているのかもしれないよ。どうする？」

手を引いて逃げ出すかい。逆に問いかけたが、返って来たのは不敵な笑み、力強い応えであった。

「引きあげるよ！」

桜花が右手をあげて、岸から船に飛び移ろうとしたときである。

二

「ややっ、こ、これは!?」

「みな倒れているぞ。なにが起きたのだ？」

新たな一群が庫の方から現れた。町人風の男たちが七、八人で、荷物を積みこんだ大八

車を押している。米俵がいくつも重なった見るからに重量のありそうな荷だ。仕留めた連中の仲間だろうか。詳しい事柄はわからないが、問いかけても素直に答えてくれるとは思えなかった。

眠らせるしかない。

桜花は無言で風と闇に融ける。ふたたび二本の鎌を摑み、足音もなく男たちに近づいて行った。むろん、白蓮や朱楽たちも加勢する。ひと言も発していないが、迷うことなく桜花に従っていた。

「な、なんだ、てめえらは」

くノ一軍団に取り囲まれて、警戒するように身構える。全員が懐に手を入れて、武器を取り出す準備をしていた。

「こいつらだ」

「てめえらっ、荷を盗みやがったな！」

匕首を抜き放ち、切りつけて来る。最後の言葉で失神部隊と仲間であることがわかった。それだけでも大きな収穫、遠慮なく鎌を操って、急所を突いていく。手練れはひとりとしておらず、まるで勝負にならない。赤子の手をひねるようなものだ。新手はあらたな失神部隊となり、縛りあげられて、転がされる。

「この荷はどうする？」

白蓮の言葉に、命令を返した。

「ついでだよ、いただいていこうじゃないか。早く船に移すんだよ。花火を見た役人が、動き出すかもしれないからね。急ぐんだ」

花火をあげるには、いささか時期外れといえなくもない。役人がそれほど真面目にお勤めをしているとは思えないが、用心のうえにも用心しなければならなかった。阿魔衆の金主の名を知られるわけにはいかない。

「早く運ぶんだよっと、うっ、重いね」

桜花も白蓮と一緒に俵を担いだが、ずっしりと肩に重かった。加えて、独特の生臭さが漂っている。海風のせいとばかりは言えない臭いが、俵から立ちのぼっていた。

「なんの臭いだろうな」

「さあねえ。死人かもしれないよ」

「まさか」

と相棒は否定したが、胡散臭い品物であるのは確実だ。桜花は仲間たちを急かして、すべての荷を船に積みこむ。役人が来るのではないかと、気が気ではなかった。思いもかけない別の荷によって、出発予定が大幅に遅れている。

「さあ、いいかい。船を出すよ。岸に残っている娘はいないね」

白蓮とふたり、最後まで河岸に残って、安全確保に努めた。失神していた男たちから、

小さな呻き声があがっている。目覚め始めた者がいるようだ。長居は無用、二人は軽やかに船に飛び乗る。

「出航」

くノ一軍団を乗せた船は、ようやく目的地に向けて動き出した。隅田川をのぼって、浅草寺の方角に舵を取る。あらかじめ準備しておいた水戸家の御紋――徳川家の葵の御紋が入った提灯に手際よく灯をともした。白蓮が不安げに眉を寄せる。

「ずいぶん数が多いな。目立ちすぎるのはよくないのではないか」

「いいんだよ。お上の見廻り船に目をつけられたら大変じゃないか。乗っているのが女とわかれば、一悶着さ。あんたが暴れ足りないのはわかってるけどね。ここは定めに従うのが得策、ありがたい葵の御紋のお力を、せいぜい利用させてもらうさ」

「なるほど。それにしても、あの妖怪爺さんが、よく使うのを許したな。さすがはお頭、どのような手を使ったのか教えてほしいものだ」

ふふん、と、桜花は鼻をならした。

「渋々だったよ。けど、捕まるのはご免だからね。それに万が一ってこともある。事が露見したとき、自分たちは無関係だと逃げられる可能性もあるからね。一蓮托生、危険な仕事を命じるからには、それ相応の覚悟を決めろと迫ったのさ。安全な手形がない限りは、今回の仕事は引き受けないと駄々をこねてね。それで、まあ、仕方なくってとこさ」

「お頭ほどの美人であれば無理難題もなんのその、鼻の下を長く伸ばしている顔が、目に浮かぶようだ。どんな荷が届くのかと、首を長くして待っているであろう」

「姉様、じゃなかった、お頭。荷をほどきました。ご覧になりますか」

竜子の言葉に、二人は緊張する。桜花の本当の妹で年齢は十五歳、意思が弱く、流されやすいのがたまにキズだが、無粋な黒覆面の下には、吸いつきそうな雪白の肌が息づいている。多少、色香が足りないが、あと二、三年もすれば、男の目を引く艶女になるのは間違いない。しかし、今は美醜云々の話をしているときではなかった。

「入ってたかい？」

短く問いかける。

「はい、空荷ではありません。もっとも、贋物か本物かまではわかりませんけど」

お勤めのときは、たとえ姉妹といえども礼を重んじる。お頭として、厳しい表情で聞いた。

「俵の中身は？」

「海産物みたいな感じです。臭くて、たまりません。船だけじゃなくて、あの臭いにも酔いそうで」

鼻に皺を寄せて、不快感を示した。おおよそのことは見えてきたが、頼りない妹に聞いても思うような答えは得られまい。桜花は白蓮ともども船倉に降りて行った。大きな木箱

が開けられて、中身が並べられている。色鮮やかな彩色を施された花瓶や大皿、瑠璃色をした美しい玻璃の食器類などだった。日本製ではない。

「阿蘭陀や唐の品物だね。あたしも見るのは初めてだけど、おそらく本物だろうよ。長崎から届いたばかりなんだろう。それを荷揚げするところだったんだろうさ。お上のお膝元で抜荷をしようなんていう肝の据わったご仁が、今時いるとは驚きだよ」

抜荷は抜買とも言って、密貿易のことである。武器や貿易禁制品の取引を、中国や阿蘭陀船と直接行って利益を得るのだ。

「これと似たような花瓶や大皿が、見世にもあったな」

白蓮が意味ありげな視線と言葉を投げた。日本橋富沢町に『盗人横丁』と呼ばれる一角があり、そこが阿魔衆の隠れ家になっている。どうせなら贋物とすりかえて、依頼主に渡してはどうかと、危険な企みを持ちかけていた。桜花が口にした「万が一のとき」を想定したのだろう。いざとなったら、これらの品物は武器になる。おそれおおいことながらと、役人に訴え出れば、依頼主の立場は非常に悪くなるからだ。頭のまわりすぎる相棒に、桜花は苦笑する。

「そこまでやる必要はないだろうさ。これから行くのは水戸藩の下屋敷、妖怪爺も覚悟を決めたからこそ、提灯の使用を許したんだろうよ。おとなしく渡してやるさ」

「こっちはどうする?」

指さしたのは予想外の荷、ひとつだけ開けられた俵の中身は、煎海鼠や干しアワビ、フカヒレといった海産物だった。中華料理の材料として需要が多く、このころはまだ幕府による表立った取引は行われていないものの、最高の密貿易品として輸出されている。陶器類の荷を降ろしたあと、空いた船に俵物を積んで、今度は長崎に届けるつもりだったのではないかと、桜花は推理していた。

どうするかねえ。

少しだけ逡巡する。正直に申告するべきか、渡さずに隠してしまうべきか。高価な値で売買される品物だけに、「隠し持っておこう」と白蓮の目が告げていた。

「お渡しするよ」

「なぜ？」

たまには余禄があってもいいのではないか。この荷のことは知らないのだから、馬鹿正直に教える必要はあるまい。言葉にされない部分について、同意したいのは山々だが、それでは忠義がたたない。

「したたかな妖怪爺だからこそ、さ。向こうが搦め手でくるならば、こっちはとことん正直にぶつかりたいんだよ。裏表なしにしたいのさ。その方があたしの信条に合っているしね」

「だが、向こうはそれほど真剣に、対応しているとは……」

「お頭。船が近づいて来ます」
甲板からの呼びかけで、さっと頬が強張った。急いで上にあがって様子を窺う。冷たい風に身を縮こませながらも、前方に船の明かりらしき灯を確認した。御船手組の見廻り船かもしれない。
みんな静かにしているんだよ。騒ぐんじゃない、やり過ごすんだ。
仲間だけにわかる手話を送り、甲板に貼りつくようにしながら、近づいて来る船を見た。御船手組は幕府の海軍で、平常の任務は大川筋と江戸湾入港の船の監視、罪人の島送りなどである。定期的に見廻っているのだろうが、桜花は出現時刻が少し引っかかった。
「ちょうど荷を降ろし終わっているころだね」
抜荷が終わったころに、悠々と見廻りに現れたのは単なる偶然だろうか。もしかしたら、時間をずらして、抜荷が終わるのを待っていたのではないか。竜子ではとうてい理解できなかったであろう独り言に、またまた白蓮が応える。
「つまり、抜荷の下手人は御船手組と繋がりがあるということか」
「あるいは袖の下を使ったか。これはあくまでも推測だけど、お上にかなり顔のきくやつかもしれない。あたしたちが思っている以上に大物かもしれないよ」
いやな胸騒ぎが高まってくる。近づいて来るのはまぎれもなく御船手組の船だ。声がかかるのではないかと冷やひやしたが、何事もなく船は通り過ぎて行く。だれからともなく

安堵の吐息が洩れた。

「葵の御紋が役に立ったようだね。このまま音をたてないようにして下屋敷に入るよ」

隅田川を挟んで浅草寺の向かい側に水戸藩の下屋敷がある。依頼主であり、阿魔衆の金主でもある水戸光圀が、今もお忍びで滞在していた。無事、任務を終えて、とりあえずは安堵するはずなのだが……。

なんだろう。胸騒ぎが消えない。

桜花は親指の爪を噛む。不安になると出る悪い癖、闇に覆われた川面が、まるで彼岸に続くかのように、沈鬱な暗さをたたえていた。

三

翌朝。

日本橋富沢町に戻った桜花は、不吉な予感が的中したのを知る。

「……」

隠れ家が見事に消滅していた。『盗人横丁』と呼ばれた一角は、火事で焼けてしまっていた。二階建ての長屋の一階に、古着屋を中心にして、骨董屋や小間物屋などが軒を連ねていたはずだった。慣れ親しんだ見世の匂いが、桜花たちを出迎えるはずだった。それな

のに、今、ここにあるのは黒く焼け焦げた残骸だけ、今も黒い煙があちこちから立ちのぼり、不気味な残り火がくすぶっている。阿魔衆の本拠地は、跡形もなく消え失せていた。

「死んだのは？」

絞り出すようにして尋ねる。

「いない。不幸中の幸いというやつだ」

答える白蓮の声もかすれていた。

「怪我人は？」

「何人かが軽い火傷を負ったようだが、動けぬほどの傷ではない。火が出たことにいち早く気づいた下忍が、すみやかに動いたようだ。残っていたのは年寄りばかりだったが、その割には被害が少なかったと……」

「これで!?」

思わず声を荒らげた。

「あたしたちの家が綺麗さっぱり消えちまったんだよ。ゆうべまではあったのにさ。戻って来たら焼け野原だ。見てごらんな、なにも残っちゃいないよ。なにもないじゃないか。これでも被害が少なかったっていうのかい。みんなの財産が焼けちまったってのに、くくそっ、ちくしょおぉ～～～～っ」

悔し涙があふれ出る。命が助かっただけまし、それはよくわかっている。だが、明日か

らどうすればいい？　隠居した元くノ一たち、これから育っていく若いくノ一たち、そして、現役のくノ一たち、阿魔衆を支えていくには金がいる。綺麗事ではすまされない。お頭としての責任が、ずしりと肩にのしかかっていた。

「なんとかなる。今までもそうだった」

白蓮の励ましに、無理やり笑みを押しあげる。

「そうだね。みんなは？」

古着を集めて商売を再開しなければならない。骨董品なども必要だ。米に味噌、醤油、塩といった生活必需品も揃えなければ……桜花の頭の中は忙しく動いている。大変だがひとりではない。仲間たちのために、一刻も早く再建させるのだ。

「わたしの犬たちに借りていた家に、年寄りたちは落ち着いている。近くにもう一軒、空き家があると聞いた。竜子に調べに行かせている。空いているようであれば、借りるように言っておいた。その借家をわたしたちが使えばいい」

獣使いの白蓮は、忍犬を六頭、飼っている。『生類憐みの令』が出て以来、犬が傷つけられたり、殺されたりするような事件が増えてしまい、お上は四谷に犬小屋を設置、そこに犬を収容していた。町中をうろつく犬は殺されかねない有様で、収容する犬は増える一方だ。それを考えたお上は、今月に入ってから中野に新しい犬小屋を造っている。たかが犬小屋と考えがちだが、十万坪もある広大な敷地であり、犬に対するそういった待遇が、

よけい反感を買うという悪循環に陥っている。たとえ忍犬といえども、むやみに放し飼いはできない状況だった。白蓮は犬たちのために、貸家を借りていたのだが、そこをいっとき避難場所にしたのである。

「古着ばかりだったから、よく燃えたんだろうねえ」

しみじみと言い、ふたたび火事の跡地を見やった。桜花の胸にはいくつかの疑問が渦巻いている。昨夜の仕事に関係あるのだろうか。いつもの相手の仕業だろうか。いつもの敵が抜荷にも関わっているのか。頼もしい相棒が、桜花の疑問を言葉にした。

「甲賀百人組の仕業であろうか」

らしくない荒事だと、表情にそれが表れている。甲賀百人組は阿魔衆の敵だが、後ろで糸を引いているのは、知足院の大僧正・隆光。言うまでもなく五代将軍、綱吉公のお抱え僧侶だ。名前のごとく飛ぶ鳥を落とすほどの隆盛ぶりで、今年の九月には神田橋近くにある隆光の知足院が護持院として認められ、このとき、彼は大僧正に任ぜられている。綱吉だけでなく、将軍の母親である桂昌院の寵愛も一身に受け、得意満面なのだが、隆光にとって目の上のコブと言えるのが徳川光圀、水戸藩のご隠居様である。

綱吉が将軍になる際、後押しした手前、表立った行動はできないが、綱吉を失脚させるべく、水面下で活動している。表向きは平安な世の中のように見えるものの、見えないところで戦は繰り広げられているのだった。

今回の騒ぎも、隆光の差し金なのではないか。火の不始末と考えられなくもないが、付け火の可能性も捨てきれない。だが、と、二人は思っていた。百人組のお頭、軒猿がこのような真似をするだろうか？

「あたしもそう思っていたのさ。軒猿らしくない、とね。ただ、命令されれば、やむなく従うかもしれない」

「では、お頭は命じられさえすれば、百人組の組屋敷に付け火をするのか。罪もない忍びたちの住処を奪うのか。年寄りや子供が犠牲になるとわかっていても、依頼主の命令に従うのか」

「むきにならないでおくれな。可能性がなくもないと言っているんじゃないか。ずいぶん動きが早いけれど、抜荷を奪い取った仕返しということも考えられる。ということは、つまり、軒猿たちが昨夜の抜荷事件にも、関係しているってことになるわけだけれどね」

これまたぴんとこなかった。阿蘭陀や唐からの密輸品を、隆光がほしがったのだろうか。あるいは献上品として、珍しい品物を手に入れたかったのか。それを聞きつけた光圀が、阿魔衆を動かした。それなりに筋はとおっている。納得できなくもない。が、今ひとつしっくりこなかった。

「あたしはね。積みこもうとした俵物の荷が、気になっているんだよ。船の漕ぎ手は長崎から着いたばかりで疲れていたはずだろ。すぐに出立したとは思えないんだ。何日間かど

こかで休んでからにしたと思うんだよ。となると、新しい荷を積んだ船ごと、隠す場所がいる。抜荷だからね。岸に繋いだままにはしておけないだろ」

「河岸に建つのは大名家の下屋敷や、豪商の屋敷。それのどこかに逃げこもうとしたのではないかと、お頭は考えているわけだな」

よけいな説明は必要ない。相棒はわかりが早くて助かる。

「ああ、考えられないことじゃないだろ。人夫たちだって、江戸で息ぬきしたいはずさ。岡場所あたりで粋な東女としっぽり濡れて、なぁんてね。あたしの想像だけれど、まっすぐ長崎に向かったとは思えない」

大名家や豪商が、関わっているのではないか。そのうちのだれかが、付け火を命じたのではないか。推測はふくらみ、とめどなく広がる。白蓮が考えながら言った。

「昨夜の渡来品は贋物なのかもしれぬ。花瓶や大皿は隠れ蓑、抜荷のどこかに重要な文書が隠してあったとは考えられぬか」

続けて発せられた白蓮の質問に、多少、驚きを覚えた。もっと大きな秘密があるのかもしれない。深読みしたがゆえの言葉だった。

「そこまでは考えていなかったよ。でも、抜荷にそんな秘密文書を隠すとは思えないねえ。送り主がだれであるかはわからないけれど、下手をすればお上に没収されかねない荷だ。そんな危ない橋を渡るよりも、信頼できる忍びにでも託した方が、確実に届けられるよう

な気がするよ」

「うむ、そうだな。考えすぎか」

「問題は抜荷の下手人さ。そいつが意趣返しで、火付けをさせたような気がするんだよ。あたしは甲賀百人組よりも、そいつの方がクサイんじゃないかと思っているのさ。ただの勘だけどね」

抜荷の下手人同様、問題なのが、金主の光圀公。なんの目的で抜荷を奪わせたのか、いつものようにわけがわからない。昨夜も黙って荷を受け取っただけで、なにも言わなかった。光圀の依頼はそれ自体が謎めいており、桜花は頭を悩ませるのが常、ぽつりと本音が出る。

「まったく、光圀様はなにを考えておられるのやら」

「金を出せと持ちかけてみろ」

相棒は大胆な提案をする。光圀が素直に火事の見舞金を出すようであれば、抜荷事件と火事騒ぎの繋がりが濃厚になるのではないか。どんな手がかりでもいい。付け火であるのなら下手人を捕らえたい。白蓮の提案には悲痛な思いがこめられていた。それをわかったうえで、桜花は首を振る。

「それはできない相談だね。見舞金を出したからといって、抜荷事件と火事騒ぎが関係あるということにはならないだろ。光圀様の真意は、お金ではかれない。手がかりがほし

いのであれば、自分たちで探すしかないさ」

「しかし、お頭。なさけない話だが、ご老公様の方が、われらよりも数段、優れた情報力を持っている。甲賀百人組が火事に関係しているかどうか、それだけでもわかれば動きやすくなるではないか。わたしは甲賀組のことだけでも、はっきりさせたいのだ。どうしても信じられぬ」

何度か刃(やいば)を交えてきた甲賀組に対して、独特な連帯感が生まれ始めていた。互いの間にあるルールがあって、それを超えるような非道は行わないのが、暗黙の了解とでもいうような、非常に微妙な関係である。言葉にしたわけでも、文書をかわしたわけでもない。が、桜花の心にも、それは確かに存在していた。だからこそ、忍びたちを殺さないようにしてきたつもりなのだが……そんなルールはもはや存在しないということなのだろうか。

「直に聞いてみるのが、てっとり早いかもしれないねえ」

冗談まじりの返答に、白蓮は苦笑するしかない。

「色仕掛けでか？」

「それしかないだろ」

片目をつぶったとき、

「姉様っ」

竜子が頬を紅潮させて走って来た。だれか倒れたのか。火事で怪我をした下忍の容態で

も悪くなったのか。
「どうしたんだい」
「い、いいから、は、早くっ」
喋るのも惜しいという感じで、来た道を戻って行く。今は隠居くノ一の避難所になっている貸家の方角だ。異変があったにちがいない。まさか、まさか、まさか。桜花の胸は不安ではちきれそうだ。すでに二親のいない自分たちを、母親代わりになって育ててくれた実の祖母、お婆様と呼ばれる知恵袋の顔がちらついた。全力疾走で貸家の前に行ったが、荒い息の下で竜子が示したのは……。
「こ、これ」
玄関脇に置いてある鉢植えの万年青だった。
「これ？」
桜花はきょとんとして首を傾げる。
「そう、これ」
竜子は強調して鉢植えを突き出す。なんでわからないのさ、ちゃんと見せているだろ。もどかしげな顔をしている。
「本当にこれのことなのかい」
「だから、そうだって言ったろ。何回、同じことを言わせるのさ！」

「……」

しばし沈黙が続いた。桜花は怒り、竜子は当惑。

「はは、ははは、これはいい。そうか、万年青を見せたかったのか、竜子」

白蓮の笑い声が、気まずい沈黙を打ち破る。いささか鈍い竜子は、姉と相棒を交互に見て、おずおずと答えた。

「う、うん、そうだよ。帰って来たら戸口に置いてあったんだ。きっと、だれかがあたしにって、置いて行ってくれたのさ。火事見舞いだろうねえ。見たわけじゃないけどさ。惚れぼれするような美い男だと思うよ、うん」

「ほう。竜子にと添え書きでもあったのか」

笑いをこらえながら、白蓮が聞く。

「ううん。なんとなく、そう思っただけ。ほら、あたしはみんなの中で、一番素直で、淑やかで、優しくて、気がきいて、おまけに房事もうまくて、可愛いでしょ。だからさ。男衆に人気があるんだよ」

「ぷっ」

これには桜花も吹き出してしまった。思いっきり笑い転げているうちに、ある事柄がはっきりしてくる。万年青の贈り物は、少なくとも答えをひとつ、教えてくれたように思えた。断定はできないが、当たっているような気がする。それに、これといった瘴気を発し

ているようには見えない。妹が自惚れるのぐらいは、この際、許してやろうではないか。

「なんだよ、そんなに笑わなくてもいいじゃないさ。この万年青はね。本当にあたしへの火事見舞い、アタタタ」

小さな鼻をつまんで、桜花はささやいた。

「本当にあんたは単純で可愛いねえ。その単純すぎるところが、人気なのかもしれないよ。ところで肝心の貸家は見つかったのかい。万年青に現をぬかして、役目を忘れちまったんじゃないだろうね」

「み、見つけたよ。言われたとおり、借りる手続きをしてきたよ。うちが火事になったことは、日本橋中に広まっているからさ。同情して店賃を安くしてくれたんだ。今日からでも使っていいってさ」

「そうかい、そりゃよかった。少しは役に立つのがわかって安心したよ。その万年青だけどね。もしかしたら、妖術師が置いていったものかもしれない。『真夜中、万年青からしのびやかに立ちのぼる邪気。それが口から吸いこまれて、哀れ、竜子は妖術師の傀儡に』なんてことにならないとも限らないからね。あたしが預かっとくよ」

とどめとばかりに鼻をきゅっとつまみ、鉢植えを奪い取った。

「アタタッ、でも、それはさ。どこかの、だれかが火事見舞いとして、あたしにくれたものなんだよ。あたしが育てるのがいいんじゃないかと……」

「どこかの、だれかがはっきりしたら返したげるよ。それまではだめだね。特におまえは捕まりやすいじゃないか。また面倒をかけられるのはご免だよ」

家の戸口から顔を突き出している下忍たちも、実は自分への贈り物ではないのかと、興味津々（しんしん）、目を光らせていた。火事で気落ちしたくノ一たちにとって、思いもかけない大きな励みになったようだ。

「さあさあ、みんな、ぼんやりしていないで、火事の後片づけをしておくれな。忙しいんだからね。遊んでいる暇はないよ」

甲賀百人組以外のだれか、見えない敵の存在を、桜花は感じている。抜荷の下手人かもしれない人物、そいつが付け火をしたのではないか。

「わたしは下屋敷に行ってみる。朱楽だけでは心もとないゆえ、な」

そっと告げた白蓮に、大きくうなずき返した。一刻も早く不気味な敵の正体をつかまなければならない。頼みの綱は捕らえた人夫、下屋敷での責め問いが、始まっているころだった。

四

水戸藩の下屋敷は、両国をさらに遡（さかのぼ）った上流の、隅田川河岸に建てられている。上屋

敷は言うまでもなく江戸における藩主の居館であり、中屋敷は上屋敷が罹災した場合の予備の邸宅という性格をそなえていた。それらの居館に対して下屋敷は、蔵屋敷とも呼ばれて、国元から回漕されてくる物資の荷揚地、蔵地としての役割を持っている。他の屋敷同様、広大な敷地を有しており、敷地内には築山や園池を配して、休息用の別荘としても使われていた。

優雅な面ばかりが強調される大名屋敷であるが、離れや牢屋なども造られているため、秘密裡に事を運ぶのに適している。あたたかな初冬の陽射しが、まったく届かない一角で、朱楽は責め問いを始めていた。

「うふふ、どうすれば素直になってくれるのかしら」

透けるような白い肌を持つ十七歳の美少女は、島田風の髪型をして、膝上までしかない短い着物を着ている。石床に横たわる若い男は、素裸で両足を固く縄でくくられ、後ろ手に縛られているものの、さほど怯えていない。むしろ目をぎらぎらと血走らせて、嘗めるように朱楽を見あげていた。無理もない。朱楽の小悪魔的な美しさと、豊満な肉体を目にすれば、若い男はだれでもそそられる。目で堪能し、匂いを吸いこむだけで、充分すぎるほどに感じてしまうのだ。男の逸物はすでに勃ち、隆々と天を向いている。

「見たい？」

欲望を察して、朱楽は尋ねる。男は舌なめずりしながら、うなずいた。最初から肌襦袢

や腰巻きなどは着けていない。横たわる男の顔の上で、堂々と両足を開いてやった。わざとらしく尻をさげ、左右に振りつつ、ゆっくり顔に近づける。薄暗い地下牢の中にあるのは、一本の蠟燭のみ。鮮明には見えないはずだが、それがよけいに情欲を掻き立てるのかもしれない。男はごくり、と、何度も生唾を呑んだ。

「た、頼む、な?」

喘ぐように懇願する。朱楽は尻をさげてやったが、唇に届くほどには近づかない。男はけんめいに舌を伸ばして、女陰を味わおうとする。はあはあと熱い息がかかり、朱楽もじゅんっと蜜壺が潤んだ。が、ここで与えるわけにはいかない。両足を広げた中腰の恥ずかしい姿勢のまま、尻をもどかしげにまわしてみせる。女陰を近づけたり、離したりして、徹底的に焦らした。

「な、なあ、焦らさねえでくれよ。おれは……」

「どこのだれなのか、雇い主はだれなのか」

ことさら冷ややかな声で聞いた。牢屋の中には下忍の娘がひとりと、牢屋の外には二人の下忍がいる。後輩のお手本になるべく、今はいちおう取り繕っていた。発せられた質問に、男は同じ言葉を答える。

「知らねえ、本当だ。金をやると言われたから船に乗っただけだ。まさか、抜荷をやるとは思っていなかった。嘘じゃねえ。おれはなにも知らねえんだ」

「さっきから同じ返事ばかり、信じられるわけないでしょ。抜荷をやるぐらいだもの。けっこう大物が後ろに付いているんじゃ、あ！」

思わず声が洩れた。男が頭をあげ、舌先を花弁に伸ばしたのである。わずかにふれただけだったが、若い男を前にして、朱楽も火照っている。潤んだ蜜壺から、きらめく雫が一滴、つつーっと落ちた。

「おうぅ」

男は呻くように、それを舌で掬い取る。ただでさえ豊かな朱楽の胸は、感じるにつれ張りつめてきた。短い小袖の下で、ぐっとひとまわり大きくなる。

「あぁぁ」

悩ましげに着物の上から、乳房を持ちあげ、揉みしだく。自然に尻が動き、男の顔の上で円周運動をした。近づきすぎるとまた嘗められてしまうが、嘗められないのもつまらない。少しだけ尻をさげると、男はすかさず舌を伸ばしてくる。今度はもろに花弁を嘗められた。

「うふうっ」

朱楽はのけぞり、きつく両の乳房を握りしめる。もっとさげたかったが、けんめいに耐えた。役目がある。火事でなにもかも失ったことを忘れてはならない。この責め問いにすべてがかかっているのだ。女陰を唇から離して、もう一度、質問する。

「あんたの雇い主は？　抜荷を企てたのはだれ？」
「し、知らねえ」
　ごくごくっと何度も喉が鳴る。飢えているのは朱楽も同じだ。ふだんは後輩相手の性技指導か、同僚相手の艶技鍛錬、たまに男とできるかと思えばそれは妖魅という最悪の房事条件下に置かれている。人間の、それも若い男と交われる機会はめったにない。経験豊富な女忍者に、刺激されるなと言う方が無理であろう。それでもお役目第一と我慢する。
「あぁ、こ、答えて。本当のことを言うのよ！」
　鼻面に女陰をこすりつけるようにして迫ったが、迂闊にも近づきすぎた。とたんに男の舌がいきおいづき、小刻みに蠕動する。もとより花弁は開きすぎるほどに開いていた。充血しきっていた花芯を、舌先で巧みに嘗めあげられる。
「ああっ、いいっ、うふうぅっ」
　大きな声を放った。まだ駄目、外すのよ、聞き出したあとでなきゃ駄目。言い聞かせるのだが、欲望にはかなわない。男の顔に跨った恰好で、じっと停止してしまう。舌に花芯がふれるよう、わずかにずらしたりもした。
「んぐ、んぐんぐぅ」
　男は夢中で舌を使う。股間の逸物がますます大きくなってくる。朱楽はうっとり目を細めて、乳房を揉みあげていた。尖った乳首を指先で刺激する度に、蜜壺がどんどん熱くな

ってくる。子宮に眠る『火蛇』が目覚めないように細心の注意を払っていた。相手が妖魅の場合は、反射的に火蛇が動き出すが、今回は普通の男。それほど制御しなくても大丈夫だろう。こういった解放感を味わえるのも、人間の男なればこそ、朱楽はつい声を洩らしていた。

「ううぅ〜〜〜〜〜〜〜〜、んふぅうう〜〜〜〜〜〜〜〜」

乱れた胸もとから雪のように白い双つのふくらみが飛び出ている。着物が邪魔なのだが、動きたくない。花芯を嘗める舌から離れたくなかった。

「ぬ、脱がせて、はあはあぁ、早くぅうぅ〜〜〜〜〜〜」

控えている下忍に命じる。

「は、はい」

言われるまま、頬を染めて、娘は朱楽の帯をほどいた。短い小袖を取れば、玉子の剝き身のような裸身があらわになる。上半身はほんのり桜色に染まって、見るからに好色そうだ。毛深い質ではないゆえ、淫らに開いた花弁の様子や、後ろの菊花がひくつく様子まで、はっきり見える。男は目でも楽しめたにちがいない。

「んふうう、うふうぅぅ」

嘗めながら、しきりに荒い息をついていた。その鼻息にさえ女陰を刺激される。朱楽は張りつめた乳房を握りしめ、くっとこらえた。

「ま、まだよぉ〜〜、だ、駄目ぇ〜〜、はああンぅ〜〜〜ン」

かろうじて尻をずらし、男の舌を蜜壺の入口に移動させる。達きたかったが最後の我慢、熱を帯びた声で聞いた。

「や、雇い主は？　あはあぁ〜、こ、答えてくれたら挿れさせたげ、る、から、あああぅ〜〜〜ン」

ずずっと大袈裟な音をたてて、男が蜜を吸った。舌先を蜜壺に差し入れては、愛液をあふれさせて、啜る。ほんの少しだけ舌先がもぐりこむのがまた、たまらない。白旗をあげたのは朱楽の方だった。ずらした花芯を戻して、舌技の恩恵を存分に受ける。男ははりきって、いちだんと舌の動きを速めた。小刻みに揺れる、しなやかにそよがせる。花芯がはちきれそうだ。我慢できない。

「あ、あたし、あぐううっ、も、もう！」

だめ。

「うくうっ、達くっ、達くううぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

桃のような尻に一瞬、力が入った。すぐに小さく痙攣し、下半身が揺れる。男の顔に女陰をこすりつけるようにして動いた。目も鼻も口も、びしょ濡れであろう。がくがくと尻を振り、女陰を押しつけたが、男はかまわずに舌を動かし続けている。次はおれの番だと言わんばかりだった。

「んぐぅ、は、早く、ううぅ、頼むぅ」

懇願の声には切実さがこもっている。まだ一度もふれていない男根であったが、いまや直立不動、腹にくっつかんばかりに硬く勃っている。責め問いはこれからだ。

「あれを」

朱楽が振り向くと、耳まで赤く染めた下忍が、恥ずかしそうに輪を差し出した。それを受け取ると、名残惜しかったが、顔の上から離れる。

五

「ふううう、ふうふう」

フイゴのように、男は喘いでいた。朱楽は豊かな乳房をすりつけながら、身体を下にさげていく。若い逸物を両手ではさみ、透明な液があふれている尖端部に、ちゅっとご挨拶の接吻をする。

「おうっ」

男はびくっとのけぞり、腰を突きあげた。出る寸前だったかもしれない。朱楽は素早く根元に先刻の輪をはめる。『自白の輪』と呼ばれるもので、いくら放とうとしても、男は吐精できない。付けられたことに気づきそうなものだが、興奮しすぎているのだろう。早

く、早くと繰り返している。

「あんたも手伝うのよ。着物を脱いで、顔に跨って」

下忍に告げ、先刻の朱楽と同じ姿勢を取らせた。男は目で興奮させられながら、朱楽が与える男根の責めに耐えなければならない。自白するのは時間の問題だろうが、念のために確かめる。

「抜荷の下手人はだれ？」

一度、達ったお陰で、だいぶ冷静になっていた。もっとも蜜壺の中は熔岩のような愛液がたぎっている。いつでも挿入可能だが、桜花の怖い顔を思い出して、お役目を優先させた。

「し、知らぬ、うふうぅ、おれはただの雇われ人夫」

人夫。の台詞が「ぷふうっ」と曖昧になる。下忍の娘が尻をさげすぎて、女陰に吸いつかれていた。

「あ、いやン」

あわてて持ちあげたが、男は顔をあげて、唇をへばりつかせている。下半身から見つめる朱楽には、その有様が克明に見えた。羨ましいと蜜壺から蜜を滴らせてばかりもいられない。

「勝手なことをしちゃ駄目、お仕置きよ」

ちゅるりっと逸物の尖端部を口に含んだ。

「んんんぐうぅぅっ」

男は嘗めたり、呻き声をあげたりと忙しい。さかんに腰を突きあげて、ふるふると尻を震わせる。とうの昔に吐精しているはずなのだが、いっこうに出る気配がない。朱楽は快楽と苦しみの狭間を、さらに漂わせるべく、胸の谷間を利用する。男根を両の乳房で挟み、やわやわと揉みあげた。そうしておきながら時折、咥えこんだりもする。根元はしっかり『自白の輪』で縛りあげられているから、なんの心配もない。大きく口を開けて男根を呑みこんでは、先端部に戻って、舌をそよがせた。

「くううっ」

白目を剝きかねない感じで、男は背中を反らせる。男根はこれ以上ないほど充血し、ぱんぱんに張りきっていた。朱楽も我慢できなくなってくる。男の顔面に跨った娘も、先刻からせつない喘ぎ声を洩らしている。

「あふぅ〜〜ン、あぁぁ、いいぃ、ああ、あぁぁ〜〜〜ン」

ゆるやかに尻を前後させ、舌の動きを調節していた。すぐに達ってしまっては、外で見張っている同僚に馬鹿にされる。達きそうになると、蜜壺の入口に舌を移動させて、絶頂の波に呑みこまれないようにしていた。それを見ているだけで、朱楽は熱くなる。

「ああ、もう駄目」

身体を起こして大きく両足を広げ、逸物を蜜壺の入口にあてがった。亀頭を少しだけ挿れて、先端部に蜜をからめる。くちゅくちゅと入口付近を刺激し、快感を高める。奥からあふれ出る蜜が、そそり立つ男根の側面を濡らしていった。自然に尻が上下に動く。早く奥まで味わいたかったが、けんめいに欲望を抑えた。根元まで呑みこんではいないが、もう手を添える必要はない。ふたたび乳房を摑み、裸身をくねらせながら、やわらかく揉みしだいた。

「はあぁ〜、いいぃ〜〜〜〜〜〜」

朱楽は下半身、下忍の娘は男の顔の上に跨っている。二人の娘が相手をしているのに、男は果てることができない。極楽地獄とでも言おうか。最高に気持ちがいいのだが、最高に苦しくもあった。

「んぐふう、ふうふう、は、早く」

出させてくれと熱望していた。朱楽はかすれた声で返事をする。

「だめ、あ、あはあぁ〜〜〜、だめよぉ、ああぁ、ちゃんと教えてくれなきゃ、んふぅう〜〜〜ン、出させて、あ、げ、な、い！」

最後に思いきり腰を沈めた。蜜壺の奥まで男根を呑みこみ、じいぃんと甘く痺れる。待ちかねていた刺激を受けて、ふくらみきっていた壺芯（スポット）が喜んでいるようだった。そのまま前後に腰を動かして、男根をたっぷり味わう。壺芯がこすりあげられて、蜜壺の中が蠢い

た。身体が熱い、燃えあがりそうだ。

「ああっ、いいっ、気持ちいいぃ〜〜〜っ」

ぐりぐりと奥のふくらみを、亀頭にこすりつける。淫らな音が石牢の中に広がれば広がるほど、徐々に気温が高くなってきた。『火処の朱楽』の異名が示すように、朱楽の艶技は子宮の奥から誕生する火蛇、熱くなるのは蜜壺の中だけではない。ひとまわり大きくなった乳房が重たげに揺れる。迫り出した小さな乳首を、指先でいじり、絶頂を引き寄せようとする。

「あ、朱楽様ぁ、あああぁ〜〜〜〜」

その前に下忍の娘が耐えきれなくなった。白い尻を小さく揺らして、絶頂を迎える。歓喜声や達くときの動きが今ひとつね。などと、妙に冷静なことを思ったりもしたが、朱楽もこらえきれない。硬くなった乳首を指でつまみあげる、腰が忙しげに前後する。身体を前屈みにして花芯をこすりつけるようにする。

「んくうっ」

背中が綺麗に反り返った。ぎゅっと乳房を握りしめながら、いちだんと深く腰を沈める。亀頭が壺芯を突きあげた刹那、

「あ――――」

一瞬、なにもわからなくなる。尻が小刻みに震えていたが、やがて、それは大きな痙攣

となって、両脚に広がっていった。無意識のうちに、尻が前後に揺れ動く。こすられた花芯が、あらたな悦びを運んでくる。

「ああ、あうあぁ、あふうぅ〜〜〜〜」

がくがくと尻を振り続けていた。蜜壺内では相変わらず隆々と、男根が張りつめている。達ったばかりなのに、また絶頂に呑みこまれそうだ。動くつもりはないのに、尻を振ってしまう。

「ぐうぅ、な、なぜ?」

呻くように、男は聞いた。どうして、果てることができないのか。あまりにも辛い。楽にしてほしい。

「わ、輪をはめた、はあはあ、から、よ」

答える朱楽の方も、肩で喘いでいる。自他ともに認めるスキモノ、蜜壺内で猛り狂う『刀』の切れ味を、もっと楽しみたかった。肉襞を締めて尻を持ちあげ、きゅうぅーっと男根を絞りあげるようにする。亀頭を入口に引っかけるような状態にしたあと、思いきり腰を沈めた。

「うふうぅっ」

壺芯を突かれて、頤をのけぞらせる。桜色に染まった豊満な乳房が、ぷるるんっと揺れた。身悶えするように下から揉みあげ、焦れったげに腰を動かし始める。やはり、相手

も果てないと真の満足感を得られない。男根が炸裂して、蜜壺内に精液が充満するあの感覚、あれを味わいたかった。

「は、果てたい、な、ら、ああ、あはああぁ～～～～～」

正直に喋りなさいよ。言葉にはならなかったが通じたらしい。苦しげに呻いて、男は首を振る。

「ううぅ、ふうふう、し、知らぬ」

もうひと責め、朱楽は蜜壺に全力を集めた。達くのを抑制しながら、ゆっくりと腰を上下させる。下忍の娘は命じられたわけでもないのに、男の胸や首筋に唇を這わせていた。人によっては女以上に唇や舌の愛撫が好きな者もいる。ましてや無理に吐精を禁じられている状況なのだ。感じないわけがない。

「ああぁ、よ、よせ、はあはあ、も、もうだめだ」

虚ろな目を宙にさまよわせていた。朱楽は責め問いの手をゆるめない。肉襞を淫靡に蠢かせ、男根の尖端部と側面をやわやわと刺激する。子宮に誕生しかけている可愛い火蛇を、ほんのちょっとだけ蜜壺に飛び出させた。

「あうっ」

ちろり、と、熱い舌で嘗められたように感じただろう。男は狂ったように何度も腰を突きあげる。獣のように呻く。火蛇の攻撃によって、今まで一度も覚えたことのない快感を

与えられたにちがいない。

「うおぉっ、おうおうっ、おおううっ」

猛り狂う獅子のごとく尻がはねあがる。跨っている朱楽ごと、荒々しく上下に揺れた。下忍の娘がびっくりしていたが、よけいなことを喋っている暇はない。荒馬を乗りこなすように、朱楽はしなやかに動きを合わせる。

「あっ、あっ、あっ」

壺芯を突かれる、弾けそうになる。

「いくぅっ、くううっ、あくうううう〜〜〜〜〜〜っ」

達くうぅっ!!

朱楽は三度、達していた。それでも男は果てることができない。放心したように口を開け、腰だけひくつかせている。まともに喋れない朱楽は、下忍の娘に質問を発するよう手で示した。

「抜荷を命じたのはだれ?」

「……の、軒猿」

すでに正気を失いかけていたのかもしれない。こらえきれずに答えたという感じだった。朱楽はかすれた声で確認する。

「こ、甲賀百人組の?」

かすかに男はうなずき返した。喋るのが辛いのは、朱楽にもよくわかる。ここまで責めて得られた答えであれば、信じられるのではないだろうか。しかし……やや疑問の残る答えでもあった。

「はあはあ、お、お頭に」

中間報告するしかない。果てさせてやりたかったが、心を鬼にして男根を抜いた。よろめくようにして床に転がる。ひんやりした感触が、火照った肌に心地よい。

甲賀百人組の軒猿ねえ。抜荷で手に入れた渡来品を、隆光様に献上して、点数をあげようってことかしら。

なんとなく、しっくりこない。年を取っているのか、若いのか、まるでわからない甲賀組のお頭。人の好さそうな猿そっくりの顔が、朱楽の脳裏に浮かんでいた。

六

さて、名前があがった軒猿はと言えば――。

「お頭。あれはやりすぎでございまする」

「そうだ、そうだ」

「火付けなど、卑怯者のすること」

「然り。甲賀百人組の名に傷がつきましょう」

手下たちにこれでもかと責められていた。『自白の輪』による責め問いも辛いが、手下に突きあげをくらうのもまた辛い。

「別にわしが命じたわけではない。甲賀組がやったわけでもない。そのように目の色を変えずとも……」

もごもごと口ごもった反論に、すぐさま反論があがる。

「われらの仕業と思われまする」

甚八が厳しい表情で言う。かつて桜花に右手首を切断され、片手を失った忍びであるが、そのあとの戦いにおいて、呆れるほどの変貌ぶりを見せた。桜花に惚れていたため、可愛さ余ってなんとやら、妖術でねじふせてやろうと思ったようなのだが、敗れてしまえばあとに残るのは桜花に対する愛ばかり、今回も手下たちの煽動役となっている。あれだけ目をかけてやったのにと、軒猿はいささか面白くない。飼い犬に手を咬まれたような心境なのだった。

付記すると、百人組とは鉄砲組のことで、甲賀組、伊賀組、根来組、二十五騎組の四組で編成されている。各組とも頭一名、与力二十騎（二十五騎組だけは二十五騎）、同心百名からなっていた。大手門の護衛がその役目だが、徳川の天下となった今、さほど重要な役割とはいえまい。門周辺を見廻る警官ぐらいの役職でしかなかったところに、百人組お

取り潰しの噂が出たから大変である。軒猿は甲賀組存続を考えて、仕方なく隆光に取り入り、手下たちの生活を必死に支えようとしていた。それなのに、と、怨み言のひとつも言いたくなる。

わしの気持ちも知らずに、勝手なことを言いおって。

つい睨みつけていたが、いやいや、と思った。こやつらが反撥するのも当然のこと。わしとて、付け火の話を聞いたときには、いやな気分になった。阿魔衆に同情の気持ちが湧いた。そこまでやる必要があるのか、とな。なぜ、このようなことをしたのか、わしとて尋いてみたいわ。

などと思っているから、手下によけいなにも言えなくなる。雇い主の隆光には「いつまで手こずっておるのじゃ！」と怒鳴りつけられ、手下には「われらは納得いきませぬ」と迫られる。いいことなしのお頭勤めだ。

「はあ」

もはや癖になっている吐息に、甚八の声が重なった。

「阿魔衆と甲賀組は確かに戦っておりまする。しかし、殺し合いではありませぬ。心と心、技と技、阿魔衆と甲賀組との競い合いでございまする。あのように卑劣な真似をするなど言語道断、人間の風上にもおけぬやつらではございませぬか」

武士の風上にもおけぬ、という言葉をもとにしたのであろう。言うも言うたり、われら

が言いたいのはまさにそれよ。組屋敷の殺風景な広間は拍手喝采となった。軒猿も一緒に手を叩きたいぐらいだったが、立場上、それはできない。

「おまえたちの気持ちはわからぬでもない。わしとて、今回のことにはだな。その、まあ、なんというか」

で、声が途切れた。いつにも増して精彩がない。説得力もなければ、説得できるとも思っていない。静寂が訪れた広間に、再度、凛とした甚八の声が響き渡る。

「あのような輩と手を組むのは、ご免でございまする。今回は別口までも巻きこんで、阿魔衆を翻弄する計画。われらの出番はございませぬ。甲賀組は静観していた方が、よろしいのではありませぬか」

で、またまた拍手喝采。軒猿も心の中で同意する。そのとおりじゃ、わしも見ていたいわ。心の裡では、ひそかに阿魔衆を応援しているぐらいじゃ。だがな、甚八。一度、関わった以上、高見の見物は許されぬのよ。

「これは隆光様のご命令、逆らえば甲賀組の存続は不可能となる。明日から、われらは家なし、職なし、金なし三無人よ。ついでに言うと、妻や子も愛想をつかして出て行くかもしれぬ。そうなれば家族もなしで四無人、それでもよいのか」

造語には造語で対抗した。江戸城に吹き荒れる人員削減の嵐、幕府は財政難をきわめ、常に金欠状態だ。甲賀組など吹けば飛ぶどころか、粉微塵に消え去る儚い存在、現実を突

きつけられて、手下は黙りこむ。

許せ、わしに力がないばかりに辛い思いをさせるのう。こらえるしかないのだ。阿魔衆と甲賀組、どちらが大事かと問われれば、迷うことなく、わしはおまえたちと答える。美女揃いで、おまえたちよりもずっと忍びとしての能力も高く、情報収集力にも優れており、生活力も旺盛で逞しく……考えているうちに馬鹿らしくなってきた。桜花たちが路頭に迷うことなどあるのだろうか？

否。

すぐに答えが出る。

そうだ、くノ一どもはこやつらより、ずっと世事に長けておる。心配するほどのことはあるまいさ。手を焼くのは『あのような輩』や『別口』の方であろう。ふぅむ、憐憫の情さえ湧いてくるのう。気の毒なことじゃ。

自問をめぐらせ、自分で答えを出すのもまた常、しかし、我知らず、にやにやしたのがいけなかった。

「ついていけぬわ！」

甚八が怒気をあらわにして立ちあがる。

「おれもじゃ」

即座に賛同したのは、京弥という若い忍びだ。くノ一の竜子を捕らえたときに、見張り

役となった忍びなのだが、艶技をかけられて以来、どっぷりとはまり、竜子に心底惚れている。甚八ひとりならば、ここまで盛りあがらなかっただろうが、京弥が加わったので、団結力が強くなっていた。

「そうじゃ、このようなやり方、得心がいかぬ」

「おれもじゃ」

「お頭が考え直すまでは命令には従わぬ」

次々と立ちあがり、あっという間に半分以上が戸口に向かう。ほとんどが十代から二十代前半の若者ばかりだ。

「あ……」

ま、待て。今こそ結束を固めねばならぬとき、甲賀組同士で争っているときではないのだ。『あのような輩』や『別口』につけいられたら、なんとする。伊賀、根来、二十五騎組のやつらも、隙あらばと狙っておるのだぞ。甲賀組だけ潰して、自分たちは生き残ろうと、あれやこれやと画策しておるものを、このような騒ぎが知れたら、どうなることか。言葉にせずとも胸の裡を知れ。わしの心を読め！

以上の説得は、口に出せないまま終わっていた。差し伸べた右手が力なく下に落ちる。広間に残ったのは隠居した忍びばかり、世の例に洩れず、若者たちは造反するらしい。軒猿は吐息をつくのも忘れて、茫然と立ちつくしていた。

「くく、おぬしも苦労が多いのう」

笑いを含んだ声で、振り返った。いつの間にか広間には、だれもいなくなっている。後ろに立っていたのは幽斎と名乗っている紋様師ならぬ、紋妖師。甚八が指摘した『あのような輩』がこいつだ。軒猿が見つけてきた妖術師だが、貫禄のある大柄な身体や、大黒様を思わせる福々しい顔を見る度に腹立たしくなる。

わしよりも偉そうな顔をしおって。どちらが雇い主なのかわからぬわ。おまけに厄介事まで運んできおった。『別口』をたきつけて、付け火をしたのはこやつであろうよ。いったい、なにを企んでおるのか。

「命じられたこと以外、やるのはよせ」

押し殺した声で告げた。できるだけ威厳を持たせたつもりなのだが、果たして、成功したかどうか。

「そうはいかぬ。おれも命は惜しいからな。下調べをしてわかったのは、雌蟷螂は存外、手強いということだ。そのうえ、葵の御紋も後ろに控えている。搦め手で攻め、徐々に追い詰めて、最後にとどめを刺す！」

どんっと床を踏み鳴らして、威嚇の反撃に出た。残念ながら軒猿よりも迫力があったかもしれない。体重だけでも二倍はある。押され気味だった。

「しかし、『別口』まで巻きこむのはどうかと思うがな。忍びや術師であるならばともか

くも相手は……」

「甲賀組より怖ろしいやつらよ」

くくっと、幽斎は忍び笑う。挑発するような笑いであったが、軒猿は平静さを装った。能面のような猿顔を維持すること、それが唯一、こやつに勝てる部分だった。幽斎は喜怒哀楽がはっきりしている。すでに勝ったような気分なのだろう。固太りした身体には自信がみなぎっていた。

「では、なんとしても、今のまま推し進めると？」

負けじと軒猿も両眼に凄みをこめた。正々堂々と勝負しろ。付け火をするような真似はするな。年寄りや子供には手を出すでない。視線にすべてを表したつもりだったが、幽斎はあっさりと答える。

「そうだ。おぬしらが言うところの『別口』をな。せいぜい利用させてもらうさ。すでに動き出している。今さら止めることはできぬわ」

「つまり」

一歩も引かずに睨みつける。

「まともに勝負する自信がないというわけだな」

問いかけではなく断定だった。

「なんだと!?」

あきらかに幽斎の顔色が変わる。もとは武士なのかもしれないと、軒猿は読んでいた。ゆえに誇りだけは高い。それを傷つけられると、真っ赤になって怒る。ある意味、扱いやすい男でもあった。おだてあげれば調子に乗って、いくらでも舞い、踊る。

「気を悪くしたか、すまぬ」

素直に謝って、さらに続けた。

「だが、おぬしの動き方を見ていると、そう思えてしまうのだ。真正面から戦いをいどまぬのが、いささかな。歯がゆい感じがしないでもない」

やれやれ、おかしな具合になってきたものよ。要するにわしは手心を加えさせようとしているわけだ。ふぅむ、ということはだ。直接対決になれば、こやつが負けるかもしれぬと、心のどこかでわしは思っているわけか。それは困るな。阿魔衆に戦いをいどむのは、これで三度目。三度目の正直という言葉もある。隆光様もさすがに今回は許すまい。はてさて、どうしたものか。

物思いに沈むのが好きなので、思う存分、浸ってしまった。とめどなく暗く落ちこみかけたが、

「なんとでも言うがいいわ」

憮然とした幽斎の言葉で、いやおうなく引き戻される。馬鹿にしたように鼻を鳴らして、軒猿を一瞥した。

「着々と準備は進んでいる。くノ一どもが邪魔をせぬよう、甲賀組が働けるのであれば、おれもよけいな真似はせぬのだがな。先刻のあれでは、いたしかたあるまい。隠居爺ばかりでは話にならぬわ」

ごもっとも。ついうなずきかけたが、途中でやめた。手下の気持ちもわかる。幽斎の言い分も理解できぬではない。では、自分はどうすればよいのか。大好きな堂々めぐりの世界に入りかけたが、これも直前で我慢した。

「進んでいる準備とやらを、そろそろ見せてもらおうではないか。口だけであれば、こちらにも考えがある」

雇い主はわしだと、あらためて口にした。皮肉っぽい笑みを浮かべて、幽斎は広間の隣の部屋に続く戸に進む。開けようとしたが、ふと思い出したように後ろを見た。

「ひとつ聞いておきたい。今回のこれがうまくいった暁には……」

「わかっておる。隆光様に紹介して、仕官の道が開けるように手筈を整える。わしは約束は違えぬゆえ、安心いたせ」

おまえと違ってな、いいかげんなことはできぬのよ。せいいっぱいの皮肉を返したつもりなのに、相手はけろりとしている。

「ま、軒猿殿に限って、約束を違えるようなことはあるまいさ。いざ、こちらへ」

戸を開けた幽斎に、仕方なく従った。まったく、いちいち癇にさわる男だ。仕官の口と

いう大事を頼んでいるのではないか。少しは謙虚にだな。人を敬っても罰はあたらぬと思うが……。

「おお！」

目をあげた瞬間、心の文句が消え失せた。そこに広がっていたのは薄暗い寝間。行灯の明かりに照らし出されて、白無垢の花嫁が、敷かれた布団の枕元に座っている。初夜の光景であろう。

「あれは？」

「おれの傀儡に陥ちかけている大名家の姫君よ。黙って見ておるがいい。なにもかも、すべてをおれにまかせることじゃ」

幽斎は笑いを残して、幻像の中に吸いこまれて行く。妖術師によって生み出された異世界を、軒猿は口を開けて凝視していた。

第二章　謎の男

一

「あ、若様。なにをなさいまする」

白い打掛を羽織っていた姫君は、いきなり後ろを向かされた。肌襦袢や腰巻き、長襦袢、そして、小袖類などはすでに脱ぎ捨てている。裸身に純白の打掛をまとっただけの、心もとない花嫁姿だった。

「這いつくばるのじゃ」

若殿様が命じる。いつものような初夜、終わりのない秘め事。そういった異常さには気づいていない。

「は、はい」

言われるまま布団の上に這いつくばった。焦れた声が響く。

「そうではない。尻を高く突きあげるのじゃ。両脚を大きく広げての」

「く」

屈辱的な姿態を取らされることに、強い羞恥を覚えたが、おずおずと尻をあげ、命令どおり両脚を広げた。まとっている絹の白い打掛が、やわやわと肌を愛撫し始める。羽織っているだけなのに、胸もとや股間にぴたりと密着していた。背中や尻にも絹が貼りつき、皮膚を刺激している。全身を舌で嘗められているような感じだった。やわらかな絹の舌は、ヒトのそれよりも心地いい。

「うんんぅ〜〜〜〜ン、んんぅうぅ〜〜〜〜ン」

こらえようとしても声が出てしまう。何度も不可思議な時を持ったお陰で、わずかな前戯で快感が高まるようになっていた。硬かった乳房も少し大きくなり、埋もれていた乳首がすぐ尖るようになっている。絹の舌が乳首を転がすように嘗め、唇で軽く咬んだりした。たったそれだけの刺激なのに、

「んぅうっ」

尻をいっそうあげて、のけぞる。

「くくく、そうじゃ、姫はよい娘じゃのう。今宵はまだそのときではないが、近いうちにひとつになろうぞ。この打掛が姫の白い肌を求めておるゆえな」

若殿は打掛を尻にすりつけるようにして、揉みしだいている。股間に貼りついていた絹

の舌が、淡い叢を嘗め始めた。舌先を使って叢を分け、開きかけている花弁をそっと割る。剝き出しになった花芯は、早くも充血していたが、いまだに美しい桜色だった。嘗めてくれるだろうと、期待して待つ。が、絹の舌は花弁を嘗めるばかりで、なかなか伸びてこない。

「あ、あ、あぁ、は、早くぅ」

おねだりするのを覚えたのも最近のこと、振るか振らぬかといった程度ではあったが、尻を小さく揺らした刹那、

「あくぅっ」

絹の舌が花芯にふれる。小刻みに蠕動し、優しく嘗めた。経験の浅い姫には、強すぎる前戯は苦痛になりかねない。やわらかく、しなやかに、細心の注意を払って、花芯を嘗めあげる。

「うぅ〜〜〜んぅ、あぁ、いいぃ〜〜〜〜ぃ」

教えられたように、できるだけ声をあげるようにした。次はどうしてほしいのか、なにがほしいのか。若様は執拗なまでに聞き、要望をかなえてくれる。そのためには声を出すのが良策、恥ずかしさに頬を染めつつも、かなりの大声を出していた。

「そうじゃ、いい声じゃ。褒美をやろう。一度、達くがよい」

若様は相変わらず、尻をさすり、撫でている。ときおり打掛がふっと皮膚に融け、一体

化するように見えた。桃のような尻が透けて、なおさら刺激される。背中や両脚に融合しかけた打掛が、嘗めるように動いた。

「あはぁ〜〜、い、いやいやぁ〜〜」

いやではない。これも覚えた言葉のひとつだ。こういった言葉によって、互いに刺激され、気持ちが高まる。はあはあと喘ぎ、自然に尻を振っていた。花芯を嘗められれば嘗められるほど下半身が揺れる。上下、前後と淫らに動く。高島田に結いあげた髪を、覆っている綿帽子が、ゆらゆらと白い花のようにゆらめいた。

「うふうぅ、ああぁ、ふうふう、あうううぅ〜〜」

頬が真っ赤になり、乳房は花芯のような桜色になっている。蕾のごとく固い蜜壺からも、こらえきれずに蜜が滲んだ。男根による洗礼はまだだが、指によって何度も肉襞をさわられている。いつものように早く指を挿れてほしいと思い、さらに高く尻をあげる。融合しかけている絹の打掛が、まあるい曲線そのままに、貼りついていた。墨のような叢の色合いが、ことさら淫靡に見える。

「おう、おう、蜜があふれてきたぞ」

若様がちゅるりと蜜壺の入口に唇を付けた。

「ひ！」

一瞬、背中を反り返らせる。絹の舌は最高だが、ヒトの唇も同じぐらいに刺激的だ。湿

った感触や息づかいが感じられて、柔肌が熱く燃えてくる。若様の唇と舌は、蜜壺の入口を念入りに嘗める。後ろの菊花をなぞるように、舌先をそよがせる。不思議なことに打掛をまくりあげているわけではないのだが、女陰や菊花にふれていた。もはや、ほとんど打掛と肌の区別がつかなくなっている。ときにふわりと打掛が透けたかと思えば、白い皮膚が剝き出されたりもした。両脚の皮膚に同化して、白く変わったその奥に、肉色の女陰が見え隠れしている。

「たまらぬ」

若様はそろりと、中指を蜜壺に挿し入れた。

「うくっ」

再度、姫君は頤(おとがい)を突きあげる。乳首に吸いつく絹の舌や、花芯を嘗める絹の舌が、いちだんと動きを速くする。嘗めながら両掌で揉みあげるように乳房を愛撫し、腹や背中の皮膚を撫でさする。蜜壺に挿れられた中指は、慎重に肉襞をさわり、奥へと指を伸ばしていった。奥のあれ、なんであるのかわからないあれを、突かれながら嘗められると、ふわっと意識が遠くなる。あまりの気持ちよさに失神しかける。

「ふうっ、ううっ、と、殿っ」

若様から殿に格上げしていた。高く掲げた尻が、揺れ動きながら、さらに上にあがる。布団に乳房をこすりつけるようにして、姫君は悶(もだ)えた。

「あぁぁ〜〜〜〜〜ぁ、も、もう、はあはあぁ〜〜〜〜〜」

絶頂が近づいている、花芯が痛いほど張りつめている。応えるように絹の舌が速くなった。小刻みに揺動して、高みにのぼりつめさせようとする。

「と、殿っ、はあああぁっ」

最後のひと声は絶叫だった。

「達くっ、達くうぅっ、達きまするううぅ〜〜〜〜〜〜っ」

きつく布団を握りしめ、きゅっと尻を突きあげる。次の瞬間、下半身が大きく痙攣した。痺れるような快感が、両脚に広がっていく。思わず力を抜いたとき、蜜壺内の中指が、ぐっと奥を突いた。

「うくうぅっ」

蠢く肉襞の奥で、壺芯がぷっくりふくらんでいる。それを突かれてのけぞった。ぷるぷると太股が震え、獣のような声が迸る。

「おうっ、おおおぅっ、いいぃ〜〜〜〜〜っ」

くちゅくちゅと、蜜壺が淫らな音をたてている。男にしては細い指が、壺芯を撫でさすり、こすりあげた。はしたない音が大きくなるほどに感じてくる。もっとほしいと思ってしまう。

「はあはあ、早くぅ」

濡れた眸で後ろを見たが、なにを、どうしてほしいのか、姫にはわからなかった。訴えたくても、これ以上、言葉にならない。凛とした面差しの若様は、かすれた声でまた命じた。

「仰向けになるのじゃ」

「は、はい」

くるりとこちらを向いた姫の裸身には、純白の打掛が張りついている。腕や胸、腹、両脚と、絹の肌になったかのように、着物と同一化していた。長い裾が人魚の尾ヒレのように、足先で遊んでいる。両脚の膝頭を付けていると、まるで白無垢を着ているような姿になった。

「脚を広げるのじゃ。できるだけ大きくの」

妙な色に目を光らせて、若様は告げる。自分の身に起きていることを、知る由もない姫は、両膝を曲げ、少しずつ持ちあげていった。すると……まさに着ていた白無垢を広げたかのごとく、秘部があらわになる。先刻の絶頂で蜜壺付近が濡れ光り、蠱惑的な〝絵〟となっていた。

「美しいのう」

ごくりと唾を呑む。どこまでが着物で、どこからが肌なのか、わからない。乳房は桜色に染まり、女陰の襞は艶めかしく肉色になっている。淡い茂みの部分も、墨で描いたよう

に官能的だ。開いた花弁の奥で息づく花芯は、薄桃色に充血し、誘うように震えている。

「と、殿」

喘ぎつつ目を向けた姫に、若様は覆いかぶさった。まずは乳房の感触を、唇と舌で堪能する。絹と同化した絹そのものの肌は、嘗めるだけで気持ちがいい。むろん姫の快感は、その比ではなかった。

「ああ、はあはあ、と、殿、殿ぉ」

早く嘗めてほしいと、しきりに両脚を動かしている。足先で揺れる白無垢の裾が、焦れったさを表していた。若様はたっぷり味わうように、乳首を入念に嘗める。両手で揉みしだきながら、徐々に身体をさげていく。真っ白な打掛の奥で、濡れぬれと誘う女陰に、ちゅうぅっと吸いついた。

「ああっ!?」

いきなり強すぎる刺激を受けて、快感と不満が同時にあがる。うう〜んと尻を振り、曖昧に訴えた。それがわからぬ若様ではない。今度は望みどおり、やわらかく舌先をくねらせる。姫の皮膚に貼りついた打掛が、またぐにゅぐにゅと蠢き始めた。乳房を揉みしだき、乳首を絹の舌で嘗める。

「そ、そう、で、ございまするぅ、ああぁ〜〜〜〜、いいぃ〜〜〜〜〜ぃ」

んふんふと鼻を鳴らして身悶える。若様の細い中指が、ふたたび蜜壺に滑りこんだ。絹

の舌ではなく、ヒトの生唇と舌による前戯、そのうえ指の責めまで加わって、尾ヒレのような裾が忙しげに揺れる。

「はあぁ〜〜ぁ、もっとぉ、はあはあぁ〜〜〜〜」

蜜壺を責めていた指が、一本から二本になった。中指に人さし指を添えて、奥深く侵入する。ややきつめではあるものの、入らないことはなかった。太くなった分、充実感がある。ぐりぐりと指の腹で壺芯を撫で、こすりあげられる。花芯を嘗める舌がいっそう濃やかになった。くちゅぴちゃと、先刻以上にはしたない音があがっている。姫は乳房に両膝が着くほど曲げていた。もうこれ以上は広げられない。

「んんんんんぅ〜〜〜っ、あふぅぅ〜〜〜〜〜んんぅっ」

がくがくと両脚が動いていた。人魚の尾ヒレのような裾が、悩ましげに揺れる。若様の頭を両手で摑み、首を激しく振り続けていた。どうやって表現したらいいのかわからないのだ。

「あ、あ、もう」

だめでございまするぅ。

「と、殿っ、達くぅっ、達きまするうううぅ〜〜〜〜〜っ」

背中が弓なりに反り返ったあと、びくびくっと尻が痙攣する。尾ヒレのような白い裾が、飛び跳ねるように動いた。着物の裾を割るような恰好で、女陰に吸いついていた若様は、

おもむろに顔をあげる。

「さあて、そなたにはどのような〝絵〟を描くか。白無垢で嫁ぐそなた自身がよいかもしれぬのう。新しい〈肌衣〉の誕生まであとわずか、他にもそなたの仲間がおる。待ちわびておるぞ」

股間では男根が、女陰を狙うように屹立している。姫はうっとり目を細め、快感の余韻に浸っていた。

二

白無垢の武家娘が、男に責め苛まれている。

繰り返し行われる祝言の場面、そして、それは延々と続く初夜の場面になる。終わったと思うと、また始まる悪夢。

ああ、いやだ、いやだ。よりにもよって、白無垢の夢を見るなんてさ。夫婦になりたいと思う男もいなければ、所帯を持ちたいと考えたこともないってのに、どういうことかしら。なにか意味があるのかしらねえ。

昨夜の淫夢を思い出して、桜花は渋面になった。あんな夢を見てしまうとはなさけない。まるで男をほしがっているようではないか。火事で拠り所にしていた隠れ家を失い、自分

で思っている以上に、心細くなっているのかもしれない。それが祝言の夢になって顕れたのかもしれなかった。

「けど、がんばらないとね。あんたをくれた人のためにもさ」

玄関の上がり框に置いてある万年青の鉢植えを手に取る。桜花たちは借りたばかりの貸家に来て、掃除をしているところだった。忘れずに持って来た鉢植えを、しみじみと眺める。置いていった人間の想いが、葉や赤い実から放射されているようだ。見ているだけで元気が出てくる。今やこの鉢植えは女忍者たちの、アイドル的存在なのである。

空前の園芸ブームになるのは、このころからだが、植木屋たちの間では、競い合うように品種改良が行われている。万年青を始めとして、橘、松葉蘭、石斛、蘇鉄、糸南天など、現代の感覚からすれば、地味で流行りとはおよそ縁がなさそうな印象を受けるが、共通点は斑入や矮性といった珍品奇品の出やすい点にあった。自称『竜子の鉢植え』も珍しい斑が入っており、売ればけっこうな値がつきそうな珍品である。が、今ひとつ元気がないように感じられた。

「この赤い実の色がさ。悪いんだよ。水のやりすぎじゃないのかい」

背後の足音を察して聞こえよがしに言う。島田風の髪に短い着物を着た朱楽が、すぐに反論した。

「朝、あたしがやりましたよ。それがいけないって言うんですか」

こいつも『これはあたしに贈られた鉢植え』と思っているクチであろう。ほとんど全員がそう思いこみ、朝に夕に水をやるのだから万年青はたまらない。

「これはあたしが責任を持って面倒を見るよ。勝手に水をやらないでおくれな。みんなにもそう言っておくれ。いいね」

お頭の立場を利用して、『あたしの鉢植えなんだよ』と、宣言したようなものだった。朱楽は不満げに唇を尖らせる。

「でもぉ」

「文句あるのかい」

冷たく睨みつければ、首をすくめて退散する。

「あ、いえ、なにもありません。お頭の命令に従います」

「それで、なんの用なのさ。用事があったから来たんじゃないのかい」

「そうでした。捕まえた人夫のことなんです。まだ水戸藩の地下牢にいるわけですけれど、どうしますか。抜荷の下手人は甲賀百人組の軒猿と、吐いたわけですから、解き放ってやりますかぁ」

甘ったるく語尾を伸ばすのが、朱楽の悪い癖。媚びを売りすぎるその仕草が、時々鼻につく。

「馬鹿をお言いでないよ。あんな戯れ言、信じているのかい。軒猿かどうか、わかったも

んじゃないさ。本物の下手人に、捕まったときにはそう答えろと、命じられたのかもしれない。あてになりゃしないよ」

「まあ、あたしもそう思いますけどぉ。それじゃ、しばらく地下牢に閉じこめておくわけですか。今日は竜子が交代して、見張りに付いていますけど」

「竜子じゃ頼りないからね。あとで白蓮を行かせるよ。責め問いは『鉄鼠の白蓮』の得意技、真実を吐露させるには、ちょいと怖い思いをさせてやった方がいいかもしれない。そうすりゃ素直になるだろうさ」

「じゃ、あたしはなにを？」

「そうだねえ。頼みたいことはあるんだけどさ」

真の下手人は俵物を積みこんだ船を、どこに隠すつもりだったのか。空船にしないで、新たな荷を積みこむ予定だったのは確かだが、抜荷を積んだ船を漫然と岸に繋いでおくわけにはいかない。隠すために河岸沿いに建つどこかの屋敷に逃げこむ必要があったはずだ。繋がりがあるのは大名家か、はたまた豪商か。大物が動いているような感覚はあるものの、現時点でははっきりしていない。手当たり次第、探りを入れるだけの人員も時間もなかった。

「とりあえず、下忍たちに部屋を割り振っておやりよ。喧嘩にならないように注意するんだよ。あとで『あっちがよかった』だの、『こっちの部屋の方がいいわあ』だの、騒がれ

るのはいやだからね」

若い娘が集団生活をするとなれば、それなりにむずかしさがある。今までは慣れ親しんだ家――何軒も連なった大きな長屋を、自由に使っていたため、急に狭くなれば不満が出るのは当然だ。ただでさえ火事騒ぎで気が立っている。些細なことが原因で、それこそ後々まで争うような火種を作りかねない。こういうときこそ一致団結して、事にあたらなければならなかった。

「わかってます。新しい隠れ家ができるまでの辛抱と、言い聞かせていますから」

「ちょいと、お邪魔いたしますよ」

不意に引き戸が開いて、黒い着物姿の男が顔を覗かせた。年のころは三十代後半、羽織も黒だが、地模様の入った渋い茶色の裏地を使っている。粋でお洒落な装いだった。風雅な数奇者、そんな印象を受ける。数奇者とは風流な人、茶の湯をたしなんだりする人、あるいは色好みの人のことをいう。

「はい、どちらさまでございましょうか」

姐さん被りの手拭いを取って、桜花は玄関先に膝を突いた。見たことのない男だが、なんとなく心惹かれる。祝言の淫夢を見たからではないだろうが、惚れやすいという悪癖が、ひょっこり頭をもたげていた。

「ええと、盗人横丁、あ、いや、失礼いたしました。火事になった古着屋さんの、女主

という方にお目にかかりたいと思いまして」

食いいるように、男は桜花を見つめている。いやらしい視線ではない。記憶に焼きつけようとするかのような、凄みのある目だった。迫力に押されて、桜花は無意識のうちに少しだけ後ろにさがる。

「女主はわたくしでございますが」

殺気に似たものを感じていた。あるいは妖術師かもしれない。武器にもなる簪を、さりげなく外して、握りしめる。

「やはり……そうでございましたか」

男は止めていた息を吐き出すように、大きく深呼吸した。張りつめていた空気がやわらぎ、殺気らしきものが弱くなる。桜花も知らずに、肩の力をぬいていた。

「月並みな褒め言葉ではございまするが、いや、お美しい。顔がふんわりと丸みを帯び、お顔は薄い桜色の肌、目がぱっちりして、眉は厚みがあり、眉と眉の間がゆったりとした雰囲気で開いている。口はあくまでも小さく、歯は粒が揃っていて雪のごとき皓さ、額ぎわは自然で、首が長く、後れ毛がない。手の指はと見れば、細くて長く、爪は薄い。腰はしまっていて、あまり肉がついていないようでございまするな。それも美人の条件のひとつ、文句のつけようがありませぬ。あたしも美女には数多く出会いましたが、貴女様ほど美しい方に出会うたのは初めて、柄にもなく胸が高鳴っておりまする」

一気に褒め言葉を並べて、ふうっと吐息をついた。息もつかずに喋ったので深呼吸が必要だったのだろう。月並みどころではない。普通では口にできない褒め言葉だった。

「はあ」

これだけ褒められれば桜花とて悪い気はしない。とはいえ、いささか薄気味悪くもあった。下心があるのではないか。厄介な頼み事が口にされるのではないか。朱楽はむろんのこと、好奇心旺盛な下忍たちも、茶の間にするつもりの部屋から顔を突き出している。桜花は真意を知りたくて問いかけた。

「それで、どんな御用でございましょうか。このあとの台詞を考えますと、聞きたくないような気もいたしております。頼み事でございましょうか」

「これはおそれいりましてございまする。察しが早いのも、美い女の必須条件。実は折り入ってお願いがございまして、本日、参上つかまつりました次第。実は」

さらに近づいた両眼を見て、どきりとした。夢見る少年のような美しい眸だったからである。先刻までの鋭い眼光は消え失せ、このうえなく優しい表情になっていた。無言で見つめられてしまい、桜花はうろたえる。

「な、なんでございましょう」

頬を染めて促した。どうにもやりにくい。妖術師であれば、すでに負けを認めざるをえなかった。見事に陥ちてしまっている。

「実はあたしは絵師でございまして、拙いながらも、それでこの口を養っております。天女のごとき貴女様の噂を耳にする度、一度、描いてみたいものだと思っておりました。こうして、お目にかかりますと、その思いがつのるばかり、あ、いえ、もちろん無料とは申しませぬ。描かせていただく代金として、ここに十両、ご用意してまいりましたが」

懐に手を入れて、取り出そうとする。

「十両!?」

桜花は驚きに目を丸くした。それを勘違いしたのか、

「少のうございますか。それはそうでしょうな。貴女様の貴重な時間を、あたしが買い取らせていただくわけでございますから、そうでございますなあ。十五両、いやいや、二十両ではいかがでございましょうか。本日は手付け金として、半金、置いてまいりますゆえ」

懐紙に包んだ小判らしき包みを置いた。朱楽がしきりに後ろで突っついている。お頭、引き受けた方がいいですよ。火事騒ぎでなにかと物入りだし、金はいくらあっても腐るものじゃないですから。美少女の存在にそこで初めて気づいたように、男が朱楽に視線を移した。

「貴女様もお美しい。古着屋さんは美女揃いだと、常々、聞いておりましたが、後ろに居並ぶ方々も、負けず劣らずでございますなあ。いやはや、眼福、眼福。今日は良い目の保

養をさせていただきました。至福の時でございまする」
「あ、あの、あたし、朱楽って言うんです。他にも白蓮とか、竜子とかいるんですよ。みーんなそれぞれに個性あふれる美女で……」
「おやめよ、みっともない」
早口で制した。金をくれるのであれば絵のモデルぐらいお安い御用と、朱楽なりに考えているのはわかる。一日も早く元の家を再建したいがゆえの言葉だった。もっとも、桜花に競争心をいだき、あたしの方が綺麗とアピールしている部分があるのも否定できない。
「失礼ですが、お名前をお聞かせ願えますか」
ここでようやく桜花も少し冷静になった。今まで名前も聞かずにいたわけで、狼狽ぶりが表れている。
「これは失礼をいたしました。申し遅れましたが、あたしは積翠の号で、絵を描いております。まだまだ世に知られてはおりませぬが、のちに描いたことを貴女様が誇りに思ってくださるような、絵師になるつもりでおりまする」
積翠。桜花は記憶を探ってみたが、聞いたことのない名前だった。浮世絵はまだ墨刷りだけしかなく、色鮮やかな錦絵は出ていない。浮世絵師として有名なのは、菱川師宣だが、昨年、亡くなっていた。覚えのない名前といい、いきなり二十両を提示することといい、怪しい人物なのではないかという疑問が湧いてくる。個人的にはぐっときたが、お頭とし

ては簡単に受けられなかった。

「考えさせてくださいまし」

小判らしき包みを押し返した。ああ、もったいない。受け取っておけばいいのにさ。朱楽のつぶやきは無視する。

「描いていただく気持ちになりましたら、ご連絡いたします。どちらに文を送ればよろしいでしょうか」

さほど深い意味もなく尋ねた。

「冬木屋さんの方に来ていただけば、わかりますよ。奇妙な客人の積翠と言えば、取り次いでくれますのでね」

「え」

浮ついていた気持ちが、一気に冷める。この男、やはり、敵の妖術師かもしれない。あるいは手先なのか。強い警戒心と疑惑が湧きあがってくる。

冬木屋は材木商を営む豪商で、深川から茅場町（かやばちょう）一帯は、冬木屋の材木置場や見世、屋敷が軒を連ねており、冬木町と呼ばれていた。数奇者や絵師、俳人、戯作者（げさくしゃ）といった著名人が集まるサロンのような場所になっている。桜花が引っかかったのは、豪商であるということと、深川という立地条件だ。

一昨日の抜荷事件。俵物を積んだ船を隠す場所として、あたしは大名屋敷か豪商の屋敷

が怪しいと思った。冬木屋であれば簡単に隠せただろうよ。もしかしたら、この男はあたしたちの様子を探りに来たのかもしれないね。

「わかりました。必ずご連絡いたします。描いていただくにしろ、お断りするにしろ、だれかを使いにやりますので」

本当は引き受けたかったのだが、急に答えを変えたら不審をいだかれる。敵の罠なのかもしれないが、気づかぬふりをした方がいいと判断した。

「お断り、ですか。しないでいただきたいですねえ。それでは、これで失礼いたしますよ。良いお返事をお待ちいたしております」

なにやら妙な言い方をして、積翠と名乗る男は出て行った。

「お断り」

それがどうかしたのだろうか。やけに意味ありげだったような……思いに沈む暇はない。桜花は急いで命じた。

「朱楽。あとを尾けな。本当に冬木屋の客人なのか、積翠が本名なのか。できる限りのことを調べてくるんだよ」

「はい、はいはいはい、かしこまりました。『火処の朱楽』におまかせくださいませ」

退屈しきっていた朱楽は、喜び勇んで飛び出して行く。

三

「お頭っ」

入れ替わるようにして、二人の下忍が入って来た。興奮しているらしく、頬が赤く染まっている。桜花が質問する前に、異状事態を報告した。

「味噌や醤油を売ってくれないんです」

「あたしの方もそうでした。うちには米を売れないと言われたんです。塩も買いに行きましたが、そこも同じ返事で」

味噌、醤油、米、塩などの、生活必需品を買いに行かせていたのだ。桜花はとうてい信じられない。最初は冗談だと思った。

「なにつまらないこと言ってんだい。いつものお見世だろ。長年、付き合いがあるんだよ。売ってくれないわけが……」

まさか!?

はっとした。これも『だれか』の仕業ではないのか？　付け火をした真の下手人が企てたことではないのか？　阿魔衆に心理的圧力をかけようとして、兵糧攻めを始めたのではないか？

「本当なんです、お頭。どのお見世の人も、みんな素っ気なくて」
「あたしたち、嘘なんかついていません。お見世の人たち、様子がおかしかったです。目を合わせないようにしていました。だれかに言われて、売らないようにしているんじゃないかって」
　ねえ、と、二人は顔を見合わせる。間違いない。見えない敵による心理作戦だ。孤立させて、じわじわと追い詰める。火事で士気が落ちているところを、さらに攻めて戦意を失わせるつもりにちがいない。
「ちくしょう」
　きりっと奥歯を噛みしめた。いったい、どんなやつなのか。商人にそれだけ怖れられる相手とは……武士だろうか。大名であれば可能かもしれない。だが、大名家に出入りしている特定の商人であればともかくも、職種の異なる商人を、おとなしく従わせることができるだろうか。米屋も味噌屋も商いに誇りを持つ人たちだ。桜花たちとの付き合いを重んじるように思える。
　つまり、付き合いだのなんだのを吹っ飛ばすほど怖い相手ってことだね。向こう三軒両隣りの情なんか関係ないってわけさ。いったい、どんなやつなのか。ぜひとも顔を拝みたい……。
「お頭っ」

再度、戸が荒々しく開いた。今度は白蓮が、血相を変えている。
「大急ぎで隠居家に来てくれ。わたしは犬たちを船に乗せて、水戸家の下屋敷に連れて行く。竜子と交代する予定だったから、ちょうどいいと、そうだ。金を忘れずにな。袖の下が必要だ」
言い終えるや、隠居くノ一たちの避難場所である家に踵を返した。桜花は当惑して、戸口に顔を突き出す。
「え、ちょいと、白蓮。なんなのさ。袖の下が必要って、どういうことなんだい？」
もう姿が見えない。よくわからないが、犬のことでなにか新事件が起きたようである。調べに行かせている暇はないと判断した。小判を懐紙で包み、懐に押しこんで、あとを追いかける。
「まったく、もう、次から次へといろんなことが」
途中の角で、さっきの男——積翠と目が合った。男にしては優雅な仕草で一礼する。騒ぎに気づいて好奇心をそそられ、まだ居残っていたのだろう。朱楽もそのへんにいるはずだが、視線を向ければ怪しまれる。桜花は無視して通り過ぎた。貸家の前には人だかりができ、緊迫感が漂っている。
「ああ、来ましたよ。あれが我が家の主でございます」
輪の中心部から、やけにのんびりした声が響いた。桜花と竜子の祖母であるお婆様が、

人垣を押しのけて道を造ってくれる。中にいたのはお婆様と、数人の柿羽織だった。桜花の美貌を見て、にやりと唇がゆがむ。

「こりゃ、すげえや」

「美い女だねえ」

柿羽織は御簡略見廻りをする足軽たちの別名で、柿色の羽織を着用していることから、その名称がついた。華美取締りという権限を持つ柿羽織たちの目は過酷で、わがもの顔に城下を往来しては、女たちの衣服を改め、手にした小袋、文箱の類まで開けさせて容赦なく調べたりする。柿羽織の中には、呉服店に押しかけて、ご禁制の豪奢な反物などを見つけると、藩庁の名で押収した挙げ句、他領に持ち出して売り払う悪徳警官まがいの不届き者もいた。通常は華美取締りの名目で動くかれらが、どんな用件で隠居家を訪れたのか。白蓮が犬のことを口にしていたことから考えて、おおよその推測はついている。

「これは、みなさま、お役目ご苦労様にございます」

桜花は下手に出て、頭格らしい男の手をそっと握りしめた。

「つまらないものでございまするが、お納めくださいませ。みなさまがお見廻りをしてくださるお陰で、わたくしどもは安心して江戸の町を歩けます。何卒よしなに」

包んだ小判を素早く渡して嫣然と微笑みかける。吉原の太夫さながらに、男を虜にする極上の笑顔だ。威嚇を与えるべく、無意味にニヤニヤしていた柿羽織たちだったが、柄に

もなく頬を染め、急に落ち着きをなくし始める。

「い、いや、なに、犬の声がな。うるせえって苦情が来たのよ。犬は中野に造られている新囲いに収容するのが定め、よもや犬を飼ってはいるまいと思ったがよ。念のために様子を見に来たってわけだ」

犬はすでに白蓮が裏口から連れ出したはず、お婆様が視線でそれらの事実を伝える。華美取締りの柿羽織が、どうして、犬を飼うことにまで口出しするのか。因縁をつけているのはあきらかだったが、追及できるわけもない。

「ほほほ、いやですねえ、旦那」

桜花はわざとらしいほどの明るさで笑いとばした。

「うちには犬なぞおりませんよ。先日、火事を出したばかりなのは、ご存じでございましょう？　犬を飼う余裕なぞ、ございませぬ。どこの、どなたが訴え出たのか知りませんが、風に乗って流れて来た吠え声でも、勘違いなさったのでしょう。もし、お疑いであるならば、家の中をご案内いたしますが」

頭格の男の手を、両手で包みこむ。相手もとうの昔に犬が連れ出されたのを知っている。これはわかりきったうえで行われている会話なのだ。

「いや、それには及ばねえよ。あんたのような別嬪が、幕府の役人であるおれたちを騙すはずがねえ。ま、気にしねえでくんな。これもお勤めだからよ」

懐に袖の下を納めて、意気揚々と柿羽織たちは引きあげて行く。下忍たちが野次馬を追い払い、お婆様も家の中に戻る。桜花は複雑な気持ちで、柿羽織たちを見送った。

あんな連中まで使って、いやがらせをするなんて。幕府にも繋がりがあるってことを、暗にほのめかしているんだろうさ。この調子じゃ、もっと厄介な事件が起きるかもしれない。次はなにを仕掛けてくるか。

「白蓮様は無事、犬たちを河岸に連れて行きました。竜子様と見張りを交代するため、水戸藩の下屋敷に向かうとのことです」

下忍のひとりが、伝言を告げる。

「わかった」

「尾けますか」

柿羽織たちが行った道を目で示して申し出た。柿羽織を尾けたところで、すぐに黒幕がつかめるとは思えない。が、手がかりが少ない以上、ここは定石どおりに動くしかなかった。

「頼むよ。くれぐれも気づかれないようにするんだよ。少しでも危険を感じたら、すぐに引きあげるんだ。わかったね」

相手の正体が見えないのは実に不気味だった。若い下忍にはお頭の恐怖が理解できないのかもしれない。

「はい」

いとも軽やかに返事をして、人波にまぎれこむ。桜花は新しい貸家に戻りながら考えこんだ。

抜荷の下手人が、付け火をしたのか。そして、付け火の下手人が、今回の騒ぎを企てたのか。捕らえた船の人夫は、甲賀百人組の軒猿が下手人なのだと告げた。しかし、軒猿が柿羽織を利用して、こんないやがらせをするだろうか。米や味噌といった生活必需品が買えなくなるような姑息な真似をするだろうか？

そうは思えないんだよねえ。それじゃ、真の下手人はとなると……。

「あっ」

だれかがぶつかって来たので、桜花は反射的に懐の巾着を確かめた。よろめいたふりをして、懐のお宝を盗む掏摸が多いからだ。激突した瞬間に弾き返してしまったらしく、俳人風の装いをした老人が地面に座りこんでいる。助け起こそうと屈みこんだが、油断なく懐の巾着は握りしめていた。江戸の掏摸は油断がならない。生き馬の目を抜く都市では、老人は老人に非ず、老人のふりをした巾着切りかもしれないのである。

「すまないことをしちまったね。大丈夫、えっ!?」

桜花は顔を見て絶句した。倒れていたのは正真正銘の老人、金主である水戸家のご隠居様が、俳人に変装して座りこんでいる。

「桜花の尻は、よう弾むのう。いきおいよく弾き飛ばされてしまったわい。その分ではポロポロと、赤児を産めそうじゃの」

フォフォフォッといつものように、妖怪爺らしく笑った。あるときは虚無僧、あるときはただの好色爺、またあるときは俳人と、まさに物の怪さながらに千変万化ぶりを発揮する。

「……」

あまりにも自然すぎて怖い。好色爺は地だからともかくも、それ以外のときも、なりきりすぎている。楽しんでいらっしゃるんですね、ご老公様。

一瞬、声を失ったものの、すぐさま光圀の意図どおりに動いた。

「悪かったですねえ。お怪我はございませんか。ご気分がお悪くなられたんでしょう。引っ越したばかりで、なんのおもてなしもできませんが、お茶でも一服、召しあがっていってくださいな」

「おお、それはなにより、助かりますのう。どうも腰を痛めてしまったようで」

演技力たっぷりに、光圀が腕に捕まった。たまたまぶつかった赤の他人同士として、貸家に入る。戸を閉めて、上がり框に座らせたとたん、俳人爺の目が光った。

「大名家で異変が起きておる。婚礼の夜、突如として花嫁が消えてしまうのだ。神隠しに遭ったかのごとく、綺麗さっぱりとな。いなくなってしまうのよ」

「それは」

抜荷事件と関係あるのでございますか。喉もとまで出かかった問いかけを、かろうじて呑みこむ。白無垢の悪夢のことも甦ったが、光圀の鋭い眼光に遮られていた。黙って言葉を待つ。

「行方不明になった花嫁はすでに三人」

懐から取り出した草紙には、嫁ぐ方と花嫁を迎え入れる大名家の名前が記されていた。大名というのは一万石以上、上様にもむろん、お目見えが許されている。四軒目の名前に、桜花は目を留めた。

「最後の大名家は？」

「近々姫君が嫁ぐ大名家じゃ。手筈は整えてある。いつものように動け」

潜入して探れという隠密指令であった。帰ろうとする気配を感じて、あわて気味に尋ねる。

「消えた姫君たちに共通する特徴のようなものはありますか」

最低限の情報は得ておきたい。花嫁であることの他、なにか手がかりに繋がるような共通点はないのか。

「ふぅむ、三人ともさほど美貌の持ち主ではない。ただ皮膚がの。きめ細やかで色白、吸いつくような餅肌じゃったらしいが」

「皮膚」

それ以上の質問は許されない。光圀は早くも立ちあがり、貸家をあとにする。見送った桜花の目の端に、またもや積翠の姿がよぎった。

阿魔衆の近辺には、不穏な気配が高まっている。

四

日本橋を離れた謎の絵師、積翠が向かったのは、材木商、冬木屋のある深川ではなく、新両替町一丁目だった。現在の銀座一丁目あたりで、その東側に銀座の江戸屋敷が建てられている。

銀座とは幕府の監督下でその指示を受け、銀貨を鋳造してその手数料を受け取る特権的な共同事業体だ。今で言うと公団がそれに近いかもしれない。現代の東京の銀座は、その江戸銀座の在った場所で、古くは伏見にあり、この時代には京都の両替町に本拠地があった。積翠は広大な江戸屋敷の裏口からそっと敷地内に入る。

さてさて、内蔵助さんはお目覚めになりましたかね。

と離れの茶室を見やったが静まり返っていた。屋敷の主は積翠が出る前、気持ちよさげに微睡みかけていたが、まだ眠っているのだろう。そろそろ起こしてやろうかと、茶室近

くを流れる泉水のそばに行った。露地から露地へ進む道には垣根が造られて、葉牡丹や万年青、寒さに強い種類の菊などが植えられている。さながら花畑の中に茶室を設けてあるような形にしてあった。通常、茶室の露地には花を植えず、花は茶席で床の間を花を賞るものとされていたが、彼はそういった考えにはとらわれずに、独自の茶室を築いたのである。

「いいですねえ。うっとりと眠くなりますよ」

水のせせらぎを聞いて目を細める。上の方から低い場所に流れて来る泉水を、あらかじめ堰いておき、水が流れるにつれて、せせらぎの音が、だんだんと小さくなるようにしておいたのだ。茶事のあと、酒を飲んでいい気持ちになっていた主を、さらに心地よく眠りに誘おうと、このような仕掛けをしたのである。環境ＢＧＭとでも言えばいいだろうか。積翠は粋な演出をするのが好きなのだった。

「行きますよ」

留めておいた堰を一気に切り落とすと、茶室の側を流れる泉水が、大きな音をたてた。水飛沫をあげて、上からいきおいよく水が叩きつけられる。その音が目覚まし代わりになったにちがいない。

「……さん、ですか？」

寝ぼけた声が響き、茶室の下地窓が開いた。屋敷の主、銀座役人を務める中村内蔵助で、

年のころは二十代なかば、積翠より十歳ほど年下である。白皙明眸の若き主は、幼子のように細くたおやかな手を下地窓の端にかけている。女の身体と茶碗と金銀にしか触れたことのない驕奢の限りをつくしている手だった。

内蔵助の生家である中村家は代々屋号を『帯屋』と言い、九郎右衛門を譲り名としている。古くから銀座の頭役を務める名家であり、内蔵助もこののち、三十一歳の若さで年寄に任ぜられている。異例の若さであることからも、単に良家生まれのお坊ちゃまではなく、才幹優れた人物であったことがわかるだろう。もとより、積翠は牛のように鈍い人間は大きらいだ。彼がこれだけ入れあげているのは、相手が並々ならぬ才覚の持ち主である証。また内蔵助の方も積翠の才能に惚れこみ、強力な後ろ盾になっている。

「そうでございますよ。内蔵助さんがお寝みの間、あたしは下界に降りましてね。面白いことをしてまいりました」

愉しげに言い、躙口から茶室の中にもぐりこんだ。二畳半よりはやや大きめの、趣のある部屋なのだが、入った瞬間、違和感を覚える。茶室の空気が出かける前とあきらかに違っていた。妙に俗っぽくなっているその原因を、積翠はすぐさま察知する。冷ややかな目が、床の間に活けられたアオキの一挿しに向いた。

「だれか来たのですね」

この茶室にまるで合わないではないか。せめて寒椿でも持ってくれば、まだ許せるもの

を。不機嫌そうに引き抜き、下地窓から投げ捨てる。アオキのことだけでなく、内蔵助にも少し腹をたてていた。訪問客に起こされただろうに、泉水の仕掛けを知って、気づかぬふりをしたのが、なんとなく気に入らない。自分が気遣うのはいいのだが、屋敷の主の気配りは無用。自分は勝手にやっているのでいいのだが、主にはのびのびと甘えてほしいのだ。それを我儘と言うか、徹底した職人気質と思うかは、人それぞれだが、育ちのいい内蔵助はあくまでもおっとりと応じる。

「はい、冬木屋のご新造さんがおいでになりました。貴方へのご依頼ですよ。京での噂を耳にしたのでしょう。白地の小袖に絵を描いてほしいとのことでした」

謳うようなその口調は、胸に湧いた不愉快な感情を即座に消し去った。言葉と言葉の間に、なんともいえない間がある。たゆたうようなその刹那の瞬間が、積翠は愛おしくてならない。

「小袖にねえ」

あたしはもっと別の『もの』に、描いてみたいのですよ。ま、それをさせてくれるのではないかと思って、富沢町の女忍者を訪ねたのですがね。どうなることやら、でございますよ。

京を本拠地にして活動している積翠は、島原の遊女や豪商の妻女たちの求めに応じて、白地の小袖に絵を描いていた。それが一種独特の瀟洒な模様として、世間に広がりつつ

ある。江戸へは遊びがてら、お忍びで来たのだが、彼にとって仕事は空気を吸うように自然な事柄。

「冬木屋さんの頼みであれば、お断りすることはできますまい。使いを出して、諒承したと伝えておいてください」

にやにやしながら、内蔵助がたった今まで掛けていた軽くて薄い木綿の布団を座布団代わりにして座る。これも積翠が考案したもので、以前、内蔵助が長患いをしたとき、薄い真綿の布団を何十枚も仕立てさせ、寒いと言えば多めに布団を掛け、熱いとなれば枚数を減らすといったように、微妙な調節をするために生み出された布団であった。二人は男色関係にあるのではないかという噂がまことしやかに流れるのも無理からぬこと、敢えて否定をしないあたりが、いかにも怪しいと思えなくもない。

「わかりました。ですが、こ……」

「しっ」

積翠は人さし指で、内蔵助の唇を留めた。京ばかりでなく、江戸でも広まり始めている名前を口にしてはならない。

「だれが聞いているかわかりませんよ。もしかしたら、公儀の忍びが、この屋敷を見張っているかもしれません。知られた名をつぶやくのは駄目でございますよ。わたしは今、あまり名を知られていない謎の絵師、積翠。くれぐれもご油断なきよう、お願いいたします

よ」

「また始まりましたね」

内蔵助はくくっと小さく忍び笑う。見立て遊びのようなことを、積翠はよくやるのだ。何々になったふり、何々の真似などと言って、絵や陶芸をやっているうちに、その道で優れた作品を造りあげてしまうという奇才の持ち主、今度はなにをするつもりなのかと、若き主の眸は好奇心満々に輝いている。

「それで？」

下界でなにをして来たのかと促した。

「絵師の積翠として、お願いして来たのですよ。是非、絵を描かせてほしい、とね。あぁ、あの肌、そそられますねえ」

夢見るような眸を宙に彷徨わせる。浮かんでいるのは言うまでもない。女忍者を率いるお頭、桜花である。積翠は男も女もいけるクチの両刀使い、特に女性遍歴は将軍様といい勝負をするぐらいに相当、派手だった。むろん、内蔵助もきらいな方ではない。

「富沢町にある古着屋に行くという話でしたね。噂の女主がお気に召したのですか。『江戸の女など、どうせ、ろくなものではあるまいさ』と、出かける前は言っていたではありませんか。ずいぶんな変わりようですね」

からかうように言った。

「逢えばわかります。吉原の太夫も裸足で逃げ出すかもしれませんよ。極上の上の特極上、あれこそ、まさに天女です。あたしが逢った女子の中に、あれほどの肌を持つ者はいませんでした。肌を撫でただけで、昇天してしまいそうですよ」

艶っぽい話題になり、内蔵助の興味がますますつのる。薄い布団を胸もとで抱きしめ、白い頬を桜色に染めた。

「貴方がひとめで陥ちるとは……わたしも逢ってみたいものです」

積翠がつまらないお世辞を言わないのは、よく知っている。天女の姿をあれやこれや思い浮かべているさまが見て取れた。

「女主だけではないのですよ、内蔵助さん」

説明する声にいちだんと力が入る。

「他にも、そう、名は朱楽でしたか。これがまた魔物のような美少女で、好色という印象を受けました。透けるように白い肌をしてましてね。甲乙つけがたい美貌の持ち主です。それ以外にも、陽に焼けた異国風の雰囲気を持つ女子がおりましたよ。ええと、名前はおそらく」

懐から出した草紙を、内蔵助も覗きこむ。阿魔衆、くノ一軍団、お頭は桜花、右腕は白蓮、他にも朱楽と竜子の名前や年齢、特徴が記されている。

「白蓮でしょうね。年齢は二十歳、女主よりも一歳年上です。ちょいときつそうな感じで

したが、あの女子もなかなかどうして、女主に勝るとも劣らない美しさ。この竜子という少女の姿は見あたりませんでしたが、なに、また足を運んでみますよ。家の奥から顔を覗かせていた若い娘たちの中にも、素晴らしい資質を持っていると思われる娘がいましてねえ。また行くのが楽しみです」

「……そんなに大勢、いるのですか」

ごくり、と、小さく喉が鳴る。積翠の言葉を信じるならば、吉原の太夫以上という女子が、日本橋富沢町にはうようよしているわけだ。天女とまで表現するからには、絶世の美女ばかりなのであろう。

「それにしても、積翠さん。そのような草紙をどこで手に入れたのですか。くノ一と書かれていますが、本当に女忍者……」

「声が大きいですよ」

ふたたび指で唇を制した。

「この草紙については他言無用、入手先も聞かないでください。信用問題ですからね。江戸での仕事にかかわります。お願いしますよ」

「わかりました。ですが、くノ一となれば心惹かれます。秘め事の技もさぞや、と思いまして」

率直な物言いではあったが、育ちの良さと相まって、内蔵助の品位を逆に高めている。

同意せずにいられない。

「まさに然り。桃源郷でございましょう」

「引き受けてくれるといいですねえ」

陶酔するようにつぶやいた内蔵助に、不本意ながらマイナス要素を告げた。

「むずかしいかもしれませんね。この江戸屋敷よりはましと思い、連絡場所として冬木屋の名を教えておいたのですが、冬木屋も銀座同様、荻原重秀様と深いかかわりを持っています。女主たちと対立関係にある僧、隆光様の影がちらついてしまうのはいなめません。あたしは関係ないんですがね。向こうは当然、警戒するでしょう」

三ヵ月ほど前に、幕府は大がかりな金銀改鋳を行っていた。中心になって強く推進したのが、勘定頭差添役の荻原重秀。これはのちの勘定吟味役のことだが、銀座も大金を得て、内蔵助は我が世の春を満喫している。元禄一の伊達男として、勇名をはせるのもこのころからだ。金さえあれば自由にならないことはないと、多少、驕りも出ている。

「なんとかなりませんか」

金が必要であれば、いくらでも用意いたしましょう。くノ一たちの絵を描いてください。彼女たちを冬木屋かこの江戸屋敷に招いてください。言葉にされない部分を、積翠はたやすく読み取った。

「焦りは禁物です。なるようになりますよ。今までもそうでしたからね。これからもそう

でしょう」

頭に浮かぶのは、桜花のなめらかな白い肌。妹だという竜子にも、ぜひ逢ってみたい。今日、逢えなかったのが残念でならなかった。

「竜子」

想いをこめて、積翠はつぶやく。

五

さて、噂の主はなにをしているのか――。

「よいか。充分に気をつけるのだぞ、竜子」

不安げな白蓮に見つめられて、水戸藩の下屋敷の船着き場にいた。周囲はすでに暗闇に包まれている。捕らえた人夫の見張りを交代するために、白蓮は来ていた。六頭の忍犬を日本橋富沢町の家から移動させて来たのである。

「わかってるって、あたしにまかせといてよ。ちゃぁんと姉様、じゃなかった、お頭のもとに救援物資を届けるからさ。この大きな屋形船に乗ったつもりで、どんっと頼りにしてよ」

どんっと胸を叩いたものの強すぎて咳こむ。膝上の短い着物姿が、見るからに頼りなか

った。屋形船も積まれた荷も、光圀の配慮によるもので、船室にあたる場所には、米俵、味噌樽、醤油樽、塩の入った大きな袋が、たっぷり積みこまれている。咳こんだ姿を見て、ますます不安になったにちがいない。

「やはり、わたしが……」

船に飛び移ろうとした白蓮を、竜子はあわてて止める。

「大丈夫だってば、言われたとおりにやるよ。それにあたしは太郎丸や次郎丸たちを操れないもの。なにかあったとき、命令に従ってくれないのは困るよ。水戸藩の下屋敷で、忍犬が騒ぎを起こしたらまずいじゃないさ。だから、ね。心配しないでよ」

冗談じゃない。陰気くさい牢屋で、見張りを続けるのなんか、ご免だよ。だいたいが、あたしは牢屋とは相性が悪いんだ。責め問いが得意な白蓮こそ、暗くて、カビ臭い牢屋がお似合いだよ。

などと内心思っている。不安はあっただろうが、桜花にも交代するよう言われている。不承不承という感じで、白蓮はうなずいた。

「わかった。では、お頭に伝えてくれ。すべてはそれらの荷に表れている。思っていたとおり、ご老公様はわかっていらっしゃるようだ。抜荷が付け火事件に関係あるのは必至、柿羽織たちを調べた方がよい、とな」

「はあ」

ずいぶんと長い伝言だなあ。覚えきれないよ。ええと、積まれている荷に表れている、光圀様はわかっている、抜荷が付け火事件に関係ある、柿羽織たちを調べろ、だな。

反芻して、もう安心した。当然のことながら、意味はよくわかっていない。姿形は姉に似ているが、思慮深さや頭脳の優秀さにおいて、いささか劣っている。

「そいじゃ」

面倒なので、さっさと下忍に合図した。これ以上、伝言が増えるのは困る。屋形船が岸から離れて、沖に出て行く様子を、白蓮はいつまでも見送っていた。付記すると屋根船と屋形船は大きさがまるで違う。屋根船は渡し船などに使われる小さな船で、屋形船はそれよりもずっと大きく、沢山の荷を運んだり、船遊びで遊芸を楽しむときなどに用いられた。竜子が借りた船は中型程度だが、それでも屋根船よりはかなり広く感じられる。今の阿魔衆にとって、この船はまさに救援部隊。

「日本橋にいちばん近い船着き場に行くんだよ。大急ぎでね」

呼びかける声には、隠しきれない喜びがあふれていた。船頭役も阿魔衆の下忍が、男に扮して舵を取っている。甲板にいると風が冷たい。

「うぅ、寒っ、やっぱ、夜になると冷えこむね」

桜花であれば船頭の隣に立ち、寒風に身を曝しながら、順調に進むよう目を光らせるところだが、竜子はそのへんも気がまわらない。三人の下忍は寒い甲板にいるのに、風のな

い室内に入って、にっこりだ。
「あったかーい」
積みあげられた米俵や味噌樽が、よけいに気持ちをあたたかくさせる。富沢町で起きている不売騒ぎを、竜子はまだ知らないのだが、要するにこれらの荷は小判同然、見ているうちに顔がほころぶのは仕方ないだろう。
「やれやれ、今夜はひさしぶりにゆっくり眠れ、ん?」
視野を黒い鳥のようなものが横切った。今は夜、ここは船の中、鳥などいるわけがない。荷のことを考えれば蠟燭は点けたくなかったが、もしや、と思った。敵の妖術師かもしれない。荷を奪おうとして、隠れていたのではないか。蠟燭に火を点けて、積みあげられた荷を照らしてみる。
「だれかいるの?」
船が傾かないようにするため、荷は真ん中に積まれていた。隙間はあるが、人が隠れられるほどは空いていないように思える。それでも注意して、暗い荷の隙間に目を凝らした刹那、さっと鳥のような影が動いた。
「だれっ!?」
誰何の声を聞いて、船室の戸が少しだけ開けられる。寒風を中に入れないよう気遣っていた。

「竜子様、どうかしたのですか」
下忍の眸が心を表すように揺れている。自分の心を見たような気がしてしまい、竜子は早口で言い繕った。
「なんでもない。なんだか進み方が遅いよ。急いどくれ」
「はい」
戸が閉まったとたん、三度、影が動いた。今度こそと思い、荷の側に蠟燭を立てる。隙間に入ってみようとしたが、とうてい潜りこめない。鳥ではなく、鼠だろうか。だが、確かに空中を飛んでいたような……。
「あっ」
荷の隙間から、するりとなにかが抜け出した。それは一枚の美しい着物、空を飛ぶ鳥の姿が、墨のような色合いで描かれている。空中に広がった着物は、蠟燭の明かりを受けて、蛍のように光っていた。
「……きれい」
思わず手を伸ばしてしまう。竜子とて若い娘、美しい着物に興味がないわけではない。ふだんは古着を仕立て直して間に合わせているが、上等の白い羽二重に描かれた小袖は、このうえなく魅力的だった。空中に浮かんでいること自体、異常事態なのだが、それらのことは頭から消えている。

「うわっ」

伸ばした手を、不意に摑まれた。

「なにをする。これはわたくしの着物じゃ」

いつの間に現れたのか、小袖を着た若い娘が立っている。竜子と同じ年ごろの若い娘で、素晴らしい美人ではなかったが、喋り方や物腰に町屋の娘ではない気品が漂っていた。空を舞う鳥を薄墨のような色で描いた小袖が、なんの違和感もなくしっくりとなじんでいる。見事な躍動感があり、まるで本物の鳥のように見えた。描かれている鳥が動いていると勘違いしたのだろうか。

「あの、失礼ですが貴女様は、うっ」

唇で唇を塞がれてしまい、話せなくなる。すり寄せられた着物の、しなやかな感触がたまらなく気持ちいい。絹であるはずなのに、しっとりしており、かすかに湿り気が感じられた。肌のようでありながら、絹のようでもある。絹肌のごとき不思議さを、竜子は味わっていた。

「あぁ、やわらかくて、しなやかで」

極上の絹に包みこまれているかのよう、ふたたび差し入れられた舌に夢中で舌を絡める。娘の背中に両手をまわして、掌でも絹肌を思う存分楽しんだ。サラサラしていながら、手に吸いつくような感じも覚える。さほど薄い布地には思えなかったが、掌をさげていく

と、娘の可愛らしい尻の割れ目に到達した。

この娘、なんか変だよ。隠れる場所なんかなかったのに、どうして……。

かろうじて浮かんだ疑問は、儚く消え果てる。桃のような尻の割れ目に、指先を滑りこませた。さわればさわるほど、うっとりしてくる。陶酔感が高まってくる。すでに絹肌の虜になっていた。

「は、はあぁ、だ、だめ」

唇を離して、竜子は喘いだ。姉もきめ細やかで綺麗な肌をしているが、この娘はそれ以上に魔的な魅力を発している。抱きしめられると、ふぅっと意識が遠くなった。全身を絹肌でくるまれているような、至福感を感じる。熱っぽく唇を重ね、舌と舌を絡め合う。頬をすり寄せただけで、下半身がチリチリと疼いた。

「あ、あたし、なんだか、ヘン」

くずれるように座りこみ、虚ろな目をあげる。娘も傍らに寄り添って、胸もとに手を入れてきた。さわられるのを待っていたように、竜子の乳房はふくらむ。みずから帯を解き、短い着物と短襦袢を脱ぎ捨てる。短襦袢などという襦袢は存在しないが、着物の丈に揃えて長襦袢の裾を切ったのだ。のしかかって来る娘に押されるようにして、竜子は横たわる。むしゃぶりつくように娘の唇を吸った。

「んんぅんんうぅ」

相手は着物を着ているはずなのだが、まるで素肌のように感じられる。顔や胸、腹、そして手足と、竜子の全身は絹そっくりの皮膚に愛撫された。接吻しながら、娘はしなやかに両手を使い、乳房や腹をこすりつけてくる。さらに着物の袖が脇腹をくすぐり、裾が足の裏を刺激した。

「あぁ〜〜、いい〜〜、いいよぉ〜〜」

竜子はかすれた声を洩らし続ける。娘は身体をずらして、すでに尖りかけている双つの乳首を咥えた。舌先でくるみ、小刻みに蠕動させる。羽織っている着物の袖が、ふわりと持ちあがって、竜子の耳や首筋にふれる。舌で耳朶や首筋を嘗められているようだ。耳の穴に絹の端がそっと滑りこむ。

「んふぅっ」

新鮮な刺激に、思わずのけぞった。耳から下半身まで、雷光のような衝撃が走ったのである。じゅんっと蜜壺の奥が熱くなり、竜子は尻をくねらせた。その欲望を察したのか、娘は腹のあたりにさがって唇を這わせる。両手は乳房に残したまま、やわらかく揉みしだいていた。と、娘が着ていた着物が、裸身から離れて空中に持ちあがる。下から蠟燭の明かりを受けて、描かれている鳥の模様が、竜子の眼前に浮かびあがった。ぼんやりそれを見あげる。

——阿魔衆の竜子か。

突如、一羽の鳥が声を発した。絵模様であるはずなのに、すべての鳥がはばたいている。この時点で竜子は妖術師の術に陥ちた。もはや自分の意思はない。なにも考えずに返事をする。

「は、はい、あぁ〜〜〜、り、竜子で、ございまするぅ、あはあぁ〜〜〜〜〜」

娘の舌はもっとさがり、叢付近を嘗めていた。竜子は毛深い質だが、くノ一のたしなみのひとつとして、手入れは怠らない。綺麗に刈られた叢を、極上の絹舌が嘗めまわしている。そう、舌も肌同様、やわらかく、しなやかで、絹のようだった。

「は、早く、早くぅ」

竜子は両脚を広げて、花弁に舌を誘おうとする。眼前に浮かぶ小袖からは、鳥の群が飛び出して、船室を音もなく舞った。二十羽ほどいた黒い鳥は、激突するようにして重なり、徐々に数が減っていく。

やがて、一匹の亀が、積みあげてある荷の上に現れた。赤く光る眼で、竜子たちを見おろしている。

六

「だ、だれ?」

なんとか出た問いかけは、娘の愛撫に遮られた。ちゅうぅっと強く花弁全体を吸われる。罰と言わんばかりだった。

「あぅっ」

竜子は一瞬、背中を反り返らせる。いささか強すぎる舌技だったが、そのあとの動きは優しかった。舌先でゆっくり花弁を割り、震える花芯（クリトリス）を剝き出させる。舌をやわらかくそよがせて、熱心に嘗め始めた。待ち望んだ前戯に、竜子は身悶える。

「んぅうう〜〜〜〜んん、うんんぅ〜〜〜〜〜〜〜〜うぅう〜〜〜〜」

童女がいやいやをするように首を振る。空中に浮かんだままの着物は、描かれていた鳥の模様がなくなって、白無垢のようになっていた。だらりとさがった袖が、竜子の胸のふくらみにふれる。袖が掌のような形に変化し、乳房を入念に揉みあげた。娘の舌が速くなる、蜜壺にそろりと指が挿入される。

「ああっ」

たまらず尻をはねあげた。『逃水の竜子』なる異名を持つくノ一は水術師、使うのも水ならば水分も多い。蜜壺の中は早くも洪水状態で、蜜がどっとあふれてくる。あっという間に尻の下が泉のごとく濡れそぼる。じゅぷじゅぷという重い濡音（じゅおん）が響く度に、泉の量が増していった。

「うふぅ〜〜〜〜、いいぃ〜〜〜〜、あはあぁ〜〜〜〜〜〜〜〜」

竜子は乳房にくっつかんばかりに両脚を曲げている。女陰に顔を埋めている娘は、舌で巧みに花芯を嘗めながら、二本の指を男根のように操った。肉襞を撫で、奥で息づく壺芯（スポット）を指の腹でこすりあげる。小鳥がついばむように突いたかと思えば、亀頭をまわすような動きを見せる。竜子の艶技（つやわざ）は相手の精気を吸い取って、最後には死を与えるものなのだが、艶技を使うどころではない。思うさま相手に蹂躙（じゅうりん）されていた。

「んんっ、あんんんっ、あうぅうう〜〜〜〜っ」

次第に高まってくる、こらえきれなくなってくる。娘の舌と指も欲望を察知していちだんと速くなった。やわらかく舌が揺れる、指が忙（せわ）しなく出し挿れされる。

「あ……」

も、だめ。

「ぅくうっ、達くうっ、達くうううぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

四肢をきゅっと縮めたあと、大きく痙攣した。すぼまった蜜壺から押し出されかけた指を、娘は逆らって奥に挿入させる。ぱんぱんに張りつめた壺芯を、亀頭で責めるように突いた。

「あくうっ、だ、だめぇっ、うくうっ」

達ったばかりなのに、まだ絶頂の波にとらえられている。堰を切ったようにあふれ出した大量の愛液が、後ろの菊花を伝って流れ落ちた。滴り落ちる蜜がたまり、尻の下は浸水

したかのような有様だったが、娘はかまわずに愛撫を続けている。空中に浮かぶ着物の袖が、乳房を揉みしだき、乳首を咥えるような刺激を与えていた。絹が透けるはずはないのだが、荷の上に載っている黒亀の姿が透けて見える。

——極上の肌じゃ。若くて、はりがあり、なめらかで、しっとりと濡れておる。

蜜壺の締まり具合も最高じゃ。おまえにするか。

勝手なことを言った瞬間、黒亀の姿がヒトに変わる。顔は墨で塗りつぶされたように黒くてはっきりしない。しかし、股間で屹立する逸物が、男であることを示していた。起きあがるつもりはなかったのに、宙に浮かんでいる着物が竜子を引っ張る。意に反して座位の恰好になっていた。娘はタコのように女陰に貼りつき、舌で花芯を嘗め、二本の指で蜜壺を休みなく責めている。

「あああぁ〜〜〜〜」

惚けたように、竜子は声をあげるばかり、早くも次の波に呑みこまれそうだ。不気味な影男は背後にまわって座りこむ。後ろの菊花に、どくんどくんと脈打つ男根があたる。すぐにつらぬいてくれるかと思いきや、焦らすように後ろから乳房を摑んだ。黒い手が雪白の乳房をやわやわと揉みあげる。

「ね、ねえ、はあはあぁ〜〜、は、早くぅ〜〜」

焦れて甘い声で、おねだりした。けんめいに尻を動かして、菊花にあたっている男根の

尖端部を刺激する。たっぷり濡れているだけに、すべりがいい。尻を突き出したり、円周運動のような動きをしたりして、相手を挑発しようとする。むろん、その間も娘の責めは続いている。竜子がどのように動こうと、まったく離れずに舌と指を使っていた。挑発するどころではない。

「あっ、あっ、あっ」

また。

「うくっ、達くううううう〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

頤をあげ、綺麗に背中を反らせた。がくがくと尻が揺れた刹那、後ろにいた影男が男根で蜜壺をつらぬく。もろに壺芯にあたり、頭が真っ白になった。

「あ――――」

悲鳴のような歓喜声を迸らせる。なにも考えられない、ただただ気持ちがいい。影男は竜子の尻を両手でかかえこみ、何度も腰を突きあげる。達ったばかりでひくついている壺芯を、いじめるように責めた。突かれると肉襞がきゅきゅーっと締まるため、男も気持ちがいいのかもしれない。もっとも、相手が人間であればの話だが、不思議なことにこれだけ歓喜声をあげているにもかかわらず、甲板にいる下忍は気づいていなかった。少しだけ疑問をいだいたとき、

「くくく、船室はおれの結界内、声や姿は消せるのよ」

心を読んで男が言った。蜜壺と男根で繋がることにより、竜子の考えがわかるようになるらしい。

「ゆえに、たとえ戸を開けて覗きこんだとて、見えるのは偽りの風景。おまえがうたた寝をしている姿だけなのだ。仲間の助けを期待しても無駄なこと、しかし、これだけ深く術に陥ちているのに、まだ疑問が浮かぶとは」

ぐいっと男根を突きあげた。

「あぐぅっ」

お仕置きのつもりだったのだろう。そのひと突きで思考能力は、完全に消え失せる。両脚を広げた淫らな姿で、女陰の娘と後ろの影男にすべてをゆだねた。空中に浮いている着物が、前に傾けとでも言うように、竜子の後頭部を押している。いやおうなく後背位を取って、尻を高く掲げた。娘は逆さになって、相変わらず竜子の花芯を嘗めている。両脚をカエルのように広げて、濡れ光る女陰をあらわにしていた。お返しがほしいのかもしれない。

「んふうぅ〜〜〜〜〜〜」

竜子は喘ぎつつ、娘の女陰に舌を伸ばした。相嘗めという恰好を取りながら、ますます尻を高くして、背後の影男と深く繋がろうとする。相手も期待を裏切らない。尻を荒々しく摑むと、蜜壺の入口付近で亀頭を遊ぶように動かし、一気に奥までつらぬく。

「ううっ」

じいぃんっと脳天まで甘く痺れた。身体の下にもぐりこんでいる娘は、いっときも唇と舌を離さない。竜子は知らなかったが、このとき、娘の裸身は床から五寸（十五センチ）ほど浮いていた。ぴたりと竜子に密着し、豊かな乳房を腹のあたりにこすりつける。浮かんでいる下半身を、大胆に折り曲げて、離れてしまった竜子の唇に花弁を近づけた。ひくつく後ろの菊花まで剝き出されている。軽業的な肢体であったが、もはや他のことに気を向ける余裕はない。

「んぐうぅ〜〜〜〜、んむむむくうぅ〜〜〜〜」

舌を必死にそよがせながら激しく喘いだ。またすぐに達ってしまいそうだったが、ふと影男の動きがゆるやかになる。空中に浮かんでいた純白の着物が、竜子の背中にふわりと舞い降りた。背中から尻にかけて、くすぐったいような感覚が走る。覆い被さった着物が、波打つように濃やかな動きを見せていた。

「はあぁっ、ああっ、あああぁ〜〜〜〜っ」

蜜壺が心を示すように、絶え間なく濡音をあげている。あふれ出る愛液は、小さな水たまりのようになって、床に溜まっていた。蜜がどれだけ多くても、締まりは悪くならない。タコ壺のように男根の側面を締めあげ、ふくらんだ壺芯で亀頭を刺激する。

「おおうっ、凄いのう」

影男もこらえきれず、声を発した。艶技が自然に働き、相手の精気を吸い取ろうとしているのだが、当の竜子自身、それには気づいていない。できるだけ尻を後ろに突き出して、快感を得ようとする。

「も、もっとぉっ、突いてっ、あはぁっ、奥っ、奥にもっと！」

娘の花芯を嘗めることなど忘れていた。早く次の絶頂を引き寄せたい。気が遠くなるほど感じたい。白い肌に玉のような汗をしたたらせて陶酔する。濡れた背中を拭うように、影男は着物を竜子の皮膚に貼りつかせた。

「ふぅむ、やはり、生娘でなければ無理か。それとも、重なるには、ある程度の時がかかるのか。いずれにしても、焦りは禁物のようだな」

意味不明の言葉をつぶやき、ぐぃっと男根を挿入させる。

「ひ！」

竜子は尻をあげて、突っ張った。張り詰めた壺芯をグリグリとこすりあげられる。娘の舌が花芯を激しく嘗める。

「あうううぅ〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

かつて覚えたことのない絶頂に包まれた。裸身を硬直させ、しばし動けなくなる。影男も蠢く蜜壺に耐えきれなくなったらしい。

「おうっ、おううっ」

絶叫を迸らせて、きつく尻を摑んだ。放たれた精液が、とどめとばかりに蜜壺の壺芯を責める。

「あ――――」

竜子はぶるぶるっと全身を震わせて、達した。知らぬ間に働いていた艶技が、影男の精気を一滴残らず吸いあげようとする。果てたはずの男根は萎えることなく、蜜壺内で再度、いきりたった。

「あ、な、なぜ、くううぅっ」

影男はわけがわからない。竜子が自分でも無意識のうちに艶技を使っていたなど知る由もなかった。動かすつもりはないのに腰を突きあげてしまう。とめどなくあふれる愛液が、男根の側面をゆるゆると流れ落ちた。あたたかい線水を浴びているようで、たまらなく気持ちがいい。影男を操る妖術師も、生まれて初めて味わう快感だった。竜子が正気であれば、『これぞ逃水の竜子の艶技、無限ノ術なり』と、得意げに胸を反らせたにちがいない。が、本人もうっとり何度目になるかわからない絶頂を迎えている。

「あくううぅっ、うくうっ、達くううぅ〜〜〜〜っ」

悲鳴のような歓喜声に、影男の喘ぎ声が重なった。

「おうっ、おうぅっ」

大きく全身を震わせて、二度目の吐精を迎える。しかし、竜子の蜜壺は攻撃の手をゆる

めない。もっと、もっと、もっと。精気を求めて蠢く。艶技を仕掛ける。影男にしてみれば、やめたいのだがやめられない。危険だとわかっていながら、離れられなくなるのが艶技の怖ろしさ、くノ一を侮った結果といえよう。

「くううっ、こ、これは、あぐうっ、た、たまらぬ!!」

間一髪、気力を奮い立たせて断ち切った。影男の姿が忽然と消え失せる。嘗め役に徹していた娘も、不意に立ちあがるや、空中に浮かんでいた純白の着物をまとった。次の瞬間、あとかたもなく消滅する。

「あああああぁ〜〜〜〜〜」

難を免れた竜子は、なにがどうなったのかわからない。どうっと倒れこみ、肩で喘ぎ続ける。

「はあはあ、い、今の、はあはあぁ、な、なに？」

厳しい戦いであったことは、床に溜まった蜜に表れている。我を忘れて快楽を貪ったのが、結果的には吉と出たのだが。

姉様に怒られそう。

ぼんやり思っていた。

第三章　肌衣（はごろも）

一

二日後の夜。

桜花は四万石の大名、津軽家の江戸屋敷に、側女中の下に仕える次女中として入りこんでいた。袷（あわせ）の着物に綿入、打掛と、着物だけでも相当に重い。

「まったく、動きにくいったらないね。脱ぐだけでも大変だよ。こんなに着こんで、よく肩が凝らないもんだ」

などと、ぶつぶつ言いながら奥御殿の廊下を走っている。昨日、潜入して以来ずっとこんな調子だった。

「桜花、どこじゃ、どこにおる？」

呼びかける声から逃げるように、下働きの御末たちが使っている部屋に隠れた。大名家

も旗本屋敷も、基本的に江戸城と造りや仕組みは同じである。表は殿様が謁見や公的な儀式に使う場であり、諸役人の執政の場であり、中奥は殿様にとっては日常生活の場である書院、御座の間、御休息などの殿舎があった。それらとは異なり奥向きは、奥御殿とも呼ばれて、殿様の奥方が暮らす場だった。ここも江戸城同様、男子禁制なのだが、殿様以外にも、なぜか、入りこめる男がいる。

「どこに隠れたのじゃ。出て来ぬか。頼みたいことがあるのじゃ」

年に似合わぬ大声をはりあげているのは、津軽弥五右衛門重郷。齢七十になろうかという津軽家のご隠居だ。元殿様であるだけに奥御殿にも自由に出入りできる。光圀と親しい間柄らしく、頼みもしないのに津軽家内偵の協力者役を買って出ていた。ご多分に洩れず、くノ一に相当、興味があるようで、迷惑千万、困り果てている。

あたしの方も頼みたいことがあるよ。邪魔しないでほしいね。隠居爺さんはおとなしく盆栽いじりでもしてればいいんだよ。

心の中でつぶやき、気配を完全に断つ。呼吸の回数を極端に少なくして空気に融けた。室内に置かれた壺のごとく、周囲に同化する。

「おかしいのう。確かに姿を見かけたのじゃが」

廊下をうろつく弥五右衛門は、小柄だが、がっちりとした身体つきをしており、とても七十歳になるようには見えない。趣味は薬造りと足腰の鍛錬を兼ねた武道、そして、もう

ひとつ、若い女体を攻め落とすことと聞けば、若く見える理由が知れよう。昨日、出会った瞬間にひとめ惚れしたのか、桜花の後を尾けまわしていた。

「桜花、出て来こぬか。薬のことでじゃな。聞きたいことがあるのよ」

で、また奥御殿の廊下をせかせかと進み始める。光圀がどのような説明をしたのかわからないのだが、薬に詳しいというようなことをほのめかしたにちがいない。薬にかこつけては、まとわりつき、油断をすると即座に尻などを撫でられる。元殿様となれば邪険にもできず、まことにもって厄介な相手なのだった。

とても四万六千石の大名とは思えないね。まあ、光圀様もそうだけどさ。

足音が消こえなくなっても動かない。足音を消したふりをして隠れていることがあるからだ。気配を探り、完全に消え去るのを待った。

付記すると、大名には譜代と外様の二種類がある。三河以来の者を譜代とし、譜代大名と直参旗本には、高禄の代わりに幕府の職員となる特権を与え、老中・若年寄・その他の重職の要員はすべて譜代から選任した。

対する外様は関ヶ原合戦以後、臣従した大名たちのことをさす。四国・九州・中国・奥羽などの辺地に置き、所領は多くとも幕府の要職にはつけない。津軽家は典型的な外様大名で、禄高も四万六千石と決して多くはなかった。このころの大名の数は、おおよそ二百四十家。うち十万石以上が四十五家、五万石以上が五十四家だ。津軽家はその他大勢のう

ちの一家で、国があるのは陸奥国の最北端、名字が示すとおり津軽（青森県）なのである。江戸はまだそれほど寒くないが、今ごろはもう雪が積もっているかもしれない。そんな厳寒の地に帰るつもりは、毛頭ないのだろう。弥五右衛門は江戸の隠居生活を楽しみ、孫娘が嫁ぐ日を心待ちにしていた。

白無垢の夢、ゆうべもまた見ちまったよ。行方不明になった姫君たちが、助けを求めているのかもしれない。

床の間に置かれた万年青を、見るとはなしに眺めた。だれの贈り物か判明していないが、置いていくのは忍びないと、わざわざ持って来たのである。くノ一のだれかに贈られた鉢植えは、側にあるだけでなんとなく力が湧いてくる。

まさか、あの男、じゃないよね？

謎の絵師、積翠の姿が脳裏に浮かんだ。褒め殺しとも言うべき台詞を残して消えた男、本当は絵を描いてもらいたかったが、お役目を優先しなければ、頭としての責務を果たせない。

そういえば、あの男。やけに意味ありげな言葉を言っていたんだよね。絵を描いてもらうにしろ、断るにしろ、だれかを使いにやるって、あたしが言ったあとにさ。

「お断り、ですか。しないでいただきたいですねえ」

あれが引っかかっている。

「お断り」
そうつぶやいたとき、
「わっ、びっくり、と、お頭?」
御末姿の竜子が入って来た。持っていた手燭を掲げて顔を確かめる。室内も廊下もすでに真っ暗、そのお陰で弥五右衛門に見つからなかったのだが、調査には最適の時刻、いつまでも隠れているわけにはいかない。
「こんなところで、なにしているんですか。まーた惚れた男のことでも考えていたんじゃないんですかぁ」
続けて入って来た朱楽が、言わなくてもいいことを口にする。ひと言多いのが語尾伸ばしと同じぐらいに悪いクセ、竜子があわてて突ついたが、しれっとしていた。いつも桜花が思い浮かべたときに言うのは、表情を読む能力が優れているからだろう。それだけに癪にさわるのだ。
「朱楽。おまえ、結局、積翠のことを調べられなかったじゃないか。ふらふらくっついて行っただけじゃないのかい。それじゃ、とても上忍とは言えないよ」
つい厳しい口調になった。積翠の名を出したことで、みずから告白しているようなものなのだが、自分の恋愛には疎くて、おくてなのが阿魔衆のお頭。それを言っていいものやらと、朱楽は竜子をちらっと見る。

やめときな。今度は本気で怒るよ。

そんな顔つきで首を振った。積翠については下忍が引き続き、見張りと調査を行っている。八つ当たりなのはわかっていたが、視線と表情の『話』が、またまた気にさわった。

「竜子、おまえも本当にだらしのない。妖術師に襲われた挙げ句、うまうまと逃げられちまってさ。せめて、手がかりだけでもつかめなかったのかい。急に小袖が出現したのどうのと、わけがわかりゃしないよ。いったい、なにが、どうなって、艶技を使うことになったのさ」

「だ、だから、黒い鳥の姿が描かれた小袖が突然、現れたんだよ。で、そのあとは黒い亀だろ。で、またまたそのあとは、あたしと同い年くらいの娘が現れてね。あとは、まあ、その、なんというか、ははは、いい気持ちになっちゃったわけで、見事に術に陥ちたというか、陥とされたというか」

「馬鹿」

軽く額を小突いた。しゅんとうなだれた姿を見て、それ以上は言えなくなる。届けられた荷のお陰で、ひとつ答えが見えかけていた。

光圀様は抜荷の下手人をご存じなのかもしれない。そいつが阿魔衆の隠れ家に火を放った。そのあと、あたしたちはなじみの見世に、米、味噌、醤油、塩といった生活必需品を売ってもらえなくなった。それらの事実を話していないのに、光圀様は黙って竜子に荷を

届けさせた。

抜荷の下手人、付け火の下手人、近隣の見世による不売騒ぎ、柿羽織によるいやがらせ。すべてはひとつの答えに結びついているのではないか。抜荷の下手人は荷を奪い取られたがゆえに怒り、意趣返しとして付け火をしたのではないか。近隣の見世に圧力をかけて売らせないようにしたのではないか。柿羽織を差し向けていやがらせをしたのではないのか。

「おまえの持って来た荷に、答えが隠されているんだよ。問題はだれが下手人かってことさ」

意味不明のつぶやきに、二人はきょとんと首を傾げる。

「は？」

これが白蓮であれば、すぐにぴんときただろう。よけいな説明がいらない右腕は、この三日間、水戸藩の下屋敷に泊まりこんでいる。捕らえた船の人夫から真実を聞き出すのが役目だが、思いのほか手こずっていた。桜花は下忍をやって交代するように命じたのだが、責め問いは自分の役目と考えているらしく、白蓮は応じない。

「なんでもないよ。ただの独り言さ」

白蓮が二人いてくれたらねえ。ま、言っても仕方ないけどさ。

いささか頼りない二人組だったが、それでも調査ぐらいはできる。まずは朱楽に目を向ける。すでに行方不明者を出している三家の大名について調べさせていた。

「わかったかい」
「はい。三家とも津軽家と同じく外様大名です。そのうちの二家は陸奥国、一家は肥前国が国元でした。三万石から十万石までと、禄高には差がありますが、辺境の地という点で一致しますね」
　自分なりに「辺境の地」という共通点を見つけていた。悪くない調査報告だが、桜花は当然、物足りない。国元を聞いた時点で、ひらめくものがあった。やはり、今回の依頼は抜荷事件と関係あるのだ。光圀は面白半分に抜荷を奪い取らせたわけではない。理由までは、まだわからないが、少なくともなんらかの理由があってやらせたこと。ひとつの事柄がはっきりすれば、次もきっと見えてくる。
「なるほど、そういうことか。陸奥国と肥前国ね。あたしたちが潜入しているこの屋敷、津軽家の国元も陸奥国だったね」
　ちらっと朱楽を見る。かなり丁寧に言ったつもりだが、気づいた様子はない。期待に満ちた目だけはわかったようで、じっと見つめ返した。
「ええ、そうです。津軽家も陸奥国ですが、それがなにか？」
　ああ、もう、苛々するね。ご丁寧に手がかりを与えてやったじゃないか。それなのにわからないのかい。その頭にはなにが詰まってんだい。腐った味噌でも入ってるんじゃないだろうね！

以上の小言は腹にしまって告げる。

「……いや、別になんでもないよ。あたしはうすぼんやりと見えてきたからさ。あとは白蓮と相談することにしよう。次は竜子。この屋敷に出入りしている商人たちについて、わかったことはあるかい」

怪しい人物は出入りしていないか。津軽家と商人たちとはうまくいっているのか。借金はないか。などなど、婚礼の日が近づいているだけに、屋敷内も空気が張り詰めている。思うようにいかないのかもしれない。

「それが」

竜子は口ごもった。

「婚礼の準備があるので、ふだんはあまり出入りしていない商人が顔を見せているようです。妖術師がまぎれこんでいたとしても、わかるかどうか」

「焦れったいねえ。それを探し出すのが、あたしたちの役目だろ。顔に『妖術師でございい』と書いてあるわけじゃないんだよ。阿魔衆の中で妖術師に遭遇したのはおまえだけなんだ。妖気とか邪気で、感知できるだろうが」

「でも、お頭。お女中衆はもちろんのこと、奉公人たちも一様に口が堅くて、なにを聞いても教えてくれないんです。あたしたちの正体を知っているんじゃないでしょうか。竜子だけを責めるのは、筋違いのように思いますけど」

庇うように、朱楽が反論する。同じことを桜花も感じていた。光圀に昨日、確かめた話では、阿魔衆であることを知っているのは、ご隠居である弥五右衛門だけのはずなのだが、お女中衆たちの態度はなんとなく、よそよそしい。新参者として警戒しているというよりも、喋らないようにという箝口令がしかれているような印象を受ける。

「屁理屈をこねるのだけは一人前だね」

可哀想だとは思ったが、これが自分たちの役目。それに早く片づけないと、見えない敵がまたなにかやるかもしれない。厳しい口調で続けた。

「とにかく調べるんだ。婚礼は四日後、姫君はその前に連れ去られる可能性が高い。妙な噂が出ていないか。幽霊のようなモノを見た者はいないか。それを調べて……」

「そういえば」

朱楽がふと思い出したように言う。

二

「姫様付きの側女中が、真夜中に白無垢を見たとか言っていました。白無垢が廊下を歩いていたとか。姫様が羽織って歩いていたんじゃないかと思い、あたしは気に留めなかったんですけど」

竜子に視線を向ける。

「あんたも白い小袖の話をしていたわよね」

「うん。荷の隙間を見たときには、小袖なんかなかったんだよ。白だからさ。目立つはずなのに見当たらなかった。現れ方が唐突だったんだよね」

夢に現れた白無垢、それが鍵かもしれない。直感力が働き、桜花は予知夢を見たのかもしれなかった。

「もしかしたら、本当に白無垢が廊下を歩いていたのかもしれないよ」

妖術師は着物を用いる術師という可能性がある。ひとつ手がかりが得られただけでも上出来だ。なんといっても津軽家には、光圀と同じぐらいの妖怪爺がいる。そいつが箝口令を発している可能性は充分に考えられた。情報不足の中、この噂話は貴重である。

「それって、肉体なしの白無垢ってことですか」

確認するように朱楽が尋いた。

「ああ。着物に見えて実はヒト、ヒトに見えるが実は着物。そんな術のことを聞いた覚えはないけどさ。世の中は広い。ありえないとは言えないさ」

ところで、と、桜花は薄暗い室内を見まわした。消えたままの行灯を見て、朱楽が火を点ける。寒々とした雰囲気が、少しだけあたたかくなった。町屋もそうだが、大名屋敷も相当に寒い。かなり冷えこんできている。

「千早はどうしたんだい。今日から加わるはずだったろ」
若い下忍の姿を、まだ見ていない。今回の依頼には必要不可欠な人員だ。
「それが」
竜子は朱楽と顔を見合わせて、言いにくそうに報告する。
「白蓮の手伝いが終わらないうちはいやだって、駄々をこねているんです」
頼りないと思ったのか、すぐさま朱楽が補足した。
「あの娘は、ほら、白蓮に憧れているというか、惚れているというか。白蓮は下忍に人気がありますからねえ」
「大丈夫ですって、姉様、じゃなくて、お頭。あたしたちがいるじゃないですか。千早なんか足手まといになるだけですよ」
「そうそう、妖術師にすぐ捕まって、と、それはあんたね」
「なんだよ。あたしの艶技に怖れをなして、逃げ出したって言っただろ。もう少しで捕まえられるところだったんだよ」
「ま、そういうことにしておいてあげるわ。下忍は見ていたわけじゃなし、なんとでも言えるものね」
「なんだって？　あたしが嘘をついているとでも言うのかい！」
喧嘩になりかけた二人を、ため息まじりに制した。

「おやめな。おまえたちじゃ駄目なんだよ。津軽家の姫様の身代わりがほしいんだからさ。ご老公様に伺った話によると、行方不明になった姫様たちの共通点は、十五歳前後で、さほど美人ではないものの、みんな肌が綺麗だった。それで……」

「だから、あたしが」

「引っこんでなさいよ、竜子。肌の美しさにかけては、あたしが一番。美しすぎるのが欠点と言えなくもない朱楽様におまかせを」

「まったく、おまえたちときたら」

二度目のため息は深かった。花嫁を奪い取るという一点だけで、推測できるはずなのに、なぜ、わからないのか。

「おまえたち、なにか大事なことを忘れちゃいないかい。武家の姫様が嫁ぐんだよ。むろん初婚で、男なんか知らない。正真正銘の生娘なんだ。男を知りつくしているくノ一じゃ駄目なんだよ！」

「あ」

「そっか」

ようやく話が通じた。お頭というのは苦労が多い。中間管理職の苦悩を感じているのは、軒猿だけではないようだ。

「だから、千早を名指しで呼んだんじゃないか。あの娘はまだ忍びの洗礼を受けていない。

おまえたちより器量は劣るけれど、しっとりとして手に吸いつくようなあの肌は、男殺しの柔肌さ。生娘である姫様の身代わりを、立派に務めるだろうと思ってね。来るように言っておいたんだけど」

来たのは厄介な相手、桜花は喋るなと目で告げたあと、早口で命じる。

「いいかい。妖怪爺を引きつけておくんだよ」

「はい」

「おまかせください」

ほどなく、足音が聞こえてきた。

「桜花、ここにいたのじゃな」

噂の妖怪爺が、にゅっと顔を突き出す。弥五右衛門が喜色満面、涎(よだれ)をたらさんばかりに見おろしている。好きな玩具(おもちゃ)を見つけた童子のような顔だった。

「……」

そう、こいつだよ。大事なお役目の邪魔する元凶、孫娘を守るためだってこと、わかってないのかねえ。

いや、と桜花は思う。わかっているはずだ。弥五右衛門はわかっていながら邪魔をしている。なぜか？　そう、知られたくないことがあるからだ。

「探したぞ。何度も名前を呼んだのに聞こえなんだか」

立ちあがりかけた竜子と朱楽を押しのけるようにして、弥五右衛門は桜花の隣に座り、手を握りしめた。二人が引きつける前に、桜花が引きつけてしまったらしい。仕方なく愛想笑いを浮かべる。

「申しわけありませぬ。この娘たちと怖い話をしておりましたので、弥五右衛門様の美声が耳に届きませんでした」

意味ありげな話を投げて、反応を見る。怖い話の部分が気になったにちがいない。

「ほう、怖い話とな。どのような話じゃ？」

好奇心いっぱいの目で問いかけた。

「綿帽子を被った花嫁の亡霊の話でございます。血まみれの女子が白無垢を真っ赤に染めて、廊下を歩いていた由。顔を切り刻まれた無惨な姿だったそうにございまする。片目はえぐりとられて、ぽっかり暗い穴が開いていたとか」

かなり脚色して、亡霊話を煽る方向に持っていった。弥五右衛門も花嫁の亡霊について、噂を聞いているかもしれない。可愛い孫娘の姿を重ね合わせれば、恐怖は何倍にもふくれあがる。

「顔を」

案の定、さっと顔色が変わった。視線の合図を受けて、朱楽がさらに脚色する。

「はい。わたくし、はっきりと見ました。ゆうべのことでございます。姫様のお部屋近く

の廊下を通りましたとき、向こうから音もなく白無垢の女子が来るではありませんか。よくよく見ますれば、床から足が浮いておりました。すーっと音もなく近づいて来たその顔を見たとたん、なさけない話でございますが、気を失ってしまいまして」

次はあたしの出番だね。とばかりに、竜子が話を合わせる。

「わたくしが見つけたのでございまする。倒れておりましたので、どうしたのかと尋ねましたところ、顔を切り刻まれた血まみれの花嫁を見たと」

作り話ではあったが、肉体のない白無垢が目撃されているとすれば、信憑性が高まる。弥五右衛門の顔は、ますます青くなった。

「……」

むっつりと黙りこむ。頼むから本当のことを喋っておくれな、桜花は心の中でつぶやいた。津軽家が仕方なく、光圀の申し出を受け入れたのは、非協力的な態度に表れている。たかが四万六千石の外様大名、御三家に言われれば断れない。小藩の哀しさ、内々にしておきたいこともあるだろうが、次の犠牲者を出さないためにも、弥五右衛門の協力を取りつけたかった。

「姫様の身が心配なのでございます」

想いをこめて告げる。昨日、お目通りはできたものの、阿魔衆たちは姫君の側に近寄るのを許されていない。衝立越しの会話とあって、桜花も顔を見ることができなかった。これで

はいざというときに守れない。せめて、隣室に控えることぐらいの許可は与えてほしかった。

「うむむぅ」

弥五右衛門は逡巡していた。孫娘は救いたい。が、簡単には喋れないお家の事情もある。商人もそうだが、侍はそれ以上に口が堅い。

「ご隠居様」

「わたくしたちのお願いを聞いてくださいまし」

竜子と朱楽が懐柔作戦に出る。青ざめていた弥五右衛門の顔が、徐々に赤みを帯び、やわらいできた。この隙にと、桜花は手燭を持って立ちあがり、廊下に出る。いくつかの事柄がきっかけになって、答えらしきものが形を成し始めていた。

出入りの呉服商人が、重要な鍵を握っているかもしれない。今日、婚礼の品物が届くとだれかが言っていたっけ。御客の間に、まだ呉服屋がいるかも……。

「お頭」

庭から声がかかった。手燭を向けるまでもない。地味な木綿の着物を着た白蓮が、足音もなく近づいて来る。桜花は庭を眺めるふりをして、廊下の端にかがみこんだ。

「待っていたんだよ。真の下手人のことを吐いたかい」

「いや、よくない知らせだ。あの男は死んだ」

「え?」

手燭に照らし出された白蓮の顔には、謝罪と自責の念が浮かんでいる。普通であれば責め問いに失敗して死なせたのではないかと疑うところだが、桜花の頭にはひとつの答えしかない。

「口封じだね」

「わたしもそう思う。ほんのちょっと目を離した隙の出来事なのだ。わたしを含めて見張りは四人いたのだが、だれも怪しい人物を見ていない。ただ」

「下忍が白い着物を目撃した？」

カマをかけてみる。

「そうだが……ここにも現れているのか？」

白蓮はわかりが早い。当意即妙、以心伝心。竜子たちとの会話で苛立っていた心が、ほっと落ち着いた。

「あたしはまだお目にかかっていないけどね。そうらしいんだよ。今夜あたり、正体を現すかもしれないね」

声をひそめて言う。

「それで、死に様だけど、どんな風だったんだい」

「大きく口を開いて、苦しみ、もがくように両手を宙に伸ばしていた。苦しみぬいたような、ひどい顔をしていた。首を絞められたのかと思ったが、喉に痕は残っていない。相当、

苦痛を覚えたはずなのに、叫び声などはいっさいなかった。どうにもわからぬ」

眠るように静かに、というのであれば、声がしなかったのは納得できる。白蓮たちが気づかなかったのも仕方がない。だが、悲惨な死に顔だったのに、なぜ、叫び声をあげなかったのか。苦しかったのに助けを求めなかったのはどうしてなのか。

「口を塞がれていたとしか思えないね。見えない『なにか』で口を塞ぎ、叫び声や助けを求める声をあげられないようにした」

不気味な死に様は、自分たちへの挑戦と警告なのかもしれない。今のうちに手を引け、そうすれば命だけは助けてやろう、阿魔衆よ。妖術師の嘲笑が聞こえるようだ。

「早く調べなければ」

血が滲むほど強く唇を噛みしめる。調査がうまくいっていないのを、その表情から感じ取ったのだろう。

「わたしも加わる。千早もじきに来るはずだ。遺体の埋葬を命じたため、来るのが遅れている。本当にすまない。お頭の命令に従わなかったせいだ。わたしのせいで、このような……」

「そこにいるのはだれですか」

若い女の声が夜気を切り裂いた。手燭を掲げた若年寄の女が、おそるおそるという足どりで近づいて来る。奥御殿では老女に継ぐ地位だが、年齢はせいぜい二十七、八歳。しか

し、一筋縄ではいかない頑固さが、その面に滲んでいる。
「第一の壁は竜子と朱楽が防いでいるけどね。あれが第二の壁さ」
「引き受けた。お頭は予定どおりに行動してくれ」
名誉挽回とばかりに、白蓮は廊下に飛びあがる。近づいて来た女の手燭を奪い取るや、ふっと吹き消し、近くの部屋に押しこんだ。素早く戸を閉めて中に消える。またたきする間の早業だった。
「頼んだよ」
にやりと笑い、桜花は若年寄の女が歩いて来た方角に進んで行った。これでようやく本格的な調査開始となる。静まり返る夜の大名屋敷を、慎重に探り始めた。

三

「そ、そなたは、んむぅ！」
部屋に押しこんだ女の唇を、白蓮は唇で黙らせる。桜花が「口封じだね」と即座に断言してくれたのが、嬉しくてならない。責め問いで死なせたのではないかと思われても、仕方のない状況であるものを、疑うような言葉はなかった。信頼の深さを感じて胸が熱くなる。
だからこそ、と思った。この女から手がかりを得なければならない。この屋敷でなにが

起きているのか。大名家の花嫁ばかり狙われる理由はなんなのか。桜花の表情に浮かんでいた苛立ちを、白蓮は鋭く読み取っている。牢屋における厳しい責め問いではなく、甘美な責めに全力を注ぎこむ。

「や、やめ、て、たも、んむむぅ、だ、だれじゃ？」

女はけんめいに唇を離して、顔を見ようとする。白蓮はよけいなことは言わない。二度の接吻を終える間に相手の帯を解き、打掛ごと袷の着物を脱がせた。それを布団代わりにして、小柄な女を押し倒し、のしかかる。武家の女の非力さと、すっぽり包みこめるほどの小さな身体が可愛らしかった。

「い、いったい、な、な、なにを……」

三度目の言葉も、唇で中断させた。長襦袢の紐を解き、腰巻きを外せば、呪縛を解かれたように、やわらかな裸身が手にふれる。激しい接吻で質問や悲鳴を遮断しつつ、右手で乳房を入念に揉みしだいた。奥務めの女たちは、みなどこかで、それなりに房事を体験している。が、さほど数をこなしているわけではない。熟れかけているのだが、その直前で自制しているような感じを受けた。火を点けてやりさえすれば、あとは簡単に燃えあがる。自分が脱ぐのは後まわしにして、徹底的に責めた。

「んむうぅぅ、むぐうぅぅぅ～～～」

接吻されながらも、まだ大声をあげようとしている。意外に貞操観念が強いようだが、白

蓮の舌を噛み切るような気配はなかった。驚くばかりで、思いつかないのかもしれない。優しく乳房から腹を撫で、早くも叢に右手を伸ばした。女はなにをするのか勘づいて、両太股をぴったりくっつける。白蓮は右手の中指で叢を探った。さわらせまいとして、女はしきりに腰をくねらせる。身悶えているように見えなくもない。かまわず、指先で花弁を割った。

「んふっ」

尻がひくっとはねあがる。わずかに両太股の力がゆるんだ瞬間、花弁の奥に隠れていた花芯を指先でとらえた。それはまさに花のメシベ、ほんの小さなぽっちりだが、ここを責められると、ほとんどの女は陥落する。白蓮は小刻みに指先を震わせて愛撫する。諦めたのか、気持ちがよかったのか。おそらくは後者だろう。ぎゅっと力の入っていた両太股が、次第に開いていった。

「んむうぅぅ〜〜〜ン、んんむうぅぅ〜〜〜〜〜〜」

唇を重ねた下で起きる声も、抵抗ではなく、喘ぎ声のようになっている。しかし、油断はできない。桜花がすみやかに調べられるよう、静かに事を進めなければならない。いっそう熱い接吻を仕掛けた。舌先で歯茎を刺激し、口中で遊ぶ相手の舌を吸う。そんな接吻は初めてだったにちがいない。

「んんん〜〜〜〜ぅん」

あきらかに異変が生じた。両手を白蓮の背中にまわして、自分から裸身を押しつけてく

る。両脚をぐっと開いて、さわりやすい体位を取った。それならばと、白蓮は指先を蜜壺（みつつぼ）にも移動させる。入口に中指を挿（さ）し入れると、蜜がとろぅりとあふれてきた。かなり感じ始めている。奥を責める前に、やはり、達（い）かせてやった方がいいだろう。蜜を掬（すく）い取り、それを潤滑液代わりにして、花芯に戻した指を蠕動（ぜんどう）させる。わずかなぽっちりだったメシべが、愛撫を受けてふくらみ、張っていた。中指を巧みに動かす、花芯を執拗（しつよう）に責める。動きを速くした刹那（せつな）、

「うんんんん〜〜〜〜〜〜〜〜ぅんううっ」

女は裸身を突っ張った。白い足袋を穿（は）いた両足に、きゅっと力が入る。大きく尻を震わせて、白蓮にしがみついた。花芯への責めはまだ続いている。動きは少しゆるやかになっているが、絶頂の波が去らないようにしていた。ぶるぶるっ、ぶるぶるっと何度か小さく震えて、女は力をぬく。前戯はいったん終わりかと思わせたあと、

「んくうっ」

蜜壺に二本の指を挿入させた。ここでようやく白蓮は唇を離したが、決して休むためではない。女の乳房に唇を這（は）わせながら、蜜壺内で指を男根のように蠢（うごめ）かせる。肉襞（にくひだ）をこすりあげては、奥の壺芯（スポット）を探る。そこはまだ未開発地帯、壺芯はさほどふくらんでおらず、充血している様子もない。性体験の少なさを物語っていた。すぐに白蓮は花芯への前戯に切り替える。蜜壺だけではあらたな絶頂を与えられないと思ったのだ。指をいったん抜き、

身体をさげていく。

「はあはあ、はあぁ、な、なにを？」

嘗められたことがないのかもしれない。女は両脚を伸ばしたまま当惑している。白蓮は両脚を大きく広げ、花弁の中心部に、ちろり、と、舌を這わせた。

「ああっ」

尻を震わせて、のけぞる。あまりの大声に思わず声が出た。

「声をあげてはならぬ」

「は、はい」

最初の抵抗はどこへやら、女は従順だった。両脚を広げておいた方が、やりやすいのではないかと思ったらしく、両手をおずおずと添えて、太股を押さえる。その初々しい仕草が新鮮で、白蓮もそそられる。舌を花芯に戻し、両手を女の乳房に伸ばした。つんと硬く尖った乳首を、指先でつまみ、クリクリといじる。むろん舌も小刻みに揺らして、充血しきっている花芯を刺激した。

「く、くうぅぅ〜〜〜〜、はあはあ、んくうう〜〜〜〜〜〜」

女は命令どおり、けんめいに声をこらえている。唇を噛みしめて、眉を寄せ、苦悶するように首を振っていた。白い両脚を持つ手にも力がこもる。白蓮はなめらかに舌を使い、快感を高めてやる。乳房の愛撫に用いていた両手のうち、右手だけをさげて、ふたたび蜜

壺内に挿し入れた。

「うくうぅっ」

濡れていたためだろう。前よりも抵抗が少なかった。するりと内部に忍びこみ、肉襞を撫で、こすりあげる。くノ一の舌技を用いて花芯を嘗めているのだからたまらない。未開発地帯だった奥の壺芯がふくらみ始めていた。そこも中指の腹で優しくこすってやる。花芯を嘗める舌の動きに合わせて、揉みしだくように、指先でやわらかく撫であげる。こんな前戯は受けたことがなかったのだろう。

「うううううぅ〜〜〜〜、くうううううぅ〜〜〜〜〜〜」

女は声を殺して呻くばかり。必死に大声をあげないようにしているのが、いじらしくもあった。声の代わりではなかろうが、蜜壺がはしたない音をたてている。ぴちゅぴちゅと絶え間なく、蜜があふれていた。長襦袢やその下の着物類が、しっとり湿り気を帯びてくる。

「う、うっ、うっ、うぅっ」

尻がひくつき始めた、絶頂が近づいている。しかし、白蓮は突然、愛撫を中断させ、女の横に並んだ。右手の指は叢付近に残して、いつでも再開する素振りを見せている。快感の波が去らぬよう、太股の内側を撫でたりした。

「は、はあはあ、は、早う」

女はろくに喋れない。初めての衝撃的な体験に、身も心もとろけている。堅い口が開く

のは、こういうときだ。

「聞きたいことがある。おかしな人間が出入りしてはいないか？　出入りの商人と津軽家はうまくいっているのか？」

「そ、そなたは……」

はっと我に返りかけた女を、またまた接吻攻撃で快楽の世界に引き戻した。おぼつかない舌使いではあったが、白蓮が差し入れた舌に舌をからめてくる。太股の付け根あたりに彷徨わせていた右手を花弁に戻した。が、強くさわったりはしない。ふれるかふれない程度の愛撫で、焦らし続ける。

「あはあ～～、お、お願い、はあはあ、さっきのように」

して。

と女は尻をもじもじさせる。

「ひとめでそなたが好きになった」

白蓮は殺し文句で、女心をくすぐった。肉体を責めるだけでなく、心もつかむのが優秀なくノ一の証、続いて懐柔作戦に出る。

「信じてくれ、わたしは姫様を助けたいのだ。そのために仲間とこの屋敷に潜入している。知っていることがあれば教えてくれぬか。このままでは姫様は連れ去られてしまう。それでもよいのか？」

敵ではない、味方なのだという想いをこめる。ある程度、真実を告げるのもコツだ。くノ一であることまで明かす必要はないが、なにも言わないのでは、相手も心を開かない。

「わ、わたくしは、ああぁ、お許しくださいませ」

女は悩み、揺れていた。若年寄という地位にある以上、めったなことは口にできない。かといって、この状態で嘘をつきとおすことができようか。できれば教えてやりたい、喋ってしまいたい。けれど……頬に頬をすり寄せて、女は涙を滲ませる。あとひと押し、白蓮は指を花芯に戻して、愛撫を再開させた。異常な状況下であればあるほど、女体は甘く燃えあがる。

「うんうぅ〜〜〜、あふううぅ〜〜〜〜〜」

すぐさま女は喘ぎ始めた。いきりたつ花芯をなだめるように、中指を濃やかに震わせる。ときおり蜜壺に指を移しては、あふれる蜜をからめ取り、また花芯をさわった。快感が高まると蜜壺にするりと指が移動してしまう。

「ああン、いやいやぁ、あああぁ〜〜〜〜〜ンンン」

こらえきれずにしがみつく。花芯だけをさわってほしいとねだる。

「教えてほしい。この屋敷でなにが……」

白蓮はぎくりとした。背後にだれかがいる。白蓮の帯をほどき、なにかを仕掛けようとしていた。忍びこむ隙間風が、部屋の戸が開いたことを知らせている。三本分の指にも満

たない隙間が確認できた。

あんな隙間から、どうやって忍びこんだのだ？

俄然、興味が湧きあがる。妖術師であるならば、女が危険にさらされる懸念もあった。予定変更、指の動きを速める。耳朶を嚙み、首筋に唇を這わせ、乳首を吸った。なにも知らない女は、ただただ快感に浸る。

「あはぁ～～～、いいぃ～～～～、はあはあ、そのまま、や、やめないで、くださりませぇ～～～～」

もとよりやめるつもりはない。小刻みに指先を震わせて、絶頂を引き寄せてやる。焦らされたせいで、よけいに感じていたのかもしれない。

「あっ、あっ、あっ」

女は引き攣るように、何度も尻を突きあげる。白蓮は指の動きを速めた。一気に頂へ押しあげようとする。

「うんくうぅっ、うくうぅっ、うううううぅ～～～～～っ」

刹那、白い裸身が硬直した。尻が痙攣し、ぶるぶるっと震える。忙しなく腹が上下して、息が荒くなった。

「はあはあ、はあはあ、あぐっ」

白蓮は鳩尾に一撃を加えて、女を失神させる。本当は絶頂を与えて気を失わせたかった

のだが、その暇がない。すでに白蓮は帯を解かれて、着物の紐を外されていた。

四

「だれだ？」

問いかけたところで素直に応えるわけがない。手早く着物を脱がされて、長襦袢を剝ぎ取られる。腰巻きも外したようだが、脱がされたのがわからないほど早かった。野性美あふれる裸身があらわになる。

「名を名乗るぐらいは、あ！」

振り向きかけたとたん、乳房に衝撃が走った。背後にいるだれかが、ふれたのである。形のよい乳房を、後ろから揉みあげられ、うなじを唇で愛撫された。座ったまま白蓮は動けない。さわられた瞬間に、なにもかも遠くなった。ついさっきまでの秘め事によって、感じていたせいもあるだろう。おそらくは女と思われる両手の感触に、うっとり夢心地になる。

「あぁぁ～～～、いいぃ～～～～」

なんという皮膚なのか。まるで絹のごときなめらかさでありながら、しっとりと湿っている。さわられるにつれて、自分の肌が別の皮膚になるような感じを覚えた。乳首がぴんと尖り、乳房が少しずつ大きくなってくる。他の部分もさわってほしくて、相手の両手に

手を重ねた。右手を下にずらして、股間に導いていく。下忍に艶技を教えるときのように、右手と右手を重ね合い、相手の指を花弁に持っていった。白蓮は自然に両脚を開き、後ろの女に身をあずける。背中にあたる双つの乳房が、掌以上に極上の感覚だった。自分から背中をすり寄せて、さらに深く味わう。快感の高ぶりを察したのだろう。女の細い指が白蓮の茂みにもぐりこみ、花弁をそっと割り開いた。すでに花芯は充血しきって、ふれられるときを待っている。だが、指はなかなか動かない。

「あぁぁ、早く、早くぅ」

先刻の女のように、おねだりした。重ねている右手で、相手の指を動かそうとする。が、背後の女は従わなかった。中指を蜜壺にちゅぷっと挿れる。

「おうぅっ」

白蓮はつい大声をあげていた。先刻までの情事で、熟れた肉体は正直に反応している。蜜壺は濡れそぼり、たった一本の細い指が侵入しただけで、愛液があふれ出した。蜜壺内が熱い。肉襞が淫らに蠢いている。サド気質とマゾ気質を併せ持つ白蓮は、すぐにさわられるよりも、苛められるのが好きだ。細い指が出たり入ったりする度に、「くうぅっ」と呻いた。慣れない指づかいが、よけい好色心を刺激する。思わぬところにふれて、快感が高まるのだ。

「うふうふう、はあはあ、こ、ここを」

さわってくれと、相手の指を花芯に導いた。いつもはもっと我慢できるのだが、絹肌の素晴らしい感触を早く味わいたい。相手の指をつかみ、強引に花芯にふれさせる。お手本と言わんばかりに動かした。

「あぁぁ〜〜、そ、そう、そこ、んうううぅ〜〜ン」

見知らぬ他人の指を使って、手淫をしているような倒錯感があった。自分でふれるのとはまた違った悦びがある。まともな房事よりは、荒っぽいのや変わったのが好みであるだけに、さほど違和感は覚えない。華奢な造りの指を、小刻みに震わせて、花芯を刺激する。試しに手を離してみたが、女の指はそのまま愛撫を続けていた。首筋を唇と舌で、ゆっくり嘗めている。背中に貼りつくような乳房から、どうしても離れがたくて、白蓮は動けなかった。

「うふうぅ〜〜〜〜、あああぁ〜〜〜〜」

ぼんやり目をあげたとき、初めてそこに白い小袖が浮かんでいることに気づいた。室内は行灯の明かりすらなく、ほとんど真っ暗なのだが、謎の着物は光苔のように輝いている。夕暮れの風景であろう。茜色に染まる空が、朱色で情緒たっぷりに描かれていた。と突然、茜色の空が凝縮し始める。みるまにひとつの塊となって、朱い鳥に変わったが、即座にそれは小さな赤鬼に変化した。背丈は童子ぐらいだが、股間には立派な男根が天を向いてそそり立っている。

「どうじゃ、見たこともないほど美しい小袖であろうが。これはな。〈肌衣〉と申す小袖

よ。おまえにもと思うたが、いささかな。肌の色が気に入らぬ。ぬけるような雪白の肌でなければ、最高の〈肌衣〉にはならぬゆえ」

陰々滅々たる声で告げた。快楽の波に溺れかけていた熱情を、一気に冷ますような邪気を漂わせている。

「お、おまえは、うぐうっ」

白蓮はのけぞった。充分すぎるほど濡れていた蜜壺に、男根を挿れられたのである。向き合う形の座位で責められると、冷めかけた高ぶりが、すぐにまた再燃する。赤鬼は男根の尖端部で入念に肉襞をこすり、奥の壺芯を撫であげる。

「あうぅ〜〜〜、よ、せ、あああぁ〜〜〜」

さすがに危険探知機が働き、もがこうとしたが微動もしない。背後にいる華奢な指の持ち主が、その繊細さからは想像もできない怪力を発揮して、白蓮をかかえこんでいた。両脚をがっちり摑み、太股を大きく広げさせている。

「ヒャヒャヒャ、いい恰好じゃ」

赤鬼はせせら笑い、男根を突きあげた。

「あくぅっ」

マゾ心をも刺激されて、大声が出る。二度、三度と壺芯を突かれて、甘い痺れが広がった。乳房にも不可思議な刺激が湧きあがる。背後の女の長い黒髪が、サワサワと伸びて、

白蓮の乳房を揉みあげていた。皮膚と同じように絹を思わせる感触が心地よい。くるりと乳首にからみつき、まるで人の指のような動きで、クリクリといじった。

「どうじゃ、白蓮。よいであろうが」

赤鬼は男根を駆使して、蜜壺の内部を責める。亀頭で肉襞をこすり、奥の壺芯を撫であげた。くちゅぴちゅという恥ずかしい音が、闇の中に響き渡る。両脚を押さえつけていた女の指が、花芯に戻って愛撫を再開した。片足だけでも動かせるようになるかと思ったが、髪の毛が巻きついて自由にならない。相変わらず童女が用を足すときのように、女陰を剝き出していた。赤鬼は得意げな顔で、男根を操る。肉襞を撫でこすり、亀頭をまわすようにして壺芯を突いた。

「んくううっ」

白蓮は喘ぎ、裸身をひきつらせる。腕にも胸にも女の髪の毛がからまり、皮膚の上で水藻のように揺れていた。不気味な〝絵〟であるが、絹髪も絹肌同様、とても気持ちがいい。くすぐるように動くのが、たまらなかった。女の指が花芯を刺激する、男根が絶え間なく内部を突く。

「あぅうう〜〜〜〜、いいぃ〜〜〜〜〜〜」

もうなにも考えられない。しかし、相手は妖怪、意識しなくても艶技が働き始めていた。蜜壺の内部がきゅきゅっと動いて、男根をきつく絞めあげる。

「おお、すごいのう。さすがはくノ一、締まりがよいわ」

赤鬼はさらに顔を赤くして、陶酔したように目を細めた。腰を使わなくても、蜜壺の肉襞が複雑な動きをみせる。入口は時に強く締まり、中間地点は男根の側面部にやわやわとからまり、奥の壺芯はイソギンチャクのように亀頭にからみついた。三段階の攻撃を受けては、赤鬼も白旗をあげたくなる。

「くうぅっ、これはたまらぬ」

最後の瞬間を迎えるべく、腰の前後運動を再開させた。背後の女も花芯にあてた指を蠕動させる。左手で白蓮の乳首を揉み、背中に密着させた乳房をまわすように動かした。手足を刺激する黒髪も、小波のように肌をさわっている。白蓮が達くのが早いか、赤鬼の吐精が先か。

「うくううっ、ううううっ、くくくぅっ」

あ、もう。

「達くううううぅ〜〜〜〜〜〜〜っ」

白蓮は座ったまま背中を反り返らせる。

「おおおぉ〜〜〜〜っ」

赤鬼も呻くように声をあげ、男根をぐっと奥まで挿入させる。吐精しようとしたまさにそのとき、蜜壺の入口が刃のように変化する。鉄や鋼ほど強固ではないが、肉襞の一部が信じ

られないほど硬くなっていた。『鉄鼠の白蓮』の艶技、『刃壺（やいばのつぼ）』が働きかけたのだが……。

「ああっ」

男根が断ち切れる寸前、白蓮は髪の毛に吊りあげられていた。両手を縛られるような恰好で、裸身が上に持ちあがる。切断を免れた赤鬼は、しきりに鼻をふくらませ、勝ち誇ったような顔で見あげた。

「ヒャヒャ、ヒャヒャヒャ、おまえたち阿魔衆の艶技は先刻承知のうえよ。同じ手に引っかかるほど間抜けではないわ」

「くっ、き、きさまらの後ろにいるのはだれだ？　甲賀の軒猿だけではあるまい。今回は別のだれかが背後に、ぐっ」

声を詰まらせて苦悶する。髪の毛が喉にも絡まっていた。絞め殺すつもりなのだろう。絞める力が次第に強くなってくる。

「ぐぐぅ、ぐうぅぅ～～」

つまらない質問をする前に、大声をあげるべきだった。が、白蓮は桜花の焦りに気づいている。それゆえ聞かずにいられなかった。ほんのわずかでもいい。手がかりがほしかった。

「ヒャヒャ、これで、ひとり」

赤鬼はすでに事を成し遂げたようなことを言う。白蓮は両手をあげたまま、吊りあげられていった。だんだん意識が遠くなる、桜花の白い顔がちらついている。ここで死ぬわけ

にはいかない。お頭の手助けを……。

なにもかも消えかけた瞬間、いきなり髪の毛が切れた。喉と両手に絡まっていた黒髪が切断されて、白蓮は畳の上に落ちる。傍らに黒装束のだれかがいるのを、うすぼんやりと見た。

「何者じゃ!?」

赤鬼の問いかけには応えず、黒装束は部屋から飛び出して行く。派手に笛を吹き鳴らしながらの逃亡であった。別の部屋にいた竜子や朱楽、そして、桜花が配備していた数人の下忍が集まって来る。

「くう、命拾いしたな、『鉄鼠の白蓮』よ」

右手をあげると、背後の気配が消え失せる。同時に赤鬼の姿も消滅し、空中に浮かんでいた小袖が、外に飛び出して行った。

「ま、待てっ」

白蓮はあわてて手を伸ばしたが小袖を摑めない。静寂を打ち壊す笛の音が、屋敷中に響き渡っていた。

五

笛の音が響いている。

「あぁ、わ、若様」

が、奥御殿の一室にいる姫君に、その音は聞こえていなかった。掛けられた夜具の下で行われている秘め事に、身も心も奪われている。花嫁衣装である白い着物をまとっているが、前ははだけ、裾は広がって、裸身を隠す役目を果たしてはいない。若様がもぐりこみ、女陰を愛撫しているのだった。

「大声をあげてはならぬぞ」

くぐもった声で警告する。もとより、そのつもりはない。下手に騒げばあの悦びを得られなくなる。

「は、はい、わかっておりま、あはぁ～～～～～～ぁあ～～～」

姫君は両脚をカエルのように折り曲げていた。若様の両手は乳房をやわらかく揉みしだき、唇と舌で花弁を刺激している。最初のころは花芯があまりにも小さくて、その在処を探るのが、なかなかにむずかしかったものの、今では乳房にさわられただけで、薄桃色に充血する。メシベが勃って、嘗められるのを待つようになっていた。

「も、もっとぉ、な、嘗めて、はあはあ、くださりませぇ」

かすれた声で哀願する。小さく首を振り続け、さらに両脚を広げた。若様の舌は花弁の周囲を嘗めるばかりで、なかなか花芯にふれようとしない。熱く火照った姫君の柔肌が、夜具の下で桜色に染まっていた。

「若様ぁ、早う、早う」

もじもじと尻を動かして、ねだった。掛けている夜具が、広げた両脚の部分だけ盛りあがり、焦れたように揺れている。それでも若様はまだ花弁付近に舌を這わせるだけだった。太股の付け根あたりを嘗めては、花弁を縁取るように嘗める。すでに開いている花の中で、花芯が痛いほど充血していた。蜜壺もしっとりと濡れそぼり、入口が淫らにひくついている。

「わ、若様ぁ」

何度目かの嘆願に、廊下の声が重なった。

「失礼いたしまする」

お側女中だ。今宵は大事な初夜、そのような夜になんの用であろう。姫君は本気でそう思っていた。日毎、初夜が訪れていることなど記憶に残っていない。明日の夜になればまた忘れ去って、初めての夜を迎えるのだ。

「悟られぬようにするのじゃ。よいな。中に入れてはならぬぞ」

若様はくぐもった声で告げるや、蜜壺をちゅうぅっと吸いあげる。

「ああっ」

思わず大声が出た。

「姫様？」

けげんそうにお側女中は尋ねる。ひくっ、ひくひくっと腹を震わせながら、姫君はかろ

うじて答えた。

「な、なんでもありません。それよりも、このような時間に何用、あ！」

とうとう花芯に若様の舌がふれた。待ち望んだひととき、小刻みに蠕動して、屹立するメシベをなだめにかかる。尖って硬く迫り出している乳首も、指でつまむように愛撫していた。

「あ、はあはあ、あくうぅ〜〜、くううぅ〜〜〜」

声をあげまいと、必死にこらえる。ご褒美なのか、いたぶりなのか。若様の舌技はさらに濃やかになった。愛おしげにメシベをくるんだり、舌をやわらかくそよがせたりする。焦らされた分、燃えあがるのも早い。いまだ男根の洗礼を受けていない蜜壺であったが、とろぅりと芳しい蜜があふれ出した。

「おう、もうこのように」

わざとらしく音をたてて、若様が啜りあげる。

「んくぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

姫君は喉で声を殺した。途切れたままの答え、そして、ひそやかに立ちのぼる妖しい気配。様子がおかしいと思ったのだろう。

「どうかなさいましたか」

お側女中が少しだけ戸を開いた。外の冷気が流れこみ、人のざわめきや物音が聞こえてくる。現世を呼び覚まさせるような喧噪だったが、それらは鬱陶しい事柄にすぎない。

「この、ような、時間に、な、何用じゃ？」

喘ぎながらも答えを返した。舌の動きが速くなり、抑えようとしても両脚が震えてしまう。大きく広げた脚の動きそのままに、掛けてある夜具が艶(なま)めかしく揺れ動いた。しかし、行灯の明かりを点けていないため、お側女中には見えない。

「はい。曲者が忍びこんだ由、念のために見廻(みまわ)っております。わたくしはお廊下に控えておりますので、なにかございましたら、お声をおかけください」

ようやく邪魔者がいなくなる。戸を閉めるのを待っていたように声が出た。

「ふうふう、うふうぅ〜〜〜、わ、若様ぁ〜〜〜、いいぃ〜〜〜〜〜」

むろん大声にならぬよう気をつけている。本当は思いきり叫びたかったが、なんといっても初夜、はしたない歓喜(よがり)声などあげられるわけがない。できる限りこらえて、その瞬間を引き寄せようとする。花芯を嘗める舌の動きが速くなる、快感が高まってくる、絶頂の波に包まれかける。

「あ……」

花芯を嘗めていた舌が、突然、蜜壺に移動した。舌先で入口を割り、にゅるりと中に挿入させる。それなりに気持ちいいのだが、花芯への愛撫とは比べものにならない。姫君は不満をあらわにして、裸身をよじった。

「あああ〜〜〜、いやぁ、いやいやいやぁ〜〜〜」

上半身を揺らすものの、決して尻は動かさない。そんなことをすれば、よけいに嘗めてもらえなくなる。両手を太股に添えて、さらに脚を広げた。女陰を押しつけるように、尻を持ちあげる。おねだりの仕方が気に入ったのかもしれない。

「わ、若様、お願いでございま、くぅっ」

ふたたび舌が花芯に戻った。今度は止まることも、移動することもない。薄桃色に充血しきったメシベを入念に嘗めあげる。舌を小刻みに震わせ、乳首をクリクリといじる。先刻から焦らされ続けているのだ。とうてい我慢できない。

「あっ、あっ、あぁっ」

引き攣るように、いきなり裸身が痙攣した。

「あ――――」

尻が大きく震えて、白い腹が忙しげに上下する。ひとまわり大きくなった乳房を、若様がぎゅっと握りしめた。甘い痺れが全身に伝わって、小さな足が反り返ったり、伸びたりする。

「はあぁ～～、もっと、もっとぉ～～～～」

次がほしいと訴えた。夜具がもぞもぞと動き、はねのけられる。現れたのは白い鬼、赤や青、黒といった色の鬼は地獄絵などで見るが、白鬼というのは珍しい。が、姫君の目には若様に見えていた。股間でそそりたつ逞しい逸物、一度も挿れられたことはないが、どんな感じがするのだろう。

「若様」
うっとりつぶやいた姫君に、白鬼は命じた。
「後ろを向け」
「は、い」
素直に後背位を取る。花嫁衣装の白い着物をまとっているが、ほとんど皮膚と同一化していた。袖や裾などがわずかに垂れているものの、あとは姫君の皮膚に融合している。広げている両脚がくっつくと、小袖姿を後ろから見ているような形になった。もっとも、尻をあげた恥ずかしい恰好であるが、再度、両脚を広げると、今度はちゃんと尻の割れ目が浮かびあがる。脚をくっつけると小袖姿、広げると雪白の裸身、なんとも不可思議な光景だった。
「よい仕上がり具合じゃ」
ざらつく声で白鬼は言い、満足げに両手で尻を撫でる。皮膚そのものになっている小袖が、波のように揺れて、柔肌を刺激した。
「あぁぁ〜〜〜〜」
達ったばかりの姫君は、早くも次の高まりを覚えている。花芯に貼りついている小袖の一部が、舌のようになめらかな動きを見せた。すぼまっていた後ろの菊花が、ぴくぴくとひくついている。蜜壺の入口も誘うように蠢いた。

「そそられるのう。だが、まだじゃ、まだ挿れるわけにはいかぬ。あと少しじゃ。じきにそのときがこようぞ」

鬼の右手にはいつの間にか、一本の筆が握られている。染料や顔料の類はいっさい付いていない。焦れたように揺れる姫君の小さな尻を、左手で撫でまわし、〈肌衣〉に描く瞬間がくるのを待つ。小袖は雪白の肌が透けて見えるようになったり、背中や尻の部分が肌と同化したりしている。完全に裸身と融合したように見えたそのとき、

「ふん！」

鬼はいきりたつ男根を挿入させた。

「あくぅっ」

姫君はのけぞり、背中を思いきり反らせる。幾度となく初夜の真似事を繰り返したせいだろう。生娘であるにもかかわらず、痺れるような快感がつらぬき走った。がくがくと腰を振って、布団をきゅっと摑む。と同時に鬼は一気に筆を走らせた。裸身にしか見えない姫の背中に、なにも付けていない筆で白無垢の花嫁姿を描く。白馬に乗って輿入れする初々しい花嫁、穢れなき純白の衣裳と白い馬。それらの〝絵〟は霊光を放つかのように、白銀色の輝きを広げている。

「ううぅ〜〜、あはあはあ、も、もっとぉ、突いて、あぁぁ、くださりませぇ〜〜」

かすれた声でおねだりする。初めて挿入された男根を、たっぷり味わいたい。奥の壺芯

をもっと突いて、こすりあげて、撫であげて。貪欲に尻を動かして、逸物を奥深く呑みこもうとする。

「おう、おう、すごいのう。おれもたまらぬわ」

鬼もこらえきれなくなったのだろう。腰を突き出しては引き、また突き出した。激しく動かして、奥でふくらむ壺芯を刺激する。男根は今にも破裂しそうなほど大きくなっている。しかし、すぐに達くのは面白くない。けんめいにこらえて、蜜壺が与えてくれる快感を楽しんだ。肉襞を尖端部でこすりあげては、奥の壺芯を撫であげる。蜜壺の中全体が、タコのように蠢いて、何度も男根を締めあげた。

「おおぉ～、おおおぉ～～～っ」

さすがにこらえきれなくなる。

「んふうっ、ふうふうぅっ、あふうううぅ～～～～～っ」

姫も我慢できない。小さな尻が一瞬、動きを留め、全身が硬直した。すぐさま尻が痙攣して、蜜壺が収縮する。

「あ、い、達くっ、達すきまするぅ～～～～うぅ～～～」

「おおおおぉ～～～～～～っ」

白鬼も耐えきれずに吐精した。操っている幽斎は、離れた場所にいるが、思念体である鬼を使って射精したのである。はあはあと喘ぎながら、ぐったり手足を伸ばしている姫君

の耳もとにささやいた。
「そ、そなたはまだ連れて行かぬ。次の獲物を探すために、おれの手足となってもらうぞ」
「あい」
うっとりと夢見るような表情で、姫は答える。廊下や庭では騒ぎが広がり、あわただしくなっていた。

六

騒ぎを知らせる忍び笛が、幾度となく鳴り響いている。
「なにが起きたのでございますかっ、姫様はご無事でございますか!?」
桜花は打掛の裾を振り乱して廊下を走った。表の御殿に忍びこんでいたため、駆けつけるのに時間がかかっている。姫が拉致されたのではないかと、まずはその部屋に向かったが、廊下で白蓮に出くわした。
「どうしたんだい、なにがあったのさ」
とたんに口調が変わる。
「白い小袖が現れたのだ。ヒトに変化したり、着物に変化したりと、自在に変わる。妖術

師は〈肌衣〉と呼んでいたが、赤鬼まで出現して、危うく殺されかけたのだが……なんというか、その、だれかに助けられた」

白蓮らしくない最後の言い方が引っかかった。

「助けられたって、だれに？　竜子か朱楽じゃないのかい？」

「聞いてみたが違っていた。それにくノ一ではなかったように思うのだ。忍び装束を着ていたが、女子（おなご）ではなく、男のような……」

ひときわ大きな笛の音が、会話を中断させる。忍び笛ではない。普通の人間の耳にも聞こえる笛だ。

「中庭の方だね。あんたは姫様を頼むよ。なにがあっても、部屋の側から離れるんじゃないよ」

「承知」

二手に分かれて廊下を進む。走りながら、桜花は打掛と袷の着物を素早く脱ぎ捨てた。身軽な忍び装束になって、武器にもなる簪（かんざし）を取る。二本の鎌（かま）も用意してあったが、御末の部屋まで行かなければならない。そんな暇はなかった。

「お、お頭！」

「こっちですっ、きゃあぁっ」

庭でいくつもの叫び声があがる。忍び装束姿の竜子や朱楽、そして、配備していた数人

の下忍たちが、庭を走りまわっていた。頭上には純白の小袖が、まるで亡霊のように舞っている。一枚ではなく三枚もあり、それぞれに不気味な輝きを放射していた。

まさに天を舞う〈肌衣〉、このうえなく美しいが凶々(まがまが)しくもある。

「鬼が現れるかもしれないっ、気をつけるんだよっ」

桜花が庭に飛び出したとたん、音もなくふわりと舞い降りて来た。黄色い稲穂らしき絵が、闇の中で蛍のように光っている。簪で切りつけると、様子を窺(うかが)うように空中で停止した。攻めるべきか、いったん退くべきか。桜花の逡巡を読み取ったらしい。

「逃げてくださいっ、お頭っ、絡みついてきます！」

押し倒すようにして、朱楽がぶつかってくる。二人は地面に転がり、低木の植えこみに逃げこむ。ばさっと小袖が動いたものの、木の枝が邪魔をして襲いかかれない。朱楽が小声で告げた。

「あの小袖、顔に絡まるんですよ。ぴたっと鼻と口に貼りついて、離れないんです。呼吸ができなくなっちゃうから、もう苦しいのなんのって。あたしも竜子がいなければ危ないところでした」

「なるほど。下屋敷の牢屋で不審死を遂げた人夫も、その手口で殺(や)られたのかもしれないね」

頭上を飛び交う三枚の小袖には、黄色い稲穂の他に、茜色の空、空を飛ぶ鳥の群という

ように、違う絵が描かれている。絵の色を表すような光輝を広げているのが不気味だった。じっと凝視めていると、頭がくらくらしてくる。妖光だと、桜花は思った。下忍たちも植えこみに身をひそめて様子を見ている。動くに動けない状況だ。

「なにを探っているんだろう。それとも、あたしたちの目を引きつけておくための囮なのか」

狙いは津軽家の姫君、白蓮を行かせたが、ひとりでは手にあまるかもしれない。派手に飛びまわる〈肌衣〉の様子が、どうにも不可解だった。

「厄介なことになったもんだ。どうやって捕まえるか」

「簡単ですよ。あたしにまかせてください」

過激な火娘は懐から宝禄火を出して、火を点けようとする。これは江戸版ダイナマイトとも言うべき危険な代物だ。桜花はあわてて止める。

「馬鹿っ、そんなものをぶん投げたら燃えちまうじゃないか」

「燃やすしかないじゃありませんか。このままじゃ身動きできませんよ。みんな窒息死させられてしまいます」

「あれはね。着物のように見えるけど、着物じゃないかもしれないんだよ。行方不明になった姫君たちかもしれないんだ。下手な手出しはできないよ。それに、燃えた着物の火が飛び火して、大火事になっちまう可能性もある。火を使うのはご法度だよ」

「でもぉ」

「いいから黙って命令を聞くんだよ。ひとりだけでも捕まえられれば、妖術師の居所がわかるかもしれない。近くにいるとは思えないが、さほど遠い場所にいるとも思えないんだ。操るにはある程度、側にいなければならないからね。この屋敷の周辺にいるような気がするのさ。あたしが囮になるから、あんたは援護しておくれ。いいね、絶対に火は使うんじゃないよ」

言うが早いか、植えこみから飛び出した。

「え、だけど、火術師のあたしが火を使わないで、どうやって援護しろと、ねえ、お頭、ねえってば！」

追いかけて来る声を無視して、踊るように舞う〈肌衣〉の下に向かった。人間の姿に変わると、白蓮は言っていた。ならば、そのときに捕まえるしかない。三人のうち、せめてひとりだけでも取り戻したかった。

「姉様っ、上っ、危ないっ」

単語の羅列のような警告は、竜子が放ったもの。両袖を広げた〈肌衣〉が、桜花の頭上に覆い被さってくる。包みこまれかける直前、横っ飛びにすっとんだ。間髪を入れず肌衣の上に飛び乗る。押さえつけてしまえば、動けなくなるだろうと思ったのだが、着物が裏返るような感じで、くるりと巻きつく。

「くっ」

桜花はいち早く逃げたが、片袖が左手にしゅるっと絡みついた。火を使うのは駄目だが、怪我ぐらいは我慢してもらうしかない。やむなく簪を突き出して、刺しつらぬいた。怯むように〈肌衣〉は離れたものの、あっという間に破れた部分がもとに戻っている。不死身なのか、それとも刃に対してだけは強いのか。不死身であれば遠慮なく、火でもなんでも使うのだが、なんといっても相手は大名家の姫君、思いきった戦い方ができない。いったん近くの植えこみに避難する。

「姉様、大丈夫？」

竜子が這いつくばって近づいて来た。

「ああ、今のところはね。それよりも、竜子。おまえでなければできないことがあるんだよ」

耳もとにささやき、命じる。

「うん、わかった。やってみる」

地面にへばりつくようにして、竜子は井戸に向かった。水術師だけに屋敷内の水場はすべて頭に入っている。それを見送りつつ、桜花は声をはりあげた。

「動くんじゃないよっ、合図するまで出るんじゃないっ」

と言ったはずなのに、くノ一部隊が出現する。忍び装束を着け、手には忍び刀を持ち、

〈肌衣〉たちに斬りかかった。これらの部隊は竜子によって生み出された幻のくノ一部隊、『逃水の竜子』の逃水は、蜃気楼を意味する言葉。さほど長持ちしないが、水さえあればいくらでも現れる。

「井戸に行くよ！」

声をかけて、桜花は走った。幻部隊に襲いかかった〈肌衣〉たちは、三枚とも幻に絡みついている状態だ。布であるならば効果があるかもしれない。井戸にいた竜子から、水を汲んだ桶を受け取り、引き返して行く。すれちがった朱楽たちも、すぐに桜花の意図を察した。

「水をかけるんですねっ、お頭！」

問いかけるような言葉に、応えている余裕はない。幻に絡みついていた一枚の〈肌衣〉に向かって、思いきり桶の水をぶちまける。ヒトに戻るかもしれない、その瞬間を捕まえれば……。

「あぁっ」

悲鳴をあげたのは、桜花の方だった。〈肌衣〉が巻きつき、身体を締めあげる。顔に貼りついた布の一部が動いて、口の中にまで入りこんできた。鼻も同時に塞がれているので苦しい。

「ぐっ、ぐうぅっ」

もがき、引き離そうとするが、ますます締めつけられるばかりだ。水で濡れて重くなるかと期待したが、見事に弾き返していた。濡れるどころか、湿ってさえいない。いや、人肌のようにしっとりと少しだけ湿っている。そのせいでよけい貼りつき方が強いのだった。

「お頭っ」

「早く斬らないと！」

朱楽や下忍たちが、忍び刀でズタズタに斬り裂いた。その隙に桜花は離れたが、一部が太股に絡みついている。簪ではとうてい引き裂けない。下忍の刀を奪い取り、自分で叩き斬った。

「哈(は)っ」

忍び装束も少し切れたが、切れ端も離れる。が、二つに裂けたその布がまた襲いかかる気配をみせた。あわてて後ろに飛びすさる。

「気をつけなっ、襲って来るよっ」

腰を低くして忍び刀を構えた。切れ端だった布は、すぐにくっつき、本体の〈肌衣〉に融合する。斬っても斬っても即座に再生してしまうのだ。燃やすしかないが、試してみる気にはなれない。

「さがるんだ。ゆっくりと離れるんだよ」

身体を低くしたまま、撤退命令を出すしかなかった。幸いにも竜子が生み出す幻部隊が、

身代わり役を引き受けてくれる。しかし、いつまでも井戸の側に置いておけない。そろそろ疲れが出るころだ。

「竜子っ、こっちにおいで！」

屋敷内に逃げこみ、庭の様子を窺った。ほどなく、竜子が戻って来る。無傷の〈肌衣〉は勝ち誇るかのように、頭上を悠々と飛翔していた。雲から出て来た三日月を横切るようにして、ふわり、ふわふわと舞っている。勝利の踊りに見えなくもない。

「燃やした方がいいんじゃありません？」

悔しげに朱楽が言う。懐に手を入れて、命令がくだるのを待っている。手も足も出ないのが、なさけなくてならないのだ。それは桜花とて同じこと。

「だめだって言っただろ。燃やすのは最後の手段だ。まだ他にも手は……」

「着物が逃げるよっ、姉様っ」

庭にふたたび飛び出した竜子に、朱楽も続いた。くるくると夜空を旋回していた三枚の〈肌衣〉は、勝利の踊りを思わせるそれを続けながら、津軽家の屋敷から飛び立って行く。

「お待ちっ、深追いするんじゃないよ！」

その声が果たして届いたかどうか。二人のくノ一は足を止めず、妖しい衣のあとを追って行った。

第四章　阿蘭陀宿

一

妖術師、幽斎が操る〈肌衣〉は、予定どおりに津軽家を出た。追いかけて行ったのは、朱楽と竜子の二人、行く先は極楽か、はたまた……。

「これは本当にだめかもしれぬ」

陰々滅々たる声で、軒猿はつぶやいた。彼がいるのは雇い主である隆光の寺、知足院だ。居心地のいい屋根裏にいるのだが、気持ちは暗く沈むばかり、もっとも、こういう心理状態がきらいなわけではない。どこまでも続く闇、果てのない暗黒世界に浸って、我が身を嘆くのが趣味のひとつなのだが、今回、嘆いているのは自分のことではなかった。

「阿魔衆もいよいよお終いかもしれぬのう。大名家の姫君、それも嫁入り直前の姫君だけを獲物にしたのが吉と出たか。手を出しあぐねているうちに、着々と企ては進み、哀れ、

朱楽と竜子は罠に陥ちる」

うぅーむぅ、と、雪隠で力むときのように唸る。先刻、報告に訪れた手下は、あきらかに責めるような目を向けていた。比較的、中立派の忍びだったが、その男でさえも今回のやり方には、賛成できないということだろう。

「わしとても辛いところよ。阿魔衆との大きな戦いはこれで三度目、今回、勝たねばどうなることか」

覗き穴から我が主、隆光の様子を見る。先刻、訪れたひとりの客人と、歓談の真っ最中だった。

「いやいや、隆光殿にはかなわぬ。なにもかもお見通しでござるな。心を読めるのではござらぬか」

穏やかに言ったのは、柳沢出羽守保明（吉保）である。数えで三十八歳になる柳沢は、幼少のころから上州館林家にいた綱吉の小姓を務め、御側用人として二年ほど前から頭角を現し始めていた。昨年、武蔵川越城主七万二千石に任ぜられて、老中格となっている。綱吉に負けず劣らずの艶福家だが、見るからに柔和で、人あたりがよく、家臣たちにも人気があった。貨幣改鋳を行った勘定頭差添役の荻原重秀とは、対照的なタイプと言えるかもしれない。物腰の柔らかさで人を操るのだが、持って生まれた人柄の良さがあるのだろう。隆光もいつになく上機嫌だ。

「そのようなことはございませぬ。噂を耳にしただけのこと、今宵のお出ましはきっとその件であろうと思うておりました」

それで、と、隆光は顔を近づける。軒猿も節穴にいっそう耳を寄せた。

「さきほどの話でございまするが、いったい、その大名より、どのようなご相談を受けられたのでございますか」

「うむ。なんでも水戸家のご老公様にご相談した由。だが、それでも安心できず、わたしの屋敷においでになられたのでござる。ご老公様と言えば思い浮かぶのは隆光殿、よけいな口を挟むつもりはござらぬが、お心当たりがあるのであれば、まあ、なんとかできぬかというようなことでござるよ」

くそぅ、あちこちに声をかけおって。

軒猿は歯がみする思いだった。

これだから大名というのは油断がならぬ。水戸光圀と隆光様が対立関係にあることや、柳沢殿が隆光派であることを、知ったうえでの行動であろうがな。我が身を守るためであれば、敵味方の区別なく、駆けこむのだから困ったものよ。侍の誇りはどうした、義の精神はどうしたのだ。『仁は人の心なり、義は人の路なり』と、孟子も言うておるではないか。ああ、まったくもって、なさけない。

ふう、と、大きなため息が出た。ちなみに、仁とは人が人として持たなければならない

良心のことであり、義とは人が人として行わなければならない『正しい道』のことである。この分では隆光から、どんな命令が出ることか。面倒なことになりそうな予感があった。

「イッツッツ」

早くも胃の腑が痛み始める。良い予感は外れるくせに、悪いことだけは、なぜか、必ず当たってしまうのだ。さっさと逃げ出した方がいいかもしれない。動こうとしたとき、薄暗い天井裏に、光り輝く白い鬼が現れる。

「ヒャヒャヒャヒャヒャ」

耳障りな嗤い声をあげて、にやにやしていた。鬼のくせに光るとは何事か。鬼なら鬼らしく、どろ〜んと淀んだ邪気をまとって出てくればいいものを、まったくもって癪にさわる。軒猿は不機嫌さをあらわにして尋いた。

「幽斎か」

「さよう。なにもかも予定どおりよ。うまくいきすぎて、気持ちが悪いぐらいじゃ。あれが噂の阿魔衆か？　世直し天女か？　実のところ、あれは贋物で、本物が他におるのではないのか？」

得意満面、白鬼の鼻がひくついている。

うるさい。竜子の艶技に溺れて、危うく逃げたのをわしが知らぬと思うてか。まだお頭の桜花は相手にしておるまい。戦ったあとで、自慢をしろ。

などと、心の中で文句を言ったあと、あまり聞きたくはなかったが、渋々促した。
「状況は？」
「さっき言うたであろう。ちゃんと聞いておけ。すべて順調、阿魔衆はまるで相手にならなんだわ。おれの〈肌衣〉たちにいいように弄ばれてな。あのお頭、悔しげにきりっと歯を噛みしめておったわ。なんの問題もない」
「わしが聞いたのは、阿魔衆のことではない。傀儡にするべく、妖を仕掛けている姫君のことよ。うまくいっているのであれば……」
「おうとも、そちらも首尾は上々、津軽家の花嫁も、すでに〈肌衣〉となった。美貌はちと落ちるが、肌がの。今までの中では最高じゃ」
遮るように言われて、よけい苛立つ。人の話は最後までちゃんと聞くものだ。わしはおまえの雇い主、それが最低の礼儀ではないか。ええい、気に入らぬ。今すぐ辞めろっ、わしの前に二度と姿を見せるな！
と、クビにしたつもりで、妥協案を提示する。
「これで四人、準備は整ったであろう。あとは阿魔衆を……」
「あとひとり」
また最後まで喋らせてくれなかった。ざらざらしたいやな声で、白鬼は続ける。
「おぬしにはとうてい理解できぬかもしれぬが、おれの術にはあとひとり必要なのじゃ。

五人揃わねば使えぬ」

「……」

とうてい理解できぬ、だと？　馬鹿にするのも、いいかげんにしろ。とうの昔にわかっておるわ。ゆえに先を読み、四人でよかろうと口にしたのではないか。わかっておらぬのは、どちらなのか。

「これ以上、大名家の姫君を拉致するのはまずい」

遮られないように、できるだけ短く告げた。遮るクセがある幽斎を気遣うような言動に、自分自身で腹が立ち、よけいに落ちこむのだが、そういった暗い穴蔵状態が好きなので、実はひそかに楽しんでいたりもする。複雑怪奇な雇い主の心情など、幽斎は知るべくもない。

「しかし、おれは……」

「阿魔衆がいる」

今度は中断させてやったぞと、軒猿は内心、にんまりした。やられたらやり返す。相手がそれに気づかなくても、自己満足であっても、それはそれでかまわない。反論する気配を感じて、さらに言った。

「くノ一に生娘はおらぬと言いたいのかもしれぬが、男の洗礼を受けておらぬ者が、中にはまだいる。阿魔衆は肌の美しい娘が多い。良い〈肌衣〉が誕生するのは間違いない。四

人もさらえば『別口』も充分、満足したであろう。ひとりぐらい阿魔衆が加わったとて、文句は言わぬと思うが」

皮肉っぽく、別口の存在を口にする。なにもかも知っておるのよ、わしをなめるな。視線にこめて睨みつけた。

「ヒャヒャヒャ、まあ、いいだろう。実はな、おれもそのつもりでおったのよ。『逃水の竜子』がのう。気に入っておるのだが、あれは生娘に非ず、惜しいが諦めるしかあるまい。しかし、あの肌といい、蜜壺の具合といい、なんというか」

ごくりと白鬼の喉が鳴る。なんだ、こいつも竜子か。京弥に知れたら殺されるかもしれぬが……思うにこれはあれだな。気の強いくノ一の中では、竜子がどこか頼りなげで、口説きやすそうに見えるからであろうな。だが、なかなかどうして、あの娘はあれで芯がしっかりしておる。簡単になびきそうに見えて、なびかぬのがまたいいところ、かもしれぬが、おおっと、わしが阿魔衆を褒めてどうする？

ひとりで勝手に推理をし、自己完結して苦笑いする。その笑いをどう勘違いしたのか。

「だれかに邪魔をされた」

急に白鬼の表情が変わった。

「『鉄鼠の白蓮』を仕留めようとしたときのことよ。首を絞めあげ、あと少しで息の根を止められると思うたに、そこで邪魔が入ったのじゃ。天井裏から現れてな。白蓮の首を絞

めあげていた〈肌衣〉の髪を切り、庭に逃げおったわ」

先刻のお返しとばかりに睨みつける。軒猿は平然と見返した。

「それで？」

「あれはおぬしの手下ではないのか？　どこかで見たことのある男のように思うたが、甲賀組の忍びではないのか？　おれの邪魔をさせるために見張らせていたのではないのか!?」

「ありえぬ」

軒猿は一蹴する。幽斎の言葉に確信めいたものがないのを鋭く読み取っていた。腹芸のできない単純な男という推理は、見事にあたっているようだ。

「わしの手下が、おぬしの邪魔をするはずがない。聞いた話によれば、根来組の忍びだった男が、『鉄鼠の白蓮』に惚れているとか。そやつが助けたのであろう。抜忍になって、白蓮につきまとっていると聞いた。根来組を抜けた忍びであれば、文句を言えるはずもない。気をつけることだ」

眉毛ひとつ動かさずに、嘘八百をでっちあげた。我ながら、すらすらとよく言えたものだと感心する。どちらかと言えば穏健派の軒猿であったが、嫌いな相手に対しては変わるらしい。

「ふん、ずいぶんと遅い忠告よのう。ありがたいことじゃ。では、その抜忍。次に出会う

たときは始末するがよいのだな」
「好きにするがよい」
「そうか」
幽斎は不満げだったが、よけいな質問はさせない。
「次の手筈はどうなっておる。われらの目的は阿魔衆、企ては進んでおろうな」
「手抜かりはない。〈肌衣〉のあとを朱楽と竜子が追いかけておる。行く先はこれも予定どおり、例の屋敷よ。おぬしが言うところの『別口』から、目を逸らさせるための罠。あのお方の存在には、一度も気づくことなく、阿魔衆は黄泉に旅立つことであろう。楽しみなことよ」
「ひとつ、確認しておきたいことがある」
軒猿は努めて冷静になろうとしていたが、また不吉な予感で胸がざわめいた。聞く前から答えがわかっているような気がする。それでも仕方なく聞いた。
「四人の姫君についてだが……」
「異人に売り払う。おれは最初から、そのつもりよ」
またまた幽斎が遮った。思っていたとおりの答えであり、不愉快きわまりない態度であった。
「幽斎」

凄みをきかせて名を呼ぶ。しかし、相手はなにも感じていない。ヒャヒャヒャヒャッとひときわ甲高い嗤い声を残して、白鬼は消え去った。任務のむずかしさを思い孤独に浸りかけたが、

「軒猿、いるか」

下で隆光の声が響いた。すぐさま天井板を外して、衝立の陰に飛び降りる。

「は、ここに」

おそらくはこう言うであろう。

「大名家の姫君をそれぞれの親元に返しつつ、阿魔衆だけを仕留めよ。よいな、早急に手を打たねばならぬ。わかっておるだろうが、姫君たちは無傷でなければならぬぞ。無傷じゃ、よいか。無傷の意味を理解できるな?」

まだ口にされない隆光の言葉を想像して、胃の腑が痛みを増した。

それは無理でございまする、隆光様。幽斎はすでに姫君たちを、キズモノにしてしまいましたゆえ。はなから承知のうえではございませぬか。それを今さら、あれこれ言われましても……。

そう、どうにもならないのだった。

せめて、無事に返すしかあるまい。異国に売り払う前に、助け出すことができるかどうか。阿魔衆の活躍を期待するしかないかもしれぬ。厄介なことになったものよ。

「はあ」
はかない期待をこめて、軒猿は吐息をつく。

二

期待されているのを知ってか知らずか、朱楽と竜子。
二人は空を飛ぶ〈肌衣〉を追いかけて、日本橋本石町に来ていた。常磐橋御門外の本町と、神田堀沿いの本銀町との間の通りを言い、一丁目から四丁目までである。その先が鉄砲町で、西側は御堀であり、二丁目から三丁目の間に里俗十軒店の大通りがあった。
寛文（一六六一～一六七三）のころまでは単に石町と呼ばれていたが、三丁目に時の鐘があるので、里俗を鐘撞堂新道とも呼んでいる。この町は旅宿の多いところで、訴訟その他の用向きで江戸に出た者の宿泊所となっていた。中でも名の知れた旅宿として有名な建物に、三枚の〈肌衣〉は消えている。敷地内に忍びこんだ朱楽と竜子は、小声でささやき合った。
「まさか、あの着物たちが、長崎屋に来るとは思わなかったよ。妖術師は阿蘭陀人とも繋がりがあるのかな」
竜子の単純な推理に、朱楽はすぐさま反論する。

「そうとは限らないわよ。長崎屋の主とは、知り合いかもしれないけどね。いずれにせよ、ここが隠れ家かもしれない」

広い庭の向こうには、立派な二階建ての宿が浮かびあがっている。あと一刻ほどで夜明けだろうが、いくつかの窓には明かりが灯り、眠らぬ宿という印象を受けた。ちなみに長崎屋とは、寛永四年（一六二七）、阿蘭陀人が初めて渡来して以来、阿蘭陀商館長が将軍に謁見するため、江戸参府をする際、利用していた宿のことで、別名、阿蘭陀宿とも呼ばれている。好奇心満々、朱楽は簡単に決めた。

「忍びこむわよ」

「え、待ってよ。いちおう隠れ家らしき場所をつかんだんだからさ。お頭に報告した方がいいと、ねえ、朱楽。聞いているのかい」

聞いているわけがない。

「朱楽、とにかくさ。まずはお頭に……」

二人はほとんど同時に木陰に身をひそめた。人の気配がしたのである。ほどなく、阿魔衆の合図となっている指笛が響く。朱楽も応える指笛を鳴らして、仲間であることを知らせた。

「朱楽様、竜子様」

木陰から姿を現したのは、下忍の娘。朱楽は驚きとともに見つめる。自分の代わりにあ

る人物の調査を引き継いだ娘だった。

「どうして、あんたがここに……確か絵師の積翠を見張っていたんだったわよね。まさかとは思うけど」

顎で長崎屋を示した。

「はい。ずっと尾行しておりましたが、今日の夕方、積翠はここに招かれております。それまでは新両替町一丁目にある銀座の江戸屋敷に滞在しておりましたが、使いの者が来て、こちらに来たのでございます」

「積翠ってのは、姉様、じゃなかった、お頭の絵姿を描きたいと言った絵描きだろ。そいつが、なんでまた長崎屋に」

竜子もだいたいの経緯は聞いている。が、長崎屋と謎の絵師の繋がりが、理解できない。それは朱楽も同じだったが、おあつらえ向きに伝言役が現れてくれた。

「それをこれから、あたしたちが調べるんじゃない。ちょうどよかったわ。あんたは津軽家にいるお頭のところに行きなさい。妖術師の〈肌衣〉が、日本橋本石町の長崎屋、阿蘭陀宿に入ったとね。もちろん、積翠についてわかった事柄も一緒に知らせるのよ。謎の絵師も阿蘭陀宿に入った、ついでにそれもあたしたちが探るって、伝えてちょうだい」

「わかりました。あの、実は積翠のことなのですが」

ひそっと下忍が耳うちする。告げられたのは積翠の本名だったが、それは朱楽でも知っ

ている有名な名前だった。

「えっ、あの男が？　本当に⁉」

「間違いありません。だからこそ、ここにも招かれたのでしょう。それでは、わたしはお頭のもとに参ります」

下忍と分かれて、二人は長崎屋に近づいて行った。慎重に気を配ったが、見張りが配置されている様子はない。だれに止められることもなく、建物の裏口に立った。

「なんか簡単すぎるよ。これは罠じゃないかな」

臆病な竜子は警戒心を強める。多少、軒猿に似ていなくもない。石橋を叩きすぎて、割ってしまいかねないタイプだ。対する朱楽は見事に正反対、鼻歌まじりに石橋を渡り、石橋が割れて川に落ちてしまったあと、待ちかまえていた敵に捕まるタイプであった。

「また竜子はそんなことばかり言って。異人がいるんじゃないかと思っているんでしょ。怖いんじゃないの？」

からかわれると、すぐむきになるのも竜子の特徴。

「異人なんか怖いわけないだろ。平気さ」

先頭に立って、裏口の戸を開けた。朱楽はふふんと鼻で笑う。竜子は扱いやすくて助かるわ。こんなところで、つまらない話をしてられないのよね。まずは忍びこんでみないと、なにもわからないんだから。

「だめよ。あんたはあたしの後」

先に入ろうとした竜子を、先輩らしく後ろに押しやった。危険な役目を引き受けるのは、年長者と阿魔衆では決まっている。台所になっている裏口から、そろそろと忍び入った。いきなり洋館の造りになっているかと思ったが、台所も廊下もごく普通の造りである。少し異なる点は、天井が高いことだろうか。延々と続く廊下を、二人はひそやかに進んで行く。すべてではないが、行灯（あんどん）の灯っている部屋もあり、人の気配がそこかしこに感じられた。注意しないと、宿の者や泊まり客に出くわす危険がある。

「あんたは捕まりやすいんだから、くれぐれも用心するのよ。いいわね」

小声で与えた警告は、完全に無視された。

「うわぁ、見てみて」

竜子が後ろで、朱楽の忍び装束を引っ張る。戸がわずかに開いている部屋を覗（のぞ）きこみ、室内に身体を滑りこませた。

「ちょっと、竜子。寄り道はだめよ。屋敷内を調べるときは、すみやかに調べて、素早く立ち去る。長居は無用が、お頭の口癖でしょ。よけいなことはしないで、ほら、だめだってば」

とかなんとか言いつつ、自分もしっかり部屋に入っていた。畳の上に脚を長くしたような座卓もどきが置かれている。他にも見慣れない家具が一緒に置かれていたが、なんなの

かはわからない。壁際にはこれまた珍しい形の飾り棚が並んでいた。緑や青の湯のみのような器が飾られており、小さな玻璃（ガラス）の花瓶などもある。見ているうちに思い出したのは、抜荷の品物だった。

「怪しいわね。これは長崎奉行が関係あるかもよ」

したり顔で、朱楽は胸を反らせる。長崎奉行は幕府が長崎においた職名で、定員は三名だが、そのうちの一名は江戸勤務で秋に交代する。主な職掌は、貿易品の特権的購入、貿易統制、キリスト教の取り締まり、長崎を中心とする海岸警備、外国の使者との応接などで、役料以外にも貿易品を購入する際、役得があった。長崎奉行になれば、ひと財産築けるというのが、通説になっているため、希望する者が後を絶たず、人気のある役職と言える。抜荷にも当然、関わっているのではないかと、朱楽は思ったわけだが、竜子はきょとんと首を傾（かし）げた。

「は？」

「ああ、もう。竜子は鈍くて、いやになっちゃう。いいから早く行きましょ。どこかに妖術師がいるかもしれない。手がかりが少なくて、お頭も苛立っているわ。忍びこんだからには、なにかつかんで帰らないと」

おいで、と手招きして、ふたたび廊下を進み始めた。廊下の隅にも行灯が置いているのはありがたいが、それだけ姿を見られやすくなる。T字型になっている前方の廊下に人の

気配を感じて、二人は近くの部屋に隠れた。
「なんだろう？」
「しっ、だめよ、竜子」
顔を突き出している竜子を引っ張り、近づいて来る足音に神経を集中する。変わった恰好をした女が、盆に玻璃の瓶や湯飲み型の器を載せて、廊下をしずしずと横切って行った。ドレスを着ていたのだが、ほとんど目にしたことはない。おまけに髪が金色となれば、目を丸くするのも無理からぬこと。
「……」
二人はぽかんと口を開けて、見送った。
「綺麗だわぁ」
「あれは妖怪だよ！」
性格そのままに意見が分かれる。いかにも知っているという顔をして、朱楽は首を振った。
「あんたは見たことないでしょうけど、あれが異人の女なの。生まれつきああいう髪の色をしているのよ。目の色だって、青や緑、灰色なんて人もいるらしいわ。いいわねえ。あたしもあんな着物を、あら、竜子？」
ひとりで話しているうちに、相棒は廊下を進んでいた。あわてて後を追う。廊下の突き

当たりの左側に、二階と階下に繋がる階段があるのだが、竜子はそこにかがみこんでいた。
「単独行動は駄目だって、いつもお頭が言っているじゃない。妖術師がいるかもしれないのよ。勝手に動いちゃ駄目よ」
「いいから黙って。ほら、この下から」
「ん？」
すぐに意味ありげな言葉の意味を理解した。泣き声だ。女の啜り泣きのようなかぼそい声が、階下から流れて来る。地下のひんやりした空気に、あまり想像したくない物騒な臭いも混ざっているように思えた。
「行くわよ」
朱楽は即決したが、竜子は躊躇する。
「行かなくてもわかるよ。地下にあるのは牢屋と、相場が決まってるじゃないか。いざってときのために、助太刀できないと困るだろ。あたしはここで待ってるからさ。朱楽が偵察して来てよ」
「単独行動は駄目って言ったでしょ。あんたも来るのよ」
実は朱楽もひとりで行くのは怖かった。及び腰の竜子を引きずるようにして、階段を降りて行く。泣き声がだんだん大きくなってきた。ひとりではない。少なくとも二、三人の息づかいが感じられる。

「あ、朱楽、やっぱ、戻って……」
「静かに」
階段を降りきったところで、立ち止まる。左側に堅固な石牢が並んでいた。

三

奥まで続く牢屋は、いくつあるのかわからない。いちばん手前の石牢を、朱楽は覗きこむ。気配を感じたのかもしれない。格子の側で泣いていた女が、はっとしたように顔をあげた。
「……あなたは？」
牢内に置かれた蠟燭（ろうそく）が、青白い女の顔を浮かびあがらせている。十七、八歳の町娘という雰囲気だ。
「この屋敷を調べに来たのよ。あんたはどうして、ここに連れて来られたの。さらわれたの？」
「ええ、そう、そうなんです。お侍の屋敷にご奉公できると聞いて、両国にある家に行ったんです。あとは覚えていません。出された夕餉（ゆうげ）を食べたあと、気がついたらここに閉じこめられていたんです」
娘は悲痛な声で言い、格子にかけていた朱楽の手をきつく握りしめる。

「お願いです、助けてください。弟や妹がいるんです。おとっつぁんは死んじまったし、おっかさんは病が重くて、どうしようもないんです。あたしが働かないと、弟たちはどうなるか」

一瞬、罠ではないかと思ったが、涙を滲ませた表情を見る限り、偽りとは思えない。他の牢屋に閉じこめられている女たちも、話し声に気づいて、呼びかけてくる。

「助けてください」

「お願い、ここから出して」

あがった声で、おおよそ人数が推測できた。五、六人はいるだろう。異人に売られてしまうのかもしれないと、朱楽は思った。突飛な考えと言えなくもないが、抜荷の下手人が後ろに控えているとなれば、あながち的外れではあるまい。おまけにここは阿蘭陀宿、長崎奉行なども出入りする場所だ。

「わかったわ。鍵を見つけて出してあげるわ。必ず助けるから騒がないで……なによ、うるさいわね、竜子」

肩を叩かれて、邪険に払いのける。

「あたしたちが来たことは、言っちゃ駄目よ。いつものように振る舞って、なんなのよ、うるさいって、きゃあぁっ」

いきなり朱楽は空中に吊りあげられた。肩を叩いていたと思ったのは竜子ではなく、一

枚の小袖、黄色い稲穂の絵柄が蛍のような輝きを帯びている。くるりと朱楽の身体を包みこむと、近くの石牢に進んだ。石床を歩いて進んだわけではない。一尺ほど浮いて、まっすぐ牢屋をめざした。

「ぐうぅ、は、放してっ」

けんめいにもがくが、小袖の呪縛は強まるばかり、視野に入ったのは同じようにして運ばれる竜子の姿だった。隣の石牢の鍵が自然に外れて、戸がぎぎぃ～と重い音をたてる。呻き声をあげる暇もなく、竜子は牢屋の住人となった。

「り、竜子、あ、ぐぐぐぅ～～～」

そして、朱楽も自然に開いた牢屋に連れこまれる。戸が開いている間に逃げればいいものを、囚われ人の女は怯えたように隅で縮こまっていた。

「今、の、うちに、に、逃げ……」

そこまで喋るのがやっとだった。開いたときと同じような音をたてて、石牢の戸が無情に閉まる。床に投げ出された朱楽の上に、白い着物がのしかかった。見た目は軽そうに見えるが、重石を載せられたようになって微動もできない。

「お、重い、あんた、す、少し痩せた方が、ぐうっ」

文句が気に入らなかったのか、急に重さが増した。身動きできない状態だったが、かろうじて右手が動かせる。髪に挿している武器代わりの簪を取り、握りしめた。切り裂い

てやろうとしたが、いち早く手首に袖が巻きつく。
「ああっ」
ぽとりと手から落ちた。使えるのは口のみ、着物の端だけでも咬んでやろうと身構えたとき、ふっとやわらかな唇が重なった。とたんに抵抗する気持ちを失ってしまう。唇を開き、差し入れられた舌を甘く吸いあげた。しかし、身に着けているのは特殊な布で織りあげた阿魔衆自慢の忍び装束、簡単には破れない。それを知っているからこそ、接吻ぐらいはと許した部分もある。
「あぁぁ～、あ、あんたはだれ？」
唇を離して、問いかけた。眼前には妖しい眼をした娘の顔がある。裸身に白い着物を羽織っているが、相変わらず全身から仄かな光輝を放っている。見たことのない顔ではあるものの、皮膚の美しさだけは褒めたくなった。なめらかで、しっとりとしており、頬を寄せると吸いつきそうな感じがする。朱楽は好意的な感情をいだいたのに、返ってきたのは冷たい言葉。
「おまえの命はここで尽きる」
抑揚のない声で言った。
「その美しい肌をもらうとしよう。〈肌衣〉の一部となって、仕えるがよい。それがおまえに残された道」

「え、な、なんのこ、あ！」

と、朱楽はのけぞる。重なっている娘の裸身が、くねるように動いたのだ。朱楽には見えなかったが、着物に描かれている黄色い稲穂が、風に揺れるかのごとく、ゆらゆらとゆらめいている。やがて、稲穂は無数の小さな黄蛇に変化し、朱楽の忍び装束の上を這いまわった。たくさんの小蛇がわずかな隙間を探して動きまわる。

「な、なにを、あぁ～～～、い、いやぁ～～～～」

朱楽はなにをされているのか、まるでわからない。娘と接吻した時点で、術に陥とされていた。動くにも動けず、逃げるに逃げられない。首筋を愛撫する娘の唇と舌の動きに、とろんと目を細めた。

「うふぅ～ン、いいぃ～～～」

娘は忍び装束の首もとを広げて、次々に小蛇を侵入させる。布と肌の隙間に滑りこんだ小蛇が、豊かな乳房に群がった。やわやわと揉みしだかれているような快感が走る。感じやすい質ゆえ、すぐに乳首が尖ってきた。小蛇が巻きつき、きゅっと締めあげたりしながら、くるくるまわる。ちょうど軽く咬まれているような刺激になり、ますます乳房が張りつめた。

「ううううぅ～～～んむうぅ～～～～ぅ」

長い喘ぎ声をあげ、いやいやするように首を振る。と、乳首に巻きついていた小蛇が、鎌首をもたげて、びりっと布を破った。脇腹や腹、秘部のあたりでも、同じようにして忍

び装束に穴が開く。一ヵ所であれば、さほど損傷は受けないが、あちこち破ければ丈夫な布も弱くなる。娘は胸もとから腹まで、一気に引き裂いた。隠し持っていた二つの宝禄火が、重い音をたてて石床に転がる。

「あっ、いやっ」

さすがに少し頭が冷めたが、乳房を摑まれた瞬間、また陶酔状態になる。うぅ～んと甘い声を洩らして、娘に抱きついた。自分から唇を寄せて接吻する。前で破けた朱楽の忍び装束を、娘は素早く脱がせにかかった。白い着物の袖や裾が、まるで人の手のように動き、雪白の裸身をあらわにさせる。黄色い小蛇は何匹かが集まり、くっついて、次第に大きな蛇となった。男根そっくりの鎌首をもたげて、太股をうぞうぞと這いまわっている。残っていた小蛇は愛撫役となって、娘を手伝った。

「あぁ～ン、いいぃ～～～～いい」

朱楽は裸身をくねらせて身悶える。蠟燭の明かりに照らし出された白い肌には、何匹もの小蛇や男根蛇が蠢いているのだが、気づかない。娘の愛撫に身をまかせて、喘ぎ声を洩らし続ける。背中にも尻にも、小蛇が貼りつき、細い舌をチロチロと出し入れしていた。尻の菊花に舌を伸ばして、震わせるように愛撫する。

「あふぅっ」

思わず声を放ち、両脚をひくつかせた。欲望の高まりを感じたにちがいない。腹のあた

りを嘗めていた娘が、さらに身体をさげて、朱楽の太股を大きく広げた。あまり毛深くない質ゆえ、すでに開いていた花弁の様子が鮮明に見える。恥ずかしそうに色づき、震える花芯を、娘は蛇のような舌使いで嘗めた。

「んん！」

今度は尻を震わせ、さらに両脚を広げる。尖った両の乳首には、それぞれ小蛇が絡まり、締めあげたり、ゆるめたりして、物の怪らしい愛撫を与えている。娘は舌先を小刻みに震わせて、花芯を入念に嘗め始めた。感じやすい朱楽は、早くも蜜壺から蜜をあふれさせている。娘は細い指を少しだけ入れて、割り開いた。匂い立つ蜜を求めるかのように、小蛇がわっと群がる。我先にと頭をもぐりこませて、蜜壺内に侵入した。

「あっ、あっ、な、なに!?」

朱楽はわけがわからない。男根ではないが、男根のように肉襞をこすり、撫であげている。枝分かれした男根が思い浮かんだ。いくつもの頭を持つそれが、甘美な責めを行っている。娘の舌は花芯に吸いつき、蠕動し続けていた。乳首の小蛇も休みなく愛撫している。快感部位をすべて責められるのだから、たまらない。

「あふうぅ〜〜〜〜、うふうふうぅ〜〜〜〜〜〜〜〜」

激しく喘ぐばかりだ。太股のあたりで停止していた男根蛇が、おもむろに活動を再開する。尺取り虫のような動きで蜜壺に近づくや、にゅるりと先端部を挿し入れた。と、中に

入っていた小蛇が、先端部にくっつき、合体する。ぐいっと奥までつらぬいた。
「んくうぅっ」
朱楽は背中を反り返らせる。男根だけという特殊な姿であるため、舌技の奉仕をしている娘の邪魔にならない。娘の胸の下にもぐりこみ、蜜壺に先端部を突っこんでいる。花芯を嘗める舌の動きに呼応するように、動きが速くなっていった。しかし、逸物はあきらかに妖怪、蜜壺に侵入した時点で、『火処の朱楽』の艶技が始動している。子宮の奥で火蛇が静かに様子を窺っていた。
「うふう〜〜〜ン、ああぁ〜〜、も、もっとぉ、もっとぉ〜〜〜〜〜〜」
火蛇の主はそんなことを忘れているかのように、喘ぎ声を洩らしていた。いや、忘れているのだろう。ほとんど無意識のうちに、艶技を使えてこそ、上忍の資格がある。妖術師の方もつられて、熱くなるのが常。娘の舌がいっそう濃やかに動き、あふれる蜜を利用して、単体男根も激しく責める。くちゅぴちゅという淫らな音が、両者の快感を高めた。
「あっ、そこっ、いくうぅっ」
両太股を自分で抱えて、朱楽は唇を噛みしめる。もう、すぐそこだ。絶頂の瞬間が近づいている。それでも我慢したのは、火蛇がまだ育っていなかったせいだ。これまた無意識の行為なのだが、元々スケベ心が強いので、可能な限り絶頂を先延ばしにする傾向がある。こらえるだけこらえてこそ、より深い快感が得られるというもの。だが、我慢にも限界があった。

「んぅくうううぅ～～～～～～～～～～」

あ、だめ。あたし、もう。

「うくっ、達くぅっ、達くうううぅ～～～～～～～～～～っ」

びくんっと大きく裸身を震わせた。次いで小刻みに両脚が痙攣し、肌が桜色に染まる。豊かな乳房や白い腹が、せわしなく上下しながら、少しずつ力が抜けていったとき、

「あひぃっ」

再度、単体男根が奥を突いた。蜜壺の奥でふくらみきっていた壺芯を、思いきり撫であげる。

「おうぅっ、ううぅっ」

朱楽は獣のように吼える、子宮の奥で火蛇がのたうちまわる。チロチロと赤い舌を伸ばして、単体男根の動きを見ていた。同じ蛇の姿をした物の怪同士、果たして、どちらが勝利宣言をするのか。歓喜声を迸らせる朱楽の耳に、艶めかしい竜子の喘ぎ声が聞こえている。

四

「あぁ～、だめぇ～～～、だめだよぉ～～～～」

隣の牢屋で、竜子は違う体位による責めを受けていた。とうの昔に忍び装束は脱がされ、輝くばかりの裸身を曝している。白い着物が壁際に貼りつき、竜子は着物に両手を吊りあげられるような恰好で、石床から両足をやや浮かせていた。着物の絵柄は船の中に現れたときと同様に、墨で飛ぶ鳥を描いた一枚である。複数の黒亀が着物から出現していたが、顔だけがヒトという人面亀、そいつらが乳房を愛撫している。両足は呪縛されていないので、けんめいに膝頭をくっつけて、人面亀をもぐりこませないようにしていた。手入れの行き届いた叢に、二匹が貼りついて狙っている。舌を長く伸ばして、花弁を広げようとした。

「あ、いや、いやぁ～～～」

小さく首を振ったが、腕の付け根が痺れてくる。わずかではあるが両足が浮いているため、両腕にかかる負担が大きい。爪先だけでも床に着ければ楽なのに、いくら伸ばしても届かない。思うように愛撫できないのが、もどかしかったのだろう。着物の裾が足首に巻きつき、動かないように固定されてしまった。剝き出しになった女陰に、人面亀が貼りつく。花弁を素早く割り開き、花芯をひと嘗めする。

「んんぅっ」

尻を突き出すようにして震わせた。嘗めてほしいと哀願するような姿となり、人面亀が応える。ヒトよりは小さめの舌を、巧みにそよがせて、責めた。背後の壁に密着している

着物も、おぼろげに娘の姿を形造っている。幻のように儚げな裸身が浮かびあがっているのだが、着物と同一化しているので、生身の裸体ほどはっきりしていない。おぼろにかすむその姿は、〈肌衣〉という名前が実にしっくりくる。見える姿は定かではないものの、皮膚の質感などは普通以上、なめらかで、吸いつくような前戯が始まった。背中にあたっている乳房が、やわやわと蠢き、竜子の肌を刺激する。

「だ、だめぇ〜〜、はあはあ、やめ、やめてぇ〜〜〜」

喘ぎながらの言葉では説得力がない。娘は後ろから竜子の乳房に両手を伸ばした。両の乳首にそれぞれ黒い人面亀が吸いついていたが、かまわずに揉みしだく。乳首を咥えたまま人面亀が揺れ動くさまが、たまらなく淫靡だった。女陰係の人面亀も、花芯を熱心に嘗めている。水術師の竜子はただでさえ蜜が多い。すでにあふれて、洪水状態になりかけていた。たらぁり、たらーりと太股を伝って、愛液が流れ落ちている。

「ちっ、ちゅちゅっ」

と音をたてて、一匹の人面亀が蜜壺の入口に貼りついた。あふれ出る蜜を吸い、飲んでいる。耳や脇腹を嘗めていた他の亀も、集まって来て、合体していった。竜子の愛液にはくノ一の精がこもっている。それを飲めば元気潑剌、力が増していくのは当然だ。合体して大きくなった亀の頭部が、すみやかに男根に変化する。

「あぅうっ」

背後の娘が不意に裸身を硬直させた。男根に変化した人面亀が、娘の股間にくっついたのである。両性具有の妖しげな肉体になったが、艶技の怖ろしさを知っているのだろう。まだ挿れようとはしない。焦らすように蜜壺の入口あたりを撫でまわしている。

「あんぅ〜〜ン、いいぃ〜、いいよぉ〜〜〜〜〜」

両手両足を呪縛され、吊りあげられた哀れな姿で、竜子は悶えた。背景に白い着物があるせいで、肉色の裸身がよけいに艶めかしく映る。蜜壺係の黒亀がいなくなり、またまた愛液がしたたり落ちた。小袖の裾が輝きを増して、濡れ光る。蠟燭の明かりしかない薄暗い地下牢だけに、これらの〝絵〟が異様さを高めた。

「あっ、あっ、あぁっ」

竜子の乳房がひとまわり大きくなって張りつめる。人面亀が尖った乳首を舌でくるみ、ちゅちゅっと何度も吸いあげる。女陰係の人面亀も花芯を嘗める。充血しきったメシベを入念に舌で愛撫する。高まってくる、我慢できない。

「あ――――」

もぅ、だめ。

「ぅんくうぅぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

全身を突っ張り、達していた。がくっ、がくがくっと両手足が揺れる。吊りさげられた恰好なので、震えの伝わり方も激しい。尻がひくつき、蜜壺からどっと愛液があふれ出し

た。まさに大洪水である。小さく震え続ける両足を、〈肌衣〉は巻きつけていた裾で持ちあげ、大きく広げさせた。花芯を嘗めている人面亀は、相変わらず貼りついたまま離れない。乳房にも二匹の亀がくっついている。汗の滲んだ裸身に、三匹の人面亀がくっつき、開脚姿勢を取らされていた。春画の絵師でなくても、絵心をそそられる場面だろう。竜子は朱楽よりも年下であるうえ、童顔なので、さらに欲望を掻き立てられる。

「うふうふう、たまらぬわ」

背後の〈肌衣〉が言った。どこかでこの光景を視ていた妖術師が、こらえきれなくなって憑依したにちがいない。

「おまえは可愛いのう、竜子。たっぷり責めてやろう。艶技など使えぬほどに、歓喜声をあげさせてやろうぞ」

〈肌衣〉の股間にくっついた臨時男根が、天を向くようにそそり立っている。両足に巻きついていた袖が、太股に移動して、抱えこんだ。蜜壺の入口に男根の尖端部をあてがう。流れ落ちる愛液が、亀頭を撫でながら、側面部をゆるゆると這い降りていった。

「おう、おう、これよ。おまえの蜜は不可思議な動きをする。それにあたたかくて気持ちがよい。知っておるか。蛇はな。女子のぬくい穴が好きなのよ」

様子を窺うようにして、亀頭の部分を侵入させる。その間も人面亀は乳首と花芯を責め続けていた。一度、絶頂を迎えたのに、もう次の波が訪れようとしている。〈肌衣〉は乳

房をやわらかく揉みしだき、踊るように腰を動かした。円を描くようにしては、くいっと突き出したりもする。が、決して奥まで挿れようとはしない。蜜があふれるばかり、竜子は焦れて尻を振った。

「あぁ〜ン、も、もっとぉ、い、挿れて、はあはあ、挿れてよぉ〜〜〜〜」

蜜壺の奥では、とうの昔に壺芯がふくらみ、疼いている。花芯係の人面亀が、昂りを感じて舌を速めた。竜子はけんめいに尻をさげ、少しでも深く男根を導こうとする。

「うン、あンンンン！」

どうしても壺芯に熱い衝撃がほしかった。ぐいぐいと尻をさげるが、両手を呪縛している袖の力はゆるまない。乳房がいちだんと張りつめ、乳首が尖った。〈肌衣〉がなだめるように、乳房を揉みあげる。乳首係の人面亀がちゅるりと舌を絡ませる。花芯係の人面亀も、ぷっくりふくらんだメシベを熱心に嘗めた。挿れずにもう一度、達かせて、より深く術に陥とそうとしているのだ。敵の企みはわかっていたが、この状態では逆らえるはずもない。

「あ、あ、あ」

また。

「うんぅう――――」

カエルのような恰好で、竜子は手足を硬直させる。頬ばかりか耳まで真っ赤に染まり、きゅっと歯をくいしばった。苦悶の表情に思えなくもないが、それは間違いなく絶頂の瞬

間、ふるふると尻が震えて、銀の雫のような蜜がしとどに流れ落ちる。蜜壺の入口を塞いでいた男根が、もろにその恩恵を受けた。なまあたたかい愛液が、撫でさするかのごとく、亀頭と側面部を刺激する。

「おうぅっ、たまらぬ！」

不意に〈肌衣〉が呻き、腰を突きあげた。そのときを待ち望んでいた壺芯に、見事、命中する。

「あふっ」

と、竜子はのけぞった。ふくらみきっていた壺芯は、たった一度の突きでは満足できない。みずから腰を使い、貪欲に快感を引き寄せようとする。激しく尻を上下させ、男根の充実感を思うさま味わった。あとから、あとから蜜があふれてくる。妖術師の意に反して、引き抜けなくなっていた。吸いこまれたままの男根に、愛液があたたかい線水となって降り注ぐ。ゆるやかに側面部を這う間も、波のように動いて、刺激を与えた。男にとってはたまらない悦びなのであろう。

「おう、おうぅ、おうおうぅ」

だらしなく、〈肌衣〉は呻いていた。高貴な姫君の顔が、かつて覚えたことのない悦びで弛緩している。目を細め、口もとをゆるめているが、腰だけはしっかり使っていた。奥深くまで挿れる、何度も壺芯を突く。すると子宮の入口が開いて、どっと蜜が流れ出して

くるのだ。そして、至福の線水の出番となる。まさに極楽浄土、竜子は素晴らしい時を与える天女であった。

「あっ、あっ」

天女も男根の責めに歓喜声を迸らせる。

「うんくうっ、い、達くうぅっ、達くうううぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

三度目の絶頂は、深くて長かった。尻が自然に痙攣して、止まらない。ひくひくと震える度に、また小さな波に包まれた。寄せては返す波のように、幾度となく絶頂を迎える。蜜壺内の複雑な動きに、とうとう耐えきれなくなったのだろう。

「おうう〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

妖術師も吐精していた。もっとも本人は離れた場所にいるので、竜子の蜜壺内に射精しているわけではない。夢精に近い感覚であり、実際はその離れた場所で射精している。生身でなければ艶技にもかかるまいと思いがちだが、思念体はすなわち生身、艶技に陥ちれば、いやおうなく精気を吸い取られる。それを警戒してか、

「くうっ」

即座に男根を引き抜いた。死に物狂いであったにちがいない。〈肌衣〉はぜいぜいと肩で喘いでいる。対する竜子は物足りなかった。

「もっと、もっとぉ」

おねだりして、蜜壺から愛液を迸らせる。妖術師の分身である男根は、少し萎えかけていたが、迸った愛液を受けて、また勃起する。竜子の愛液には危険な魔力が秘められていた。男を虜にして、忘れられなくさせる魔性の壺。挿れてはいけないと思うのに、蜜壺に突進してしまう。

「ああっ」

と喘いだのはどちらだったのか。壁に貼りついていた〈肌衣〉の力が抜けて、石床に横たわった。騎乗位になった竜子は、すかさず前を向いて、責めにかかる。両手は袖に結ばれており、両足は裾でくくられていたが、少なくとも体位だけは優位に立ったように思えた。花芯に吸いついていた人面亀は、邪魔になったのを察して退く。今度は尻にまわり、菊花を嘗め始めた。

「あああ〜〜〜ン、うふうぅ〜〜〜〜〜ン」

竜子は下にいる〈肌衣〉の乳房に、自分の乳房をこすりつける。なめらかな絹肌の感触に、思わず我を忘れかけた。艶技優位と思えたが、またしても、とらわれかける。陶酔感を察したのか、〈肌衣〉がふわりと竜子を抱きしめる。背中から尻まですっぽりと、しなやかな絹肌に覆われた……ように思えたが、実際には自在に伸び縮みする白い着物によって、全身を包みこまれていた。それらが揺れ動いて、肌全体を刺激する。絹のような舌で嘗められているような感じだった。目をあげると、牢屋全体が透けて見える。陰惨な場所

なのに別世界にいるかのよう、

「あふぅぅ〜〜、いいぃ〜〜〜〜〜〜」

蜜壺に男根を咥えこんだまま、竜子はゆっくり尻を上下させた。本当は速く動いて、妖術師を艶技に深く陥とすつもりだったのに、考えられなくなっている。術をかけたり、かけられたりと、常人にはわからない部分で戦いが続いていた。隣の牢屋からも、朱楽のかすれた喘ぎ声が休みなく聞こえている。

「あ、あけ、ら」

瞬間的に朱楽のことが浮かんだが、

「あぁっ、あぁぁっ」

罰するように〈肌衣〉が、腰を突きあげた。じゅぷっと重い音がしたあと、大量の蜜があふれ出る。このままでは負けてしまう、姉様のところに行かなければ、朱楽を助けて逃げないと駄目だ。さまざまなことが、これまた瞬間的によぎったものの、透けて見える今の風景のように、遠い出来事に思える。抱きしめられる心地よさに、すべてを忘れかけたそのとき——。

五

「竜子っ」

男の声が響き渡った。ほとんど同時に鈍い音がして、半透明だった世界が突然、鮮明になる。竜子の裸身を覆いつくしていた白い着物が、素早く取り払われたのだった。もっとも、鮮やかになったところで、ここは牢屋。さほど明るくなったわけではないが、蠟燭の明かり分の視界はある。

「え？」

竜子は男根に跨(またが)っていた中腰の姿勢のまま、茫然(ぼうぜん)と黒覆面姿の男を見つめた。かなり間の抜けた恰好であるのは言うまでもない。助けに現れた男は忍び装束をまとっており、気絶させた〈肌衣〉を竜子の下から引っ張り出している。いつの間にか牢屋の鍵が壊され、戸が開いていた。町娘らしい娘もひとり囚われているのだが、逃げようとはせずに、片隅で震えている。

「今のうちに逃げるんだ。ここにいたら殺される」

男は町娘には目もくれず、ひたすら竜子を見据えていた。どこかで見た覚えのある眸(ひとみ)だったが思い出せない。

「あんたは？」

これも罠なのではないか。竜子は町娘を背中に庇い、開け放たれている戸を、ちらちら見やった。

「おれの名前は、ええい、詳しい話はあとだ。とにかく逃げるのだ。すべては逃げたあとで……」

「そうはさせぬ」

倒れていた〈肌衣〉が、ゆらりと起きあがる。操り人形のような不気味さだった。体重を持たない一枚の布が、糸で吊りあげられたように見える。男は忍び刀を抜き放ち、竜子を戸の方に押した。

「行けっ、逃げろっ」

そう言われても、囚われている娘を置いていけない。

「あんたも来るんだよっ、ほら、立って！」

片隅で縮こまっている娘を、叱咤するようにして引っ張る。が、ぴくりとも動かない。膠かなにかで石床に貼りついているようだ。無理に立たせようとするが、どうしても石床から離れない。

「あ、あたしは駄目っ、動けないっ、逃げられないんですっ」

振り絞るような叫びがあがった。なぜ、どうして、質問しようとしたが、そんな暇はな

い。ふわりと舞うように飛びかかって来た〈肌衣〉を、男が斬りつけて、防ぐ。
「殺さないでっ、その着物は大名家の姫君なんだよっ」
「どちらも助けることはできぬ。ならば、おれはおまえを助ける。朱楽と一緒に逃げるのだ。早くしろっ、行けっ」
牢屋の鍵を投げてよこした。殺気立った言葉に押されて、竜子は転がるように牢屋を出る。町娘が気になって、何度も振り返るが、立つことさえできないらしい。
「ごめんよ。必ず助けに来るから」
小声でつぶやき、隣の牢屋に走る。朱楽は冷たい床に横たわり、正常位で〈肌衣〉の責めを受けていた。長い脚を大きく開いて、喘いでいる。
「んふぅうう〜〜〜っ、いいっ、あぁぁ〜〜〜〜〜っ」
先刻の竜子同様に、艶技を用いることなど忘れていた。みずから腰を動かして、上になっている〈肌衣〉を抱きしめている。全身を蝉の羽根のような薄い衣で覆われているのも、まったく同じだった。妖しげな霊光を放つ絹の袋に、包みこまれているかのよう。そして、石牢の隅では、町娘とおぼしき娘が青い顔で震えている。自分がいた牢屋の再現場面を見せられているようだった。
「朱楽っ、しっかりして！」
鍵を開けて中に飛びこみ、体当たりするようにして、〈肌衣〉を押しのけた。当て身を

くらわせて、素早く失神させる。次いで、朱楽の身体中に絡まっていた薄い衣を急いで取った。中から現れた朱楽は、焦点の合わない眸をけんめいに彷徨わせる。

「り、竜子？」

「そうだよ、早く逃げるんだ。お頭のところに戻らないと」

「あ、ああ、そう、そうね。ま、待って」

朱楽は落ちていた宝禄火と武器代わりの簪を拾い、よろめきながら立ちあがった。宝禄火は造るのに手間もかかるし、金だってかかるが、こんなときによく気がまわるものだと妙な感心をしてしまう。

「あんたって、意外にケチなんだね」

「なによ。文句ある？」

「ちょっと思っただけだよ。早くしないと、怖いお姫様が目を覚まして……」

「た、助けて」

それまで震えていた町娘が、消え入りそうな声で哀願した。結果はわかっていたが、竜子はいちおう手を引っ張ってみる。やはり、微動もしない。悪夢の繰り返しのような気持ちになった。倒れている〈肌衣〉を見やりながら、二人で試してみたが、どうしても動かない。

「駄目だ。これも妖術師の術なのかもしれない」

「逃げるわよ。とにかく、お頭にこの事実を知らせないと」

朱楽は切り替えるのが早い。囚われた娘を置いて、外に飛び出した。竜子もあわてふためいて追いかける。

「ま、待ってよ、朱楽。ひとりだけでも連れ出してさ。助けてあげた方が、あ！」

通りかかった牢屋の中では、竜子を助けた男が硬直していた。壁際にいる〈肌衣〉は、鬼火のように光る眼で睨みつけている。男は苦しげに呻きながらも、けんめいに警告を発した。

「な、に、をして、いる、に、逃げ、ろ」

首をわずかにねじまげるのがやっとだった。黒装束をまとった身体は、固まったようになっている。術をかけられたにちがいないと、竜子は思った。

「早く逃げようよ」

朱楽の腕を引っ張るが、まったく関係ない言葉を返す。

「ちょっと、あれはだれなの？」

「だれかは知らないよ、あたしを助けに来てくれたらしいんだけどさ。そんなことより、朱楽。早く逃げなきゃ」

「あんたを助けに来たですって？　ちがうわよ、あたしを助けに来たんだわ。竜子の牢屋の方が、たまたま手前にあったから、あんたを先に助けたのよ。勘違いしないでほしいわね」

「いや、だからさ。そういう問題じゃないだろ」

「そういう問題なの。これはね、あんたが思っているよりずっと重要な、きゃあぁっ」

「朱楽!?」

通路の天井にあらたな〈肌衣〉が現れていた。ムササビのような姿で、石造りの天井に貼りついている。朱楽の胴体にしゅるっと片袖を巻きつけて、吊りあげたのだ。相棒が落とした簪を拾い、竜子は飛びあがりざま片袖を斬りつける。

「てやぁっ」

切り裂いたが、すぐに戻ってしまう。朱楽は天井の〈肌衣〉に抱きしめられるようにして、また囚われ人になった。

「あんただけでも逃げるのよっ、早く行って！」

「くっ」

心は残るが、くノ一としての任務を優先する。竜子は階段を駆けあがり、慎重にあたりを見まわしたあと、出口めざして突っ走った。

「は、早く、お頭に、あぁぁ～」

天井から見送った朱楽には、再度、肉の責めが再開される。〈肌衣〉が手を放せば、石床に激突して大怪我をするのは間違いない。打ちどころが悪ければ死ぬかもしれない。異常な極限状態だったが、スキモノの朱楽は刹那の悦びに身をまかせた。

「んん～～～ン、あはぁぁ～～～～～～ン」

背中に極上の絹肌がある。やわらかな乳房がぴたりとくっつき、着物の袖や裾が、朱楽の裸身を愛撫する。茜色の夕暮れを描いた一枚で、〈肌衣〉の両掌は朱楽の大きな乳房を愛撫していた。力を入れて支えているわけではない。にもかかわらず、朱楽の裸身は落下しなかった。背後にいる〈肌衣〉の身体全体が、粘着質なものに変化している。貼りついているのに、さらりとした感触なのが不思議でならない。落ちそうなのに、なぜ、落ちないのか？

心の問いかけが聞こえたのだろうか。二人分の足音が響いて、階段を降りて来る気配がした。

「くくくく、うまい具合に獲物が手に入ったわ」

静まり返った牢屋に、男の声が木霊する。開いていた牢屋の格子戸を次々に閉めていく。夜目が利くらしく、明かりの類は持っていなかったが、後ろに尾いていた男が手燭を持っていた。照らし出された顔を見て、朱楽は小さく息を呑む。

「あんたは」

謎の絵師、積翠だった。下忍によって、阿蘭陀宿に入ったという情報はもたらされていたが、妖術師らしき男に付き従っているのが解せない。積翠は敵の一味であり、阿魔衆のもとを訪れたのは、罠に誘いこむためだったのだろうか。そうとしか考えられないが、ちらりと投げられた意味ありげな目が引っかかる。お喋りな朱楽も沈黙しなければならないときは心得ていた。無言で二人のやりとりに耳をすませる。

「幽斎様、あの男はどうしたのでございまするか」
積翠は忍びの者とおぼしき男を顎で示した。朱楽はよけいに意識を集中する。黒覆面から覗いていた目を見ただけで、薄々男の正体がわかっていた。名前を口にしなかったのは、それが男を窮地に陥れるかもしれないと考えたからである。竜子ほど朱楽は鈍くない。自分を助けに来たと言いはったのは、せめてもの意地だった。
「邪魔立てしたゆえ、我が〈肌衣〉のエサにな、しようと思うておる」
「ほう、面白いもので縛っておりますなあ」
「む、おぬし、視えるのか!?」
幽斎の驚きはそのまま朱楽の驚きでもあった。男を助けたいと思い、必死に目を凝らしたのだが、なにがどうなっているのか、まるで視えなかったものを……やはり、ただものではないようだ。江戸でも噂になる男だけのことはある。
「わたくしも絵師のはしくれ、目だけは良うございます。幽斎様がお使いになられます技の一端を、知った思いでございまする。いやはや、見事、積翠、感服つかまつりましてございまする。このうえは是非、ご指導を賜りたく存じまする」
へりくだった態度には、いささか皮肉めいた響きが感じられる。が、幽斎は竜子と同じく、気づかないタイプのようだ。
「くく、くくくく、それほどでもござらぬがな。まあ、ご覧あれ」

満更でもない顔で答えて、右手を動かした。竜子を責めていた〈肌衣〉が、するりと牢屋の格子を通りぬける。黄色い稲穂が描かれている一枚だ。さらに左手で合図すると、朱楽を責めていた墨で鳥を描いた一枚が格子を通りぬけて現れる。二枚の〈肌衣〉は、着物を掛けてあるときのように、両袖を広げた形で立っていた。

「眩(まばゆ)いばかりの輝きでございますなあ」

積翠は目を細めて、〈肌衣〉を凝視する。心を押し隠したその横顔からは、なにも読み取れなかった。無視され続けるのが、朱楽はきらいである。

「ねえ、ちょっと、あ、いやぁっ」

声をかけたとたん、愛撫が激しくなった。茜色の夕陽が飛び散るように四散して、何羽もの鳥になる。天井で両手足を呪縛され、女陰を曝した恥ずかしい姿で、絹の責めが始まろうとしていた。

積翠は無言で見あげている。

阿蘭陀宿の地下では、秘密の営みが続いていた。

六

「阿蘭陀宿だって?」

桜花は津軽家の屋敷で、下忍の報告を聞いている。背中には自分の武器である二本の鎌をくくりつけていたが、膝に万年青の鉢植えをかかえて、心を落ち着かせていた。いやな胸騒ぎがおさまらない。ここから飛び去った三枚の着物は、日本橋本石町にある阿蘭陀宿に消えたという。竜子と朱楽たちが遅いのが、気になっていた。白蓮は姫君の見張り番をしているため、この部屋にはいない。『肌衣襲撃事件』の余韻が残っているのか、屋敷はなんとなくざわめいていた。

「はい。着物を追いかけて来た朱楽様と竜子様に、宿でちょうど出会ったのです。お頭は津軽家においでになるから、早く知らせろと言われました」

「あんたが阿蘭陀宿にいたということは、つまり」

鋭く問いかける。

「自称絵師の積翠も、阿蘭陀宿に入ったってことだね」

「そうです。そのことなのですが、実は積翠は」

耳打ちされた内容は、意外な事柄だった。積翠は京の絵師であり、紋様師でもある。いくつか号を持っているが、中でもっとも有名なのは……。

「なるほど、あいつは雁金屋の道楽息子だったのかい。粋な着こなし、洗練された雰囲気。それで合点がいったよ」

雁金屋は京で隆盛を誇った呉服屋だ。元和六年（一六二〇）六月十八日、徳川秀忠の娘、

和子が後水尾天皇の女御として入内、和子が着用した衣裳や夜具のすべてを、雁金屋が調整して収めている。入内したあとも、雁金屋は和子の御用達となり、愛顧を受けて、京の豪商になった。今日の呉服屋の観念からいえば、いかに富裕な客といっても、一軒や二軒を相手に商いをしているなどというのは、考えがたいことだが、当時はそれが可能だったのである。

しかし、時代は動きつつあった。

「現銀かけ値なし」を信条に、薄利多売を旨とした呉服商が現れ始めたのである。ほとんど東福門院だけに出入りをして、高級呉服を扱っていた雁金屋は、当然のことながら、東福門院の逝去とともに没落を始めた。積翠は父親が亡くなる際、相当な財産を受け継いだが、二、三年で使い果たしたというのが通説、雁金屋もほどなく営業不能となって見世を閉めている。ゆえに桜花は「雁金屋の道楽息子」と表現したのだった。

「怪しいとは思っていたけれど」

ひとりごとのようにつぶやく。どこかで桜花は信じていた、いや、信じたかったのかもしれない。少年のように煌く眸、絵にかける熱い情熱。見るからに粋人という感じの積翠に、今も心惹かれている。絵を描いてもらいたいと、心のどこかでまだ願っている。あの眸が曲者なのだが……。

悪い男だとは、どうしても思えない。でも、阿蘭陀宿に三枚の〈肌衣〉が逃げこんだとなると、妖術師のいる可能性が高くなる。積翠は妖術師――甲賀組と繋がりがあるのだろう

か。阿蘭陀宿に行ったのは、そこにいた妖術師に会うためなのか。そうだとしたら、なぜ？

「お頭、いかがいたしましょう。阿蘭陀宿に戻って見張りを続けますか」

下忍の申し出に首を振る。

「いや、おまえは隠れ家に戻って少しお休み、ご苦労だったね。朱楽と竜子が戻ってくれば、またなにか新しい知らせが入るだろう。動くのはそれからでも……」

不意に忍び笛が鳴った。この屋敷の要所要所に、下忍を配備している。危険を知らせる音ではなかったが、どうして鳴ったのかわからない。立ちあがりかけたとき、その理由がわかった。

「お頭っ、捕まっちまったよっ」

風のように竜子が飛びこんで来る。素っ裸だったが、本人は気にかけるどころではない。ぜいぜいと息をきらしている。避けそこねて腕をぶつけた桜花は、万年青の鉢植えを畳に落としてしまった。

「どうしたのさ、朱楽かい？」

平静さを装って尋ねる。お頭たるもの、いついかなるときも動じてはならない。窮地のときこそ冷静に判断するのが務め、鉢から飛び出した万年青を戻したが、生っていた実がいくつも落下していた。

「あーあ、せっかく実が生っていたのに」

「万年青なんかどうでもいいよ。朱楽が捕まっちゃったんだ。阿蘭陀宿の地下牢だよ。他にも町娘らしい娘たちが、四、五人ぐらい閉じこめられていた。もしかしたら、異人に売りとばすつもりなのかもしれない。あたしも〈肌衣〉に襲われて、牢屋に閉じこめられかけたんだけどさ。忍び装束の男が現れて助けてくれたんだよ。あれは、いったい、だれなんだろうね、姉様」

一気に喋って、大きく息をつく。阿蘭陀宿の地下牢、町娘が四、五人、売り飛ばすつもりなのかもしれない、忍び装束の男に助けられた。必要事項を記憶して、脱ぎ捨ててあった小袖を竜子の背中にかける。

「お頭、朱楽様を」

「早く助けに行きましょう」

竜子の帰還に気づいた下忍たちが、次々に集まって来る。今にも飛び出して行きかねない表情をしていた。

「お待ち、勝手な行動は許さないよ。朱楽と竜子も、あたしが止めるのを無視した結果、こうなった。妖術師は〈肌衣〉を操って、わざと阿蘭陀宿に案内したとも考えられる。罠かもしれない」

「で、でも、それじゃ、朱楽はどうするのさ。見捨てるの？　助けに行かないの？」

「そうは言ってないだろ。とにかく、白蓮を呼んどくれ。相談したうえで、どうするか決

める」

「そんなことしている間に、朱楽は殺されちゃうよ！」

珍しく語気を荒らげた竜子の声に、忍び笛が重なった。今度の音は警告を含んだ鋭い合図、さっと全員が緊張する。阿魔衆が動揺しているのを読んで、奇襲攻撃をかけてきたのだろうか。

「二人ひと組で動くんだよ。いいね」

早口で言い、廊下に出る。

「お頭っ、〈肌衣〉だっ」

白蓮が血相を変えて走って来た。

「絵柄はない。白無垢のような純白の着物だ。わたしの身体に巻きついて、庭に飛び出して行った。まだ近くにいると思う」

「姫様は？」

問いかけながら、桜花は廊下を走った。たった今、白蓮が来た方角、姫君の寝所に向かう。絵柄のない〈肌衣〉となれば、新しい一枚かもしれない。竜子を捕らえようとして追いかけて来たのか、すでに屋敷内にいたのか。後者だと推理する桜花に、白蓮は早口で答える。

「見張りが付いているが、待て、お頭。考え違いをしているのではないか。姫様がすでに〈肌衣〉になったと思っているのではないか。襲いかかって来たのは、〈肌衣〉と化した姫

様だと考えているのではないのか」
　そのとおりだったが、答える時間が惜しい。
「失礼いたします」
　寝所の戸を開け放ち、部屋に飛びこんだ。そうはさせじとお側女中が立ちはだかる。
「待ちや」
「は」
　桜花は跪き、頭をたれて、臣下の礼を取った。
「ここは姫様の寝所、そなたたちのような者が入れる場所ではありませぬ。さがりや」
「姫様のご無事をご確認できれば、それでよいのです。奇怪な着物が現れた由、お顔を拝見できますれば、おとなしく戻りますゆえ」
「何事じゃ」
　お側女中の身体で隠れてはいるものの、布団の上に身を起こす人影が見えた。〈肌衣〉
騒ぎで真っ暗にするのは不安があったのだろう。枕元の行灯が点いていたお陰で、少なくとも姫君がまだ行方不明になっていないことだけは、はっきりした。
「ご無礼いたしました。行灯を点けておられるのは賢明だと思いますが、もっと明かりを増やした方が、よろしかろうと存じまする。われらが屋敷内を見まわっておりまするが、何分にも広うございますゆえ、目が行き届かぬ場合もございまする。物の怪も明るい部屋

はきらいましょう。では」

廊下に出た桜花を、白蓮が待っていた。

「だから言うたではないか。姫君はちゃんと寝所にいたのだ。妖術師は襲うつもりだったにちがいない。純白の着物がいつの間にか現れて、姫君に飛びかかるところだった。お女中の悲鳴を聞いて、部屋に入ったわたしに、今度は襲いかかって来たというわけだ」

「白い着物が部屋に入ったのは、見なかったんだね」

質問というよりは、断定に近かった。

「あ、ああ、そうだが」

不審げに白蓮が眉を寄せる。鋭い右腕は彼女なりに、桜花の考えを推理したらしい。

「お頭、それでは……」

「あぐぅっ」

突然、庭で悲鳴があがる。下忍の娘に白い着物が絡まっていた。二人は同時に駆け降りて、それぞれの武器を操る。桜花は背中にくくりつけていた二本の鎌を取り、白蓮は腰に挟んでいた黒い鞭を握りしめた。切っても再生するのはわかっている。

「てぃっ」

桜花は遠慮なく、鎌で切りつけた。白い着物はいち早く、下忍の娘から離れる。大きな蝶のように、ひらひらと空中を舞い、別の下忍にまた絡みついた。今度は白蓮が鞭を叩き

つける。それを何度も繰り返して、白い着物は庭を舞った。
「妙だな」
背中合わせになって、白蓮がささやく。
「なにがさ」
「襲うのは下忍の娘ばかり、われらには用がないと見える」
「そりゃ、そうだろ。あたしたちは生娘じゃないからね。襲う意味がないのさ。ついでに言うと、朱、黒、黄色、そして、白という色の〈肌衣〉が出現している。これであんたにもわかるだろ」
「なるほど」
にやりと笑ったそれが答え、竜子であればきょとんと首を傾げたであろう会話は、白い着物の襲撃によって遮られる。二人の頭上に舞い降りかけたが、やはり、巻きついたりはしない。威嚇するように袖を振ったあと、屋敷の屋根にふわりと飛びあがる。風が吹きつけた瞬間、後ろに倒れて見えなくなった。
「探せっ」
桜花は確信をこめて命じる。
「屋敷内に戻って来るはずだ。姫君の寝所を中心にして見張るんだよ。見つけたら忍び笛で合図しろ。決してひとりで動いてはいけないよ。わかったね」

無言でうなずき、散って行く下忍たちを横目で見ながら、竜子が近寄って来る。差し出したのは小さな紙きれだった。

「なんだい」

「飛び散った万年青の実のひとつだよ。手触りが変なんで、試しに潰してみたんだ。そうしたら潰れなかったんで、おかしいと思ってさ。広げてみたら中にそれが書かれていたんだよ」

けんもつ。

という文字が記されている。竜子は別の一枚を差し出した。

「万年青の実は全部、朱い紙で造られていたんだ。他にも、こんな言葉が記されていたよ」

やみのもとじめ。

行方不明になった花嫁、抜荷事件、焼かれた阿魔衆の隠れ家、阿魔衆に味噌や醤油を売らなくなった商人たち、なにかを隠している大名家、日本橋本石町の阿蘭陀宿。それらのことが『けんもつ』で、見事、ひとつに結ばれる。

「闇の元締が相手とはね。厄介なことになったもんだよ」

桜花はぽつりと言った。

第五章　闇の元締

一

その夜、下忍の娘――千早は〈肌衣〉に囚われていた。白い着物に見えた妖術師の傀儡は、襲いかかるふりをして、下忍たちの肌や生娘であるかどうかなどを探っていたのである。

「や、やめ、て、ああぁ、だ、め」

千早は姫君の寝所と思われる部屋の布団に、仰向けに横たわっている。忍び装束はびりびりに引き裂かれていたが、それをやったのは白虎、千早の身体に乗り、動けないように押さえつけていた。

「くくく、おまえのこの肌」

ぺろりと、白虎が頬を嘗める。反撃しようと思うのに、くにゃりと力が抜けた。獣とは

思えない優しさで耳朶を噛む。

「うふぅっ」

思わず身体を震わせる。忍び装束も白虎の鋭い鉤爪で引き裂かれたのだが、肌には一筋の傷も付いていない。布だけを切断する素晴らしい技を持っていた。白銀色に輝く白虎が、妖怪であるとわかっていても、その美しさに心奪われる。陶酔したように見つめる千早は、すでに妖術師の虜、かろうじて正気を保っているのは、大好きな白蓮のことが頭にあったからかもしれない。白虎が忍び装束の袖を引っ張ろうとしたが、布団の上から必死に逃げた。

「い、いやっ、び、白蓮様ぁ～」

這って逃げようと背を向けたが、忍び装束を尖った牙で引っ張る。あちこち裂けていたせいだろう。皮を剥くように、するりと忍び装束が脱げた。雪白の背中と桃のような尻があらわになる。

「旨そうな尻じゃ」

白虎は再度、ぺろぅりと舌を這わせる。

「あぁっ」

刹那、千早の全身が甘く痺れた。無意識のうちに尻を高く掲げ、両足を広げてしまう。豊満な乳房は畳に着いていたが、下半身だけは布団の上に残っている。無毛に近い体質だ

けに、後ろからでも、菊花から女陰にかけての淫らな〝絵〟が見えた。白虎は涎を垂らさんばかりにして、舌なめずりする。

「ぐふぅ、馳走になろうぞ」

まずは菊花とばかりに、嘗め始めた。小刻みに蠕動させながら、舌先をそよがせる。白虎の大きさからして、舌も大きいように思うが、その舌技は繊細で、巧みだった。千早は供え物のように、ますます尻をあげる。菊花を愛撫していた舌が、願いをかなえるように蜜壺に移った。が、本当に嘗めてほしいのはそこではない。

「あむぅ〜〜〜〜ン、うふぅ〜〜〜〜ン」

焦れて小さく尻を振る。けんめいに尻をあげ、頤をあげたため、背中が極端に反り返り、いかにもくノ一らしい曲線を生み出していた。思うところを責めてほしくて、みずから肌に残っていた忍び装束を引きはがす。輝くばかりの裸身が、薄明かりの中に出現した。足袋だけは穿いたままなのが、妙にそそられる。

「ぐふぐふぅ、まだじゃ」

白虎は鼻面をもぐりこませて、蜜壺に舌を這わせていた。伸びた舌先が時折、ちろりと花弁にふれる。

「あひっ」

と、千早はのけぞった。白蓮の顔を思い浮かべて、こらえにこらえていたが、もう耐え

きれない。仰向けになろうとしたが、

「立て」

短く命じられた。

「あい」

逆らうことはできない。素直に立ちあがり、白虎の前に立つ。童顔には不似合いの大きな乳房が、雪をあざむくかのような白さを放っている。ややくびれた腰から尻にかけての曲線も、少女らしさを残しており、実が落ちるそのときを待っているかのようだ。見られていることを感じて、頬を朱に染める。

「あ……ああっ」

不意に大声を放った。白虎が鼻面を突き出して、花弁を嘗めたのである。待ち望んだ瞬間、両脚を広げて、みずから乳房を揉みしだこうとしたが、別の掌が背後から双つのふくらみを握りしめた。

「手伝って進ぜよう」

白い〈肌衣〉が、背中に密着している。絹肌の感触と、姫君の乳房が、このうえなく気持ちいい。

「あぁ～、いいぃ～～」

うっとり目を細めた。豊かな乳房の中に埋もれていた乳首が、少しずつ迫り出してくる。

姫君はそれを細い指でつまみ、クリクリといじった。桜色の乳首が、よけいに大きくなる。いじられて、ふくらむ。花弁の中で眠っていた花芯（クリトリス）もまた、舌技によって目覚めていた。薄桃色に充血して、硬くなってくる。

「うぅんふうふぅぅ〜〜、あふぅ〜、あああぁぁ〜〜〜〜」

立っているので、どうにも安定しない。感じるまま身体が揺れる、尻が淫らに動く。しかし、あまり動くと舌が外（はず）れてしまうので、両脚を踏ん張った。快感度を察したように、白虎の舌が速くなる。舌先で優しく花芯を嘗める。さらに硬くなったメシベを、くるむようにして、軽く吸った。

「うくうっ」

白虎の頭を抱えて喘いだ。異形のものである毛の感触が、異様な興奮をもたらしている。抱えるというよりは、押さえつけるような感じになっていた。逃げてはいや、ずっと嘗めて、そのまま、あぁ、そう、ずっと。絶頂が近づいてくるにつれ、千早の身体は忙（せわ）しく上下し始める。足袋を穿いている両足の踵（かかと）を、あげたり、さげたりして、高ぶりを示した。白虎の舌がいちだんと速くなる、なめらかに花芯を責める。

「あっ、あっ、あぁっ」

もう。

「うくっ、達（い）くううぅ〜〜〜〜〜〜〜っ」

両足を突っ張り、裸身を硬直させる。ぶるぶるっ、ぶるぶるっと尻が痙攣するように震えた。白虎は愛撫をやめようとしない。なおも柔らかく舌を蠕動させる。背後にいた〈肌衣〉が、千早の両脚を後ろから抱えあげた。童子が用を足すときのような恰好をさせて持ちあげる。箸さえまともに持ったことはないであろう姫君の細い腕が、軽々と千早を抱えていた。空いた乳房には〈肌衣〉の袖が貼りつき、掌の代わりをする。千早の尻の下にもぐりこんだ白虎が、蜜壺の入口を舌先で広げた。

「あぁ〜ン」

甘えるような声とともに、つつーっと蜜がしたたり落ちる。それを掬い取るようにして、白虎は啜った。と同時に舌をくねらせて、蜜壺に少しずつ挿入させる。いまだ男を知らぬ初々しい壺、だが、千早はくノ一、それ以外の前戯は、白蓮の手によって行われていた。箱入り姫君たちよりは開発されていたと言えるだろう。

「ぐふうぅ、思うておったより、ずっと案配がよさそうじゃ。これは一度でうまくいくかもしれぬ」

舌をさらに蜜壺深く挿し入れて、肉襞を探る。男根は知らないが、指による疑似男根の洗礼はすんでいた。とはいえ、まだまだ蜜壺より、花芯の方が感じる。

「いや、いやいやぁ〜」

いつまでもメシベを放っておいてはいやだと訴えた。白虎はすぐに動き、ふくらみきっ

て震えている花芯をちゅるりと吸う。

「あ！」

千早は宙に浮いた姿勢で、尻を突きあげる。恥ずかしい恰好をさせられていることにより、いつもよりずっと興奮していた。達ったばかりなのに、メシベの昂りはおさまらない。小さな男根のように勃って、ふるふると揺れている。白虎は舌技を再開させた。小刻みに舌を動かして、花芯を入念に嘗める。右手の指がヒトのそれに変化し、蜜壺の入口付近にふれた。

「あ、はあはあ、はあぁ〜〜〜、いいぃ〜〜〜〜」

宙ぶらりんの状態で、千早の裸身は感じるままに揺れていた。嘗めてほしくて、みずから両脚を広げているように見える。もっとも、今は否定できない。何度も達きたかった。絶頂の波に溺れたい。失神するほどに感じてみたい。

心が読めるのだろうか。

「ぐふ、ぐふぅ、達くがよい。何度もな」

涎を垂らして、白虎が告げた。蜜壺の入口を探っていた二本の指が、内部に滑りこみ、肉襞をこすりあげる。奥で息づく壺芯を、指の腹で撫であげる。千早は艶技の訓練をするときのように、疑似男根をきゅきゅっと締めつけた。後ろの菊花をすぼめるようにすると、蜜壺が締まるのを知っている。

「おう、おう、生意気にひくついておるわ。さすがはくノ一、大名家の姫君よりも、仕上げやすそうじゃのう」

ご褒美とばかりに、舌の動きが速く、濃やかになった。男根代わりの指も、くちゅくちゅと淫靡な音をたてて、出たり入ったりしている。小鳥がついばむように、壺芯を軽く突つき、千早の快感を倍加させる。

「あう〜〜、はあはあ、おうぅ〜〜〜〜〜っ」

固く目を閉じて、いやいやするように首を振る。空中に浮いた不安定な裸身は、絶え間なく揺れ続けていた。絶頂のときが近い、呑みこまれそうだ。舌先が揺れる、二本の指が壺芯を撫でる。

「あ――――」

ひくひくっと、千早は痙攣した。一度目のときよりも深い絶頂に包まれる。さらに二度、三度と尻を震わせていたが……やがて、だらりと力を抜き、後ろの〈肌衣〉に寄りかかった。

二

「あ、あ、あぁ」

千早は知らぬ間にまた布団に横たえられていた。白無垢を思わせる着物をまとい、両脚を広げて、異形のものによって与えられる絶頂のときを待っている。相変わらず穿いたままの足袋が、なんとも言えない姿を醸し出していた。幽斎は絵描きであるだけに、やや異状な風体の方が好色心を駆り立てられる。

「生娘なのに、この色香はどうじゃ」

遠隔地から操る幽斎そのままに、白虎の目尻がだらしなく垂れさがった。横になってもくずれない若い乳房を、ヒト型の手でやわらかく握りしめる。そうしている間も、千早がまとっている着物は、ざわざわと波打つように動いていた。首筋や背中や尻を、小さな舌で嘗められているような快感が広がる。白い〈肌衣〉の姫君が、そっと唇を重ねてきた。

「う、む、むぅ」

差し入れられた舌を、夢中で吸う。白虎はしっとり濡れ光る女陰に、三度、唇を近づけた。嘗めてもらえる、早くほしい、あのときを迎えたい。千早はできるだけ両脚を広げて、自分の意志を示した。息づかいが感じられる、次には舌が伸びてくる。

「んくっ」

願望に反して、使われたのは指だった。ちゅぷっと音をたてて、二本の指が蜜壺に挿し入れられる。二度、達っているお陰で、感じやすくなってはいたが、やはり、花芯への愛撫がほしい。

「はあはあ、お、お願いで、あぁぁ～、ございまするぅ～～～」

唇を離して哀願する。しかし、白虎の唇と舌は動かない。男根代わりの指を操って、奥の壺芯を徹底的に責める。二度の絶頂でふくらみきっているそれを、執拗に撫でこすり、蜜をあふれさせた。上半身係の〈肌衣〉も、千早がまとっている着物を乳房に被せるようにして、揉みしだいている。感じないことはないが不満だった。

「うんふう～、ううぅ～～～ンぅ～」

小さく首を振っていたが、乳房と蜜壺は正直に反応している。乳首が尖り、蜜壺ではぴちゅぴちゅとはしたない音があがっている。まだまだ蜜の量は少ないものの、それでも充分、濡れてきた。いよいよ男根の責めが始まるのかと思った刹那、

「あはぁっ」

痛いほど勃っていた花芯を嘗めあげられる。たっぷり焦らされたあとだけに、いちだんと快感が高まった。ひとまわり大きくなった乳房を、〈肌衣〉が絹のような掌で揉みしだく。尖った乳首を口に含み、コロコロと舌で刺激する。白虎は花芯を嘗めながら、二本の指で巧みに肉襞をこすり、壺芯を優しく突いた。かつてないほど壺芯が張りつめ、ひくひくと蠢いている。どっと蜜があふれ出し、じゅぶちゅぶという重い濡音に変わった。

「はあはあ、や、やめない、で、あふうぅ～～～」

千早はもうなにも考えられない。足袋を穿いた両足の指を、伸ばしたり、反らしたりす

るのがせいいっぱいだ。下手に動けば唇が離れてしまうかもしれない。尻を動かさないようにして、両脚を広げる。あと少し、あぁ、いい気持ち、そのまま嘗めて、もっと早く舌を動かして！

「あ……」

不意に花芯から舌が離れた。花弁に移って、周囲を嘗めている。取り残されたメシベは、硬く充血しきって、ぴくぴくとひくついていた。壺芯を責めていた指も動きがゆるやかになり、あふれる蜜の音が響くだけ、焦らしの技巧とわかっていても苛立つ。小刻みに尻を振って、必死におねだりする。

「あぁぁ〜〜〜ン、も、もっとぉ、んふうぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

眼前にいた〈肌衣〉にしがみつき、狂ったように接吻した。中途半端はいや、早く絶頂に導いて。そんな願いをこめて、自分の舌を差し入れる。入れられた舌に舌を絡めて、吸いあげる。張りつめた白い乳房が、興奮を表すように激しく上下した。乳首に着物が密着して、透けるような感じになるが、むろん、千早は気づかない。ただただ達きたかった。もう一度、悦びを味わいたい。

「んぐうぅ、むぐうぅぅ〜〜〜」

接吻しながら喘いだ。白虎は願いを感じたのか、ふたたび舌技が始まる。蜜壺に挿れっぱなしの男根代わりの指が、なだめるようにやわやわと、指の腹で壺芯を刺激している。

あふれる蜜の量は増えるばかり、菊花まで濡れそぼって、下に敷いている着物の尻のあたりが湿っていた。こんなに濡れたのは初めての体験、なにもかも初めてづくしで、千早は燃えあがる。

「ああっ、いいっ、いいぃ〜〜〜っ」

今度こそと、期待をこめて、派手に声をあげた。が、白虎の舌は速く動かない。快感が去らない程度に、舌先をそよがせている。すぐそこに絶頂が来ているものを、直前でそれが訪れなかった。不満でならなかったが、いやおうなく愛液はあふれ出る。熱っぽく火照った裸身が桜色に染まっていた。

「んふぅ〜〜〜〜、ふうふう、うふうぅ〜〜〜〜〜〜」

早く、ねえ、お願い、早く、早く、早くぅ。苦悶するような表情で、千早は訴える。ぐうっと快感が高まりかけたが、またしても舌が外れてしまう。白虎の頭を両手で押さえつけ、花芯から動かないようにした。が、舌の動きを遅くされれば達くことはできない。主導権を握っているのは、あくまでも白虎なのだ。もどかしくてならない、頭がおかしくなりそうだ。

「んんっ、んんんぅ〜〜〜〜、うくぅんんんん〜〜〜〜〜〜」

両脚を突っ張り、尻をあげて、少しでも舌に近づけようとする。千早なりのおねだりだったが、白虎は気に入らなかったらしい。

「ならぬ。両脚をあげるのじゃ」
「あ、あい」
仕方なく、もとの恰好に戻った。両脚を突っ張って力が入ると、蜜壺の奥まで指が入らなくなってしまうのだろう。辛い責めの再開となったが、壺芯をさわられ、こすられているうちに、だんだんと絶頂が近づいてくるように思えた。まるで壺芯がメシベに変化したような快感を覚え始めたのである。壺芯を刺激されると、連動するように花芯が甘く痺れた。舌の動きは決して速くなかったが、それでも充分に感じる。壺芯を指の腹でクリクリいじられると、下半身がとろけそうになった。
「あはあぁ〜〜、はあはあ、いいぃ〜〜〜〜」
尻が自然に揺れる。白虎の愛撫に合わせるように、小刻みに動いた。そうすることによって、さらに快感が深くなる。曲げたままの両脚が、かくかくと妖しげに揺らいだ。穿いている足袋がだらんとさがり、これまた頼りなく揺れ動いている。全身が弛緩しているにもかかわらず、一点だけに気が集まっていた。
「ああ、あ、あ、あ、あああ、ああ」
惚けたように千早は声を洩らし続けている。白虎は花芯から舌を離し、指だけで蜜壺の肉襞と壺芯を入念に愛撫していた。それなのに感じる。まさに壺芯がメシベのごとく、ぷっくりと張りつめていた。愛液があとから、あとから、流れ出てくる。竜子ほどではない

が、洪水状態だ。火照った蜜を利用して、白虎の指が集中的に壺芯を突く。指の腹でなめらかに刺激する。快感が高まる、ぐーっと熱いものがこみあげてくる。

「あっ、あっ、ぅくうっ」

足袋を穿いた両足が、きゅっと反り返った。

「うくっ、ぃ達くうぅっ、達くうううううぅ〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

歯の隙間から、歓喜声を迸らせる。次の瞬間、白虎は花芯を嘗めた。達ったばかりのところを攻撃されて、頭が真っ白になる。

「あ――――」

何度も、何度も尻をはねあげ、裸身を痙攣させた。次から次へと絶頂の波が押し寄せてくる。花芯と壺芯が連動して、快感を増幅させた。達けば達くほど、もっと深い悦びに襲われる。あふれ出た蜜が音をたてるだけで、肉襞が震え、それが快感となって跳ね返った。どこをさわれても感じてしまう。裸身全体が蜜壺と化したかのようだ。

「後ろを」

向けと白虎が告げる。

「ふうぅ……」

虚ろな目で、千早は従った。裸身には白い着物が張りつき、ところどころ透明になって肌と同化している。後背位を取ったのだが、尻の割れ目そのままに、後ろの部分がくっつ

いていた。このとき初めて、白虎は無粋な足袋を脱がせる。絵的に見て美しくない。『作品』としての完成度を高めるためには、素足でなければならなかった。

「いよいよ、五枚目、これで我が秘法は成就する」

白虎の姿を借りて、幽斎は千早の尻を愛おしげに撫でまわす。股間に屹立している肉色の男根は、てらてらと光っている。腹にくっつかんばかりに直立姿勢で、隆々といきり立っていた。

「ぐふぐふぅ、充分に濡れておる。ぐふふ、挿れたとたんにまた達ってしまうかもしれぬのう」

男根の亀頭を蜜壺にあてがい、わずかに挿入させる。あふれ出た新鮮な蜜を、たっぷりからめた。〈肌衣〉が渡した筆を右手に握りしめて、真っ白な千早の背中に筆を載せる。と同時に蜜壺を男根でつらぬいた。

「むぅ！」

「あくぅ〜〜〜〜っ」

魚が跳ねるように女体がひくつく。背中に現れた色は目が覚めるほどに美しい『青』、男根の洗礼を受けて、千早は新たな悦びに陥ちていった。

三

姿を消した千早と津軽家の姫君。

桜花は見張りを続けながら考える。綺麗に島田を結い、手描き友禅の小袖を着て、優美に装っていた。華やかな着物とは裏腹の考えが、頭の中を駆けめぐる。

犠牲者はこれで五人、妖術師の企みどおりに進んじまってるようだね。けど、あたしたちも阿魔衆を名乗るくノ一軍団、後手にまわったけれど、ここから追いあげるよ。千早と四人の姫君を必ず取り戻してみせる。

凄みのある目で、豪邸の奥御殿の大きな門を見つめた。昨夜で津軽家の調査は打ち切りとなり、姫君奪還のそれに変わっている。桜花が見張っているのは、深川の材木商、冬木屋の別邸で、深川寺町裏に建てられている。時刻は昼近く、冬木御殿と近隣の人々から呼ばれる屋敷は、奥御殿用の門が開き、早朝から忙しげに人が出入りしていた。大名家や商家の門については、細かい決まりがあるため、大名家ほど格式ある造りではない。しかし、中の屋敷と庭は贅をつくしたものであるとの噂だった。

冬木屋の祖は、上野国碓氷郡の上田直次という者で、承応三年（一六五四）江戸にのぼって材木商を営んでいたが、延宝三年（一六七五）芝金杉橋開墾の大工事を請け負って

成功し、一躍成金となった。その子、上田五郎右衛門政親は、事業を拡大して京都に別宅を持ち、ここを出張所にした。大徳寺雲林院の大檀那と言われる一方、表千家五世良休宗左の後援者ともなっている。

現在、冬木屋を営んでいるのは、政親の子の三代目、政郷だ。絵師や俳人、作家などを、この別邸に逗留させ、懇ろな後援を惜しまないことでも、その名を知られている。別邸に設けられた茶室茶庭では、こういった著名人を招いて、度々茶事や、さまざまな催しが開かれている。政郷の別邸は、まさに江戸のサロンなのだった。

けんもつ、か。

万年青の実に化けていた朱い紙、そこに記されていた『けんもつ』という名前。別の紙には『やみのもとじめ』とも書かれていた。

「田村監物」

人々に密かに怖れられている男の名前を、声に出してつぶやく。監物だけでは、どこのだれかを特定するのはむずかしかったが、闇の元締という一文によって、桜花は見えない敵の正体を知った。裏の世界を牛耳る男、どこの、だれであるのか、顔を知る者はほとんどいない。しかし、阿魔衆に味噌や醤油を売らなくなった商人たちを見ても、その影響力が想像できる。顔は知らなくても、恐怖だけはしっかり植えつけている男――。

「姉様」

下忍の様子を見に行った竜子が、小走りに戻って来る。若いくノ一も桜花と似たような着物姿で、派手やかに着飾っていた。幼さは残るものの、匂い立つような色香を放っている。

これでもう少し気がまわれば、言うことないんだけどねえ。

などと思いつつ聞いた。

「まだかい」

「うん、遅れてるみたいだね。でもさ。あたし、思うんだけど、万年青の実に仕込まれていた『けんもつ』と『やみのもとじめ』、あれって罠かもしれないよね。阿魔衆を攪乱するために、敵がわざと教えたとは考えられないかな」

おや、竜子にしては、まともなことを言うじゃないか。多少はましになったのかね。

「その可能性がないとは言えないね」

「そ、それじゃ、さっさと阿蘭陀宿に行った方がいいじゃないか。白蓮たちに合流して、朱楽を助けに行こうよ」

桜花は今回、思いきって部隊を二つに分けた。阿蘭陀宿は囮の可能性が高い。そちらには白蓮部隊を向かわせて、桜花部隊は冬木屋に来ている。それが納得できないのだろう。少女の目は真剣だった。いつもは自分が囚われの身となり、朱楽が助けに行くのだが、反対の立場になってしまい、苛立ちを覚えているにちがいない。気持ちはわかるが、お頭と

しては、さまざまな事態を予測して、部隊を動かさなければならなかった。
「朱楽の救出には、白蓮たちが行っている。もしかしたら、あっちこそが囮なのかもしれない。全員で行ったらどうなるか。一網打尽にされたとき、だれが助けに行くんだい、ええ？」
「それはそうだけど」
ちらっと恨めしげに目をあげる。
「あのさ。よくわからないんだよ。なぜ、姉様は万年青の言伝を信じるのかな。嘘かもしれないとは考えないの。どうして、姉様がみずからここに……」
「気だよ」
桜花はさらりと言った。
「え？」
「万年青を膝に抱くと、あたしはすごく気持ちが落ち着いた。それは、あの鉢植えを育てた主の心だと思うんだよ。そうそう、阿蘭陀宿の地下牢から、あんたを助けた男が、贈り主かもしれない。ありえないことじゃないだろ」
「えっ、姉様はあの男がだれか知っているの!?」
「さあてねえ。ただ、白蓮も殺されかけたところを、何者かに助けられている。あんたを助けたのと、同じ男かもしれない」

自分なりの推測を言葉にしたが、竜子の気持ちは別の方に向いていた。
「それじゃ、あの万年青はあたしか、白蓮に対する贈り物じゃないか。姉様のじゃないよ」
むきになっていた。桜花はがっくりくる。
「……そういうことを話している場合じゃないだろ。とにかく、安らぎを与えてくれる万年青の気を、あたしは信じたのさ。それゆえ、紙で造られた実に記されていた言伝を信じた。闇の元締である田村監物が、真の下手人だと、思ったんだよ」
「つまり、監物が抜荷事件の下手人ってこと?」
「そう」
「で、あたしたちの家に火を放った?」
「そう」
「だけど、それが大名家の姫君事件と、どう関わってくるのさ。田村監物は確かに闇の元締かもしれないけど」
迷推理もここで止まった。桜花は手がかりを与えてやる。
「ゆうべ、白蓮が言ってただろ。津軽家は出入りの商人に対して、『お断り』をしていたようだ、と」
白蓮は陥落させたお女中から、あらたな情報を入手していた。それによって、推測が確

実なものになったのである。が、竜子は相変わらず鈍かった。
「あ、うん」
そいで？
きょとんと首を傾げられてしまい、苦笑する。
「おまえ、『お断り』の意味を知っているんだろうね」
謎の絵師、積翠のことを、つい思い浮かべていた。桜花の絵を描きたいと申し入れたあと、彼はさも意味ありげにこう言ったのである。
「お断り、ですか。しないでいただきたいですねえ。それでは、これで失礼しますよ。良いお返事お待ちいたしております」
なにもかも知っていたのではないか。そのうえで、手がかりのような言葉を残していったのではないか。心を惹かれているのは否定できない。『お断り』のひと言が、恋の炎をよけい燃えあがらせる。姉の心を知る由もなく、竜子は無邪気な顔で答えた。
「もちろんだよ。ええと、諸藩の大名は高利を払う条件で、大名貸から金を借りる。でも、いざその期限がくると、『お断り』と言って、強権を笠に着た支払い拒否をした。要するに大名貸をしている商人から、借りるだけ借りて、返さないってことさ。できるものなら、あたしだってやりたいよ」
江戸庶民の心を表したような言葉だった。この大名貸のせいで、見世を閉めるはめにな

った商人がどれだけいることか。金策に困り果てている大名や旗本たちにも言い分はあろうが、あくまでも侍の側に立った非常に理不尽な取り決めなのである。お手本のような答えをしたのに、言った本人はまだぴんとこない。

「だから、なんだって言うの。妖術師に命じているのは、甲賀組でしょ。そこに闇の元締が出てきて、話がややこしくなったのは認めるけどさ。なんだか、よくわからないよ」

苛々した様子で、なおもくいさがる。朱楽のことが気になって仕方がないのだろう。冬木屋なんかを見張るぐらいなら、早いとこ白蓮部隊に合流した方がいいよ。口にされない部分の不満が、顔に表れている。

「『お断り』をやったのは、津軽家だけじゃないはずさ。おそらくは花嫁をさらわれた大名家すべてが、出入りの商人に対して、やったにちがいない。ところが、婚礼が迫って、さらにまた無理難題を押しつけたってことも考えられるだろ。嫁入り道具、衣裳、夜具、当日の料理などなど、商人に頼まなければなにも用意できない。となれば、おのずと答えは見えてくる」

「でも、抜荷事件は？　どこでどう関わってくるの？」

「ああ、もう、苛々するね。大名家の国元を考えればわかるじゃないか。あとは自分で考えな」

「待ってよ、あともうひとつ、姉様はお婆様に監物のことを聞いて、ここを見張ることに

決めたんでしょ。それはどうしてなのさ」

お婆様は桜花姉妹の実の祖母で、阿魔衆の生き字引、闇の元締についても詳しく知っていた。昨夜、津軽家の姫君ともども千早が消えたあと、桜花はすぐさま行動に移り、冬木屋に来たのである。細かい事柄を知っているのは、片腕の白蓮のみ。

「宝物さ」

桜花は笑いながら言った。ますますわからないという顔で、竜子は眉を寄せる。

「は？」

「監物の宝物が、あたしたちには必要なんだよ。それがあれば闇の元締はおとなしくなる。今回の敵は妖術師だけじゃない。田村監物が背後にいる。宝物を持っていないと、新しい隠れ家にいる阿魔衆まで殺されかねないからね。後手後手にまわっていた戦いを、これで切り返すのさ」

「ふうん」

と、竜子は納得できないような表情で、鼻をひくつかせる。

「なんだい」

「あ、別にたいしたことじゃないんだけどさ。なんとなく気になるんだよね。お婆様は物知りで、田村監物のことを知っていたとしても不思議じゃない。疑う気持ちはサラサラないけどさ。調べるまでもなく、即座に監物のことを教えてくれたでしょう。昨日の今日だ

からさ。なんだか、あまりにも早くわかりすぎたような気がして」

思わずぎくりとする。予想もしていない言葉だった。そういえば、と、ここで桜花も疑問を持つ。闇の元締についての情報が、すみやかにもたらされたのはなぜか。たとえ監物の『宝物』のことを知っていたとしても、今日、冬木屋を訪れることまで、入手するのは不可能だったのではないか。お婆様は知っていたのではなく、だれかに教えてもらったのではないのか。

「ふうん」

今度は桜花が鼻を鳴らした。

「なんだよ」

「いえね。あんたもなかなか読みが深くなったと思ってさ。感心したんだよ。お婆様の話だと思って、一も二もなく信じちまったけどさ。これは用心しないとね」

「うん、ついでにもうひとつ。ねえ、姉様。まさか、謎の絵師がここにいるかもしれないなんて、思っているわけじゃあないよね。積翠に逢いたくて、恋しくてさ。冬木屋を見張っているわけじゃあないよね」

「……」

桜花は黙りこむ。朱楽もそうだけど、この娘も、なんで色恋のことに関してだけは鋭いんだろ。それだけ頭がまわるなら、お役目のことを考えりゃいいものを。

「つまらないことを言うんじゃないよ。あたしはお頭として、やるべきことをやっているだけさ」

ま、気にならないと言やぁ嘘になるけどさ。それよりも、囚われている朱楽や姫君たちを助け出すのが先決だよ。色恋話はそのあと……そのあとで、どうなるものでもないように思うけれど。

「お頭」

下忍の声で、素早く頭を切り替えた。ほどなく、町人用にしては豪華な駕籠が、近づいて来る。配備している下忍たちに、桜花は指笛で合図を送った。

やるよ。

四

桜花は堂々と駕籠に近づき、先頭を歩いていたお供の女に声をかける。

「失礼いたします。冬木屋の者でございますが、本日は別の門からお入りいただいております。主によりますと、この門は本日、方角が悪い由。どうか、こちらにおいでくださいませ。ご案内いたします」

「はい、宜しくお願いいたします」

素直に女は付いて来た。お供の女が二人、駕籠を担いでいる男が二人、駕籠の後ろに浪人風の男が二人、従っている。桜花たちの動きを予測していたとは思えない。念のための護衛役であろう。合計六人、二人の浪人はさすがに警戒心を見せ、刀の柄を左手で握りしめている。無理もない。殺気を隠してはいるものの、くノ一たちが、忍びやかに駕籠を包囲し始めている。妙な気配を察知してこその護衛役。

「待たれい」

寂しげな道に入ったところで、ひとりの浪人が声をあげた。

「冬木屋の裏口はこちらでは、うぐっ」

最後まで喋れない。後ろから下忍が襲いかかり、忍び刀の鞘で後頭部を打った。振り向いたもうひとりの浪人も、鳩尾を突かれて地面に沈む。お供役の女たちは、桜花が素手で失神させた。駕籠屋と思った二人の男は、懐から匕首を抜き放ち、反撃に出る。監物の手下にちがいない。

「はっ、てやぁっ」

桜花は巧みにかわして、ひとりの手首を叩いた。落ちた匕首を拾ったが、怪我をさせたくない。拳を腹に叩きつけ、男が前屈みになったところを、手刀で後頭部を打つ。残るひとりの駕籠屋もどきも、竜子に倒されて地面に伸びた。

「い、いったい、なにを、あ、あなたがたは？」

駕籠の戸を開けた若い娘に、桜花は短く問いかける。
「近江屋のお葉さんですね」
田村監物は複数の顔を持つ元締、回船問屋の近江屋もそのひとつだ。娘は清らかな箱入り娘といった感じで、ただただ当惑している。
「は、はい」
ためらいがちに答えた。
「命までいただくつもりはございません。ちょいと眠っていてくださいましな」
軽く拳を鳩尾にくいこませれば、あらたな失神娘の誕生だ。ここまでは予定どおり、順調すぎると言えなくもない。
「竜子、おまえは駕籠ごと船で運ぶんだよ。終わったら、阿蘭陀宿に向かうんだ。おそらくは、あたしの方が早く着くだろうけどね。もし、おまえたちの方が早く着いた場合は、白蓮たちに合流しな。もう宿に潜入しているかもしれないけど、繋ぎ役兼見張り役として、下忍をひとり残しているはずだ。その下忍と合流したあとはその場で待機、白蓮からの連絡を待つんだよ。早まった行動を取るんじゃない。いいね」
「はい」
行く先も段取りも、すべて整えている。下忍たちはみな艶やかな小袖姿、いかにもお供の奉公人という感じで、駕籠を担いだ。裏道を通りぬければ、その先には屋形船を用意し

てある。江戸は縦横無尽に堀や河川が走る町、船さえあればどこにでも行けた。

「よし、あたしたちはこいつらの始末だよ」

竜子たちを見送ったあと、倒れている男女を移動させる。女はひとりでも、どうにか運べるが、男は二人がかりの大仕事、まずは雑木林に引っ張りこみ、二度に分けて運ぶことにした。隠し場所として近くに空き屋を見つけてある。二人の下忍を見張り役としてその場に残し、慎重に気配を探る。左右に雑木林が広がる細い裏道を、注意深く進み出したそのとき、

「お待ち」

桜花は人の気配を感じて、片手をあげる。先刻、相手から奪い取った匕首を、きつく握りしめた。

「そこにいるのはわかっているよ。隠れていないで、出ておいでな」

下忍たちもそれぞれに簪や忍び刀を構えている。一触即発、緊張感が高まる中、それを打ち消すように、のんびりした声が応えた。

「やれやれ、見つかってしまいましたか。別に気にしないで、行ってくださってかまわないんですがね」

現れたのは黒い着物を粋に着こなした男、裏地は渋い茶色だったが、木洩れ日が先日の着物と同じ裏地ではないことを教えてくれる。微妙に色が違うのだった。男はにやにやと

愉しげに笑っている。

「積翠、さん」

『さん』が取ってつけたようになってしまった。積翠は顔の前で軽く右手を振る。

「呼び捨てでけっこうですよ、桜花さん。それから、あたしにご遠慮なく、どうぞ、お仕事を続けてください。お邪魔をするつもりはありませんでした。たまたま見つかってしまった次第でして」

悪びれた風もなく、また笑みを向けた。真意をはかりかねて、桜花は立ち往生する。前に出ようとする下忍たちを、何度も手で制した。

「動くんじゃない」

「あたしにかまわず、どうぞ」

積翠は「お行きください」と、下忍たちに目で告げる。初めて見たときと同じように、くもりのない眸だった。さらに混乱する。なぜ、現れたのか。叫ぶでもなし、人を呼ぶでもなし、まったくわけがわからない。

「用があるのは、貴女様だけ」

ひとりになれと、積翠はほのめかした。相手は絵師で、そのへんの女よりも綺麗な手をした優男、いざとなれば桜花ひとりで充分、対応できる。

「お行き、急ぐんだ。予定どおりにするんだよ」

「ですが、お頭。危険です。わたしだけでも残ります」
倒すべきだと、これまた目で告げる下忍に、再度、桜花は命じた。
「お行き」
「は」
あとはもう逆らわない。最初に運ぶ三人を、担いだり、持ちあげたりして、下忍たちは雑木林の奥に消える。積翠は待ちかねたように、歩き出して、振り返った。
「さ、参りましょうか」
自信たっぷりなその態度に、少しかちんとくる。あたしが絶対に付いて行くとでも思っているのかい。馬鹿にするのも、いいかげんにしな。あたしは今、お役目の真っ最中なんだよ！
「積翠さん、あたしは……」
「貴女様のお仲間を、お助けいたしましょう。詳しいことは申せませんが、いかがでございますか」
信じる信じないは貴女様次第、お好きになさってくださいませ。そんな表情だった。
ええい、ままよ。
桜花は決断する。最悪の場合でも、阿蘭陀宿に行くのが遅れるだけの話だ。そう、阿蘭陀宿に行くのが遅れるだけ、ああ、あたしはなにをやっているんだろう。早く行かないと、

白蓮たちが危ないかもしれないってのにさ。こんな男の話を信じて付いて行くなんてどうかしてるよ。

ざわめく心をいだいて、積翠のあとに続く。

雑木林の間から射す木洩れ日が、荒事とは無縁のやわらかな光を広げていた。

同じころ、白蓮は阿蘭陀宿の敷地内に潜入している。

暗いな、異様な邪気だ。

まだ昼を過ぎたばかりだというのに、不自然なほど暗かった。輝く太陽の光がどこかで遮られて、阿蘭陀宿には届いていないのではないか。夕闇に包まれたかのように、あたりはどんよりとした邪気に覆われている。耳が痛くなるほどの静寂が心を騒がせた。気配は在る。足を踏み入れた瞬間から、白蓮はだれかの『眼』を感じている。

「気をつけろ。どこかに隠れているはずだ」

黒い鞭を持って、下忍たちに警告を発した。外には二人、繋ぎ役兼見張り役を残してある。桜花はひとりでいいと言ったが、自分たちが殺られた場合、桜花を援護する下忍はひとりでも多い方がいい。そう判断して、二人、外に残してきた。引き連れているのは全部で七人、白蓮を入れると十人の部隊だ。

「開いています」

尖兵となった下忍が、裏口の戸を確認して来た。手で合図を送り、まずは白蓮が戸口に迫る。人のざわめきや話し声といった生活音は、いっさい聞こえてこない。それがいっそう不気味だった。罠であるのは間違いない。

入るぞ。

躊躇することなく、視線で命じた。桜花たちの到着を待っていたら手遅れになってしまうかもしれない。先頭に立って宿に入り、長い廊下を進んで行く。要所要所に行灯が置かれていたが、天井が高いためだろう。普通よりも暗い印象を受ける。ひそやかな邪気が流れて来る方角に、自然と足が向いていた。

ここだ。

少しだけ戸が開いている部屋の内部を窺う。やはり、行灯が点けられている。裸身の女らしき姿をとらえて、じっと眼を凝らした。雪のように白い肌、豊満な乳房、腰から尻にかけての美しい曲線。見覚えがある。まさか、と思った。

「朱楽!?」

いきおいよく戸を開いた。部屋の中央で裸身の朱楽が、虚ろな眸を宙に彷徨わせている。足の長い座卓のような家具に、左手を着き、右手をあげて、立ち姿を取っているように見えた。部屋に置かれた珍しい家具同様に、裸身の朱楽はそういった物体のひとつに思える。白蓮はおそるおそる、ふれてみた。

冷たくて、固かった。身体全体に透明な蠟でも塗ったかのよう、首筋に手をあててみたが、脈はとらえられない。

「まさか」

先刻の予感を声に出していた。

「死んでしまったのか、朱楽。まさか、そんな、そんなことが、うぐっ」

突如、白蓮は声をつまらせる。天井に貼りついていた〈肌衣〉が、ふわりと舞い降りたのだ。朱楽に気をとられて、上を確認しなかったのはあきらかに手落ち、青い桔梗が描かれた〈肌衣〉が、するすると動いて、その気はないのに袖を通してしまう。忍び装束にぴたりと密着した。またたきする間の出来事である。

「白蓮様っ」

「今、お助けいたし、ぐっ」

廊下にいた下忍たちにも、次々に別の〈肌衣〉が巻きついた。朱で茜色の夕焼けを描いた着物、墨色で空を舞う鳥を描いた着物、黄色で風に揺れる稲穂を描いた着物、そして、なにも描いていないように見える純白の一枚。それらが忍びこんだ下忍の身体に巻きつき、絞めあげる。

「あ、朱楽っ、あぐぐぅ、し、しっかりしろっ」

白蓮はけんめいに手を伸ばした。朱楽はなにも答えない。玻璃のような眸を、宙に向け

ていた。

五

（あ、朱楽ぁっ）

だれかに呼ばれたような気がして……。

「え？」

と、朱楽は目をしばたたかせる。立っていたのは左右に田圃（たんぼ）が広がる道、茜色に染まった空を、無数の黒い鳥が飛んでいた。田圃では黄色い稲穂が風に揺れ、道端に生えている青い桔梗が、秋の深まりを感じさせる。初めて見る風景なのに、どこかで見たことがあるような、不思議な感覚があった。

「おかしいわね。あたし、いつの間にこんなところに来たのかしら」

着ているのは、いつもどおりの短い着物。阿蘭陀宿に侵入して捕まり、竜子を逃がしたあと、天井に貼りついたまま、〈肌衣〉に責められたところまでは記憶に残っている。が、そのあとがまったく思い出せない。

「そういえば、あの男はどうしたのかしら。無事なのかしら。あたしを助けに来てくれたあの男は生きているかしらね。たぶん、甲賀百人組の京弥だと思うけど」

あたしを助けに来てくれた、の部分を、ことさら強調する。人がいるわけでもないのに、変な部分にこだわるのが、朱楽らしいと言えなくもない。京弥は竜子に惚れている甲賀組の忍びだが、朱楽は前に艶技をかけたことがある。以来、なんとなく気になる存在になっているのだった。

「仕方ない。ま、そのへんを歩いて、あらぁ、もしや、あれは？」

彼方から、こちらに近づいて来る一行が見えた。白無垢の花嫁が、白い馬に乗って、ゆっくり進んで来る。武家娘なのか、町娘なのかわからないが、嫁入りの行列であるようだ。互いの距離が近くなるにつれて、花嫁の真っ赤な唇が、やけに鮮明に浮かびあがる。その意思はないのに、ついぼんやりと見惚れていた。

「……綺麗」

朱楽は美しいものに弱い。若い娘にとって、白無垢は憧れの存在でもある。行方不明になった姫君たちが、婚礼直前であったことなど、見事に忘れ去っていた。通り過ぎる白い馬を、二、三歩、追いかけたとき、

「そなたにも白無垢を与えてやろうぞ！」

ふわりと花嫁が飛翔する。広がった着物が薄く透けて、空を飛ぶ黒い鳥や、茜色の夕焼け空が、絵柄のように思えた。逃げようとしたが、いち早く身体を包みこまれる。白無垢の袖にいやおうなく手を通していた。裾が太股にからまり、動けなくなる。

「あ、く、く、る、しい」

この感じ、覚えがある。天井に貼りついていた〈肌衣〉が、あたしになにかを絡めて、苦しくなった。だんだん意識が遠くなって……。

「逃げろっ」

不意に絶叫が響いた。忍び装束の男が、刀で白い着物を切り裂き、朱楽の背中を強く押した。

「早くっ、逃げるのだっ」

言われるまでもない。朱楽は行列が来た方向に、全力疾走する。これまた似たような場面を、ついさっき体験したばかりではないか。牢屋にいた自分と竜子を救うべく、危険を顧みず現れた男。この景色といい、男が現れたことといい、同じ体験をするのはなぜなのか。答えを知っているとは思えなかったが彼に聞くしかない。

「京弥っ」

追いついて来た男の覆面を、朱楽は引き剝がした。陽に焼けた端整な顔に、複雑な苦笑いが滲む。朱楽がきらいではないのだが、出逢ったことを狂喜するほど、嬉しくもないといった雰囲気だ。

あっ、なんだ、そうなんだ、わかっちゃったわよ。あんたのお目当てがだれなのか。本当はだれを助けに来たのか、ね。なんだか気に入らないわ。

千々に乱れる女心であったが、京弥はまったく気づかない。
「わけがわからぬ。ここは村のようだが、村外れまで行くと、また同じ場所に戻ってしまうのだ。何度やっても先には行けぬ」
真面目に言ったが、理解しがたい言葉が朱楽の口から出る。
「あんたは竜子が好きなわけね。艶技に陥ちて以来、忘れられないんでしょう。それで命の危険を顧みず、阿蘭陀宿まで助けに来たわけね」
「な……」
押し倒すようにして、近くの林に倒れこむ。後ろの道端には青い桔梗の花が咲き、田圃には黄色い稲穂が揺らめいている。危険な状況であるのに、そんなことは気にしない。朱楽は京弥の唇に、自分の唇を重ねた。竜子になんか負けないわ、あたしの蜜壺こそが最高だって思わせてやる。
対抗意識と元来の房事好きが相まって、欲望を止められなくなっていた。舌で京弥の唇をくすぐり、わずかに開いたその中に、舌を差し入れる。そうしながら、素早く着物を脱ぎ、相手の忍び装束も脱がせていた。秘め事はすみやかに、有無を言わせず行うのが、朱楽の信条なのである。
「よ、よせっ」
しかし、京弥は無理やり唇を引き離した。

「おまえの言ったとおりだ。おれは竜子に惚れている。あいつを助けるために阿蘭陀宿に行った。そのあとのことは……覚えておらぬ」

「ふふん、だ。なんだかんだ言う割には、しっかり感じているじゃない。これはどういうことなのかしらね」

褌の下では筍のごとく、にょっきり逸物が頭をもたげている。まだ完全勃起とはいかないものの、接吻で目覚めたのは確かだ。

「い、いや、だからだな。ここはわけがわからぬ場所ゆえ、早く逃げねば危ないと、あ、よせ、や、やめ、ろ」

最後の部分は弱々しく消えた。すでに褌を外して、朱楽は男根をちゅぷっと口に咥えている。京弥が好きなのか、それとも竜子への対抗意識だけなのか、本人もよくわかっていない。ただ今はこの秘め事に溺れたかった。よけいなことを考えたくない。亀頭を舌でくるみ、嘗めあげる。喉の奥までぐぅーっと呑みこみ、また亀頭に舌を戻して、巧みにそよがせる。

「くっ、くううぅ～」

京弥は固く目を閉じて、呻いた。もしかしたら、竜子の顔でも思い浮かべているのかもしれない。そう考えるとよけいに腹が立ち、舌技に力が入った。やわらかく亀頭を刺激し、男根の側面に舌を這わせる。こらえようとしても、感じてしまうにちがいない。朱楽の掌

の中で、筍はぐんぐん硬さを増していく。

「うう〜〜、よ、よせ、お、おれは……」

それでも京弥は抗う素振りを見せた。頭にはくるが、朱楽も感じている。花芯が疼き、蜜壺がひくつくように収縮していた。早くこれがほしいと、肉襞が叫んでいる。応えるように口の中で、男根がぱんぱんに張りつめた。

「あぁ、あたし、もう」

我慢できず、蜜壺の入口に男根をあてがう。尖端部をほんのちょっぴり挿し入れただけで、蜜があふれ出してきた。いつもなら自分だけでなく、相手も焦らすのだが、今は余裕がない。蜜をたっぷり亀頭にからめて、少しずつ腰を沈めていった。ふくらみきった乳房が、朱楽の動きそのままに、さも重たげに揺れている。

「んんうぅ、いいぃ〜、ああ〜、いいわぁ〜〜〜」

円を描くように尻をまわしては、じゅぷっと音をあげて尻をさげる。焦らす気持ちはなかったのだが、挿れたことによって、多少なりとも余裕が生まれた。また京弥に自分の蜜壺の素晴らしさを味わわせてやりたいという思いもある。根元までは呑みこまずに、尻を悩ましげに動かした。

「うふう、ふうふう、や、やめろ」

頑固に言い張る京弥であったが、残念なことにその声は小さい。反対に逸物は大きくな

るばかり、最後の抵抗とばかりに押そうとした彼の手を、朱楽は豊満な乳房に導いた。どきりとしたように両掌が一瞬、硬くなる。が、このうえなく魅力的なふくらみの誘惑に、逆らえる者がいるだろうか。

否。

「くううっ」

京弥は朱楽を抱きしめるや、草むらに押し倒して正常位となる。一気に奥まで男根が挿入され、もろに壺芯を突かれた。

「ぅくうぅっ」

朱楽はのけぞったものの、長い両脚をがっちり京弥の尻にからめる。逃がしてなるものかと乳房をすりよせ、身体を密着させた。とうに準備ができていた蜜壺が、淫らな音をあげる。じゅぶちゅぶと、重い濡音を響かせた——。

若い二人が行う秘め事を、見つめている眼がある。道端の青い桔梗が不意に伸びて大きくなり、桔梗の絵柄の〈肌衣〉に変化した。田圃で揺れる黄色い稲穂も、同じようにして、〈肌衣〉になる。

「んくうううぅっ、いいっ、ああっ、もっと、もっとぉ〜〜〜〜〜〜〜っ」

朱楽は気づいていない。〈肌衣〉たちは静かに忍び寄って行く。

六

そして、阿蘭陀宿に潜入した白蓮部隊も、〈肌衣〉による絹の責めを受けていた。

「うぅンンン、び、白蓮様ぁ〜〜〜〜〜〜〜」

「だ、だめ、で、ございまするぅ、やめて、はあはあ、も、もう」

部屋や廊下では、下忍たちがさまざまな絵柄の〈肌衣〉に、思うさま弄(もてあそ)ばれている。墨色で描かれた空を舞う鳥、風に揺れる黄色い稲穂、茜色の夕焼け空、白で描かれた白い馬に乗って進む白無垢の花嫁。さらに、もう一枚、青い桔梗の〈肌衣〉は、白蓮の身体に絡まって、絞めあげていた。下忍たちは必死に助けに行こうとしていたが、それどころではない。

「く、うぅ、あはぁ〜、い、いやぁ〜〜」

ひとりの娘は後ろから、茜色の〈肌衣〉に羽交い締めされるような恰好になっていた。身体はもちろんのこと、両足も宙に浮いている。動くに動けない緊縛状態、妖術師が操る〈肌衣〉の絵柄が何羽もの朱い鳥に変わって、忍び装束を食いちぎっていた。乳房や女陰の部分だけ、くりぬいたように破れている。純白の乳房が黒い忍び装束から飛び出し、淡い叢(くさむら)が剝き出しになっている様子は、裸身を曝(さら)すよりも淫靡な〝絵〟かもしれない。朱

い鳥が両の乳首に吸いつき、叢を嘗め始めている。両足が着かない不安定な宙にいるため、まったく抵抗できない。

「だ、だめぇ、はあぁ〜〜〜、び、白蓮様ぁ〜〜〜〜」

両膝をくっつけようとするのだが、これまた無駄な努力に終わった。裾が絡まった両足を、逆に大きく広げられてしまう。〈肌衣〉は妖しげな朱い霊光を放ち、薄明かりの中でほのかに輝いていた。この着物に包みこまれた時点で、ほとんど術に陥ちたも同然なのである。白蓮の名前を呪文のように唱えるのは、なんとか意識を保とうとしているためであった。

「くくく、おまえは生娘ではないが、〈肌衣〉にとっては上等なエサ。旨そうな魂を、食いつくしてやろうぞ」

妖術師が姫君の口を借りて、告げる。忍び装束から飛び出したように見える乳房を、背後にいる〈肌衣〉が、右手でやわやわと揉みしだいていた。片手しか使わないのは、もうひとりの娘を後ろに抱えこんでいるからだ。朱い〈肌衣〉を挟んで、二人のくノ一が背中合わせになっているのである。仲間があげる喘ぎ声や微妙な振動も、快感を高める道具のひとつ、娘は悩ましげに悶えた。

「うふぅ〜〜〜ン、はあぁ、いいぃ〜〜〜〜〜」

広げられた両脚を、みずから曲げて、女陰をあらわにする。もう我慢できない、早くあ

そこを嘗めてほしかった。おねだりの仕方が気に入ったのだろう。叢を嘗めていた朱鳥が、とうとう花弁に移動した。舌先で花びらを広げ、蜜を吸うように、充血している花芯をちゅうぅっと吸いあげる。

「ああっ」

と、娘はのけぞった。朱楽ほどではないものの、普通よりは大きめの乳房が、ぐぐっとふくらむ。尖って震える乳首に、二羽の朱鳥がむしゃぶりついた。軽く咬んだり、吸いあげたりと、こちらも舌技を駆使して快感を与える。負けじとばかりに、花芯係の鳥も張りきった。濃やかに舌先をそよがせて、硬く勃つメシベをなだめようとする。蜜壺の中が熱くなり、じゅんっと潤むのを感じた。

「あふうぅ〜〜〜〜〜〜〜〜ンン」

その気配を察したにちがいない。新たな朱鳥が蜜壺の入口に鼻面を突っこんだ。顔はヒトという人面鳥、少しだけ開いた蜜壺の入口から蜜がとろぅりとあふれる。わざとらしく音をたてて、それを啜った。花芯係の鳥が、そそられたらしく、舌を速める。メシベを愛おしげに嘗める。

「んくうぅ〜〜、くううぅ〜〜〜〜〜」

さらに両脚を広げて、固く目を閉じた。けんめいに他のことを考えて、気をやらないようにする。達けばもっと深く術に陥ちるのはわかっていた。心を読んだように、白蓮の喘

ぎ声が響く。

「に、逃げ、ろ、あ、あぁぁ～」

部屋の中にいるので、どんな状態なのかは見えない。が、艶(なま)めかしい声がすべてを語っていた。

「外、に、くっ、くううっ、い、行け、はあはあ、逃げろ、と……」

あとは聞こえなくなる。「外で待つ連絡役のもとに行き、お頭ともども逃げろと伝えよ」、そういう命令だった。だれかが役目を果たさなければならない。この責めから逃げて、外に行かなければならない。

「んふうふぅ、び、白蓮様ぁ～、ふうふうぅ～～～～」

健気(けなげ)にもお役目を頭に浮かべて、襲いかかる快感の波を押しのけようとする。が、朱鳥たちの愛撫はいっそう濃密になった。乳首をちゅっ、ちゅちゅっと吸いあげ、花芯をやわらかく嘗める。蜜壺の入口に鼻面を突っこんでいた朱鳥が、仲間たちの動きに呼応して動く。男根の形に変化するや、ぐっと一気にもぐった。

「くぅ！」

娘は一瞬、両脚を突っ張る。奥でふくらむ壺芯を、思いきりこすりあげられて、下半身が痺(しび)れた。すぐさま両脚の力がぬける、いや、無意識のうちにぬいたのかもしれない。そうしないと、男根が蜜壺内でなめらかに動かないからだ。

「あああああぁ～～～、だ、だめぇ～～～～～～～～」

うっとりと目を細めて、小さく尻を振る。くちゅぴちゅと、蜜壺内では淫らな音があがっていた。疑似男根と化した朱鳥が、忙しげに出たり入ったりを繰り返している。さらに尖った乳首を、二羽の鳥が熱心に吸いあげる。痛いほど屹立している花芯に、優しく舌をそよがせる。

「あ、あ、あ」

絶頂の波に包まれかけたそのとき、

「に、逃げ、ろっ」

ふたたび白蓮の声が起こった。次いで黒い鞭が唸り、娘を呪縛していた〈肌衣〉の裾が見事に切断される。どうっと床に投げ出されたが、乳房や秘部にくっついている鳥は離れない。

「くっ、うううううっ」

唇を嚙みしめ、這うようにして、戸口に向かった。しかし、甘美な責めから逃れるのは容易ではない。まずは乳房の二羽を引き剝がし、花芯の一羽に手を伸ばしたが、蜜壺の男根鳥が壺芯を突く。

「あああっ」

娘は這いつくばった姿勢で、ぶるっと震えた。蜜壺からは愛液があふれて、太股を伝い

落ちる。動きが止まったことに力を得たのか、花芯係の鳥がまたも勢いづいた。メシベを唇で包みこむようにし、舌先を小刻みに蠕動させる。仲間の動きを感知して、男根鳥も動きを速める。何度も壺芯を突きあげる。

「うく……ううううぅ〜〜〜〜」

蛇娘のごとく、死に物狂いで床を這い進む。朱鳥が乳房に吸いつかないよう、乳房で床磨きをするように前進して行った。裏口から一番近い距離にいたお陰で、あと少しのところまで迫る。花芯の鳥が舌を震わせる、蜜壺の男根鳥が淫らな音をたてて責める。くうっと唇を噛みしめ、開け放してあった戸から、転がるようにして外に出た。

「あくぅっ」

立ちあがろうとしたが、そこに〈肌衣〉が襲いかかった。なんと切断された裾の部分が、一枚の着物になったのである。

「くく、くくくく、逃がさぬ。われらは五枚となって、完全なる霊力を得た。ゆえに切断されれば、その部分がまた一枚の〈肌衣〉に変化する。切りたければ切るがよい。どんどんな」

激しく喘いでいた娘の唇に、〈肌衣〉は唇を重ねる。と、男根鳥が〈肌衣〉の股間に貼りつき、雌雄同体のような姿になった。娘を抱きかかえたまま、空中に浮かびあがる。そのまま正常位となって、のしかかった。長く伸ばした着物の裾で娘の背中を支え、褥代わ

りにしている。空中を房事の場に選ぶのは、相手をより強く呪縛できるからだろう。逃れる術はない。

「あっ、いやっ、ああっ」

娘は悲痛な声で叫ぶ。気を逸らそうとしても、熱い肉の責めにはとうてい勝てない。乳房にも朱鳥が吸いつき、花芯の朱鳥が入念にメシベを嘗めあげる。のしかかった〈肌衣〉は、覆いかぶさり、尻を抱えこむようにして、疑似男根を突きあげた。蜜壺内の肉襞をこすりあげつつ、壺芯を責める。こらえにこらえてきた絶頂の波が、大きなうねりとなって娘を包みこんだ。

「あ――――」

お、お許しを、白蓮様ぁ。

「うくっ、達くぅっ、達くうぅぅ～～～～～～～っ」

全身を硬直させたあと、大きく尻を痙攣させる。何度も何度も尻を震わせ、両脚をひくつかせた。押し殺した喘ぎ声が、徐々に小さくなる。唇や顔にふわふわしたなにかを、娘は感じていた。

「そのまま眠るがよい。永遠にな」

朱い〈肌衣〉の眼が、着物の輝きと同じ霊光を放っている。

七

ひとり、逃げたはずだ。頼む。お頭に知らせてくれ。

祈るような想いを抱きつつ、白蓮は青い桔梗の絵柄の〈肌衣〉と戦っていた。

「いや、あぁ、やめ、ろ」

着ていた忍び装束を破かれてしまい、陽に焼けた裸身を曝している。天井に浮かびあがった青い〈肌衣〉によって、両手を吊りあげられていた。右手にかろうじて黒い鞭を握りしめているのは、白蓮なりの意地といえよう。五寸ほど浮いた両足にも、〈肌衣〉の裾が絡まり、本人の意思に関係なく、太股を大きく広げている。

白蓮の前に佇む朱楽は、それらの様子を無言で見つめている。生きているのか、死んでいるのか、まるでわからない。

「あけ、ら、わ、わたしの声を聞け、ああ！」

白蓮はぴんと手足を突っ張る。青い桔梗の絵柄が、複数の小さな竜となり、裸身のあちこちにへばりついたのだ。形のよい乳房に吸いついた二匹は、髭のある唇で乳首を咥える。脇の下や腹にも、何匹かがくっつき、唇と舌、さらに竜にしかない髭も加えて、愛撫していた。むろん、女陰にも青い竜が貼りつき、奉仕しようとしている。くノ一らしく手入れ

の行き届いた叢に、髭と舌を伸ばした。

「あ、あ、よ、よせ」

責めるのも責められるのも好きな白蓮は、もう感じ始めている。尻を後ろに引いて、いちおう形だけは最後の抵抗を示していたが、蜜壺の中で肉襞は蠢き、そのときが訪れるのを待っていた。忍び装束を破かれる間も、休みなく刺激を与えられている。下忍たちよりずっと感度のいい白蓮にとって、こらえるのは至難の業といえた。

「あはぁ〜〜、うふぅ〜〜〜ン」

つい悶えてしまう。乳房をいじられているだけで、じゅんっと蜜壺が熱くなる。嘗めてほしくて尻を突き出し、女陰を青竜に近づける。それが気に入ったのか、腹が立ったのか。女陰にくっついた青竜が、花弁に軽く咬みついた。

「ひ！」

と、白蓮は裸身を引き攣らせる。いやなのではない、感じていた。おおいにマゾっ気を刺激され、蜜壺からは早くも愛液が滴り落ちる。女陰の青竜は舌先を細く尖らせて、すっと花弁を割った。

「あっ」

短く声をあげる。中にひそんでいる花芯の尖端部を、わずかに舌先がかすめたのだ。女にしてはやや大きめのメシベが、剝き出されている。薄桃色に充血して、立派に勃ってい

た。背後で呪縛している〈肌衣〉が、妖術師の声音で愉しげに言う。
「おうおう、男のようではないか。いやらしいのう、白蓮」
「な、なにを、ああっ」
三度、裸身を硬直させた。花芯係の青竜が、勃っているメシベを強く咥えたのである。まるで男根に尺八をするかのように、顔を動かして、刺激する。痛みと快感の微妙な狭間を、白蓮は漂う。
「う、うぅ、うううぅ〜〜〜」
我慢しているのに、歯の隙間から呻き声が洩れた。乳房を愛撫している二匹が、硬く尖った乳首を咥えて、宙に浮かびあがる。飛んで乳首を軽く引っ張るようにした。千切れるほどに強く引っ張りはしないが、もしかしたらという怖さがある。それがよけい快感を高めた。まだ責められていない蜜壺が、勝手に蠢き、蜜をあふれさせる。一滴、二滴と、太股を伝って、雫が流れ落ちた。
「くく、ほしいか？」
背後の〈肌衣〉がささやく。青い桔梗の着物は、白蓮が可愛がっている下忍の娘——千早だ。巨乳と呼べるほどの乳房が重たげに揺れ、股間には青竜が合体して、雌雄同体となっている。尻のあたりに勃起した疑似男根があたり、焦らされているような思いを味わっていた。

「だ、だれが、はあはあ、お、おまえ、ふうぅ～、などに」

途切れとぎれではあったが、なんとか反論する。だが、正直に蜜があふれて、床にまで垂れていた。青い〈肌衣〉は嗤いながら、蜜壺の入口に男根をあてがう。小さな円を描くようにして、亀頭をこすりつけた。くちゅぴちゅという恥ずかしい音が、あがり始める。決して深く挿れたりはしない。入口付近をこするだけだ。蜜壺があげる音や、焦らされることにも、マゾ心を刺激された。感じているのを察したのだろう。〈肌衣〉は吊りあげていた両手の縛めを、わざとゆるめた。白蓮自身が腰を沈めれば思う存分、男根を楽しめる。両足はいまだに着物の裾で呪縛されているので動けない。両脚を広げ、中腰になったあられもない姿で、白蓮は必死に我慢した。

「くっ、ふうぅぅ、うふうふう」

先刻の下忍同様、宙に浮いているため、揺れるとそのまま動きになって表れる。達くのをこらえて尻を震わせているのが、はっきり見て取れた。乳首を咥えている二匹の青竜が、乳首全体を呑みこむようにして、ぶちゅっと吸いつく。と同時に花芯の青竜が舌の動きを速める。白蓮はそれでも踏ん張る、気をやらないようにする。

「あ、やめ、ろ、だ、だめ……」

いきなり後ろの〈肌衣〉が、男根を突きあげた。

「くうっ」

思いきり白蓮は背中を反らせる。一度、壺芯を突かれてしまうと、もう我慢できない。こらえにこらえていた欲望が一気に弾け飛んだ。尻を忙しく上下させて、男根がもたらす悦びを貪欲に味わおうとする。じゅぶっ、ちゅぶじゅぶっと重い濡音が響き渡った。花芯よりも壺芯を突かれる方が、より深い快感を得られる。が、相手は妖怪、使う気はなくても艶技が働きかけた。蜜壺の入口、中程、奥と三段階にわたって締めあげ、疑似男根を切断しようとする。

「そうはさせぬ」

呻くように〈肌衣〉が言った瞬間、男根の尖端部がヒトの唇に変化した。蠢く壺芯をぱくっと咥えて、揉むように唇を揺動させる。

「おううっ、くううっ、おうぅ〜〜〜〜〜っ」

白蓮は獣のような咆吼をあげた。締まりかけていた蜜壺が、予想もしない反撃を受けて弛緩する。ふくらみきった壺芯を、ヒトの唇で責められるのなど初めての体験、大きく両脚を広げた恰好で、ぶるぶるっ、ぶるぶるっと何度も痙攣する。とどめとばかりに、ちゅううっと壺芯を吸われた刹那、

「あ……」

意識が遠くなった。が、裸身は絶頂の瞬間を、正確に告げる。大きく尻が震えて、蜜がどっとあふれ出した。二度、三度と背中が反り返る度に、深い絶頂が訪れる。艶技など使

う余裕はない。蜜壺に呑みこんだ男根を、さらに味わおうと、自分で尻を動かし始めた。
「んふぅ、んふうふう、うううふぅ～～～」
「これでおまえも、〈肌衣〉の虜」
くるりと半回転させられて、向かい合わせの座位をとらされた。見慣れた千早の顔に、赤い邪眼がきらめいている。目と眼が合ったとたん、こめかみのあたりが痺れて、蜜壺がさらに疼いた。あれがほしい、もっと激しい快感を迎えたい。役目のことは綺麗に消え去り、房事のことだけで頭がいっぱいになる。
「白蓮様ぁ」
甘えたような千早の声が響き、豊かな乳房を密着させてきた。妖術師が千早の顔と声を使っているだけなのだが、もはや冷静な判断力はない。艶技の訓練のような錯覚に陥り、やわらかな裸身を抱きしめていた。
「あぁ～～、ち、千早、いいぃ～～～」
いつもの訓練と違うのは、下忍の千早が主導権を握っている点だった。空中に浮いての座位という、かなり変わった体位で、白蓮は尻を上下させる。ぐりぐりと壺芯を、男根の尖端部にこすりつける。淫らにひくつく壺芯を、男根唇が再度、嘗めあげた。今度は前よりも優しい愛撫で、メシベを嘗めるときのように、舌先を蠕動させる。ぐうぅーっと快感が子宮の裡側からこみあげてきた。

「んぐうううぅ〜〜〜、おおぅ〜〜〜、くぅううぅ〜〜〜〜〜」

二人の下には白い着物が、褥となって広がっていた。〈肌衣〉は伸縮自在、どのような大きさにも変化する。白蓮が尻を動かすにつれて、絹の着物に妖しげな皺が寄った。上下すると、天幕のようなそれが、たわみ、揺れて、乱れる。

「うぅんんぅ〜、はあぁ、白蓮様、白蓮様ぁ〜」

千早はふだんどおりの声で、白蓮の裸身を抱えこむ。唇に唇を重ねて、舌を差し入れてきた。ふわふわしたモノが、口の中に入ってきたが、まともな感覚はすでにない。舌に舌を絡めながら、白蓮はかまわずそれを呑みこんだ。快感が高まってくる、全身が甘美な痺れに包まれる。

「ふうぅ、ち、千早、ああ〜〜、いい、いいぃ〜〜〜〜」

尻を前後に動かして、花芯同士をこすりつける。知らぬ間に花芯係の青竜は姿を消していたが、後ろに移動したらしく、尻の菊花を嘗め始める。そこも白蓮にとっては、快感地帯、青竜はにゅるりと菊穴（アヌス）に舌を挿入させた。

「あ、ああっ」

反射的に尻をあげかけたが、千早が凄い力で押さえつける。この行為が好きだとわかって、菊穴の青竜は竜体を小さめの男根に変化させた。蜜壺にも一匹、男根竜が入りこんでいる。菊穴はかなりきつめだったため、細めにするという妖怪らしからぬ気配りを見せた。

くいっ、くくいっと尖端をもぐりこませたあと、根元まで一気に挿し入れる。
「あはあっ」
白蓮は千早にしがみついた。小刻みに下半身が痙攣し、またしても失神しかける。蜜壺では唇を持つ男根竜が動き、菊穴には別の小竜が入りこんでいる。蜜壺と菊穴の間の薄い肉襞が、強くこすり合わされて、頭がぼぅっとなっていた。白蓮が動きを止めると、千早が腰を突きあげる。
「もっと、もっとぉ、白蓮様ぁ～～」
股間で屹立する男根竜を、自在に操り、蜜壺を責めた。
「あ、あ、あ」
白蓮は惚けたように、小さな声をあげるばかり、まったく動けない。それなのに感じる、絶頂が訪れそうになる。千早が乳房をカリッと噛んだとたん、魚が跳ねるように大きく震えた。密着した乳房と乳房、花芯と花芯が熱くなる。こすりあげられて、絶頂の波が近づいてくる。
「もっと、もっと、もっと！」
動いてと、千早が責めた。ようやく白蓮も腰を使って、巨大な波を引き寄せようとする。千早が男根を突きあげる、花芯を密着させてこすりつける。
「あ、もう」

陶酔しきった表情で、目を閉じる。何度目になるのか、もはや覚えていなかったが、頭はすでに真っ白、完全なる失神状態だ。裸身だけが反応し、がくがくと尻を揺さぶった。きゅーっと蜜壺が締まったが、艶技にいたることはない。小刻みに震え続けていたが、やがて、手足をだらりと伸ばした。

「あぁぁ……」

千早にもたれかかって、はあはあと荒い息をつく。綿のようなモノがふわふわと、視野に広がっていたが、なんなのかわからない。さっき呑みこんだモノに、似ているように思えたが……思考はそこで停止した。

「白蓮様ぁ」

唇を重ねてきた千早を、きつく、きつく抱きしめる。強く抱きしめて、裸身を縛りあげるように、抱きしめられているのはだれなのか。

朱楽。

最後に映ったのは、物体のような朱楽の姿。白蓮の裸身に透明な糸が、幾重にも巻きついている。それがなんであるのか、わからなかった。

第六章　蜘蛛網ノ法

一

朱楽、大丈夫かな。白蓮はどうしただろ。朱楽を助けられたかな。

竜子は桜花が言うところの『宝物』をある場所に届けたあと、屋形船で阿蘭陀宿近くの船着き場に向かっていた。思いのほか時間をくってしまった。おそらく桜花部隊の方が先に行っているだろう。時刻は暮れ六つ（午後六時前後）、日がとっぷりと暮れて、あたりは闇に包まれている。日本橋本石町近くの船着き場は、ひっそり閑と静まり返っているように思えたが――。

「船が停まっています。もう少し下流に行きますか」

船首にいた下忍が、指示を仰ぎにきた。竜子は甲板に出て様子を見る。停泊しているのも屋形船だったが、明かりの類はいっさいない。それなのに人の気配が在った。目を凝ら

してみると、何人かの人影が見える。ひそかに荷を積んでいるような感じだったが、これは例の抜荷ではあるまいか。

「少し離れた場所に停めておくれ。あたしが調べてみる」

可愛らしい鼻が、なにやらキナ臭いものをとらえていた。抜荷で思い出すのは、田村監物。まさか、監物ではないだろうが胸騒ぎがする。

「ですが、竜子様。向かい風のせいで、船が思うように進まず、予定よりもずっと到着が遅れてしまいました。一刻も早く阿蘭陀宿に行った方がいいのではないでしょうか」

下忍の意見はもっともだった。囚われの身である朱楽や、救援部隊の白蓮たちのことは当然、気になっている。

「わかってるよ。だけど、あの船、なんとなく引っかかるんだ。この船着き場は阿蘭陀宿にいちばん近いだろ。連中の船という可能性もある。もしかしたら、妖術師は朱楽や町娘たちを、どこかに移そうとしているのかもしれない。そう思ってさ」

上忍らしい推理に、下忍も納得する。

「わかりました。ご命令どおりにいたします」

「あの船の横を、なにげない感じで通り過ぎてよ。飛び移ってみる」

船を停めて岸に降りると、相手の船に近づく間に、気づかれてしまうかもしれない。岸を離れられたら、今度はまた追うのが大変になる。問題のない船であれば、そのまま岸に

飛び移ればいいだけのこと、竜子の計画を正確に理解して、船の漕ぎ手は静かに近づいて行く。着物を脱ぎ捨てて、忍び装束になり、覆面を着けた。忍び刀を背中にくくりつけて、船の縁に立つ。

「わたくしもお供を」

「あたしも、ご一緒します」

武器を携えた二人の下忍も、覆面と忍び装束になっている。竜子はうなずき返して、告げた。

「行くよ」

桜花そっくりの口調で言い、下忍よりも先に飛び移った。かすかに船が揺れたが、こちらにまわって来る人影はない。続いて、二人の下忍がほとんど同時に移って来た。手で合図して、左右に配置する。見張りを立てたうえで、屋形船の戸を少しだけ開けた。

真っ暗だよ。

明かりを点けていないのだから、あたりまえである。闇に馴れている目でも、中の様子をつかむのに、多少、時間を要した。男とはあきらかに異なる独特の体臭が、船室内に満ちている。

女だ。

やはり、と、思った。阿蘭陀宿の地下牢に閉じこめられていた町娘たちではないのか。

異人にでも売られてしまうような感じだった。彼女たちである可能性は非常に高い。朱楽がいるかどうかわからないが、たぶん、いないだろうと判断する。朱楽がいたと仮定した場合、こんなに静かに事が運ぶとは思えないからだ。

こっちへ。

見張り役の二人を呼び寄せる。

「何人ぐらい、いる？」

「男衆が五、六人といったところです」

ひとりの報告を聞いて、心を決めた。すみやかに片づけなければならない。まだ次があるのだ。

「いいかい、殺すんじゃないよ。気絶させるだけだからね」

忍び刀を抜き放ち、甲板をまわって、岸に移る。

「やや!?」

「て、てめえらっ」

さすがに相手も気づいた。胸もとから匕首を出すのが、手の動きに表れる。竜子は忍び刀の柄で、素早くひとりの喉を突いた。左側から迫った男には、鳩尾に一撃をお見舞いする。二人の下忍も的確に急所を狙い、五人が地面に沈んだ。命じるまでもなく、懐から縄を出して、縛り始める。あとは囚われている町娘たちを解放してやればいい。

「よし、娘たちを逃がしてや……」

屋形船に飛び移る前に戸が開いた。ひとりの男が娘の喉に匕首を突きつけて、出て来る。たまたま中にいた男が、異変を察して反撃に出たのだろう。

「どこのだれかは知らねえがよ。邪魔をするやつぁ、敵ってことだ。これ以上、手出しすると、こいつをぶっ殺してやるぜ！」

人質を盾にして、脅しをかける。どうしたらいい、姉様、教えてよ。このままじゃ、みんな連れて行かれちまうよ。せっかく助けてやろうと思ったのに……。

こいつらが監物の手下だとしたら？

不意にひらめいた。昼間、桜花との会話によって、いくつかの事柄がわかっている。わかっていない部分もあったが、試しにカマをかけてみた。

「その娘になにかしたら、『近江屋のお葉さん』の命はないよ」

「て、てめえ、女か!?」

男はまず竜子が女だったことに驚いた。暗いうえに覆面と忍び装束では、性別まで見分けられない。が、続いて湧いたのは驚きよりも疑惑だったようである。

「お葉さん、だと？」

探るように忙しく、目が動いた。お葉のことは知っているようだが、拉致されたことまでは知るわけがない。単なる脅しの言葉なのではないかと、疑っていた。

「お葉さんは今日、冬木屋で開かれる茶事に招かれていた。そこをあたしたちが襲ったのさ。今はある場所にいる。返してほしければ、娘たちを逃がせ。解放してやるんだ」

網渡りのような駆け引きだった。せめて拉致されたことが、耳に入っていれば、もっとスムーズに運んだにちがいない。桜花であれば、もっと大胆なカマをかけられたかもしれないが、竜子にはこれがせいいっぱいだ。

「……」

沈黙する相手を、さらに揺さぶる。

「おまえは田村監物の手下なんだろう？　お頭が怖くないのかい？　おまえのせいでお葉さんが戻らないとなったら、監物はどう思うだろうねえ。監物は代わりにおまえの命がほしいと言うかもしれないよ」

できるだけ桜花の口真似をして、自分こそがお頭なのだと演じた。わずかに動揺して、匕首の切っ先が逸れる。竜子はすかさず棒状手裏剣を投じた。男の額めがけて、まっすぐ軌跡が走る。

「ぐぇっ」

見事に命中し、人質にしていた娘に倒れかかった。いち早く二人の下忍が船に移り、ひとりが男を受け止める。もうひとりは娘を引っ張って、血で汚れないようにした。くノ一ならではの心遣いと言えるかもしれない。逃げるとき、身体や着物に血が付いていては目

立ちすぎる。

「まったく、もう、いやになっちまうよ。殺すなとか言ってるあたしがこれだもんね」

自嘲気味につぶやき、竜子も船に飛び移った。船室に囚われている娘たちの縄を解いてやる。

「みんな早くお逃げ。ただし、よけいなことは喋るんじゃないよ。この事件には厄介な男が関わっている。命が大事なら口を閉ざすことだ。お役人になにを聞かれても喋るんじゃない。いいね」

口真似をしているうちに、桜花が乗り移ったかのような雰囲気になっている。全部で六人いた娘たちは、青い顔でうなずき、渡してやった板の上を歩いて行った。綺麗な娘が多い点を考えても、監物の目的はあきらかである。

「危ないとこだったよ。まさに間一髪だね」

娘たちを見送ったあと、竜子は岸を伝って、自分たちの船を繋いだ場所に向かった。遅くなったことで、桜花に怒られるかもしれない。その顔を思い出して、思わず震えた。船から降りて来た下忍に、早口で命じる。

「さあ、次は阿蘭陀宿に、ん？」

ふと夜空を見あげる。きらきら、きらきらと、なにかが光っていた。三日月と星は出ているが、動いているので星ではない。いくつかの美しい光が近づいて来る。朱、青、黄色、

白、そして、黒っぽい霊光。五色の色を確認した刹那、
「ほほほほほ」
頭上で嗤い声が起こった。
五人の〈肌衣〉が、夜空を舞っている。それぞれが霊光を放射して、踊るように飛翔していた。幽玄とさえ言える艶やかな光景に、一瞬、目を奪われる。
「……」
〈世直し天女〉対〈肌衣天女〉。
美しき戦がだれも知らない場所で始まろうとしていた。

二

「ほほ、ほほほ、おまえたちも餌食にしてやろうぞ。他の仲間たちと同じようにな」
不吉な言葉を吐いて、〈肌衣〉たちは飛びかかって来る。竜子の頭上に舞い降りたのは、白無垢を思わせる純白の着物だった。
「くっ」
とっさに忍び刀で切り裂く。だが、相手はふわりと舞いあがってしまい、切れたのは裾の一部だけ、そのあと、見たくもない現実を突きつけられた。切れた部分はほんのわずか

だったものを、みるまに一枚の白い着物に変化したのである。

「ま、まさか」

周囲に視線を走らせると、まったく同様の事態が起きていた。袖や裾を切ると、切った着物と同じ色の〈肌衣〉が誕生するのだ。

「だめだよっ、切るんじゃないっ」

と叫んだものの、では、どうすればいいのか。

「逃げるんだっ」

叫びながら、川に向かってありったけの念を吹きつけた。『逃水の竜子』の表技は水を使って幻を出現させること、蜃気楼のくノ一部隊が、河岸に現れる。見た目にはまったく変わらない。騙された〈肌衣〉たちが、次々に襲いかかった。

「今のうちに逃げるんだよっ、早く！」

阿蘭陀宿に向かうしかない。仲間に合流して、不利な状況を打破するのだ。幻を囮にして突っ走ったが、〈肌衣〉は想像以上に動きが速かった。ふわり、ふわりと舞い降りて、幻を消滅させる。中には幻ではない本物の阿魔衆も混ざっていた。

「きゃあぁっ」

ひとりの下忍が捕まったのが、まるで合図のようになる。二人、三人と、次々に吊りあげられて、川の上に浮かびあがった。蛍のような輝きを放つ〈肌衣〉に、抱えられる犠牲

者のくノ一たち、夢のように美しく、摩訶不思議な光景に、つい見惚れたのが間違いのもと。

「うわっ」

竜子も白い〈肌衣〉に吊りあげられる。忍び刀を握りしめていたが、相手は大名家の姫君、肉体を刺せるはずもない。さりとて、着物を切り裂けば、その数だけ妖魅が増えてしまう。

「は、放せっ、あ、や、やだっ」

着物の下に、小さな白虎が何匹もひそんでいた。鋭い牙で忍び装束を引きちぎる。引きちぎられた分だけ竜子も増えればいいのだが、そうはいかない。白い素肌が剝き出しになるだけだった。

「や、やめ、あぁ、んむっ」

無理やり〈肌衣〉に唇を奪われる。とたんに、じぃんと子宮が疼いた。差し入れられた舌を夢中で吸う。相手の舌に舌を絡める。小さな白虎は身体中を這いまわり、忍び装束を破っていった。気づいたときにはもう半裸状態、さわり心地のよさそうな乳房や、波打つ腹、叢から蜜壺にかけての部分が露出している。腕や足にはまだ忍び装束が貼りついていたが、重要な箇所は陥とされたも同然だ。

「だめ、だよぉ～、あ、あたしは、はあぁ～～、朱楽を……」

助けに行かないと。

つぶやきは悩ましげな喘ぎ声に変わる。竜子は〈肌衣〉と向かい合わせになって、激しく接吻した。そのまま下に降りて行ったのだが、他の事柄には気がまわらない。抱きかかえられたまま、なんと、川の水面に着地した。白い着物が天幕のように川面に広がる。江戸版ウォーターベッドとでも表現すればいいだろうか。〈肌衣〉は常に空中浮揚という状態なので、呪縛されている限り、川に沈むことはない。が、呪縛を解かれれば即、土左右衛門になる危険性もあった。竜子は今、術に陥ち、半分失神しているようなものだからである。

呪縛に陥ちたままであれば夢想死、呪縛を解けば土左右衛門。どちらを選んでも、待っているのは地獄への道、妖術師は非情な罠を仕掛けたのだった。

「あ〜〜〜〜〜」

自分の状態などまるで知らない竜子の眸に、ぼんやりと下忍たちの姿が映っている。空中で責められる者、川の上すれすれのところで挑まれている者と、場所や体位は異なるが、どれも〈肌衣〉の輝きを受けて、この世のものとは思えない霊光を放っていた。まさに天女の秘め事と言えるかもしれない。

「何度も達くがよい。どれだけあがこうと、〈蜘蛛網ノ法〉からは逃れられぬ。極楽浄土を彷徨いながら、死出の旅に出るがよいわ」

白い〈肌衣〉は竜子の乳房を唇と舌で愛撫し、叢に右手を伸ばしたが、まだ花弁にはふれない。ぴたりと密着した絹肌に、うっとり目を細める。

「はあぁ〜〜〜ン、あんんぅ〜〜〜〜ン」

絹で愛撫されているような感じがする。唇も掌も、普通の女のそれではなかった。すり寄せているだけなのに、妖しげに蠢き、竜子の肌を刺激する。加えて、背中の感触がなんとも言えずよかった。川面に広げられた白い着物の上に、竜子は横たわっているのだが、たぷたぷと揺れるさまがたまらない。川という自然がもたらす波と、〈肌衣〉の淫靡な動きが相まって、至高の快感を与えてくれた。背中や尻を無数の舌で嘗められているような感じがする。

「うふうっ」

ぞくぞくっときて、思わず声が出た。水術師ゆえ愛液の量は人並み以上、早くも蜜壺の入口から蜜が滴り落ちる。

「くくく、そら、もう、これじゃ」

妖魅と化した姫君は、細い指先を蜜で濡らし、花弁にふれた。花びらを開かずに、上から撫でこする。小刻みに振動させる。が、興奮しすぎてしまい、少し痛かった。花びらの奥で眠る花芯が、硬くなりすぎている。

「あ〜、いやいやぁ、いやだよぉ〜〜〜」

甘えた声で言い、〈肌衣〉にしがみつく。両脚を大きく開いて、焦れったげにひくつかせる。おねだりの仕方が気に入ったのだろう。先刻まで忍び装束を食いちぎり、いったん着物の絵柄に戻っていた白虎が一匹だけ出現した。大きさは三歳ぐらいの童子ほどだが、股間でいきり立つ男根は、成人の逸物以上に隆々と天を向いている。太股の付け根にうずくまり、花弁にそろりと舌を伸ばした。

「んくぅっ」

待ち望んだ舌技に、竜子は尻を震わせる。しかし、脚を閉じれば愛撫をやめてしまうかもしれない。自分の両手で太股を持ち、「嘗めてくださりませ」という恰好を取った。白虎はその願望に応える。舌先で花弁を割り開き、中で震える薄桃色の花芯に舌をそよがせる。このうえない優しさで、蠕動させた。

「んん〜〜、うふぅ〜〜〜〜、あ、そ、そこ、いいぃ〜〜〜〜〜〜」

竜子は悶え、上半身をくねらせる。下半身は動かせないので、せめてもの快感表現だった。乳房を嘗める〈肌衣〉の頭を両手で抱えこみ、せつなげに声をあげる。気持ち良さのあまり尻が揺れると、その振動で絹の褥がたわみ、身体全体が揺れた。快感が即座に動きとなって跳ね返ってくるような、不思議な思いを味わっている。悦びが倍加され、さらに高まった。

「あ、いい、もっとぉ〜、あ、はあぁ〜〜、う〜〜ぅン、いいぃ、いいよぉ〜〜〜」

幼い口調が、妖術師の欲望をも刺激する。白虎の舌がなめらかになり、速さを増した。充血しきった花芯を濃やかに嘗める、なだめるように舌を震わせる。

「あっ、あっ、あっ」

竜子はカエルのような恰好になり、両脚に力を入れた。

「ぅくぅ〜っ、達くぅ〜っ、い、達くぅうぅぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

ぐっと全身を突っ張らる。がくっ、がくがくっと大きく尻が痙攣し、絹の褥が悩ましげに揺れた。川面に敷かれた白い着物が、竜子の快感度に従って、たぷたぷと重たげに振動する。背中や尻にあたる部分の絹が、あらたな命を吹きこまれたかのように、竜子の肌を撫でさすった。

「うふうぅっ、ふうぅっ、うふうふうっ」

ただただ声をあげ、激しく喘ぐばかり。いつの間にか〈肌衣〉と白虎が合体している。たおやかな姫君の裸身に、てらてらと濡れ光る逸物が隆起していた。姫君が童顔で清らかな姿なればこそ、男根の異様さが際立つ。尖端部がヒトの顔をしており、分厚い唇から舌が出たり入ったりしている。いかにも臨時合体という感じだったが、機能は充分すぎるほどだった。

「惜しいのう。おまえが生娘であれば、〈肌衣〉にできたものを」

男根が喋り、蜜壺の入口に尖端をもぐりこませる。

「あ！」

達ったばかりの竜子は、小さく尻を震わせた。そのとたん、蜜がどっとあふれ出す。絹の褥に滝のごとく流れ落ちた。

「おうおう、このように濡れては辛かろう」

くぐもった声で、男根が言う。じゅじゅっと奇怪な音をたてて、蜜を啜りあげた。そうしながら〈肌衣〉は竜子を抱きしめ、向かい合わせの座位を取る。淫らに開いたままの竜子の花芯と、姫君の花芯が密着した。絹の肌同様、姫君の花芯が小刻みに揺動する。かつて覚えたことのない悦びに、じぃんっと痺れた。

「ううう～～～っ」

竜子は歯をくいしばって、頤を反らせる。前に突き出す形になった乳房にも、〈肌衣〉は乳房をくっつけた。蜜壺にもぐりこんだ男根は、ゆっくり動きながら、尖端部でぐにぐにと肉襞をこすりあげている。どんどん、どんどん、あふれ出る蜜を、ときおり吸いあげては、奥の壺芯を突いた。

「くうっ」

と、尻を震わせる。たわんだ絹の褥によって、川面に波が広がっていった。竜子による艶めかしい波、他の場所で責められている下忍が、別の淫波を起こしている。くノ一対妖術師の戦いなのだが、現在のところ、くノ一たちは苦戦状態、竜子も艶技を使うどころ

か、逆に精気を吸いとられていた。白虎がじゅるじゅるっと蜜を吸う度に、間違いなく消耗している。が、それに気づきさえせず、竜子は喘ぎ続けている。

「はあぁ〜〜、んふうぅ〜〜〜、んんんんんぅ〜〜」

その唇に〈肌衣〉が唇を重ねた。なんの警戒心もいだかず、竜子は口を開く。と、ふわふわしたなにかが口腔内にあふれた。綿菓子のような感じだったので、するりと飲みこむ。送りこまれてくる正体不明のモノを、乳を飲む赤子のように受け入れる。

「くくくくく、褒美じゃ」

再度、くぐもった声が蜜壺で響いた。ふくらみきっていた壺芯を、唇で軽く咥えて、舌をそよがせる。

「あっ、ああっ」

刹那、今まで一度も覚えたことのない快感が走った。感じすぎちゃう、ああ、だめだよお。桃のような尻を震わせて、何度もはねあげる。ぶるぶるっ、ぶるぶるっと裸身が小さく痙攣する。絹の褥の動きが、いちだんと大きくなった。大量に蜜があふれたが、あふれればあふれただけ、男根が吸い取って、精気が失われる。だが、もはや竜子にくノ一の冷静さは残っていない。

「あ……また」

達っちゃうぅっ！

「くうっ、うくううう、達くううぅ～～～～～～～っ」

ぴんと裸身を硬直させた。絶叫するような歓喜声だったが、なぜか、大きく響かない。竜子の口や顔には、透明な糸が巻きつき、声を遮断しているのだった。ほとんど肉眼ではとらえられない糸は、なめらかな裸身にも巻きつこうとしている。

「これぞ〈蜘蛛網ノ法〉よ。肉体はむろんのこと、おまえの魂も捕らえた。次は魂を喰ろうてやろうぞ」

重々しげに告げる〈肌衣〉の声に、鋭い叫び声が重なった。

「竜子っ」

三

忍び装束姿の桜花は、小船を操りながら、信じられない光景を見ている。

川面に浮かぶ不可解な着物、その上に竜子が座って、〈肌衣〉に抱きしめられていた。他にもひとり、同じような姿で責められている下忍がいる。あとは宙に浮いている者、屋形船にいる者と、場所はさまざまだったが、やられているのは同じこと、妖術師に思うさま蹂躙されているのだ。

「竜子っ、しっかりするんだよっ」

大声で呼びかけ、近づこうとしたが、竜子がいるのは川面、気配を察知すれば妖術師は、躊躇(ちゅうちょ)することなく水の中に沈めてしまうだろう。〈肌衣〉で包みこまれたまま落下すればどうなるか、自明の理だった。

「くっ」

仕方なく、いちばん近い屋形船に小船を寄せた。冬木屋の近くにいた下忍たちは、すでに阿蘭陀宿に到着しているはず、どうなっているだろうか。白蓮は朱楽を助け出せただろうか。桜花は屋形船に飛び移ると、背中にくくりつけておいた二本の鎌(かま)を握りしめた。正常位で下忍を責めている〈肌衣〉に向かって突き出す。

「哈(は)っ」

ひらりと〈肌衣〉は宙を舞った。

「ほほ、ほほほほ」

嗤い声を残して、蝶(ちょう)のようにひらひらと飛びまわっている。下忍からすぐに離れたのが解せなかったが、桜花はすぐにその理由を知る。

「……」

下忍の娘は仰向けに横たわった姿勢で、固まっていた。両脚を大きく開いたあられもない姿態である。たった今まで房事(セックス)をしていた痕跡(こんせき)が、濡れぬれと蜜をあふれさせる蜜壺に残っていた。そう、まさに〈肌衣〉が離れる直前まで、責められていたにちがいない。が、

下忍の娘は微動もしなかった。おそるおそる、ふれてみる。透明な蠟を塗りつけたように、裸身が硬直していた。体温は残っているものの、完全な死が訪れるのは時間の問題だろう。魂を奪われたとき、術に陥ちた者は死ぬ。

「ほほほ、おまえもすぐに行ける」

「仲間たちのもとへな」

次々に〈肌衣〉が、舞い降りて来た。屋形船の縁に留まり、鬼火のように光る目で、見おろしている。朱、青、黄色、白、黒。陰陽道の重要な五色を用いて絵柄を描いたのには、むろん、理由があった。桜花にはそれがわかっている。

「この娘たちの魂を封じこめたね。次はそれを喰らうつもりかい」

鎌を持って、身構えた。陰陽道とは古代中国の陰陽五行説に基づき、災異や人間界の吉凶を説明しているもので、易占、祓、祭祀などを行うことを主要な要素としている。こういった事柄を含めて、十世紀前後、日本において体系化された技術だ。桜花たちとて、陰陽道とは深い繋がりがある。体術は日本独自の技があるが、艶技に関しては、火や水といったように、陰陽道から生まれた術がほとんどだ。五色の〈肌衣〉には、大きな意味がある。仮死状態に陥として、次はどうするつもりなのか。その先が視えていた。

「ほう、さすがは阿魔衆のお頭」

朱い着物から、朱鳥が現れる。

「手応えがありそうじゃな」

次いで、青竜。黄色い蛇、白虎、黒亀と、絵柄が集約して、それぞれの色が示す姿となった。さらに、五匹の聖獣は合体して、ひとりの男に変化する。浅黒い肌をした頑丈な体軀を持つ男で、相変わらず空中に浮かんでいるのは、自分の力を誇示するためであろう。

「おまえが妖術師か」

じりじりと、桜花は間合いを詰めて行く。狭い船の上では、分が悪いのはわかっている。しかし、場所を選んでいる暇はない。

「さよう、幽斎じゃ。『静寂の桜花』よ。仲間の命は、すべておれの掌の中」

幽斎が右手を振ると、阿蘭陀宿の光景が浮かびあがった。朱楽、白蓮、そして、下忍の娘たちすべてが、蠟で固められたような仮死状態になっている。中には、まるで蜘蛛の糸で吊りさげられているように、木にさがっている娘もいた。あの姿が答えを教えている。術を破る鍵がそこにある。

「〈蜘蛛網ノ法〉よ。さあて、おまえに破れるかな?」

余裕たっぷりに告げる幽斎に、桜花は躍りかかった。

「てやぁっ」

一本の鎌を水平に薙ぎ払い、もう一本の鎌を叩きつける。幽斎は幻のように姿を消していた。操る〈肌衣〉と同じように、船の縁に留まって、ふわり、ふわりと飛翔する。五色

の着物たちも愉しげに嗤いながら、桜花のまわりを飛びまわっていた。
「ほほほほ、受けてみよ」
「われらの糸を」
二人の〈肌衣〉が、紅い唇を鎌に向けている。肉眼ではとらえられなかったが、透明な細い糸が、彼女たちの口から飛び出しているのだった。それは鎌に巻きついて、強靭な力を発揮する。
「くっ」
と、桜花は足を踏ん張った。〈肌衣〉の糸が両手の鎌に絡まり、引っ張られている。手を放せばすぐに奪い取られてしまうだろう。
「そう、か、あの人夫が死んだのは」
ぎりぎりと歯をくいしばりながら、声を絞り出した。抜荷事件で捕らえた人夫は、謎の死を遂げている。あれはおそらく牢屋の天井にいた〈肌衣〉が、人夫の顔に向かって糸を吐きつけたにちがいない。その結果、鼻や口に透明な綿状になった糸が詰まり、呼吸ができなくなって、死に至ったのだ。
「そのとおりじゃ。おれの可愛い〈肌衣〉たちはな。ヒトの精気を吸うことによって、糸を紡ぎ出すことができる。諦めるがよい、桜花よ。おまえも仲間のもとに行け！」
幽斎の声が合図となって、引っ張る糸の力がいちだんと強くなる。渾身の力を振り絞っ

たが、

「あっ」

両手の鎌が吹っ飛んだ。幽斎の手に移ると同時に、青い着物が桜花の背後に舞い降りる。ゆったり飛んでいるように見えるが、実際は非常に速い。糸同様、肉眼で動きをとらえられないほどだ。抵抗する間もなく、両手を摑まれてしまう。

「おとなしゅうするがよい。女子はその方が可愛いものじゃ」

幽斎の左手が無数の小さな青竜になって、桜花に襲いかかる。手足を聖獣に変化させることができるらしい。忍び装束の胸もとや太股に咬みつき、鋭い牙で引きちぎり始めた。肌には傷をつけないよう、細心の注意を払っている。

「くっ、卑怯な真似をするんだね、幽斎」

吊りさげられたまま、桜花は挑発する。

「正々堂々と姿を現したらどうだい。生身で戦う度胸がないのかい。『静寂の桜花』がそんなに怖い、むぐっ」

朱い〈肌衣〉に、唇を奪われて喋れなくなる。前に朱い着物、後ろに青い着物と、前後を挟まれてしまった。絵柄は消えているものの、ほのかに輝く霊光によって、五色それぞれを識別できる。

「おまえは油断がならぬ。生身で交わるつもりはない」

幽斎は相変わらず空中に浮かび、冷ややかに見おろしていた。桜花の忍び装束は、胴体の部分を引き剝がされて、白い素肌があらわになっている。〈肌衣〉に勝るとも劣らない素晴らしい絹肌だった。幽斎の股間で屹立していた男根が、蛇のようにいやらしく伸びる。青竜に変化した左手同様、思念体であるため、自在に操れるのだ。

「たまらぬ。吸いつきそうな肌じゃ」

尖端部がヒト顔になった男根は、桜花の額や頬を味わうように嘗めまわした。反論したくても、接吻されているので喋れない。差し入れられた朱い〈肌衣〉の舌を、無意識のうちに吸っていた。接吻された時点で、もはや半分、術に陥ちている。背後の青い着物が、剝き出しになった背中や尻を、波打つように刺激した。小さな舌で嘗められているような悦びが広がる。前にいる朱い〈肌衣〉も、負けじと乳房で乳房を揉みしだいた。密着している乳房が、妖しげに蠕動し、桜花の乳房を愛撫する。埋もれていた乳首が迫り出すと、くすぐるように相手の絹肌が動いた。

「あ、はぁぁ～、あぁぁ、だ、だめぇ～～～」

せつなげに喘いで、息を弾ませる。朱い〈肌衣〉は身体をさげ、唇と舌で乳房を入念に嘗める。空いた桜花の唇に、幽斎の身体から長く伸びている男根が舌を這わせた。男根蛇といった姿だけでも、充分すぎるほど異様なのに、尖端にヒトの顔があるのだから怖ろしい。

「早う達くがよい。何度も、な」

人面男根は耳もとにささやき、かぷっと咬む。

「あ！」

のけぞった桜花の動きそのままに、前後に貼りついている二人の〈肌衣〉が揺れる。それがひどく悩ましげだった。空中浮揚という、人面男根と同じぐらいに奇怪な〝絵〟だったが、相手は妖術師、驚いてはいられない。

「や、やめて、い、いやぁ～～～」

桜花の蜜壺は充分すぎるほど濡れていたが、それでもきつく両膝を付けて、最後の抵抗を示した。だが、朱い〈肌衣〉によって、いともたやすく太股を開かれる。女はするりと下半身を滑りこませた。大きく広げた両脚の間に横たわるような恰好になる。桜花は両手を吊りさげられた不安定な空中で、朱い〈肌衣〉の顔に跨るような姿になっていた。動くに動けない、両脚を閉じたくても閉じられない。

四

「くくく、いい恰好じゃのう」

幽斎は愉しげだった。

「阿魔衆のお頭も、〈肌衣〉の虜よ。おれがほしいと泣いて訴えるほどに、責めて、責めて、責めぬいてやろうぞ」

「おまえなどにだれが、あぁっ」

桜花は下半身を震わせる。下にいる朱い〈肌衣〉が、花弁を舌で割り、花芯を嘗めたのだ。反射的に腰を引き、尻を後ろに突き出してしまう。背後にいた青い〈肌衣〉が、菊花にちゅっと吸いついた。舌を忙しげに動かして、菊穴に舌先を少しだけもぐりこませる。後ろに尻を突き出し、太股を大きく広げたあられもない姿で、桜花は声をあげた。

「あぁ〜〜、や、やめ、てぇ〜〜、はあはあ、あくぅうぅ〜〜〜」

空いた乳房には、幽斎の身体から伸びた人面男根がくっついている。涎をあふれさせながら、両の乳首に交互にむしゃぶりついた。くねくねと伸びた部分が動くさまが、たまらなく淫靡、いかにも妖魅という感じがする。花芯を責める女は、絶え間なく舌を震わせて、メシベを愛おしげに嘗めている。菊花担当の女もまた菊穴に舌先をもぐりこませ、愛撫していた。

「はあぁ〜、あふうぅ〜〜〜、うんむうぅ〜〜〜〜〜〜」

吊りあげられた状態で、桜花は身悶える。両手脚だけはまだ黒い忍び装束で覆われていたが、それだけに雪白の肌が際立っていた。ひとまわり大きくなった乳房を、人面男根が嘗める。花芯を嘗める舌が速くなる、菊花の舌も呼応するように揺動する。必死にこらえ

ていたが、我慢できない。

「あぅ、ああぅっ、あううぅ～っ」

だ、だめ。

「うくうっ、達くっ、達くううぅ〰〰〰〰っ」

歓喜声（よがり）を迸らせ、一瞬、両手足を突っ張る。すぐさま尻が痙攣し、小刻みに揺れた。二人の〈肌衣〉たちも、桜花の悦びどおりに振動している。蜜壺の入口がひくつき、とろぅりと芳しい蜜がこぼれ落ちた。

「おう、おうおう、良い薫り（かお）じゃ」

人面男根が鼻をうごめかせる。

「さまざまな薫りの薬草を、幼いころより飲んでいるのであろう。そそられる薫りじゃ。力がみなぎってくるわ」

ぐぐっと男根がふくらみ、輝きを増した。一気に蜜壺へ突入か、と思われたが、あにはからんや、桜花の唇に侵入する。

「むぐぅ」

無理やり尺八をさせられるような形になったが、男根は舌を伸ばして、口腔内を刺激した。普通の舌ではとうてい届かない喉の奥にまでふれる。常に小刻みに振動し、やわらかく愛撫した。今まで一度もふれられたことのない部分を、舌で刺激されて、快感が高まる。

蜜壺がじゅんっと濡れる。

「んぐうぅぅ～、むぐむぐうぅ～～～～」

口を塞がれているので声は出ない。苦しげに洩れる声が、よけい好色心を掻き立てる。桜花は小さく尻を震わせて、自分なりに表現した。達ってしまったせいだろう。もはや、完全に術に陥ちている。それを感じ取って、下の〈肌衣〉が蜜壺に指を挿し入れた。入口を広げられたとたん、どっと愛液があふれ出る。はしたないほどの濡れ方だった。

「ほほほほ、もうこのように」

ちゅうちゅうと朱い女が赤子のように吸う。菊花に舌を這わせていた青い女も、真似るように菊穴に指を挿し入れた。

「むぐうぅっ」

大きくのけぞり、下半身を震わせる。が、力を入れると、蜜壺や菊穴から指が飛び出してしまう。すぐに全身を弛緩させて、幽斎に身をゆだねた。お返しのつもりで、桜花も舌を蠢かせる。口いっぱいに含んだ男根に舌を這わせる。

「おうううぅ」

思念体の幽斎が、うっとり眼を細めた。こらえきれなくなったのだろうが、桜花は『睡蓮』という艶技を持っている。交わった相手を眠らせたり、死なせたりする恐怖の秘技だ。慎重な幽斎は簡単には引っかからない。

「これでお相手願おうか」

右手を軽く振ると、男根に変化した。危険を感じた時点で、切り捨てれば被害を免れる。しゅるしゅると蛇のように伸ばして、桜花の蜜壺を探る。声が聞きたかったにちがいない。口に挿れていた人面男根を引き抜いた。

「あはあぁ〜〜〜〜〜〜〜〜」

深呼吸をするように、桜花は大きく息をつく。刹那、幽斎の右手男根がぐっと蜜壺にもぐりこむ。

「くぅっ」

きつく唇を噛みしめたが、身体は正直に反応した。ぷるるっと尻が可愛らしく震える。またしても後ろに突き出す恰好となったが、青い女は依然として菊穴に細い指を挿入させていた。下にいる朱い女も、変わらず花芯に舌をそよがせている。口から出た人面男根は、再度、乳房に吸いついた。乳房、花芯、菊穴と、すべてを責められているうえに、蜜壺にも右手男根が入りこんでいる。これは先端部が指となって、奥で息づく壺芯を探った。くちゅぴちゅという、はしたない音が、絶え間なくあがり続けている。桜花独特の芳香も、それにつれて強く匂い立った。

「うむむぅ、たまらぬのう。むちゅう、ちゅちゅうぅ、そそられる薫りじゃ」

乳房係の男根が、乳首にむしゃぶりつきながら言う。花芯を嘗める舌が、いちだんとな

めらかになる。菊穴に挿入された細い指が、忙しげに出入りする。蜜壺深く侵入した右手男根は、とうとう壺芯のふくらみを探りあてた。指先できゅっとつまみあげる。

「ひ！」

桜花は喉で声を詰まらせた。全身が痺れてしまったのだ。男根の指先はさすがに妖魅らしく、濃やかに震えて、壺芯を揺さぶる。ヒトの指先で撫であげられたり、こすられたりする体験はあるものの、ここまで深い愛撫はできない。

「んぐうっ、くくうううぅっ、くうくうううぅ〜〜〜〜〜っ」

桜花の尻は震え、芳しい蜜がとめどなくあふれ出した。右手男根が普通のそれのように、出たり入ったりし始める。壺芯を突きながら、きゅっとつまむ愛撫をする。肉襞をこすりあげては、ぶるぶるっと尖端部を蠕動させる。どれも生身の男では味わえない妙技、阿魔衆のお頭も悶えるしかない。

「うふうぅ、ふうふう、うふうううぅ〜〜」

白い腹が忙しげに上下し、高まりをはっきりと示していた。蜜壺では淫らな音があがり、素晴らしい薫りがあたり一面に広がっている。絶頂の波が近づいてくる、また達ってしまいそうになる。黄色、白、黒の〈肌衣〉たちが、勝利の舞いを踊るがごとく、宙を飛びまわっているのが、ぼんやり見えた。

「あ――――」

桜花は絶頂の波に呑みこまれそうになる。とそのとき、まだ忍び装束で覆われていた両太股が、不意にざわざわと動いた。でこぼこが浮かびあがって、なにか生き物がひそんでいるかのように、怪しげな動きを見せている。幽斎がふと見やった。

「むぅ？」

「ゆ、幽斎様、もっと、もっとしてくださりませぇ、わたくしはもはや幽斎様の僕、もっと苛めてほしゅうございますぅう」

潤んだ眸で最高の美女に迫られては否と言えまい。幽斎は伸ばしていた右手を引きあげさせるや、股間の逸物を適度な長さに縮める。下にいた花芯係の朱い〈肌衣〉を、布団代わりにして、桜花を仰向けに押し倒した。

「ふんむっ、どうじゃ！」

「ああっ」

ぐっと奥まで一気に挿しつらぬかれる。幽斎は邪魔だと言わんばかりに、後ろにいた青い着物を押しのけた。蜜壺の奥でふくらみきっていた壺芯を、男根が的確に突く。念入りに肉襞をこすりあげては、男根をまわすようにして、奥を撫であげた。尖端部に今度は唇が出現し、壺芯を咥えて、嘗めあげる。

「おおぅっ、うふうふうっ、ううううぅ～～～っ」

かつて味わったことのない複雑な責めに桜花は喘いだ。幽斎も感じているのだろう。両

の乳房をぎゅっと握りしめ、休みなく腰を使っている。肉布団にされた朱い着物は、桜花の背中や尻を愛撫していた。尻の方に顔がきているので、菊花を嘗めたりもする。あふれ出る蜜が女の顔に滴り、芳しい薫りがさらに強くなった。

「ゆ、幽斎様ぁっ」

かすれた声で桜花が叫ぶ。

「おおおぉっ、こ、こらえきれぬ」

幽斎も引きずられるように、美しい肉体に溺れた。男根の動きが速くなる、変形した男根の尖端が壺芯を責める。嘗め、咥えて、舌先を震わせた。ぐりぐりっと円を描くように男根が動いた瞬間、

「あっ、あっ、あっ」

桜花は幽斎にしがみつく。

「達くうぅっ、達きまするうぅ〜〜〜〜〜っ」

「うおおおぉ〜〜〜〜っ」

同時に幽斎も吐精する。思念体ではあるが、本物の幽斎も射精したはずだ。集まって来た〈肌衣〉の口から、透明な糸が吐き出される。それは桜花の顔や身体を、すみやかに覆っていった。

まずは肉体を呪縛して、仮死状態に陥らせる〈蜘蛛網ノ法〉、次なる獲物はくノ一たち

の魂。桜花の魂は幽斎が造り出した村に移されていた。

五

「お頭っ」

朱楽の声で、桜花は我に返った。美少女は手足に手甲や足袋を着けただけの、あられもない姿である。もっとも、桜花自身も腕や両脚に忍び装束が残っているだけの恰好だった。こちらに向かって走って来る朱楽と、周囲の風景を交互に見やる。

「ここは」

桜花は二本の鎌を握りしめて、どこかの村らしき道端に突っ立っている。茜色に染まった夕暮れ時、左右に広がる田圃には黄色い稲穂が揺らめいており、道端には青い桔梗が咲いていた。空を飛ぶ黒っぽい鳥の群を見て、ふと首を傾げる。

「どこかで見たことがあるような？」

「〈肌衣〉ですよ。五枚の着物に描かれていた絵柄は、ここの風景なんです。あとひとりというか、一枚の絵は白い着物なんですけど」

息を切らして、朱楽が報告する。やはり、自分の武器である火車剣を携えていた。話しているうちに、彼方から花嫁行列の一群が近づいて来る。ぽっくり、ぽっくりと馬に揺ら

れて、白無垢姿の花嫁が白馬の背に乗っていた。これから嫁入り先に向かう優美な行列に思えたが、朱楽の顔はさっと緊張する。

「あれですっ、白い着物は白無垢の花嫁が描かれている一枚なんです!!」

「なるほど、そういうことかい」

桜花は素早く判断する。集合を告げる指笛を鳴らしたあと、朱楽の手を引っ張って逃げた。前方の空には、なにやら白い鳥のようなものが何羽も飛んでいる。なんだろうと見つめる桜花に、朱楽は不審げな言葉を返した。

「お頭、始末するんじゃないんですか」

「馬鹿、増えるから切りつけるんじゃないよ。それこそ妖術師の思うつぼさ。ここは幽斎の結界内、その中であたしたちにわざわざ武器を与えている理由を考えてごらんな」

「なぁるほど」

幽斎は〈肌衣〉を増やしたいのだ。それゆえ武器を持たせて、切らざるをえないように仕向けている。答えを聞いても、朱楽はまだ納得できなかったらしい。

「でも、なぜ、そんな真似をするんですか」

走りながら尋ねる。

「今のこれは生身の肉体じゃない。あたしたちは肉体を呪縛され、思念体となって、無理やりここに連れて来られた。幽斎の狙いは思念体、つまり、魂を喰らうことなのさ。〈肌

衣〉に精気を吸わせて、あたしたちに本当の死を与えようとしているんだよ」

東は青、西は白、南は朱、北は黒、そして、中央は黄色という五色の〈肌衣〉を操ることによって、幽斎はくノ一たちの肉体と魂を封じこめた。ここは妖術師の結界内、術を打ち破らない限り、逃げるのは不可能だ。

「そ、それじゃ、ここで殺られたら……」

「姉様っ、姉様ぁっ」

竜子がこちらに向かって、右手の田圃を突っ切って来る。二人の下忍が一緒だったが、三人とも、惜しげなく裸身を曝していた。むろん、好きで裸になっているわけではあるまい。これも幽斎の趣向なのだろう。

「ここは変だよ、おかしいよ。村外れに行くと、また同じ場所に戻っちゃうんだ。どうしても村の外に出られないんだよ」

見上げた空には白い鳥のようなものが浮かんでいる。〈肌衣〉に捕らえられた下忍たちが、甘美な責めを受けているのだった。田圃や少し先の道端にも、天幕のような白い着物が揺らめいている。白蓮の姿を探したが、どこにいるのか見当たらない。いずれにしても、時間がなかった。桜花は早口で告げる。

「ここは妖術師の結界内だからね。いいかい、〈肌衣〉を切るんじゃないよ。艶技で勝負するんだ」

「だけど、姉様。相手は大名家の姫君や千早なんだよ。本気で艶技をかけたら、死んじゃうじゃないか」

「股間の逸物だけは、幽斎なんだよ。思念体の一部だけれど、始末すれば痛手を与えられるはずだ。艶技で……」

「お頭っ」

白蓮の声が響き、左手の田圃に姿を見せた。どこかに隠れていたのかもしれない。指笛を聞いて駆けつけて来たのだろう。しかし、背後に白い〈肌衣〉が迫っていた。

「白蓮っ、後ろに、きゃあぁっ」

助けに行こうとした朱楽も、朱い着物に襲われる。ゆらりと茜色の空から舞い降りたのだ。天幕のように広がって、覆い被さる。桜花や竜子、白蓮や下忍たちも、あっという間に捕らえられた。

「あ、や、やめ、ないで」

やめて、と言おうとした朱楽だったが、桜花の言葉を思い出して、積極的に出る。地面に這いつくばって、太股を大きく広げた。覆い被さった着物は、絹肌の姫君となって、愛撫を始める。後背位を取る朱楽の上に、ぴったりと密着しているのだが、まるで絹衣をまとっているかのようだ。重さがまったく感じられない。後ろから乳房に両手をまわし、股間にそそりたつ男根で、尻の菊花を撫であげる。すでに雌雄同体となっていた。朱楽は

元々感じやすい質なので、さわられるとすぐに熱くなる。肌同様、蜜壺が火照って、疼いてくる。

「あぁぁ〜〜、うふうぅ〜〜〜ン、いいぃ〜〜〜〜〜〜」

乳房をまさぐる姫君の両手に、自分の両手を重ねて、悩ましげに尻を振った。見事な豊乳の持ち主ゆえ、重たげに白い乳房が揺れている。早くも桜色の乳首が尖り、いじられるのを待っていた。朱楽は姫君の指を、乳首に導く。

「あぅん」

仔犬が鳴くような声をあげ、いっそう尻を高く掲げた。その姿勢が気に入ったのかもしれない。姫君の股間で屹立する男根の先端部が、二つに分かれた。ひとつは男根のまま蜜壺の入口、もうひとつは先端部が唇となって、女陰に貼りつく。花弁はすでに開ききって、充血した花芯が恥ずかしげに震えている。ちろり、と、舌先で嘗めた。

「んくうぅっ、も、もっとぉっ」

尻をひくつかせて、おねだりする。舌は願いに応えて、小刻みに蠕動し始めた。男根はまだ蜜壺に挿入されていないが、入口に少しだけ亀頭を挿れて、蜜をあふれさせる。あたたかいそれをからめるようにしながら、くちゅくちゅと入口で円運動を繰り返した。焦らしの技巧によって、蜜壺の奥にある壺芯が、淫らに蠢き、愛液が流れ出る。

「うふうぅ〜ン、あぁぁ、は、早くぅ、い、挿れてくださりませぇ〜〜」

焦れったげに、朱楽は裸身をくねらせた。男根は動かないが、花芯を嘗める舌の動きが速くなる。乳房を揉みしだく両手にも熱がこもった。尖った乳首を指先でくりくりといじり、軽くつまむようにする。

「うふう、ふうううぅ、あふうふうううぅ～～～」

感じてしまう、達きそうになってしまう。が、けんめいにこらえた。熱く燃え始めた子宮に、火蛇は誕生しているものの、まだまだ小さくて本来の艶力（パワー）を発揮できない。ある程度まで我慢して、育てなければならなかった。さかんに尻を動かして、蜜壺の入口に亀頭を突っこんでいる男根の挿入を阻止しようとする。つらぬかれたら気持ち良さのあまり、達ってしまうかもしれない。

「ああぁ、だめだめ、うぅ～～～ン、まだ、あくぅ！」

と、朱楽は背中を反り返らせた。心を読んだのかもしれない。男根がずんっと奥まで侵入したのである。ぷっくりふくらんでいた壺芯を、もろに突かれて、甘い痺れが走った。蜜があふれて、子宮内の火蛇がひとまわり大きくなる。あまり育ちすぎると、幽斎が操る男根だけでなく、姫君の肉体まで傷つけかねない。小さすぎても駄目、育ちすぎてもまたまずいと、いつもよりもむずかしかった。

「あぅっ、あふぅっ、あうううぅ～～～っ」

そして、朱楽は冷静な判断が苦手なお気楽娘、壺芯を突かれているうちに、房事に心を

奪われる。獣のように快感を貪る。重い濡音を響かせて蜜壺の肉襞を蠢かせる。もう他のことは考えられない。

「あ、あ、あたし」

もう。

「達くっ、くううっ、ぅくうううう〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

犬のように淫らな姿で、一瞬、裸身を硬直させた。ぷるぷるっ、ぷるぷるっと尻が小さく痙攣する。熔岩が満ちたかのように蜜壺内が灼熱する。と子宮で育った火蛇が、無意識のうちに出現した。『火処の朱楽』の艶技、『火蛇ノ法』が炸裂したのである。子宮からするりと抜け出した火蛇は、標的である〈肌衣〉の疑似男根めがけて突進した。

バシュッと雷光のごとき衝撃が湧き起こる。

「うぎゃあああぁ〜〜〜〜〜っ」

と同時に幽斎の絶叫が轟き、姫君はあわてて後ろに飛びのいた。股間にへばりついていた男根は、綺麗に熔けて、消滅したが——。

「くくくく、それがおまえの艶技か」

嗤い声とともに、姫君の白い股間に、にゅうっと男根が生えた。前よりも猛々しく天を向いている。他の〈肌衣〉が吸収した精気を補充して、あらたな男根を生み出したのだ。

のしかかって来た雌雄同体の姫君を、朱楽はふたたび迎え撃つ。

周囲では同じような光景が繰り広げられていた。

六

「うぅうっ、くううぅ〜っ」

白蓮もまた白い〈肌衣〉に責められていた。空中に浮かんだ白い着物が、絹の褥となって広がっている。両手と両足を後ろで縄で縛られた緊縛姿で、白蓮は絹の褥の上に座りこんでいる。縛られているため、いやおうなく女陰が剝き出しになり、強調するように乳房が突出していた。サドマゾの気があるくノ一にとっては、嬉しい責め方なのだが、手放しでは喜べない。

「くく、どうじゃ、感じるであろう?」

白虎は女陰を覗きこむだけで、なかなか嘗めようとはしない。上半身を愛撫している姫君とはまだ合体していなかった。縛りあげられる過程だけでも、充分すぎるほどに濡れている。縄をかけられた乳房がぐぐっと迫り出し、乳首が大きく膨張する。姫君が可愛らしい唇で、ちゅちゅっと乳首を吸った。

「ああっ、はあはあ、よ、よせっ」

かろうじて声を発したが、蜜壺の入口が正直にひくついている。とろーり、とろりと蜜

が垂れて、尻の方まで滴り落ちた。白虎は女陰に舌先を伸ばすものの、ふれるか、ふれないかの距離で止まる。すでに花開いている花弁の下で、普通の女子よりはやや大きめの花芯が、痛いほど勃っていた。白蓮の場合、興奮すると乳首同様、メシベがかなり膨張する。ゆえに悦びを隠すのは不可能なのだ。

「ふっ」

と、白虎が息を吹きかける。

「くうっ」

白蓮は頤をあげて、のけぞった。嘗められる以上に感じている。軽く息を吹きかけられる度に、「うふぅっ」と激しく震えた。姫君が唇を重ねてくる。白蓮は口を開き、姫君の舌を誘った。差し入れられた舌に夢中で舌をからめる。きつく吸いあげては、優しく含み、やわらかく刺激する。剝き出しになった花芯が、さらにふくらんで充血した。美味しそうに見えたのかもしれない。いきなり白虎は強く吸う。

「おおぅっ」

唇を離して、声を迸らせる。あまりの気持ち良さに、大量の愛液が流れ出した。白虎は花芯を咥えたまま、口をすぼめて引っ張るようにする。少し痛いのだが、たまらなく気持ちがいい。ぶるぶると尻が震えて、蜜壺の入口が淫らにひくついた。荒っぽい愛撫であったが、それが白蓮の好み、白虎は普通の女子にするよりも強めに舌を押しあてる。ぐりぐ

りと花芯をこすりあげる。

「ううっ、おおうぅっ、おうううぅ〜〜〜っ」

大声を放ち、背中を反らせた。形の良い乳房を、白い〈肌衣〉が、ぎゅっと握りしめる。尖った乳首を軽く咬む。これも白蓮好みの刺激であった。ますます蜜壺が収縮し、艶技の準備段階に入る。肉襞が絶え間なく蠢き、とめどなく蜜が流れる。白虎はそれを察したように、舌の動きを速めた。強く押しあてたまま、鼻面を使うようにして、硬いメシベを刺激する。姫君が乳房を揉みあげる、乳首を何度も咬む。

「あっ、あっ、あっ」

こらえられない、我慢できない。

「ぅくううっ、ぃくううぅ〜〜〜〜っ、達くううう〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

白蓮は緊縛姿で、全身をひきつらせた。すぐさま尻が痙攣し、震えが手足に広がっていったが、縛られているので筋肉がぷるぷると震えるばかり、あふれ出した愛液の多さで、快感の深さを示した。

「ふうぅ、ふうふう」

激しく喘いでいたが、

「あう！」

突如、男根で挿しつらぬかれる。いつの間にか姫君の股間に、白虎が合体していた。緊

縛状態の白蓮を、ころりと押し倒して、のしかかる。天を向くようになった女陰が、濡れぬれと淫らに光っていた。鼻息も荒く、幽斎は腰を使っている。

「うふううぅ、ぐふうふう、ぐふふふふぅ～～～」

気品ある姫君の唇から、いやらしげな声が洩れるのは、一種異様な感じだった。幽斎と完全融合しているので、唇の端から涎まであふれさせている。いやらしげにうっとりと眼を細めるさまが、また下品きわまりない。厄介なことにそんな姫君の表情が白蓮の好色心をそそるのだった。

「ああっ、あくう～っ、くううぅ～～～～」

顎をあげて、首を左右に振る。動かせるのはそこだけなので、自分なりにせいいっぱい表現していた。蜜壺には大量の愛液があふれて、じゅぶちゅぶという重めの音を響かせている。幽斎もたまらない。男根が硬さを増して、ぐぐっと大きくなる。白蓮の蜜壺が素早く反応し、入口、中程、奥と三段階にわたって締めあげた。

「おう、おうおう、これはすごい」

涎を啜りあげながら、幽斎はのたまう。艶技が働きかけていたが、我慢も限界だったにちがいない。腰の動きは止まるどころか、いっそう激しくなった。白蓮もけんめいに尻を動かして、快感を高めようとする。絶頂を引き寄せようとする。

「び、白蓮っ、艶技を、あくうぅっ」

不意に頭上から桜花の声が降ってきた。空には何枚もの着物が、天幕のように広がっている。絹の褥が妖しげに波打つ様子を見れば、その上でなにが起きているか想像できる。この世界にいるくノ一全員が、幽斎の虜になりかけていた。

「お、かし、ら」

喘ぎながらも、なんとか声を発したが、それが腹立たしかったらしい。

「くくうっ」

壺芯を思いきり突かれた。蜜壺のメシベ同様であるふくらみは、これ以上ないほどに充血しきっている。達く寸前だ。三段階の締め技で、男根の亀頭と側面部を刺激する。その締め具合がたまらなかったのだろう。

「ぐふうぅぅ〜〜〜〜」

幽斎は動きを止めて、涎をあふれさせた。顔にかかる涎が、このうえなくおぞましい。が、おぞましいがゆえに感じる。よけい艶技が働く。止まっていた腰の動きは、すぐさま再開された。今度はもっと巧みに壺芯をこすりあげる。亀頭をぐりぐりとまわすようにして刺激する。緊縛され、押し倒され、身動きできない状態の白蓮は、ふっと意識が遠くなるのを感じた。

「あ……」

歓喜声は出ない、感じすぎてあげられない。だが、むぎゅっと筋肉がふくらみ、乳房が

さらに大きくふくらんだ。がくっ、がくがくっと全身が痙攣する。反射的に蜜壺も締まった。

「うぐあぁぁ〜〜〜〜〜〜っ」

幽斎の悲痛な叫びが、異世界に轟き渡る。『鉄鼠の白蓮』の蜜壺で、『刃壺（やいばのつぼ）』が炸裂したのだった。

しかし、白い〈肌衣〉の股間には、即座にあらたな男根が現れる。白蓮もまた終わりなき戦いに引きずりこまれていった。

そして、竜子も青い〈肌衣〉と、空中から二尺ほど浮かんだ場所で、交わっていた。向かい合わせの座位で、竜子が上になっている。絹の褥となって浮かぶ着物が、くノ一と妖魅の激しい戦いぶりを示すように、妖しく揺らめいていた。周囲には切られて数が増えた〈肌衣〉の分身が、愉しげに飛びまわっている。一見したところ、美しい天女が舞う風景だが、実際は壮絶な戦場であった。

「んんぅ〜〜〜ン、あ、いいぃ〜〜、はあはあ、いいよぉ〜〜〜」

竜子はすでに深く術に陥ちている。憑かれたように尻を上下させ、とろんとした眸を宙に彷徨わせている。向かい合わせになっているのは、くノ一の千早だが、豊かな乳房の感触が気持ちよくて、竜子は自分から乳房をすり寄せていた。絹肌なのにもっちりとしてお

り、離れなくなりそうなほど強く密着する。尖った乳首と乳首がこすれ合い、それが絶妙な刺激になった。竜子の蜜壺は大洪水状態、千早の股間や絹の褌代わりの着物が、びしょ濡れになっている。

「あた、しも、あああ〜〜〜、り、竜子様ぁ〜〜〜〜〜〜」

千早が艶技の訓練時のように、甘い声で名前を呼ぶ。ここが敵地だということを、つい忘れそうになる。いつもの訓練のような錯覚に陥りそうになる。

「はあはあ、ち、はや、あああぁ〜〜〜、んふううぅ〜〜〜〜うむぅ」

唇を重ねて、もっと快感を高めようとした。蜜壺を責める男根が、ひとまわり大きくなって、壺芯を突きあげる。巧みにこすりあげて絶頂を与えようとする。竜子は汗を飛び散らせて、必死に尻を動かした。上下運動から前後運動に切り替えて、花芯同士をくっつける。

「あ、もう」

絶頂に包まれかけたそのとき、

「竜子っ」

野太い声が響き渡った。ほとんど裸に近い男が青い〈肌衣〉に飛びかかろうとする。が、男はその直前で黄色い着物にすっぽり全身を覆われた。後ろから羽交い締めされる恰好になって、空中に浮かびあがる。萎縮（いしゅく）したままの逸物が、少し哀れであった。

「だ、れ？」

ぼんやり竜子は問いかけた。どこかで見た覚えはあるが思い出せない。朱楽には「薄情な娘」と責められそうだが、覚えていないのだから仕方がない。

「おれだっ、京弥だっ」

京弥は必死に声をはりあげた。

「しっかりしろっ、妖術師の術に陥ちては、あぐっ」

不意に絶叫が止まった。後ろにいる〈肌衣〉の口から、透明な糸が紡ぎ出されて、京弥の口に吸いこまれる。黙らせるには口腔内を糸で塞いでしまうのが一番、姫君の声音を使って、幽斎が含み嗤った。

「くくく、愛しい娘がおれとまぐわうさまを見つめながら、おまえも果てるがいい。もっとも、楽しい方の果て方ではないがな」

男に対しては冷淡になるようだ。透明な糸が京弥の口や顔に向かって、続けざまに吐き出される。それらの光景が、竜子には夢のような出来事として映っていた。いっとき心を向けたものの、千早が腰を突きあげると、

「あンン！」

尻にとろけそうな快感が広がった。停止していた動きが、ふたたび全開となって激しくなる。千早の花芯に自分の花芯をこすりつけながら、蜜壺いっぱいに怒張した逸物を味わ

う。大量にあふれ出る蜜のお陰で、なめらかに動き続けていた。壺芯をこすりつける度に、愛液が流れ出る。あたたかな線水（シャワー）となって、男根の亀頭や側面を這い降りていった。

「おう、これよ」

千早がいやらしく眼を細める。幽斎そのままの表情なのだが、他の姫君同様、清らかなくノ一だけに、よけい淫靡な印象を与えた。

「『逃水の竜子』による艶技、『無限ノ術』。だが、ここはおれの世界、いくらおまえが精気を吸い取ろうとしても……おお、おおぉ、こ、これはたまらぬ」

会話を続けるのが困難になったらしい。千早はくいっと腰を突きあげる。

「あくぅうっ」

竜子は大声をあげて、背中を反り返らせた。ふくらみきった壺芯を、モロに突かれてはたまらない。二度、三度と責められて、とうとう白旗をあげた。

「あっ、あっ、あっ」

だ、だめ。

「んくっ、いくぅ〜〜〜っ、達くぅうう〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

喉の奥から歓喜声を放った。千早に抱きつき、全身を硬直させたが、すぐさま激しい痙攣が尻から手足に広がる。大量に流れ出た愛液が、絹の褥をしとどに濡らしていた。周囲を飛び交う〈肌衣〉の口から、竜子の頭上に向かって、透明な糸が静かに降って来る。

七

「あぁ、り、竜子、あうぅ〜〜〜〜〜ン、び、白蓮」

桜花は空中で両手を吊りあげられ、下界の有様を見おろしていた。透明な糸でぐるぐる巻きにされて地面に転がっている下忍、あるいは蓑虫（みのむし）のように木の枝に吊るされた下忍たちが、あちこちに点在している。主力部隊は艶技を用いて、なんとか戦っているが、いつまで保つかわからない。桜花の相手をしているのは黄色い〈肌衣〉、何匹もの黄蛇が現れており、乳房や女陰にくっついている。ヒト顔に変化した頭を蠢かせて、乳首や花芯を嘗めていた。

「さあて、そろそろ仕上げとゆくか」

前方で声が響くと、朱、青、黄色、白、黒の〈肌衣〉が集まって来る。桜花の下に広がっている着物や、他のくノ一たちの相手をしている着物は、切断されたことによって出現した分身なのであろう。朱に青が重なり、黄色が重なり、白、黒と続いて、五枚の着物が一枚の〈肌衣〉になった。黒い鳥が茜色に染まる空を飛ぶ夕暮れ時、稲穂が揺れて、道端に青い桔梗が咲く道を、白馬に乗った花嫁が進んで来る。完成図とでも言うような絵柄こそ、この異世界の風景、すべての〝絵〟がひとつに合体したあと、幽斎が出現した。

「そ、れが、あはあぁ〜〜、くふうぅ〜〜〜〜〜〜」

それがおまえの思念体だね。言葉にするつもりだったのに、濃密な愛撫によって中断させられた。手足に巻きついている黄色い〈肌衣〉が動き、桜花は仰向けの姿勢を取らされる。カエルのように両脚を開いたあられもない姿だった。両腕と両脚には、まだ忍び装束が残り、ほんのり桜色に染まった白い肌との違いを鮮明に見せている。乳首と花芯を嘗めている黄蛇の舌が、いちだんと速くなった。

「うふぅ、だ、だめ、はあぁ〜、い、いやいやぁ〜〜〜」

くっと唇を噛みしめ、必死に気をやらないようにする。が、蜜壺からは芳しい薫りが立ちのぼっていた。くちゅぴちゅという淫靡な音も、正直に気持ちを告げている。蜜壺に貼りついている黄蛇は、決して奥まで入りこんだりはしない。焦らすように入口で、淫らな音をあげ続けていた。

「ぐふ、ぐふふぅ、一度、達くがよい。黄蛇によって蹂躙されるさまをみるのも、悪くない趣向よ」

思念体の幽斎は生身そのままの体軀を、誇らしげに反り返らせている。股間では主と同じように、男根が天に向かってそそり立っていた。黒々と濡れ光り、はちきれんばかりにひくついている。幽斎の好色心を受けて、黄蛇の舌技が激しくなった。尖った乳首を舌先でコロコロと転がすようにする。充血しきった花芯を舌で濃やかに刺激する。黄色い〈肌

衣〉の褥に、両脚を広げて横たわっている桜花の蜜壺から、とめどなく蜜が流れ落ちた。

「あ、く、お、おまえ、など、に、うふうぅ〜〜ン、はあはあ、あくうぅ〜〜〜〜」

こらえにこらえていたが高まってくる。それを察して黄蛇の舌がいちだんとなめらかになる。我慢できない。

「あンンンンっ、うくうむぅ〜っ、あう、あうあうぅ〜〜〜〜っ」

達く！

「あ――――」

声だけは出すまいとしたのに、大きな歓喜声をあげていた。ぶるっ、ぶるぶるっと尻が震えて、巾着のように蜜壺が締まる。入口に先端を突っこんでいた黄蛇が、にゅるりと弾き出された。入れ替わるように幽斎が、思いきり男根を挿し入れる。

「ああ！」

桜花はのけぞり、尻を引きかけたが、そうはさせじと幽斎が腰を抱えこむ。入念に肉襞をこすりあげ、亀頭をまわすようにして、奥の壺芯に優しくふれた。一度、強く突いておき、あとは焦らしながら、じわじわと責めるつもりなのだろう。桜花が「ほしい」とねだるのを待っていた。乳房に貼りついていた黄蛇を払いのけ、むぎゅっと摑みあげる。桜色に染まっている乳首を、つまむようにして、いじった。

「あ、あああぁ、あああぁ、あああああぁ〜〜〜」

惚けたように喘ぐ桜花に、幽斎のかすれ声が重なる。
「ぐふぅ、ふうふう、さ、さすがは阿魔衆の、お、お頭。薫りだけでなく、こ、この締まり具合が、うふぅ、ぐふうぅぅ～」
気持ち良さのあまり、言葉が続かない。桜花の蜜壺は三段階に締まるばかりか、奥の壺芯が複雑な構造をしていた。ぐにゅぐにゅと蠢いたり、ぷっくりとふくらんだりする。その変化が、亀頭に素晴らしい刺激を与えるのだった。加えて、立ちのぼる芳香が性中枢をくすぐって快感を高める。幼少時より毒薬で身体を馴らしているため、注意しないと死にかねない。思念体の死は肉体の死、そう思っているのに、幽斎は引き抜けなくなっていた。
「ぐぐぐぅ、うふう、ふうふうぅ」
フイゴのように喘ぐばかりだった。不安になって桜花を見たが、声をあげてせつなげに悶えている。おねだりが出るのも時間の問題にちがいない。しばらくは大丈夫だろうと思い、徹底的に責めることにした。ぴちゅぴちゅという濡音をあげながら、腰をまわすようにして肉襞を撫であげる。複雑な動きを見せる壺芯を、ときおり軽く突いたりする。だが、突き具合が不満だったのだろう。
「あぅっ、ああぅっ、もっとっ、もっとぉ～～～～っ」
桜花は両脚を幽斎の尻に絡めて、ぐっと引き寄せた。少しでも男根を奥に導こうとしている。その姿は阿魔衆のお頭ではなく、一匹の雌であった。幽斎の安心度が高まり、魅力

的な房事に熱中し始める。抱きしめたまま桜花を座らせ、後ろから責めることにした。くるりと半回転させる。童子が用を足すときのような恰好になると、獲物を見つけた黄蛇が、すぐさま花芯に吸いついた。

「んふうっ」

桜花はびくびくっと尻を震わせる。

「おうっ、たまらぬ！」

男根を三段階に締めあげられて、幽斎は呻いた。桜花の両脚を摑み、背後から男根を挿入しながら、空中で繋がるような姿になっている。手強(てごわ)いお頭の両手は、黄色い着物によって縛りあげているので反撃できない。なすがままの状態だった。

「あ、はあはあぁ～、ゆ、幽斎様ぁ～～～～」

頬や胸もとが朱に染まって、このうえなく美しい。後ろにいる幽斎には見えないように思えるが、空を舞う〈肌衣〉たちの眼を使えばすべてが視える。感じて、ひとまわり大きくなった桜花の乳房に、二匹の黄蛇が巻きつき、やわやわと揉みしだいた。花芯を嘗める黄蛇が、仲間に連動するように、舌を蠕動させる。

「あ、だ、め、あああぁ～～～～～っ」

桜花は目を閉じ、用を足すような恰好のまま一瞬、硬直する。

「とどめじゃ！」

幽斎は壺芯をずんっと突いた。と同時に花芯の黄蛇が舌を速める、乳房に巻きついた二匹の黄蛇がちゅるりと乳首を咥える。

「ふうっ、い、達くぅ〜〜っ、達くううぅ〜〜〜〜〜〜〜〜っ」

全身を痙攣させて、桜花は歓喜声を迸らせた。精液を絞り取るかのごとく、蜜壺が締まる。肉襞が男根を締めあげる。

「おおぅっ、おおおおぉ〜〜〜〜〜〜〜」

幽斎もたまらず吐精した。『静寂の桜花』による艶技、『睡蓮』がちらりと頭をよぎったが、今さら止められるはずもない。途中で抜くなど考えられなかった。それに、ここは自分が造り出した世界、上忍どもは思うように艶技を使えない。竜子たちとの房事から、安全であろうと判断した。ひたすら腰を動かして、極上の蜜壺を味わう。三段階の刺激を与えてくれる蜜壺は、最後の一滴まで絞り取ろうとするように、淫らに収縮していた。たっぷり放出したはずなのに、すぐさま男根が頭をもたげる。力を注ぎこまれるような感じだった。

やはり、そうか。お頭と思い、危ないと用心しておったが、ここはおれの世界、ゆえにくノ一どもから精気を吸い取れるということよ。艶技など怖るるに足りず、なにが『睡蓮』じゃ、毒薬使いじゃ。

「ぐふふぅ、ぐふぐふ〜」

涎をあふれさせて、幽斎はほくそえんだ。もはや勝利は手の中、桜花を仕留めれば、すべては終わる。

「あ、あ、あぁ〜〜〜〜」

惚けたように喘ぐ桜花を、もう一度、半回転させた。正常位になって、のしかかる。虚ろな眸には、なにも映っていないのかもしれない。あるいは蓑虫状態になった仲間たちが視えているのか。

「今一度じゃ、桜花。他のくノ一も素晴らしいが、おまえの肉体は最高じゃ。あと一度だけ愉しませてやろうぞ」

愉しみたいのは、果たして、どちらなのか……ふたたび大きな声をあげる桜花の太股が、もぞもぞと動いていた。まだ黒い忍び装束が貼りついている太股の付け根から、小さな虫のようなモノが次々に飛び出して行く。一匹が分かれて二匹になり、二匹が分かれて四匹、四匹が分かれて八匹と、出現したモノは、〈肌衣〉など問題にならぬ速さで増殖していった。透明な糸に巻かれて、蓑虫状態になったくノ一たちの上に舞い降りる。

「む?」

ふと下界を見おろした幽斎に、桜花は甘い声でおねだりした。

「もっと、あはぁ〜ン、もっとぉ、突いて、はあはあ、奥を突いてくださりませぇ〜〜〜」

ぐぐっと蜜壺が収縮して、壺芯が亀頭を包みこむように、ぐにゅりと広がる。

「ぐふぅっ」

と、幽斎は女のようにのけぞった。男根から痺れるような快感が走ったのである。放ったばかりだというのに、蜜壺内で隆々といきり立っている。出したい、いや、出さなければならない、放つのだ！

「うふぅ〜〜〜ン、あはああぁ〜〜、もっとぉ、幽斎様ぁ〜〜〜〜〜〜」

桜花は尻を小刻みに揺らした。蜜壺全体が揺動（ヴァイブ）するように激しく振動する。小さな舌で男根を嘗められながら、締められているような感じだった。幽斎は獣のように吼（ほ）える、下半身を震わせる。

「おうぅ〜、おうおうっ、おおうぅ〜〜〜〜〜〜っ」

桜花の壺芯がぶるんっと震えた刹那、

「あおおぉ――――」

どっと吐精して、全身を突っ張った。が、下に広がっていた黄色い〈肌衣〉が、苦しげに訴える。

「く、くぅ、ゆ、う、さい、さまぁ」

見ると、着物のあちこちに大きな穴が開いている。決して破けるはずのない魔の衣、破けたとしても再生するか、増えるはずの着物に異変が生じていた。蓑虫状態になっていたはずの下忍たちも、なぜか、透明な糸の呪縛が解けている。

「こ、これは……どうしたことじゃ!?」

幽斎が叫び、空中に一歩踏み出した瞬間、黄色い〈肌衣〉ともども地面に落下していた。桜花も落ちたが、素早く受け身を取って、地面を転がる。この世界の主であるはずの幽斎は、思いきり地面に叩きつけられた。

「あぎゃっ」

起きあがろうとしても立てない。眠くて、眠くて、たまらなかった。眼を開けておこうとしても、瞼が重く垂れさがってくる。あたりがぼんやり霞んでしまう。知らぬ間に桜花の艶技『睡蓮』に陥ちていたのである。主が意識を失えば、異世界は消滅するのが定め、宙を飛びまわっていた五色の〈肌衣〉や、朱鳥、黒亀、黄蛇といった獣たちも、次々に消え失せていく。

「破れたりっ、蜘蛛網ノ法!!」

勝利の声をあげたのは、桜花だった。呪縛から解放された白蓮や下忍たちも集まって来る。この世界で起きていることは、そのまま現世に反映されるのだ。阿蘭陀宿と川や船で囚われ人になっていた阿魔衆たちは、すみやかに〈肌衣〉の糸から解き放たれている。幽斎にもおぼろにそれが視えていたが、わけがわからない。

「な、なぜ?」

眠気を押しのけて、なんとか質問を発した。

「これさ」

桜花が目で示した空中に、たくさんの小さな天道虫が群がっている。その中の一匹を手に取って、地面に転がっている黄色い〈肌衣〉の残骸に載せた。なりは小さいが妖魅を喰らう威力は凄まじい。あっという間に着物は失くなっていた。

「し、しか、し、ど、うして、なぜ？」

幽斎の口からは、同じ問いかけしか出てこない。生娘の白い肌に念で〝絵〟を描き、〈肌衣〉に仕立てあげる特殊な術。簡単に破れるはずはないと信じていた。いや、今も信じている。それゆえにわからない。納得できないのだった。

「〈蜘蛛網ノ法〉を破るために、ある絵師があたしの両太股に、五匹の天道虫を描いてくれたんだよ。天道虫は害虫を喰らう益虫、蜘蛛を喰らうには最適の虫さ。しかも、おまえの可愛い〈肌衣〉に合わせて、五色の天道虫を生み出してくれた。朱には朱、青には青の天道虫が、働いてくれたというわけさ」

冬木屋の離れで、積翠は桜花の両太股に五色の天道虫を描いた。描いたのは生身の肉体だが、優れた絵師による強いエネルギーは、魂にまで同じ絵を刻みつけたのである。積翠の念によって桜花の思念体は、目には見えない念の衣をまとったのだ。ゆえに、幽斎の術に陥ちるのを免れたのだが……。

「う、むむぅ、お、おれの術を、や、破る、ほどの、え、し、とは……？」

語尾が曖昧に消える。幽斎の脳裏に浮かんだのは、阿蘭陀宿で出会った積翠と名乗る京の絵師。

「も、も、しや、あ、やつ、か」

そうだ、〈肌衣〉が吐き出す透明な糸を、あの男はひとめで見抜いた。そうか、あいつだ、あいつに決まっている。だがしかし、いったい……だれなのか？

質問は口にされることなく、幽斎は深い眠りに陥ちる。自分がだれに負けたのか、最後までわからない。

幽斎の思念体が消えると同時に、阿魔衆たちは現世に戻っていた。

八

見事、幽斎を打ち破った阿魔衆。

阿蘭陀宿や川、そして、船にあった肉体に、それぞれが戻る。竜子などは覚醒したとたん、川の中に沈むという悲惨な目に遭ったが、仲間に助けあげられて、船で隠れ家に向かった。もちろん、大名家の姫君たちも一緒である。くノ一同様、現界に在った肉体に戻ったため、各大名家に帰り、なにもかも万々歳の状況なのだが……複雑な表情でため息を吐く男がいる。

「ふう」

軒猿は甲賀百人組の組屋敷で、ある人物の訪れを待っていた。彼と甚八はくノ一たちよりも早く阿蘭陀宿に忍びこみ、囚われていた京弥を助け出したのである。甲賀組が関わっていることを知られてはならない。幽斎の肉体が桜花の艶技『睡蓮』によって、眠りにつくやいなや、阿魔衆より先に動いたのだった。

やれやれ、骨折り損のくたびれ儲け、というやつか。

二度目の吐息が出かけたとき、

「お頭」

甚八が客の到来を告げる。

「お通ししろ」

ほどなく、黒い着物を粋に着こなした男が、案内されて来た。丁重に挨拶をかわしたあと、さっそく本題に入る。

「今回は世話になり申した。貴公にはなんと礼を言えばよいのかわからぬ。約束どおりの礼金じゃ」

貴重な二両が手元から離れるのは、まことにもって口惜しい。が、子を奉公に出す親のような気持ちで、そっと差し出した。奉公に出す気持ちというのは、すなわち、いずれ戻って来てほしいという切なる願いがこめられている。絵師は爽やかな表情で、懐に二両を

収めた。

「実に面白い仕事でございました。あたしも愉しませていただきましたよ。また機会があれば、ぜひ、お声をかけてくださいませ」

「うむ」

「しかし、あれですな。阿魔衆は本当に美女揃い、特にお頭の美しさはひと言では語れませぬ。本気で惚れてしまいそうですよ。あの魔的な肌にね」

「こ、これ、積翠殿」

はらはらして軒猿は、お喋りな口を制した。廊下には甚八が控えている。桜花に惚れている手下は、帰り際、積翠に襲いかかるかもしれない。隆光にも気を使い、手下にも心配りをして、気の休まる暇がなかった。

「ま、とにかく首尾は上々、ひそかに事を進めてほしいという我儘な願いを、よくぞ聞き届けてくださった。このとおりでござる」

深々と頭をさげながらも、「なぜ、二両も払ったうえに、頭までさげねばならぬのか」などと思ったりする。軒猿の苦悩を知ってか知らずか、

「で、幽斎殿はどうなされました?」

涼しい顔で、積翠は聞いた。幽斎が惨めにコソコソと逃げ出したであろうことは、聞くまでもなくわかっているはず、自分の方が優秀なのだと、軒猿の口から言わせたいのであ

ろう。

　少し名が知れると、これだから困る。絵師や戯作者といった連中は、自分こそが一番と思いたいのであろうがな。わしがご機嫌取りをするのは隆光様のみ、すでに用は済んだ。大枚二両を持って、さっさと帰らぬか。

　二両のことを思い出すと、きりきりと胃が痛んだ。もはや腹をさするのが、クセになっている。

「どうなったかはわからぬ。夜のうちに黙っていなくなったゆえ」

「さようでございますか。お天道様が、よほどこたえたのでございましょう。しばらくは陽の下を歩けますまい」

　くくっと含み笑う。お天道様と天道虫をかけていたが、軒猿にはなんのことやら、理解できない。どのような方法で術を破ったのかまでは、知らされていなかった。

「しかし、積翠殿。いったい、貴公は阿魔衆のお頭になにを……」

「それでは失礼いたします」

　答えることなく、積翠は立ちあがる。鷹揚に会釈を返して、軒猿は見送った。今回の雇い主は自分なのだと、主張したがっている自分に気づき、「おれもあの男と大差ないわい」と苦笑する。

「京弥はどうじゃ。気づいたか」

積翠を見送って戻った甚八に尋いた。

「は。多少、疲れておりまするが、大事ありませぬ。一晩、眠ればもとに戻りましょう。体力だけはありますからな」

知力はいささか欠けるが、と、お頭によく似た陰鬱な男は、遠まわしに告げていた。軒猿はやんわりとなだめる。

「まあ、そう言うな。京弥は竜子に惚れておるゆえ、先走った行動に出てしまったのであろう。幽斎の眼があやつに向いていたお陰で、動きやすかった部分もある。ものは考えようじゃ」

「それはそうかもしれませぬが……しかし、結局のところ、甲賀組はなにをしたのでありましょうや。仕掛けたまではよかったものの、途中で裏工作をし、阿魔衆が姫君たちを奪還するのに手を貸すはめになるとは」

「む」

おまえがそれを言うのか、甚八よ。だいたいがだ。おまえや京弥はわしに反撥し、みなをけしかけて、最初から阿魔衆の味方をしておったではないか。万年青の鉢植えに『けんもつ』の名と、『やみのもとじめ』なる言葉を記した贋物の実を隠したこと、わしが気づかなんだと思うてか。白蓮を助けたことも知っておるぞ。さんざん裏切り行為をしたうえで、そのようにしみじみとつぶやかれては、わしの立場がない。まったくもって、ええい、

腹立たしいわい。

怒りが湧いたが、手下相手に怒っても仕方がない。短気はお頭としてあるまじき愚行と、常日頃から戒めている。気を取り直して言った。

「わしとて同じ思いじゃ。今回こそはと気合いを入れ、幽斎の仕掛けもうまく進んでおったに、隆光様が姫君奪還を暗にほのめかされたがため、急遽、計画変更になってしもうた。わしは阿魔衆のお婆様に、わざと情報を流す結果になったが、いやはや、まことにもって、なにをしたのやら」

一度、止めた吐息を思いきり吐いて、身体の力を抜く。軒猿の側にいると、鬱陶しい『気』が伝染りそうだが、元々、似た気質の甚八は平然としている。

「闇の元締はおとなしく引っこみましょうか。またなにか仕掛けて来るのではありますまいか」

案じるのは桜花のことのみ、今からでも田村監物のもとに行きかねない様子だった。いやいや、と、軒猿は右手を振る。

「案ずるな。阿魔衆は監物の『お宝』を押さえておる。今ごろはどこぞで、取引をしているであろうよ」

「はあ。ところで、お頭。あの積翠という絵師は、何者なのでございまするか。幽斎ほどの腕を持つ男を破るとは、いったい、だれなのでございまするか」

「あやつはな」
小声で名前を告げ、にんまりほくそえむ。
「えっ、あの男が」
甚八は予想どおりの反応を見せ、納得したような顔でうなずいた。
「なるほど、さようでございましたか。さすがはお頭でございますなあ。つくづく感服つかまつりまして、ございまする」
「うむ」
働き甲斐のないお役目であったが、そこそこ褒美も出たことを考えれば、まったく無意味だったとも思えない。甲賀組、阿魔衆、どちらも傷つかず、どちらの雇い主も満足して、ある意味、万々歳なのではなかろうか。
そう、ものは考えようじゃ。こういう結末こそが、理想なのかもしれぬ。毎回、こうなってくれればよいのだが。
普通であれば満ち足りた心持ちになるものを、次のお役目を案じて、あれやこれや思いをめぐらせる。胃が痛くなってくると、なんとなく落ち着いた気分になった。ようやく満足して縁側に出る。
茜色の空が広がっている。幽斎の〈肌衣〉を思わせるような夕焼け空だった。

夕焼け空を黒い鳥が群れて飛んでいる。

桜花たちは隅田川の河岸近くを、屋形船で流していた。近づいて来た屋形船が、合図を送って来る。それに応えて船を停止させ、横付けするように並べたあと、戸をわずかに開いた。相手船の戸も少しだけ開き声がかかる。

「引き渡してもらおうか」

低くて、よくとおる声だった。監物だろうか。姿は見せないが、独特の邪気が伝わってくる。感覚の鋭い桜花には、凄まじい殺気が感知できた。

「先にお約束のものをいただきとう存じます」

のしかかる殺気を押しのけるようにして、告げる。ほんの一瞬、躊躇する気配があった。先に渡したら、引き渡さないのではないか。浮かんだ疑惑に、桜花は正直な言葉を返してやる。

「こちらも同じ思いでございますよ。闇の元締と言われる貴方様を信じて、先に引き渡せば、証文は渡してもらえないかもしれません。どうするかはそちら様次第、なんでしたら、このまま『お宝』を持ち帰っても……」

脅しをこめた返答に、すぐさま動きが出た。乱暴に投げ入れられた包みを開いて、中を確認する。金輪際、二度とふたたび阿魔衆には手を出さないという証文であった。

「確かに」

目で合図して、『お宝』を船首に連れて行かせた。目隠しをされた若い娘は、頼りない足取りで甲板に出て行く。冬木屋に入る直前で捕らえたお葉である。川に落ちないように充分、気をつけて、相手船に移した。二艘は何事もなかったかのように、静かに分かれて行く。

「ふう」

思わず安堵の吐息が出た。軒猿のような憂鬱の吐息ではない。

「これにて一件落着だよ。誓詞があれば監物も阿魔衆には手出ししないだろうさ。娘を拉致されたことによって、さらわれる方の辛さもわかっただろうしね」

「えっ、知らなかったよ。お葉さんって、監物の娘だったの」

すっとぼけた竜子の言葉を、朱楽が次いだ。

「今ごろ気づくなんて、竜子らしいわねえ。あたしはすぐにわかったわよ」

「ふん、だ。悪うございましたね。どうせ、あたしは鈍いですよ。それにしても、姉様。闇の元締と大名たちの関係が、あたしは今ひとつわからないんだよね。なんで、姫君たちをさらったのさ」

「おそらく、商人たちに頼まれたのさ。大名家に出入りしている商人に、泣きつかれたんだよ」

桜花は手短に説明する。なにかを隠していた大名家、かれらは商人たちから借りるだけ

借りたあと、奥の手を使った。『お断り』の荒技で、支払い拒否をしたのである。困り果てた商人たちは、闇の元締である田村監物に頼みこんだ。

「取り立てられたら、何割かの金を支払うといったような証文をかわしたんだろうさ。監物にとってはさほどむずかしい仕事じゃない。すぐさま姫君をさらい、脅しをかけつつ、交換条件を持ち出した」

抜荷に協力すれば、姫君を返してやろうではないか。

「大名家は協力せざるをえない立場になった。それで……」

「ちょっと待ってよ。そこがわからないんだよね。なんで大名家が抜荷に関わっていると、姉様は読んだわけ？」

「品物を考えてごらんな。フカヒレやアワビといった海産物は、どこで獲れるんだい。津軽家の国元は陸奥国の最北端、他の二家も陸奥国にある。陸奥国は海産物の宝庫じゃないか」

「そういえば、そうだね」

「で、もう一家があるのは南の肥前国、ここは南蛮から品物が入って来るだろ。珍しい壺や玻璃製品なんかは、肥前国の大名家が提供したのさ」

「なぁるほど」

「ところが、いつまでたっても姫君たちが戻って来る気配はない。痺れを切らした大名家

が、光圀様に泣きついて、阿魔衆が動くことになった。光圀様はついでに、江戸掃除を考えていたのかもしれないね」

「江戸掃除って、なんですかぁ」

朱楽の質問に、白蓮が答えた。

「田村監物だ。わたしたちを抜荷の現場にまず行かせたのは、うまくいけば、田村監物を片づけられるかもしれぬと考えたのであろう。仕事の邪魔をすれば、監物が動くと読んでおられたのであろうな。闇の元締などはいない方がいいと、考えたがゆえの命令だったのかもしれぬ。しかし、そう簡単にはいかなかった。阿魔衆は追いつめられて、危ない状況になったからな。娘を押さえられたのは、本当に幸運だった。そうでなければ、わたしたちの方が殺られていたかもしれぬ」

「ふーん」

意味ありげに、竜子は鼻を鳴らした。視線は桜花に向けられている。

「なんだい」

「いや、あの、さ。積翠は姉様になにをしたのかと思って」

「ふふふ、それは秘密さ」

「そ、それじゃ、積翠の本名は？　あいつは、いったい、だれなのさ」

「おや、まだわからないのかい。京の絵師、尾形光琳だよ」

「えっ」

竜子が驚くのも道理、光琳の名前はこのころすでに、かなり知れ渡っていた。乾山焼の絵付けをしたり、団扇絵を描いたり、衣裳に絵を着けたりと、多岐にわたって活躍している。後年、稀代の天才と呼ばれるようになる尾形光琳。桜花は幽斎を打ち破った類い希な才能にだけ惚れこんだわけではないらしい。

「ふふ、うふふふ」

不気味なほど機嫌がよかった。竜子はいぶかしげに眉をひそめる。

「なんだろう、あれ」

「しっ、今だけだから放っておきなさいって。内緒だけどさ。光琳はもう江戸を離れたって話よ。お頭に挨拶もなしに消えたってわけ、向こうはそれほど……」

「なんだって!?」

恋の喜びは一瞬にして消え去る。阿魔衆のお頭は、ふるいつきたくなるような美人なのに、なぜか、ふられるのが常、嵐の訪れを予感させるような風が、屋形船を揺らし始めていた。

あとがき

シリーズ、三冊目です。いかがだったでしょうか。

謎の絵師が登場して、またまた桜花が惚れてしまいますが、元禄時代はまだ色鮮やかな浮世絵はありません。単色摺りだけだったものの、濃淡や筆使いで、奥行きのある素晴らしい絵が誕生しました。シンプルなものほど美しいのかもしれませんね。

そういった浮世絵の素晴らしさを、もっと盛りこみたかったのですが、今回は衣裳に絵を描くという紋様師を元にしたお話であるため、浮世絵の話は出せませんでした。朱、青、黄色、白、黒の五色――陰陽道に基づく色を使い、純白の小袖が〈肌衣〉となって、妖の術を使います。朱は朱雀、青は青竜、黄色は黄蛇（本当は麒麟、または黄竜ですが、わかりやすくするために黄蛇にしました）、白は白虎、黒は亀と、五匹の聖獣も登場しました。ジュニア小説などでは主人公を助ける正義の聖獣を、こういう風に書いて、罰があたるのではないかと、軒猿に似て気の弱い私は、ちょっとびくびくしています。すみません、聖獣のみなさま、どうかお許しくださいませ。風邪が長引いているのは、そのせいではあり

ませんよね？

さて、今回は軒猿の配下たちが造反したりして、阿魔衆と甲賀百人組の戦いも、いささか複雑な動きを見せました。上からは責められ、下からは突きあげられてと、中間管理職は大変です。軒猿ほどではないものの、桜花も似たような苦労をかかえて、阿魔衆を仕切っているわけですが、いつの世も女は逞しいですねえ。男衆が押され気味なのは、江戸時代も現代も変わりがないようです。甲賀百人組の忍び、甚八と京弥が、この後、阿魔衆とどんな関わりを見せるのか、私自身も楽しみなところ、どうも桜花と竜子の姉妹は、自分の恋に疎い部分があるようで、やきもきしつつ、次巻に進みたいと思います。

軒猿ではありませんが、こうやって「あとがき」を書いていると、さて、次はなにを術にしようか、などと考えてしまうあたり、私も苦労性＆貧乏性なのでしょう。

華麗な阿魔衆の活躍をお楽しみに。

応援してください。

（この作品は徳間文庫のために書下されました）

〈参考文献〉

「江戸の恋（『粋』と『艶気（うわき）』に生きる）」田中優子　集英社新書
「新・武士道（いま、気概とモラルを取り戻す）」岬龍一郎　講談社＋α新書
「鉄砲と戦国合戦」宇田川武久　吉川弘文館
「元禄養老夜話（旗本天野弥五右衛門の晩節）」氏家幹人　新人物往来社
「（稀世の天才）尾形光琳」白崎秀雄　講談社
「江戸の盛り場」海野弘　青土社
「江戸の園芸・平成のガーデニング」小笠原亮　小学館
「田沼意次と松平定信」童門冬二　時事通信社

徳間文庫

くノ一元禄帖

はごろも天女（てんによ）

© Kei Rikudô 2003

著者　六道慧（りくどうけい）

発行者　松下武義（まつしたたけよし）

東京都港区芝大門二―二―一〒105―8055

発行所　株式会社徳間書店

電話　編集部〇三（五四〇三）四三五〇
販売部〇三（五四〇三）四三二四

振替　〇〇一四〇―〇―四四三九二

印刷　凸版印刷株式会社

製本　株式会社明泉堂

2003年7月15日　初刷

ISBN4-19-891919-4　（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

〈編集担当　永田勝久〉

愚者の街 北方謙三

数億円の金をめぐって敵と味方が交錯する。老犬シリーズの原点！

過去を殺せ 藤田宜永

カジノで未来を失った男。過去を捨てた女。二人の勝負の行方は…

殺人許可証No.3 大藪春彦

警視庁秘密捜査官が贋金造りを追い香港へ。ハードアクション長篇

黒豹スペース・コンバット下 特命武装検事黒木豹介 門田泰明

巨大秘密組織へ潜入する黒豹と沙霧。血みどろの死闘と感動の終幕

殺し屋刑事（デカ）地獄遊戯 南英男

強請屋は復活するか。ピカレスク・ハードボイルド決定版、書下し

悪への招待〈新装版〉 西村京太郎

自殺？他殺？父の死の真相を探る男にしのびよる不気味な影…

古着屋総兵衛影始末 知略！ 佐伯泰英

宿敵・柳沢吉保、再び暗躍。如何なる策謀か？超人気シリーズ書下し

徳間文庫の最新刊

霧の罠 真贋控帳 澤田ふじ子

将来を嘱望された藩士が盗みの疑いをかけられて…傑作時代長篇

はごろも天女 くノ一元禄帖 六道慧

嫁入り前の大名の姫君が拉致され…人気新感覚時代小説、書下し

春色天保政談 多岐川恭

御家人の次男で遊び人の進次郎が将軍家の跡目争いに巻き込まれ…

あいつと私 石坂洋次郎

若者の愛と性を描き、石原裕次郎の映画も大ヒットした名作復活！

新・アジア赤貧旅行 やっぱりアジアは面白い 下川裕治

旅の原点に戻り、自分の足で歩いて考えるアジア。文庫オリジナル

プノンペンどくだみ荘物語 クーロン黒沢 マンガ 浜口乃理子

アジアに集うはぐれもの日本人の生態を面白おかしく描く。書下し

アラン、海へゆくVII 臆病者の海賊退治 デューイ・ラムディン 大森洋子訳

海賊との戦いに勝利せよ。大好評海洋冒険シリーズ、待望の第七弾

世界の「宗教と戦争」講座 井沢元彦

信じる神が違うとなぜ殺し合うのか？民族紛争の原因を鋭く抉る

9784198919191

ISBN4-19-891919-4

C0193 ¥590E (0)

1920193005905

定価：本体 590円＋税

輿入れ前の姫が拉致される事件が相次いだ。水戸光圀の秘命を受け、闇に働く美貌の阿魔衆に、〈肌衣〉の術を遣う紋妖師・幽斎が闘いを挑んできたのだ！　得意の〈艶技〉を揮って反撃に出た女忍者の白蓮、竜子、朱楽らは術に陥ちてしまい……。

（書下し新感覚時代小説）

徳間文庫